岡山県埋蔵文化財発掘調査報告119

百間川兼基遺跡3
百間川今谷遺跡3
百間川沢田遺跡4

旭川放水路(百間川)改修
工事に伴う発掘調査　XIII

1997

建設省岡山河川工事事務所
岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告119

百間川兼基遺跡3
百間川今谷遺跡3
百間川沢田遺跡4

旭川放水路(百間川)改修
工事に伴う発掘調査　XIII

1997

建設省岡山河川工事事務所
岡山県教育委員会

1/1　　S39

1/1　　S53

1/2　　S61

1/1　　S61磨面

1/1　　M1

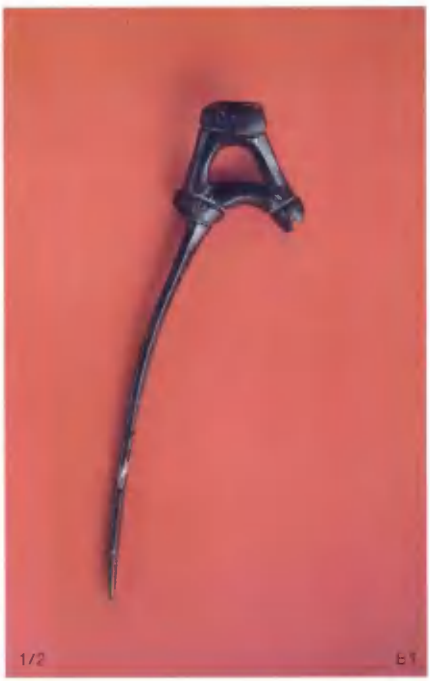
1/2　　M15

1．百間川沢田遺跡出土　石器

2．百間川兼基遺跡出土　銅製品

1/2　　W12

1．百間川兼基遺跡出土　木製品



1/2　　B1

2．百間川沢田遺跡出土　角製品

3/2　　B3

約1/1　　271

3．百間川兼基遺跡出土　墨書土器

序

旭川の放水路である百間川は、承応３年（1654）の大洪水を契機に、岡山城下を守るため岡山藩の政治顧問熊沢藩山が考案し、郡代津田永忠が設計・施工を行い、貞享３年（1686）に完成したといわれ、その後、幾多の洪水から岡山城下を守ってきました。

しかし、一方では百間川沿川では通水能力が小さく、また、堤防が弱いことなどから、幾度か氾濫に見舞われました。

このため、建設省では地元の方々をはじめとする関係者のご協力を賜り、昭和50年（1975）から本格的な改修工事を始めました。本年度は、下流区間の築堤を行い、これにより百間川本川の一連の堤防は完成しました。また、支川砂川の改修についても大幅な進捗を見たところです。

改修事業により新たに生み出された河川敷は、スポーツ・レクリエーション・自然観察の場として憩いの場を創出し、年間７～８万人の県民に利用されています。

百間川の遺跡調査は改修工事に先立ち、工事に影響する部分について記録保存をするため、昭和52年から岡山県教育委員会に発掘調査を委託し、実施しているところです。

百間川の遺跡群は、通称大曲と呼ばれている岡山市米田の百間川中流部（江戸期以前の海岸線）より、岡山市原尾島にある百間川橋梁の上流までの広い範囲に点在しており、その規模は発掘の進捗状況に伴い、昭和51年度の確認調査時点での予想を上回る大規模なものとなっています。

また、縄文時代から中世までの幅広い時代にわたる出土品が発掘されており、この地が古代から営々と連なる人々の活動の場であり、人間活動に適した豊かな風土であったことを物語っています。

本書は平成２年から平成６年に実施された百間川兼基遺跡、今谷遺跡、沢田遺跡の調査結果の一部をまとめたものです。本書が、埋蔵文化財に対する理解の増進と、学術、文化等のため、広く活用されることを期待します。

最後に、発掘調査並びに本書の編集に当たられた岡山県教育委員会を始めとする関係各位に対し、深甚なる謝意を表します。

平成９年３月

建設省岡山河川工事事務所

所長　佐合純造

序

岡山県のほぼ中央部を南北に貫流し児島湾に注ぎ込む旭川の下流域は、沖積平野が形成され肥沃な穀倉地帯であります。また、この平野の各所と周囲の各丘陵部には、地域の歴史を物語る著名な遺跡も数多く残されています。そして、旭川の東岸から分岐し、操山の北裾から東端をめぐり南下して児島湾に注ぐ百間川が、江戸時代に岡山城下を洪水から守るために造られた人工の河川であることは広く知られているところです。

建設省は、この旭川放水路（百間川）の本格的な改修工事を昭和50年から一部着工し、今日に至っていますが、岡山県教育委員会は、工事計画の段階から、河川敷内に所在する遺跡の取り扱いについて建設省岡山河川工事事務所と協議を重ね、やむを得ず破壊される部分については記録による保存処置をとってまいりました。

発掘調査は、昭和51年度の確認調査に引き続いて昭和52年度から着手し、本年で20年目を迎えました。この間、縄文時代後期から中世にいたる貴重な遺構・遺物が多数発見され、今日では吉備地方の代表的な遺跡にとどまらず、全国的にも注目される複合遺跡として知られるようになってきました。

これらの調査成果は、発掘調査報告書として順次刊行していますが、本書は13冊目、百間川兼基遺跡・同今谷遺跡としては３冊目、百間川沢田遺跡としては４冊目にあたります。本書に収録した遺跡からは、縄文時代晩期の貝塚や弥生時代後期の稲株痕跡、古代～中世の大溝群などの遺構とともに、それらに伴う各時期の多数の遺物が出土しています。なかでも、これまで県下では出土例のほとんどなかった縄文時代晩期の鳥形鹿角製品や古墳時代前期の石杵などの発見が注目されます。

本報告書が、文化財の保護・保存、さらに今後の歴史研究の一助となれば幸いです。

なお、最後になりましたが、発掘調査の実施および報告書の作成に際して、種々の御教示と御指導を賜りました旭川放水路（百間川）改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員の先生方に深くお礼申し上げます。また、建設省岡山河川工事事務所をはじめ、関係各位から多大な協力をいただきました。重ねてお礼申し上げます。

平成９年３月

岡山県教育委員会

教育長　森　崎　岩之助

例　言

1．本報告書は、旭川放水路（百間川）改修工事に伴い、建設省中国地方建設局の委託を受け、岡山県教育委員会が1990（平成２）年度から1994（平成６）年度に発掘調査を実施した、百間川兼基遺跡・同今谷遺跡・同沢田遺跡の発掘調査報告書である。

2．本報告書は百間川兼基遺跡・同今谷遺跡としては３冊目、同沢田遺跡としては４冊目にあたり、報告書名の「百間川兼基遺跡・同今谷遺跡・同沢田遺跡」は、岡山市兼基・同今谷・同沢田に所在する各遺跡のうち、百間川の河川敷にかかる範囲の遺跡をさす。

3．発掘調査は岡山県古代吉備文化財センターが担当し、本報告書掲載の発掘調査の地区・担当者・期間は、本文表１に示す通りである。

4．発掘調査および報告書の作成にあたっては、旭川放水路（百間川）改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を設け、下記の方々に委員を委嘱した。対策委員各位からは、終始有益なご指導とご助言をいただいた。記して深く感謝の意を表す次第である。

池葉須藤樹（元岡山市立犬島中学校校長）
鎌木義昌（岡山理科大学教授）〈1993年２月物故〉
近藤義郎（岡山大学名誉教授）
角田　茂（元岡山市立岡輝中学校教諭）
出宮徳尚（岡山市教育委員会文化課）
水内昌康（岡山県文化財保護審議会委員）
山本悦世（岡山大学埋蔵文化財研究センター助手）〈1993年４月から〉

5．本報告書の作成は、1995年度に岡山県古代吉備文化財センター柳瀬昭彦・澤山孝之が担当して行い、遺物の実測・トレース・写真撮影などについては補助職員等の助力を得た。

6．本文の執筆は、調査を担当した柳瀬昭彦・山磨康平・平井　勝・弘田和司・高田恭一郎・根木智宏が分担し、文責は各項目あるいは遺構ごとの文末に示した。また、本書の編集は柳瀬と澤山が担当した。

7．本報告書に関係する遺物のうち、一部について鑑定・同定あるいは分析を下記の諸氏ならびに機関に依頼し、有益な教示を得るとともに、そのうちのいくつかについて報文をいただいた。記して厚く御礼申し上げる。

プラントオパール分析	藤原宏志（宮崎大学農学部）
獣骨鑑定	松井　章（奈良国立文化財研究所）
植物種実鑑定	金原正明（天理大学付属天理参考館）
	星野佳史（株式会社古環境研究所）
ガラス小玉分析	苅谷道郎（株式会社ニコン・相模原製作所）
玉の産地分析	藁科哲男（京都大学原子炉実験所）
石材鑑定	妹尾　護（倉敷芸術科学大学教養学部）
木製品樹種同定	パリノ・サーヴェイ株式会社
木製品樹種鑑定	根岸宏明（元備前市立伊部小学校）

8．出土遺物ならびに図面・写真類は、岡山県古代吉備文化財センターに保管している。

凡　例

1．本報告書では各遺構は基本的に遺跡ごとに時代の古い順に取り上げ、時代ごとに説明を加えてある。

2．遺構が所在する位置の表現方法として、遺跡全体に組んだ20m方眼の東西軸を算用数字、南北軸をアルファベットの大文字で示し、その交点の南東部分の升を305Ｆ区・306Ｋ区などと用いる。20m方眼とその呼称方法は各遺跡ごと（百間川兼基遺跡と百間川今谷遺跡は共通）の調査開始時に設定・呼称したものを踏襲しているが、遺跡が当初より拡がったため百間川兼基遺跡の西端の南北軸に小文字のｏ～ｚを用いた部分もある。

3．本報告書の遺構全体図および各遺構図の北方位は基本的に磁北であり、遺跡付近の磁北は西偏6°30′を測る。

4．本報告書に使用した高度は、すべて海抜高度である。

5．土層断面図等の土色は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修）によるものもあるが、各調査者の記述に従った。

6．本報告書の遺構ならびに遺物実測図の縮尺率は下記のとおり統一しているが、例外については縮尺率を図示または明記している。

遺構

竪穴住居・建物 1／80、井戸・土壙・土壙墓・溝断面 1／30、遺構配置図 1／500

遺物

土器 1／4、石器および石製品・金属器および金属製品・土製品 1／2、木器および木製品 1／3、玉類 1／1

7．土器実測図のうち、中軸線の左右に白抜きのあるものは、小破片のため口径の推定が困難なものである。

8．遺物番号のうち、土器以外のものについてはその材質を示すため、下記に示すように頭に略号を付した。なお、遺物番号は各種類ごとに、また遺跡（百間川兼基・今谷遺跡と百間川沢田遺跡の二者）ごとに通し番号を用いた。

石器および石製品：Ｓ、金属器および金属製品：Ｍ、木器および木製品：Ｗ、玉類：Ｊ、土製品：Ｃ、骨角製品：Ｂ

9．本報告書に掲載した地図のうち、第２図は国土地理院の１／25,000地形図の和気・西大寺・岡山北部・岡山南部を複製・縮小し、加筆したものである。

10．本報告書で使用した弥生時代から古墳時代前半期の時期区分は、「百間川原尾島遺跡１」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39において採用した、次頁に示す土器編年に基づいている。

なお文中では、百間川中期Ⅱは百・中・Ⅱ、百間川後期Ⅱは百・後・Ⅱ、百間川古墳時代Ⅲは百・古・Ⅲなどのように略称を用いた。

編年対比表

時代＼遺跡			百間川	雄町(註1)	上東・川入(註2)
弥生時代	前期	津島	百間川前期Ⅰ		
		門田	百間川前期Ⅱ	雄町 1	
			百間川前期Ⅲ	雄町 2	
				船山 3	
	中期	南方	百間川中期Ⅰ	高田	
				雄町 3	
		菰池	百間川中期Ⅱ	船山 5	
				菰池	
				雄町 4	
		前山Ⅱ	百間川中期Ⅲ	前山東	
				雄町 5	
		仁伍		雄町 6	上東・鬼川市0
	後期	上東	百間川後期Ⅰ	雄町 7	上東・鬼川市Ⅰ
				雄町 8	
			百間川後期Ⅱ	雄町 9	上東・鬼川市Ⅱ
				雄町 10	
		グランド上層	百間川後期Ⅲ	＋	上東・鬼川市Ⅲ
		酒津	百間川後期Ⅳ	雄町 11	才の町Ⅰ
				雄町 12	才の町Ⅱ
古墳時代	前期	王泊六層	百間川古墳時代Ⅰ	雄町 13	下田所
			百間川古墳時代Ⅱ	雄町 14	亀川上層
			百間川古墳時代Ⅲ	雄町 15	川入・大溝上層

註1　正岡睦夫他「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1　岡山県教育委員会　1972年
註2　柳瀬昭彦他「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16　岡山県教育委員会　1977年

目　次

序
例　言
凡　例
目　次
第１章　地理的・歴史的環境 …… 1
第２章　調査および報告書作成の経緯 …… 7
　第１節　発掘調査の契機と経過 …… 7
　第２節　調査および報告書作成の体制 …… 10
第３章　百間川兼基遺跡 …… 13
　第１節　遺跡の概要と調査区 …… 13
　第２節　遺構・遺物の概要 …… 15
　　１．弥生時代の遺構・遺物 …… 15
　　２．古墳時代の遺構・遺物 …… 45
　　３．古代・中世の遺構・遺物 …… 62
　　４．その他の遺構および包含層等の遺物 …… 77
　第３節　まとめ …… 83
第４章　百間川今谷遺跡 …… 85
　第１節　遺跡の概要と調査区 …… 85
　第２節　遺構・遺物の概要 …… 86
　　１．古代以前の遺構・遺物 …… 86
　　２．中世以降の遺構・遺物 …… 90
　　３．その他の遺構および包含層等の遺物 …… 98
　第３節　まとめ …… 99
第５章　百間川沢田遺跡 …… 101
　第１節　遺跡の概要と調査区 …… 101
　第２節　遺構・遺物の概要 …… 102
　　１．縄文時代後期の遺構・遺物 …… 102
　　２．縄文時代晩期・弥生時代前期の遺構・遺物 …… 108
　　３．弥生時代中期の遺構・遺物 …… 123
　　４．弥生時代後期の遺構・遺物 …… 129
　　５．古墳時代の遺構・遺物 …… 136
　　６．古代・中世の遺構・遺物 …… 145
　　７．その他の遺構および包含層等の遺物 …… 153
　第３節　まとめ …… 155
第６章　おわりに …… 157

新旧遺構名称対照表 …… 158
付載
1 百間川沢田遺跡におけるプラント・オパール分析結果について …… 159
2 百間川兼基・今谷・沢田遺跡から出土した動物遺存体（予報） …… 162
3 百間川沢田遺跡における種実同定 …… 163
4 百間川兼基遺跡出土ガラス小玉 …… 170
5 百間川兼基遺跡出土の玉類の産地分析 …… 174
6 百間川遺跡群出土木製品の樹種 …… 178
報告書抄録 …… 179

図　目　次

第１図　遺跡位置 …… 1
第２図　百間川周辺遺跡分布(1/50000)…… 2
第３図　設定グリッドと調査区位置(1/6000)…… 8
第４図　百間川兼基遺跡の調査区(1/4000)…… 13
第５図　調査区各地点の土層(1) …… 14
第６図　調査区各地点の土層(2) …… 15
第７図　旧河道断面（1/80)…… 16
第８図　ｏ～ｚ区 弥生時代遺構配置(1/500)…… 16
第９図　Ａ～Ｋ区 弥生時代遺構配置(1/500)…… 17
第10図　Ｋ～Ｑ区 弥生時代遺構配置(1/500)…… 18
第11図　旧河道 出土遺物(1) …… 18
第12図　旧河道 出土遺物(2) …… 19
第13図　旧河道 出土遺物(3) …… 20
第14図　竪穴住居１、同出土遺物 …… 21
第15図　竪穴住居２、同出土遺物 …… 22
第16図　土壙１～３ …… 23
第17図　土壙４、同出土遺物 …… 24
第18図　土壙５～７、土壙６ 出土遺物…… 24
第19図　土壙８ …… 25
第20図　土壙８ 出土遺物(1) …… 26
第21図　土壙８ 出土遺物(2) …… 27
第22図　土壙９ …… 28
第23図　土壙10 …… 28
第24図　溝１、同出土遺物、同内杭遺構…… 29
第25図　溝２・３ 断面 …… 29
第26図　溝４・５・６ 断面 …… 30
第27図　溝７ 断面、同出土遺物 …… 30
第28図　溝８～10 断面、溝８出土遺物 …… 31
第29図　溝９～14 断面 …… 31
第30図　溝11・12・14 出土遺物 …… 32
第31図　溝15 断面、同出土遺物 …… 33
第32図　溝16～20 断面 …… 33
第33図　溝16・20 出土遺物 …… 33
第34図　溝21 断面、同出土遺物 …… 34
第35図　溝22・23、土手状遺構 …… 35
第36図　溝22 出土遺物 …… 36
第37図　溝24 断面 …… 36
第38図　洪水砂層 出土遺物 …… 37
第39図　ｏ～Ｆ区 弥生時代後期水田(1/500)…… 38
第40図　Ｆ～Ｑ区 弥生時代後期水田・水路、
同期自然地形（1/500） …… 39
第41図　水田１(ｐ区) 稲株痕跡、同断面 …… 40
第42図　水田２(Ａ区) 稲株痕跡 …… 40
第43図　水田層 出土遺物 …… 41
第44図　土器溜り１ …… 42
第45図　土器溜り１ 出土遺物(1)…… 43
第46図　土器溜り１ 出土遺物(2)…… 44
第47図　竪穴住居３、同出土遺物 …… 45
第48図　Ａ～Ｑ区 古墳時代遺構配置(1/500)…… 46
第49図　竪穴住居４、同出土遺物 …… 47
第50図　竪穴住居５、同出土遺物 …… 47
第51図　竪穴住居６、同出土遺物 …… 48

第52図　建物１ …… 48
第53図　建物２ …… 49
第54図　建物３ …… 49
第55図　建物４ …… 49
第56図　建物５ …… 50
第57図　建物６ …… 50
第58図　柱穴列１ …… 51
第59図　井戸１、同出土遺物 …… 51
第60図　井戸２ …… 52
第61図　井戸２　出土遺物(1) …… 53
第62図　井戸２　出土遺物(2) …… 54
第63図　井戸３ …… 54
第64図　井戸３　出土遺物 …… 55
第65図　井戸４、同出土遺物 …… 55
第66図　井戸５、同出土遺物 …… 56
第67図　土壙11～13 …… 56
第68図　土壙14、同出土遺物 …… 57
第69図　土壙15、同出土遺物 …… 57
第70図　土壙16、同出土遺物 …… 57
第71図　土壙17、同出土遺物 …… 58
第72図　土壙18、同出土遺物 …… 58
第73図　土壙19、同出土遺物 …… 59
第74図　土壙20、同出土遺物(1) …… 59
第75図　土壙20 出土遺物(2) …… 60
第76図　溝25 断面、同出土遺物 …… 60
第77図　溝26 断面、同出土遺物 …… 61
第78図　溝27～29 断面 …… 61
第79図　建物７ …… 62
第80図　土壙21 …… 62
第81図　土壙22 …… 62
第82図　ｏ～Ｆ区 古代･中世遺構配置(1/500) …… 63
第83図　Ｆ～Ｑ区 古代･中世遺構配置(1/500) …… 64
第84図　土壙23 …… 65
第85図　土壙24 …… 65
第86図　土壙25～27、土壙26 出土遺物 … 66
第87図　土壙28、同出土遺物 …… 66
第88図　土壙29、同出土遺物 …… 67
第89図　溝30 …… 67
第90図　溝30 杭列、同出土遺物(1) …… 68
第91図　溝30 出土遺物(2) …… 69
第92図　溝31、同出土遺物(1) …… 70
第93図　溝31 出土遺物(2) …… 71
第94図　溝32(ｒ区) 杭列(1/150､1/30) … 71
第95図　溝30～32 断面 …… 72
第96図　溝32 出土遺物(1) …… 73
第97図　溝32 出土遺物(2) …… 74
第98図　溝32 出土遺物(3) …… 75
第99図　溝33 …… 75
第100図　溝34 断面、同出土遺物 …… 76
第101図　溝35 断面、同出土遺物 …… 76
第102図　溝36～39 断面、溝39 出土遺物 … 76
第103図　左岸階段調査区の水田遺構 …… 77
第104図　包含層等 出土遺物(1) …… 77
第105図　包含層等 出土遺物(2) …… 78
第106図　包含層等 出土遺物(3) …… 79
第107図　包含層等 出土遺物(4) …… 79
第108図　包含層等 出土遺物(5) …… 80
第109図　包含層等 出土遺物(6) …… 81
第110図　包含層等 出土遺物(7) …… 82
第111図　百間川今谷遺跡の調査区 …… 85
第112図　Ｙ～ⅡＡ区 断面 …… 86
第113図　ⅡＬ～ⅡＭ区 断面 …… 86
第114図　Ｙ～ⅡＰ区 古代以前遺構配置(1/500) …… 87
第115図　土壙30～32 …… 88
第116図　溝40～43 断面 …… 88
第117図　溝44～49 断面 …… 89
第118図　溝50～55 断面 …… 90
第119図　土壙33 …… 90
第120図　Ｙ～ⅡＰ区 中世以降遺構配置 …… 91
第121図　溝56～60 断面 …… 92
第122図　溝57 出土遺物 …… 93
第123図　溝58 出土遺物 …… 93
第124図　溝59 出土遺物 …… 94
第125図　溝61 …… 94
第126図　溝62・63 断面 …… 94
第127図　溝64・65 断面 …… 95

第128図　溝66 断面 …… 95
第129図　溝67 出土遺物 …… 95
第130図　溝67～70 断面 …… 96
第131図　溝69 …… 96
第132図　溝69・70 出土遺物 …… 97
第133図　包含層等 出土遺物(1) …… 98
第134図　包含層等 出土遺物(2) …… 99
第135図　213･4ⅡＹ区 断面 …… 101
第136図　215ⅢＢ区 断面 …… 101
第137図　縄文時代後期 土器分布 …… 102
第138図　214ⅡＴ区 断面 …… 102
第139図　土器溜り１（1/200） …… 103
第140図　土器溜り１ 出土遺物(1) …… 104
第141図　土器溜り１ 出土遺物(2) …… 105
第142図　土器溜り１ 出土遺物(3) …… 106
第143図　土器溜り２ 炭･土器分布(1/150)、
同断面(1/60)、同出土遺物 … 107
第144図　縄文時代晩期 遺構配置(1/500) … 108
第145図　土器溜り３ …… 109
第146図　ⅡＺライン 断面 …… 109
第147図　土器溜り３ 出土遺物 …… 110
第148図　旧河道１ 断面（1/150） …… 111
第149図　旧河道１ 出土遺物(1)＜貝塚＞ … 111
第150図　旧河道１ 出土遺物(2)＜14層＞ … 112
第151図　旧河道１ 出土遺物(3)＜14層＞ … 113
第152図　旧河道１ 出土遺物(4)＜12層＞ … 114
第153図　旧河道１ 出土遺物(5)＜12層＞ … 115
第154図　旧河道１ 出土遺物(6)＜11層＞ … 116
第155図　旧河道１ 出土遺物(7)＜10･9層＞… 117
第156図　旧河道１ 出土遺物(8)＜８層＞ … 118
第157図　旧河道１ 出土遺物(9)＜８層＞ … 119
第158図　旧河道１ 出土遺物(10)
＜７・６・３層＞ …… 120
第159図　旧河道１ 出土遺物(11)＜貝塚＞ … 120
第160図　旧河道１ 出土遺物(12) …… 121
第161図　旧河道１ 出土遺物(13) …… 122
第162図　弥生時代中期 遺構配置(1/500)… 123
第163図　溝１ 断面 …… 123
第164図　溝１ 出土遺物(1) …… 124
第165図　溝１ 出土遺物(2) …… 125
第166図　溝２、同出土遺物 …… 126
第167図　溝３～５ 断面 …… 127
第168図　溝４ 出土遺物 …… 127
第169図　溝５ 出土遺物 …… 128
第170図　溝６ 断面 …… 128
第171図　溝７～９ 断面 …… 129
第172図　溝10・11 断面 …… 129
第173図　弥生時代後期 遺構配置(1/500) … 130
第174図　溝12・13 断面 …… 131
第175図　213･4ⅢＡ区 断面（1/60） …… 131
第176図　溝14～16 出土遺物 …… 132
第177図　溝17～18 断面 …… 133
第178図　水田２ 断面 …… 133
第179図　弥生時代後期末 水田・水路 …… 134
第180図　水田３（ⅢＨ区） 稲株痕跡 …… 135
第181図　水田２・水路２ 相関断面 …… 136
第182図　古墳時代 遺構配置（1/500） …… 137
第183図　竪穴住居１ …… 138
第184図　建物１ …… 138
第185図　柵列１ …… 138
第186図　井戸１ …… 139
第187図　井戸２、同出土遺物 …… 139
第188図　井戸３ …… 140
第189図　土壙１、同出土遺物 …… 140
第190図　溝21 断面 …… 141
第191図　溝22～25 断面 …… 141
第192図　溝26、同出土遺物(1) …… 142
第193図　溝26 出土遺物(2) …… 143
第194図　溝28 断面 …… 143
第195図　溝29、杭列１ …… 143
第196図　土器溜り４、同出土遺物(1) …… 144
第197図　土器溜り４ 出土遺物(2) …… 145
第198図　溝30 断面 …… 145
第199図　古代～中世 遺構配置(1/500) …… 146
第200図　溝31～33 断面 …… 147
第201図　溝31・32 断面 …… 147

第202図　溝32 断面 …… 147
第203図　溝33 断面（ⅢＦ区中央） …… 147
第204図　溝35 断面 …… 147
第205図　溝31（ⅢＤ･Ｅ区）遺物出土状態… 148
第206図　溝31 出土遺物 …… 148
第207図　溝32 出土遺物 …… 149
第208図 溝33 出土遺物(1)…… 150
第209図 溝33 出土遺物(2)…… 151
第210図 杭列１ …… 152
第211図 左岸階段調査区の水田遺構 …… 153
第212図 包含層等 出土遺物(1)…… 154
第213図 包含層等 出土遺物(2)…… 154

表　目　次

表１　百間川兼基遺跡・同今谷遺跡・
　　同沢田遺跡 調査一覧 …… 9
表２　新旧遺構名称対照表 …… 158

図　版　目　次

巻頭図版１－１　百間川沢田遺跡出土 石器
　　２　百間川兼基遺跡出土 銅製品
　２－１　百間川兼基遺跡出土 木製品
　　２　百間川沢田遺跡出土 角製品
　　３　百間川兼基遺跡出土 墨書土器

図版１　百間川兼基遺跡 弥生時代遺構(1)
図版２　百間川兼基遺跡 弥生時代遺構(2)
図版３　百間川兼基遺跡 古墳時代遺構(1)
図版４－１　百間川兼基遺跡 古墳時代遺構(2)
　　２　百間川兼基遺跡 古代～中世溝
図版５　百間川今谷遺跡 弥生時代～中世遺構
図版６　百間川沢田遺跡 縄文時代遺構
図版７　百間川沢田遺跡 弥生時代溝・水田
図版８－１　百間川沢田遺跡 弥生時代水田
　　２　百間川沢田遺跡 古墳時代遺構
図版９　百間川沢田遺跡 古代～中世遺構
図版10　百間川沢田遺跡出土 縄文土器
図版11－１　百間川兼基遺跡出土 弥生土器
　　－２　百間川兼基遺跡、同沢田遺跡出土
　　土師器
図版12－１　百間川兼基遺跡遺跡出土 土師器
　　－２　各遺跡出土 古代～中世土器
図版13　百間川兼基遺跡出土 石製品（1/2）
図版14　百間川沢田遺跡出土 石製品（1/2）
図版15　各遺跡出土 木製品（1/2、1/4）
図版16　各遺跡出土 土製品・玉等（1/2、1/4）

第１章　地理的・歴史的環境

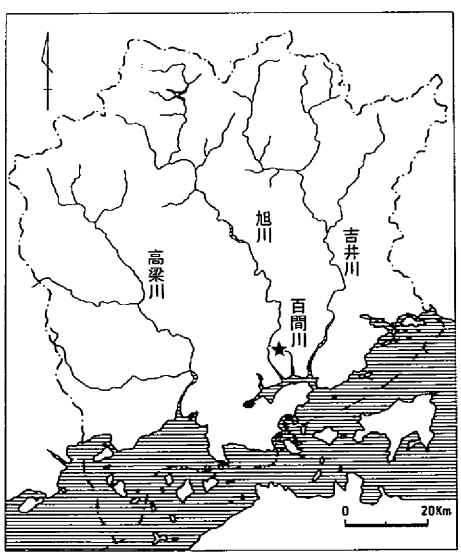
百間川は、江戸時代初め頃の寛文９年（1669年）から貞亨４年（1687年）にかけて造られた、旭川の放水路である。岡山城は旭川の一部を堀に見たてて築城されており、また城下町がその周辺に広がっているところから、水害には弱い面を持っていた。そのため旭川の水量調節が必要となり、上流部から増水時に分岐して放水できる水路、つまりバイパスを造ったわけである。この事業は、岡山藩主池田光政の命を受けた津田永忠が、熊沢蕃山の治水論「川除けの法」を取り入れて工事の指導・指揮にあたり、城下の東側に広がる操山丘陵の北麓を右岸側の堤防に見立ててその裾部を東流させ、丘陵の東端を回って南流させて海に注がせる、流程約７～８km（現在では約13km）にわたる間の一大河川改修事業であった。

この百間川の上・中流部は、中国山地に源を発し吉備高原を深く削って流下する旭川が、高原の端部でどっと吐き出される土砂の沖積によって形成された、広義の岡山平野の南東部に位置し、旭川東岸の平野（以下旭東平野と呼ぶ）の南端にあたる。旭東平野は北に竜の口山丘陵、南に操山丘陵、さらに東を芥子山および山王山丘陵によって区画された、比較的まとまりのある水田地帯を形成している。しかし、この平野の微地形を、市街化の進む以前の大正年間発行の地図によって詳細に観察すると、旭川が平野に至る入口、つまり岡山市中原付近から、南南東方向へ祇園・新屋敷・清水・藤原、南東に振って赤田・兼基・神下・長利にかけてと、祇園から南東方向へ賞田・国府市場・雄町・乙多見・長岡・長利にかけての二ルートに、条里区画の及ばない水田・水路地形の乱れが看取される。これは、旭川の一部がこの平野の形成過程において、大きく二ルートの河道として存在していたものと思われ、その後200～300m幅の範囲で蛇行を繰り返し、土砂の堆積作用と相俟って三角州の形成や周辺の沖積化を促し、やがて河道自体も埋没してわずかに中小の蛇行する用排水路に姿をとどめて現在に至っている。また、旭東平野の北東部にあたる四御神と市場出村の間の周辺は、旭川の堆積作用が及ばないため、広範囲にわたってバックマッシュ（後背湿地）であった可能性が強い。

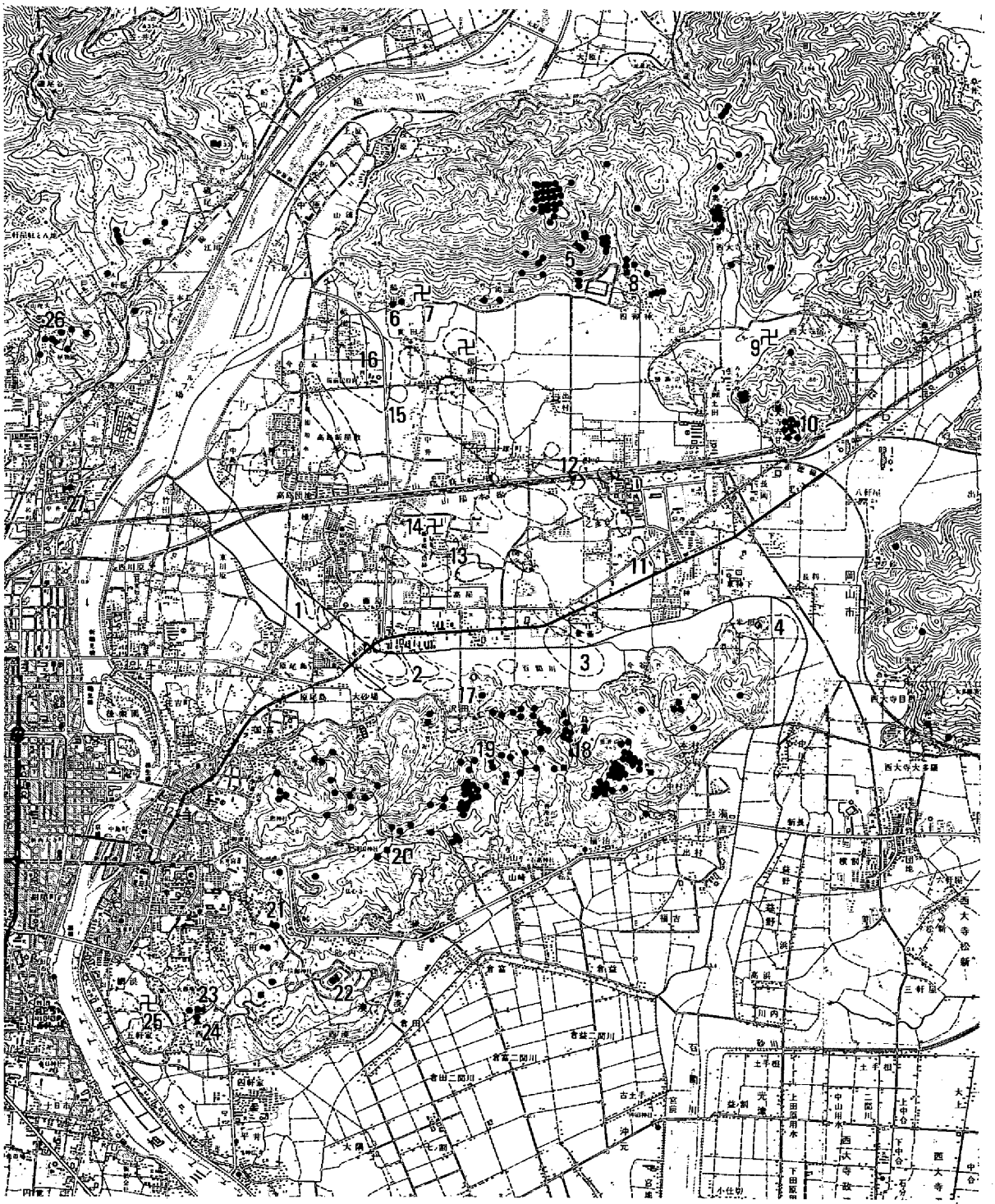
この旭東平野を中心とし、それを望む丘陵をも含めて、先土器時代の足跡はほとんど知られていない。唯一、操山丘陵の旗振台古墳北部遺跡（註１）でナイフ形石器、サヌカイトの剥片が少量表採されているに過ぎない。

縄文時代の遺構・遺物は、今のところ平野部のみ認められている。発見の発端になったのは、1959年に国道２号線百間川橋の橋脚部の工事に伴って出土した土器が、近藤義郎氏によって縄文晩期であることが確認されたことに始まる。その後、山陽新幹線建設工事に伴い調査された雄町遺跡（註２）でも晩期土器の出土を得て、沖積平野への縄文人の進出が十分予測されるに至った。

百間川改修工事に伴う発掘調査が開始された1977年以降、百間川原尾島遺跡や同沢田遺跡の微高地上あるいは



第１図　遺跡位置



1．百間川原尾島遺跡
2．百間川沢田遺跡
3．百間川兼基・今谷遺跡
4．百間川米田遺跡
5．備前車塚古墳
6．唐人塚古墳
7．賞田廃寺
8．四御神山の上古墳
9．井寺廃寺
10．山王山古墳
11．乙多見遺跡
12．雄町遺跡
13．赤田遺跡
14．幡多廃寺
15．中井・南三反田遺跡
16．備前国府推定地
17．沢田大塚古墳
18．兼基鳥坂銅鐸出土地
19．金蔵山古墳
20．旗振台古墳
21．操山103号古墳
22．湊茶臼山古墳
23．網浜茶臼山古墳
24．操山109号古墳
25．網浜廃寺
26．一本松古墳
27．神宮寺山古墳

第２図　百間川周辺遺跡分布（1/50000）

端部、旧河道からも縄文土器の出土が相ついだ。そのうち、現在までに最も古い時期を示しているのは百間川沢田遺跡の旧河道から出土した中期の土器片（註３）である。これらは摩滅が激しいため、上流域あるいは丘陵部からの流入の可能性があるが、少なくとも旭東平野周辺を大きく外れて存在していたとは考えられず、当遺跡周辺の沖積化の進行に伴う微高地の核の形成が、以外と早かった可能性も捨てきれない。いっぽう、中期までは遡れないものの、沢田遺跡の微高地縁辺部から、比較的大形で摩滅の少ない後期末の突帯文土器片（註３）が出土したことにより、後期末段階での居住は推測されていた。そして、その後百間川原尾島遺跡の微高地上（弥生前期の基盤層下約50cm）から、後期後半の条痕文土器片の散布と焼土面が見つかり（註４）、さらに操山丘陵の裾部から微高地上にかけての百間川沢田遺跡で、ほぼ同時期の多量の土器片の散布とともに炉床やドングリ貯蔵穴なども発見される（註５）など、沖積地の一部が少なくとも縄文後期には、キャンプ地あるいは定住地に近い形で利用されていたことが明らかになってきている。

縄文時代晩期の遺物は、雄町遺跡をはじめ百間川遺跡群のすべてから見つかっており、地形からその存在が予測される三角州状の微高地のほとんどは、生活の場であったと推察される。しかし、出土遺物が確実に遺構に伴って出土した例が少なく、すでに水稲農耕を行っていたことを想起させる太形蛤刃石斧や打製石鍬さらに石包丁形石器（註５）などの、遺物として良好な資料もあるが、遺構配置等から導かれるところの具体的な集落のあり方は、今一つ不明である。また、本報告書収載の沢田遺跡の調査で、弥生前期の基盤層下の微高地上の撓み（幅７～８ｍ、長さ20ｍの範囲）に認められていた厚さ10cm程の縄文晩期土器包含層は、晩期水田の可能性があったが、分析でははっきりとした結果は得ていない（註６）。

弥生時代前期の遺跡は、縄文時代晩期から続いて同様の遺跡に認められているが、前期前葉の時期がいずれも欠けている。遺構の残存状況は比較的良好で、とくに百間川沢田遺跡で見つかった環濠はおよそ90×100ｍの規模で、内側に竪穴住居が４軒、円形周溝遺構２基等で集落が構成されており（註５）、前期の段階でこの地にも防禦施設の必要な緊張関係が顕在していたとみられる。そのほか、環濠とは旧河道を挟んで隣の微高地上の撓みには、前期後半とみられる小区画水田が２面（註４）、百間川原尾島遺跡でも同様の水田が１面（註７）検出され、立地・規模・形態などの初期水田のあり方に新知見を得ている。

弥生時代中期の遺跡は、前出の遺跡のほか赤田遺跡（註８）、乙多見遺跡（註９）などがある。調査された面積にもよるが、そのうち百間川兼基・今谷遺跡が遺構・遺物の量・質ともに他を圧倒しており、この時期の母村的位置を占める（註10）。とくに、20数棟にものぼる掘立柱建物群は、規模・配置等からしても、単に倉庫群というより住居群の性格が強いと考えられ、最近西日本各地でも類例が増加しつつある。ただ、周辺から多量のガラス滓が出土していることから、ガラスそのものあるいは滓を副産物で排出するようなモノを製造した工房址の可能性も捨てきれない。関連するかどうかわからないが、この遺跡を北に望む操山丘陵の谷部から３口の銅鐸が出土していて（註11）、注目される。そのほか、この時期の水田は百間川沢田遺跡から同原尾島遺跡にかけての、微高地の端部あるいは低位部にかけて比較的狭い範囲に認められ、小区画ながら細長く部分的に五角形が混じる形態を示す（註５・12）。さらに、微高地上には用水路や一部に井堰も検出されていて、灌漑技術も完成されていたとみられる。

弥生時代後期になると、旭東平野に散在する三角州状の微高地の核は安定し、微高地を分断してい

た大小の河道や低位部も堆積作用によってある程度埋没し、その条件下で中期とは比較にならないほど、集落の大規模化や飛躍的な水田の拡大化が認められる。百間川原尾島遺跡の微高地は、とくに遺構密度が高く、後期を通じての母村的集落である。そしてその周辺は言うに及ばず、約３km離れた今谷遺跡の東端までの微高地間に、ほとんど隙間なく展開する水田は、各微高地の縁辺部に沿って掘削された灌漑水路と有機的に結ばれ機能している。その様は、確かに自然環境に恵まれた地勢にもよるが、経済的自立を背景として社会的にも技術的にも成長が急激に進んだ結果だと思われ、後期段階での共同体内部の成熟度をうかがわせる。しかしながら、後期末には旭川の両岸を含む広範囲にわたって大洪水に見舞われ、水田のほぼ全域が洪水砂で埋没しただけに留まらず、微高地上にも及び、生産基盤を失っただけでなく集落構成の上でも壊滅的な打撃を被ったことは、想像に難くない。そして、埋没した水田はその後は改修されず、少なくとも百間川遺跡群の調査のおよぶ部分では古墳時代を通じて水田化された形跡はない。ちなみに、洪水砂の上面に形成された包含層あるいは土器溜り出土の土器型式は百・古・Ⅰの時期を示し、あたかも洪水から立直った時にはもう古墳時代が始まっていた感さえある。

古墳時代の集落遺跡は、今のところ丘陵部には認められておらず、弥生時代までの微高地にほぼ継続されて分布するようであるが、この時代を通じて弥生後期との比較においてはかなり希薄である。平野を取り巻く丘陵上には、第２図のように多くの古墳が存在する。古墳は竜の口丘陵に約90基、山王山丘陵に約20基、操山丘陵に約120基を数え、 その多くは後期の小円墳であるが、前半期の円墳も約30基ほど含まれる。

最古級の出現期の古墳として、備前車塚古墳（註13）・宍甘山王山古墳（註14）・操山109号墳(註15）などの中規模前方後円(方)墳がそれぞれの丘陵に存在し、とくに操山丘陵ではそののち、網浜茶臼山古墳（註15）…湊茶臼山古墳（註16）…金蔵山古墳（註17）と続く首長墳の系譜がたどれる。これらの首長墳は、当時では南に海を望む尾根上に立地しており、海浜集団との関係も無視できない。金蔵山古墳以降、この地域では５世紀代には前方後円墳は構築されておらず、操山山頂の旗振台古墳(註18)、竜の口山裾の四御神上の山古墳などの中小規模の方墳が、調査例で知られるに過ぎない。ただし、最近行われた中井・南三反田遺跡の調査（註19）で、５世紀後半から６世紀初めの時期の、数基の古墳が沖積平野の真中に確認されるに至り、百間川原尾島遺跡などで検出されているほぼ同時期の竈付き住居群や掘立柱建物群などで構成されるような一集団との、とくに古墳の立地を視野にいれての集団関係の検討が必要になってきている。

後期古墳は、前述のように丘陵尾根や山裾に群集するが、そのうち竜の口山丘陵の山裾の唐人塚古墳（註20）・四御神権藤塚古墳、操山丘陵裾の沢田大塚古墳（註21）や操山11号・51号墳のように、比較的大形の横穴石室をもつ古墳も数基混じる。ともあれ、古墳時代後期についても微高地上の集落構成は今一つ明らかでなく、終末期の古墳あるいは集落についても不明な点が多い。

飛鳥時代から白鳳時代にかけては、この平野に賞田廃寺（註22）や幡多廃寺（註８）、井寺（居都）廃寺が建立されている。とくに前二寺は奈良時代には壇上積基壇で整備され、中央寺院に匹敵するほどの内容をもつ。また、これらの三カ寺は上道氏の氏寺とされ、さらにそれぞれの造営・修復の時期に補完関係がある（註８）とされる。いっぽう、備前国府はこの平野の中では、前二寺をつなぐ位置の国府市場を中心とした範囲に想定されているが、いまだ確実な証拠はない。しかし、当時の海に近い百間川米田遺跡では建物群が検出され、さらにほど近い溝や包含層から出土した「上三宅」の墨書

須恵杯や「官」印の須恵器、銅製の帯金具（丸鞆）などの遺物から、建物群は公的な倉庫群（倉院）の可能性が強く、国府の外港として機能していた可能性も指摘されている（註23)。ほかに百間川原尾島遺跡の奈良時代から平安時代にかけての大溝から、人形・刀形・斎串などの木製品が多く見つかっている（註４)。大溝の周辺では「大祓」の儀式が執り行われた蓋然性も高く、祓が公のまつりであり近くに国府推定地が所在することからも、国府関連の儀式と考えられている。

平安時代以降のこの平野の状況はあまり明確ではないが、百間川遺跡群の調査では、平安～鎌倉時代の施釉陶器・瓦器・土師質土器・輸入陶磁器などの遺物が、各微高地から数多く出土している。遺構的には比較的大形の条里方向に沿った溝が各遺跡で見つかっている。とくに、鎌倉～室町時代の百間川米田遺跡の大溝は、東西方向に約90m離れて並走する２本の溝が、南北溝でつながれた形の「工」字状を呈し、幅約７mの大規模なものである。大溝の両岸には、一段下がったところに１m幅程の平坦部が見られることから、その部分を船曳き道と考え、さらに規模や地理的条件などから運河の可能性が指摘されている（註24)。この大溝の北側には、ほぼ同時代に何期かにわたって営まれた集落も検出されているが、建物の規模や種類、同時期の集落構成などから、港町的な海浜集落というより海に近い農村集落と考える向きもある（註25)。また、この集落の北方に約200m離れた地点の最近の調査（註26）で、ほぼ同時期の集落と河道にかかる橋梁（橋脚部分）が見つかっており、前述の運河状の大溝とともに当時の土木・建築技術の一端を知る手がかりとなっている。ほかに、百間川原尾島遺跡でも鎌倉～室町時代の建物群が比較的広い範囲に検出されていて（註27)、集落の構成がかなり明確に判明しつつある。規模からすれば百間川米田遺跡の集落と大差はないと思われるが、周辺に見つかっている数基の土壙墓のうち２～３基には、青磁や白磁の椀や皿が副葬され、そのうちの１基には湖州鏡が副葬されているなど、単なる一農村集落とは思えない面もある。

中世の遺構は、この平野に限らず遺存状態は良くない。これは、とくに県南部の沖積平野のほとんどの調査で確認されていることであるが、現代の集落にほぼ重なることと現代水田に至る地下げなどの影響と思われる。また、同様にとくに奈良時代から平安時代にかけての遺構が希薄であることが知られつつあり、その要因として中世の初め頃にかなり大規模な構造改善（これは条里制に関連すると思われる）が行われたためと推測される。これは今のところ、本報告にかかる百間川兼基遺跡から同沢田遺跡にかけての調査で検出された、ほぼ重複する３本の溝のうち、平安時代の２本の溝がほぼ東西方向ながら蛇行するのに対し、鎌倉時代の溝は比較的東西方向に直線的であり、さらに西端部で直角に屈曲して北に向かうなどの状況から推測するしかなく、具体的にはほとんど捉まれていない。

以上、この章については註４文献の第１章を基調にして、部分的に書き改めたものである。

（柳瀬昭彦）

註

註１　鎌木義昌「岡山市域の無土器時代遺跡と遺物」『岡山市史・古代編』岡山市　1962年

註２　高橋　護・正岡睦夫他「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』１　岡山県教育委員会　1972年

註３　岡田　博他「百間川沢田遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』59　岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所　1985年

註４　柳瀬昭彦・高田恭一郎他「百間川原尾島遺跡５」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』106　岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所　1996年

註５　平井　勝他「百間川沢田遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84　岡山県教育委員会・建設省岡山河

川工事事務所　1993年

註６　藤原宏志「百間川沢田遺跡におけるプラント・オパール分析結果について」　本報告書付載１

註７　宇垣匡雅他「百間川原尾島遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88　岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所　1994年

註８　出宮徳尚・根木　修他『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市遺跡調査団　1975年

註９　正岡睦夫「岡山市乙多見における溝改修工事に伴う出土土器」『岡山県埋蔵文化財報告』３　岡山県教育委員会　1973年

註10　高畑知功他「百間川兼基遺跡１・百間川今谷遺跡１」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』51　岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所　1982年

註11　鎌木義昌「岡山県兼基遺跡」『日本農耕文化の生成』東京堂出版　1961年

註12　中野雅美他「百間川原尾島遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56　岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所 1984年

註13　近藤義郎・鎌木義昌「備前車塚古墳」『岡山県史』第18巻　考古資料　岡山県　1986年

註14　宇垣匡雅「吉備の前期古墳－Ⅱ　宍甘山王山古墳の測量調査－」『古代吉備』第10集　古代吉備研究会　1988年

註15　宇垣匡雅「竪穴式石室の研究－使用石材の分析を中心に－」『考古学研究』第34巻第１・２号　考古学研究会　1987年

註16　近藤義郎「湊茶臼山古墳」『岡山県史』第18巻　考古資料　岡山県 1986年

註17　西谷真治・鎌木義昌『金蔵山古墳』倉敷考古館　1959年

註18　鎌木義昌「岡山市域の古墳時代遺跡」『岡山市史・古代編』岡山市　1962年

註19　桑田俊明「中井・南三反田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』92　岡山県教育委員会　1994年

註20　出宮徳尚「唐人塚古墳」『岡山県大百科辞典・上』山陽新聞社　1980年

註21　出宮徳尚「沢田大塚古墳」『岡山県大百科辞典・上』山陽新聞社　1980年

註22　出宮徳尚他『賞田廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会　1971年

註23　井上　弘他「百間川当麻遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』52　岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所　1982年

註24　平井　勝「百間川米田遺跡３－中世の遺構について・大溝－」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』74　岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所 1989年

なお、百間川米田遺跡は註23報告書までは百間川当麻遺跡と呼称していたが、一連の遺跡である。名称変更の経緯については、当報告書の凡例を参照されたい。

註25　岡本寛久「百間川米田遺跡３－中世米田遺跡の構造と変遷－」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』74　岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所　1989年

註26　岡田　博「米田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』101　岡山県教育委員会　1995年

註27　註４・12文献に同じ

平井　勝他「百間川原尾島遺跡４」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』97　岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所　1995年

第２章　調査および報告書作成の経緯

第１節　発掘調査の契機と経過

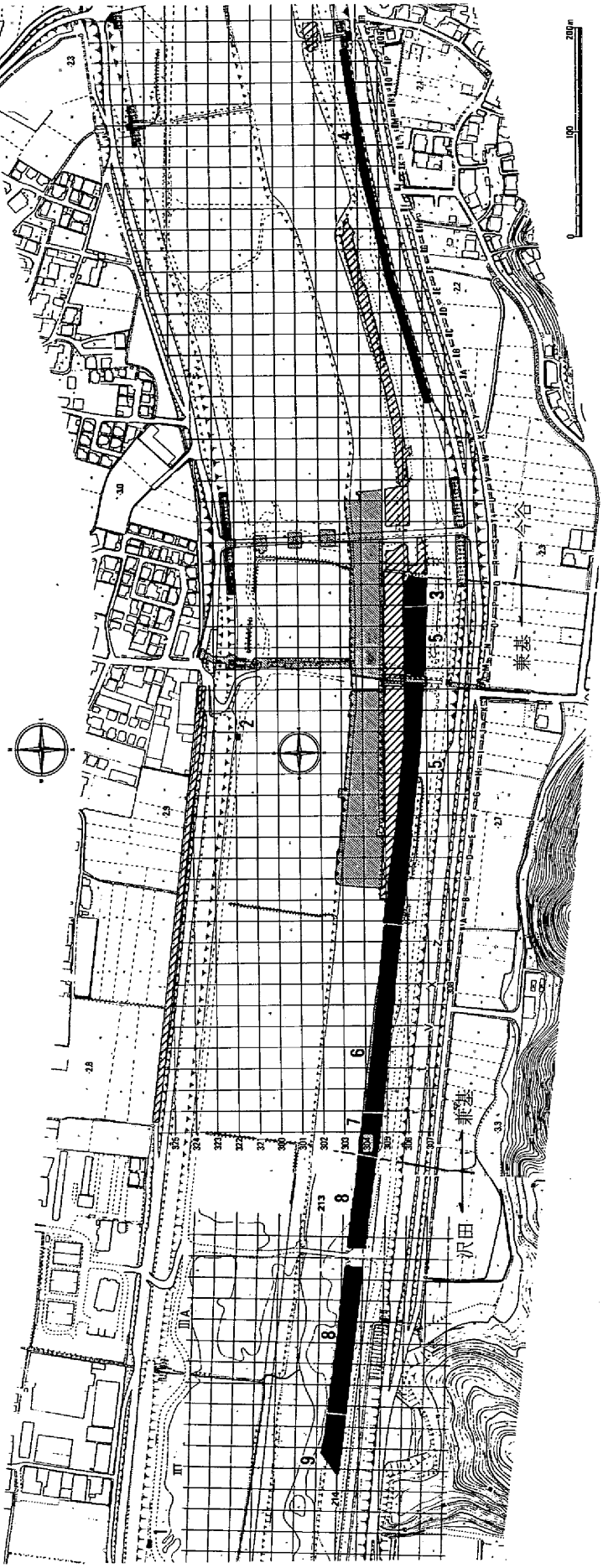
百間川が旭川の放水路として江戸時代の初め頃に造られた人工河川であることは、第１章でも触れた。その百間川の大規模な改修工事の計画構想は、昭和の初め頃からあったらしいが、建設省が本格的に改修計画を打ち出したのは1968（昭和43）年のことである。当時、百間川の河床下に遺跡（散布地）が存在することは、1950（昭和25）年頃から周知され、1965（昭和40）年度に岡山県教育委員会が発行した『岡山県遺跡地図』にはＡ・Ｂの両地点の範囲が記載されている。地名表の遺跡名は、それぞれ百間川Ａ遺跡・同Ｂ遺跡となっており、前者は国道２号線の百間川橋を含み上流の祇園用水路付近まで、後者は百間川橋の下流で河道が東方向へわずかに屈曲する付近が示されている。

改修工事計画を知った岡山県教育庁文化課は、建設省岡山河川工事事務所に対し、事前に文化財の保護に遺漏のないよう要望するとともに、以後計画進捗状況に合わせて遺跡の取り扱いについて協議を重ねた。その結果、基本的には埋蔵文化財包蔵地の範囲が確定したならば、当該地は発掘調査が終了した後に改修工事を施工することで合意した。

また、岡山県教育委員会は、建設省に対して文化財保護法第57条の３に先だつ事前協議の文書の提出を求める一方、この協議の基礎資料となる百間川遺跡（関連遺跡を含む）の範囲確認調査計画概要を提出した。その後1976（昭和51）年４月になって、建設省中国地方建設局岡山河川工事事務所長から事前協議の文書が岡山県教育委員会に提出され、これに基づいて協議を重ねた。そして、同年９月１日付けで建設省中国地方建設局長から確認調査の依頼文書が提出され、同年11月１日から岡山県教育委員会が確認調査を実施するに至った。

確認調査（第１次調査）は、低水路部分の遺跡の確認および古地形の復原と新田サイフォン（百間川Ａ遺跡の北側に隣接する祇園用水を切り替えて、低水路に直交させてその下を潜らせる施設）部分の一部について、翌年３月31日まで実施された。その結果、岡山市原尾島（第１微高地）、同沢田（第２微高地）、同兼基・今谷（第３微高地）の３箇所に遺構・遺物が多く認められる大規模な微高地が拡がり、その部分が遺跡であることが判明した。翌年度からは、確認調査の成果を基に建設省の工事計画に先だつかたちで本調査を進め、現在も継続中である。この間、各微高地間にも弥生時代後期の水田が存在することや、新たに岡山市米田一帯も遺跡であることが判明し、発掘調査の対象範囲は当初より増加し、現在に至っている。

岡山市兼基と同今谷にまたがる百間川兼基・今谷遺跡は、1978（昭和53）年７月から1981年７月末までおもに低水路の中央部分の幅30ｍを満たす長さ約380ｍの範囲を調査し、その後1986年度までにおもに低水路右岸側の幅約10～20ｍ、長さ約650ｍのほか、左岸用水の約５×420ｍ部分などを調査した。そして、これらの調査報告書は、前者が「百間川兼基遺跡１・百間川今谷遺跡１」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』51、後者が「百間川兼基遺跡２・百間川今谷遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』114として、それぞれ1982年度と1995年度に刊行している。本報告書掲載の対象となった



第３図　設定グリッドと調査区位置（1/6000）

調査区は、1990年度以降に調査を実施した、おもに低水路右岸の法線の外側２ｍ（工事掘り方分含む）までの、幅約15～18m、長さ510mと右岸側の高水敷護岸基礎部分の幅約５ｍ、長さ350mの範囲などであり、低水路右岸側の両遺跡の調査対象部分の報告書は終了したことになる。

岡山市沢田に拡がる百間川沢田遺跡は、1977（昭和52）年度から５年間に、右岸用水路および低水路右岸の法線の外側２ｍから幅約40m、長さ約500mと排水樋門などの調査を実施し、これらの調査報告書は、「百間川沢田遺跡１」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』46、「同２」『同』59として1981・1984年度に刊行している。また、1982年度から1989年度までに調査を実施した、低水路左岸法線までの幅約40mと低水路右岸法線沿いの幅約15～18mなどの部分の報告書は、「百間川沢田遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84として1993年度に刊行している。本報告書掲載の対象調査区は1993・1994年度の調査にかかる低水路右岸法線沿いの幅約17m前後、長さ約150mの範囲で、位置的には当遺跡の東端にあたり、遺構は隣接する百間川兼基遺跡に続くものもある。また、当遺跡の低水路右岸側の調査対象地も、工事用橋梁の一部を除いてほぼ終了したことになる。

なお、本報告書掲載の調査区の位置および調査担当者、調査面積などは、第３図および表１に示すとおりである。

表１　百間川兼基遺跡・同今谷遺跡・同沢田遺跡 調査一覧

年度	No	遺跡・調査区	担当者	面積(m²)	遺物(箱)
1990 (H2)	1	沢田・左岸階段	平井・藤田・村田	2,762	15
	2	兼基・左岸階段			
	3	兼基・右岸低水路(305～307-O～Q)			
	4	今谷・右岸高水敷護岸(303～307-Z～ⅡP)			
1991	5	兼基・右岸低水路（305・306-A～O）	藤田・弘田・村田	4,680	91
1992	6	兼基・右岸低水路（304・305-r～z）	大森・弘田・高田	2,400	16
1993 (H5)	7	兼基・右岸低水路（303・304-o～q）	柳瀬・大森・根木	4,320	4
	8	沢田・右岸低水路 (213・214-ⅡV～214・215-ⅢH)			44
1994	9	沢田・右岸低水路（213・214-ⅡT～ⅡV）	山磨・小畑・根木	880	10
			計	15,042	180

第２節　調査および報告書作成の体制

発掘調査は、岡山県教育委員会が建設省中国地方建設局から委託を受け、1977（昭和52）年度から実施しており、現在も継続している。調査開始から発掘調査の主管課は文化課であるが、1984（昭和59）年11月から発掘調査の実施は岡山県古代吉備文化財センターが担当している。

本報告書に掲載した百間川兼基遺跡は1990～1993（平成２～５）年度、百間川今谷遺跡は1990（平成２）年度、百間川沢田遺跡は1993・1994（平成５・６）年度に調査を実施した範囲（第３図参照）を対象としている。なお、調査は1990・1991・1993・1994年度が調査員３名の１班で通年、1992年度が調査員３名の１班で下半期に実施している。また、報告書の作成は調査員２名で1995（平成７）年度に行った。

岡山県教育委員会は、発掘調査と報告書の作成にあたって、遺跡の保護・保存ならびに調査の専門的な指導および助言を得るため、岡山県遺跡保護調査団の推薦を受けた方々に「旭川放水路（百間川）河川改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」の委員を委嘱している。

以下に、調査体制を記す。

旭川放水路（百間川）河川改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会 委員

池葉須藤樹　（元岡山市立犬島中学校校長）
鎌木義昌　（岡山理科大学教授）〈1993年２月物故〉
近藤義郎　（岡山大学名誉教授・岡山県文化財保護審議会委員）
角田　茂　（元岡山市立岡輝中学校教諭）
出宮徳尚　（岡山市教育委員会文化課）
水内昌康　（岡山県文化財保護審議会委員）
山本悦世　（岡山大学埋蔵文化財研究センター助手）〈1993年４月から〉

発掘調査

1990（平成２）年度

岡山県教育委員会
教育長　竹内康夫
教育次長　杉井道夫
岡山県教育庁文化課
課長　鬼澤佳弘
課長代理　光吉勝彦
課長補佐（埋蔵文化財係長事務取扱）
伊藤　晃
主査　藤川洋二
岡山県古代吉備文化財センター
所長　長瀬日出明
次長　河本　清
（総務課）
課長　竹原成信
課長補佐（総務係長事務取扱）
藤本信康
主任　平松郁男
主任　坂本英幸
（調査第一課）
課長事務取扱　河本　清
課長補佐（第一係長事務取扱）
柳瀬昭彦

文化財保護主査　平井　勝（調査担当）
文化財保護主査　藤田耕平（調査担当）
主　　事　　村田秀石（調査担当）

1991（平成３）年度

岡山県教育委員会
教 育 長　　竹内康夫
教育次長　　森崎岩之助
岡山県教育庁文化課
課　　長　　鬼澤佳弘（～12月）
　　渡邊淳平（１月～）
課長代理　　大橋義則
課長補佐（埋蔵文化財係長事務取扱）
　　柳瀬昭彦
主　　査　　時長　勇
岡山県古代吉備文化財センター
所　　長　　横山常實
次　　長　　河本　清
（総務課）
課　　長　　藤本信康
課長補佐（総務係長事務取扱）
　　小西親男
主　　査　　平松郁男
主　　任　　坂本英幸
（調査第二課）
課　　長　　正岡睦夫
第一係長　　平井　勝
文化財保護主査　藤田耕平（調査担当）
文化財保護主事　弘田和司（調査担当）
主　　事　　村田秀石（調査担当）

1992（平成４）年度（10月１日～３月31日）

岡山県教育委員会
教 育 長　　竹内康夫
教育次長　　森崎岩之助
岡山県教育庁文化課
課　　長　　渡邊淳平
課長代理　　松井新一
課長補佐（埋蔵文化財係長事務取扱）
　　柳瀬昭彦
主　　査　　時長　勇
岡山県古代吉備文化財センター
所　　長　　横山常實
次　　長　　河本　清
文化財保護参事　葛原克人
（総務課）
課　　長　　北原　求
課長補佐（総務係長事務取扱）
　　小西親男
主　　査　　石井　茂
主　　任　　石井善晴
主　　任　　三宅秀吉
（調査第二課）
課　　長　　正岡睦夫
第一係長　　平井　勝
文化財保護主査　大森善市（調査担当）
文化財保護主事　高田恭一郎（調査担当）
文化財保護主事　弘田和司（調査担当）

1993（平成５）年度

岡山県教育委員会
教 育 長　　森崎岩之助
教育次長　　岸本憲二
岡山県教育庁文化課
課　　長　　渡邊淳平
課長代理　　松井新一
課長補佐（埋蔵文化財係長事務取扱）
　　高畑知功

主　　査　　時長　勇
岡山県古代吉備文化財センター
所　　長　　横山常實
次　　長　　葛原克人
（総務課）
課　　長　　北原　求
課長補佐（総務係長事務取扱）
　　小西親男
主　　査　　石井　茂
主　　査　　石井善晴
主　　任　　三宅秀吉
（調査第三課）
課　　長　　柳瀬昭彦（調査担当）
第二係長　　平井　勝
文化財保護主査　大森善市（調査担当）
主　　事　　根木智宏（調査担当）

1994（平成６）年度

岡山県教育委員会
教 育 長　　森崎岩之助
教育次長　　岸本憲二
岡山県教育庁文化課
課　　長　　大場　淳
課長代理　　松井新一
課長補佐（埋蔵文化財係長事務取扱）
　　高畑知功
主　　任　　若林一憲
岡山県古代吉備文化財センター
所　　長　　河本　清
次　　長　　葛原克人
（総務課）
課　　長　　丸尾洋幸
課長補佐（総務係長事務取扱）
　　杉田卓美
主　　査　　石井善晴
主　　任　　三宅秀吉
（調査第三課）
課　　長　　柳瀬昭彦
課長補佐（第一係長事務取扱）
　　山磨康平（調査担当）
文化財保護主任　小畑良治（調査担当）
主　　事　　根木智宏（調査担当）

報告書作成

1995（平成７）年度

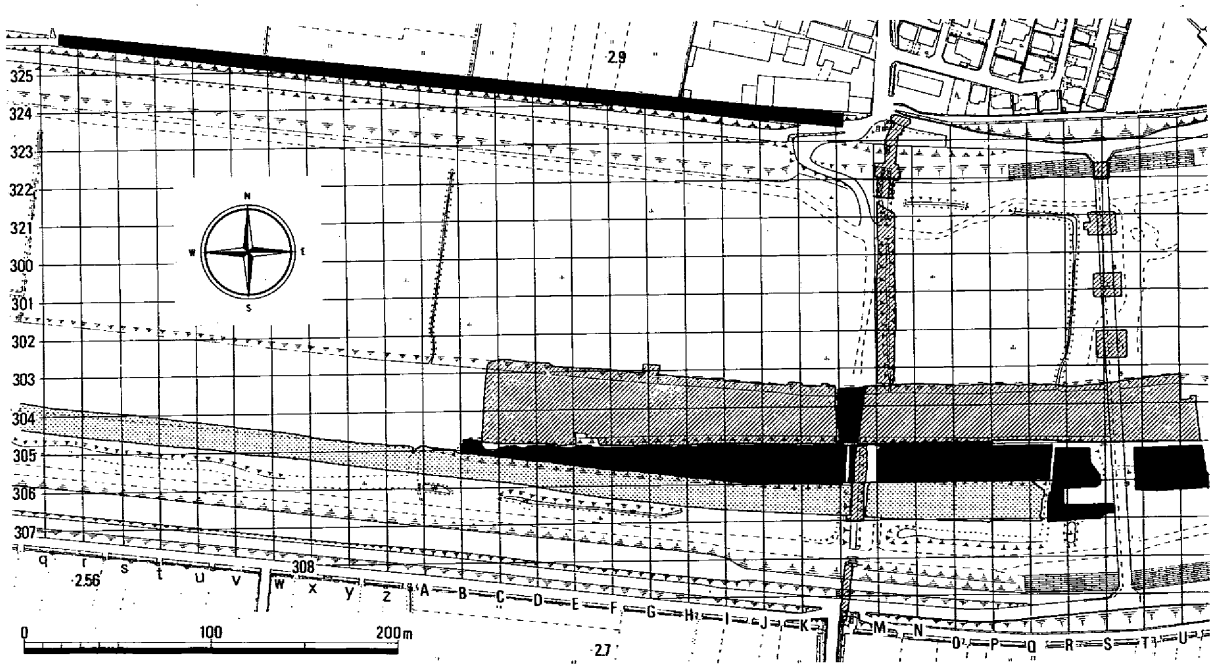
岡山県教育委員会
教 育 長　　森崎岩之助
教育次長　　黒瀬定生
岡山県教育庁文化課
課　　長　　大場　淳
課長代理　　樋本俊二
参　　事　　葛原克人
課長補佐（埋蔵文化財係長事務取扱）
　　高畑知功
主　　任　　若林一憲
岡山県古代吉備文化財センター
所　　長　　河本　清
次　　長　　高塚惠明
次長（文化課本務）　葛原克人
（総務課）
課　　長　　丸尾洋幸
課長補佐（総務係長事務取扱）
　　井戸丈二
主　　査　　石井善晴
主　　任　　木山伸一
（調査第三課）
課　　長　　柳瀬昭彦（報告書担当）
課長補佐（第二係長事務取扱）
　　岡本寛久
文化財保護主事　澤山孝之（報告書担当）

第３章　百間川兼基遺跡

第１節　遺跡の概要と調査区

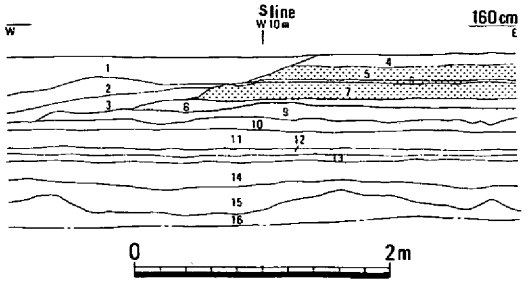
兼基遺跡の調査は、1978～1981年度と1982～1986年度そして1991～1993年度の大きく３次に分かれ、低水路北部と導入水路は『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』51に、左岸用水路と低水路中央が『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』114として刊行している。本書において扱うのは低水路の南端線に沿い、既報告の大上田・東苗代調査区に相当する部分（本書においては旧来の小字単位による調査区の細分を廃した。）を中心に兼基遺跡の微高地部分から沢田遺跡との境にかけての低位部を含んでおり、幅14～20m、長さ540mにおよぶ長大なトレンチ状を呈している。低位部における弥生水田の存在が調査範囲の拡大に繋がっている。

百間川兼基遺跡（以下は兼基遺跡と略す）はグリッドのＥラインあたりから東側が微高地となり、同一微高地ながらＱラインよりやや東を南北に流れる字境用水より東は今谷遺跡分となる。また、Ｅラインより西では弥生時代の水田が展開するがｐラインあたりの字境用水を以て沢田遺跡との境としている。現地盤高はＫラインあたりが最も高く（第６図）、調査区における微高地の最高所となる。それより東のＳラインあたりでは微高地でありながらも弥生時代期末の洪水砂に厚く覆われている。さらに低位部のＤライン付近では下層の旧河道の影響からか弥生水田層のレベルは最も低くなっている。

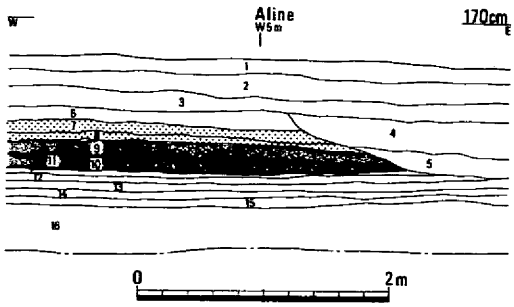


本報告掲載調査区　「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」51掲載調査区　「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」114掲載調査区

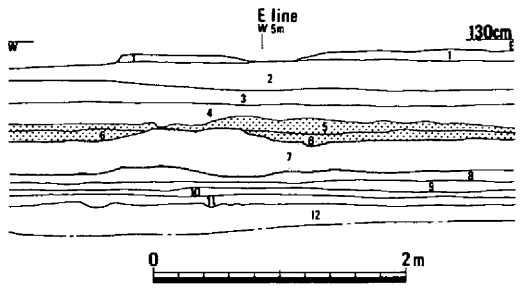
第４図　百間川兼基遺跡の調査区（1/4000）



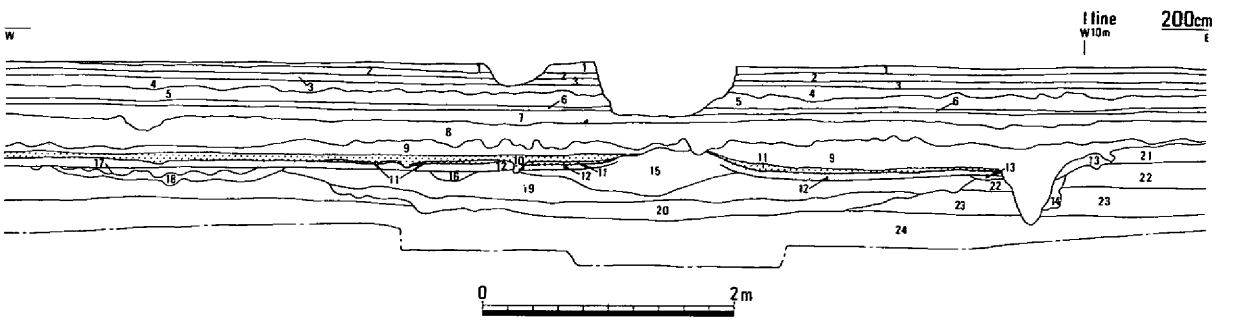
1．黄灰色(2.5Y5/1)砂質土
2．黄灰色(2.5Y4/1)砂質土
3．灰オリーブ色(5Y4/2)砂質土
4．黄灰色(2.5Y5/1)砂質土
5．灰黄色(2.5Y7/2)砂質土
6．灰色(5Y6/1)砂(灰色(5Y5/1)砂混る)
7．浅黄色(5Y7/3)砂
8．灰褐色(7.5YR5/2)粘質土
9．灰黄褐色(10YR6/2)粘土
10．灰白色(7.5Y7/1)粘質土
11．オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘質土
12．灰色(5Y4/1)粘質土(炭化物混)
13．灰色(7.5Y6/1)粘質土
14．青灰色(10BG5/1)砂質土
15．オリーブ黒色(5Y2/2)砂質土
16．緑灰色(10GY6/1)粘質土



1．灰色(5Y5/1)粘砂
2．暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘砂
3．灰オリーブ色(5Y5/2)粘砂
4．暗オリーブ灰色(2.5YG4/1)土
5．暗オリーブ灰色(2.5YG4/1)土
6．黄灰色(2.5Y4/1)砂質土
7．灰色(7.5Y5/1)砂
8．灰オリーブ色(7.5Y4/2)砂
9．暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土
10．暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土
11．オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土
12．灰色(10Y5/1)粘質土
13．灰色(7.5Y4/1)粘質土
14．黒色(7.5Y3/1)粘土
15．緑灰色(10GY6/1)砂
16．暗灰黄色(2.5Y4/2)土(ピート層)

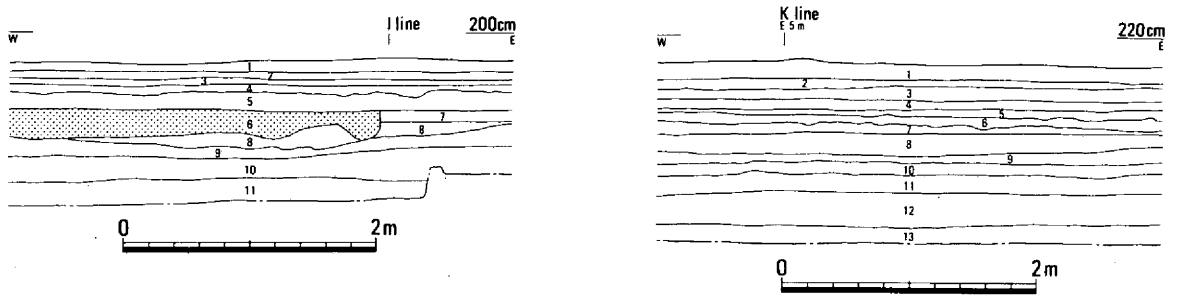


1．灰色(10Y5/1)粘性砂
2．暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘質土
3．暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘質土
4．黄灰色(2.5Y4/1)砂質土
5．暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)砂
6．緑灰色(7.5GY5/1)砂
7．暗オリーブ灰色(2.5GY5/1)砂
8．灰色(10Y5/1)粘質土
9．灰色(7.5Y4/1)粘質土
10．オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土
11．黒色(7.5Y2/1)粘土
12．暗灰黄色(2.5Y4/2)土
(ピート層)



1．浅黄色(2.5Y7/3)砂
2．灰黄色(2.5Y6/2)土(粗砂混る)
3．黄灰色(2.5Y5/1)粘質土
4．灰色(5Y5/1)粘質土
5．灰色(7.5Y6/1)粘質土
6．灰色(7.5Y6/1)粘土(Fe沈着)
7．灰オリーブ色(7.5Y6/2)砂質土
8．暗灰黄色(2.5Y4/2)粘性砂質土
9．にぶい黄色(2.5Y6/3)砂
10．灰黄色(2.5Y6/2)砂
11．緑灰色(10GY6/1)砂(グライ化)
12．暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土
13．灰色(7.5Y4/1)粘質土(グライ化)
14．灰色(10Y4/1)粘質土(グライ化、
オリーブ灰色(2.5GY6/1)土斑含)
15．灰色(10Y4/1)粘質土(グライ化、
炭含)
16．オリーブ黒色(10Y3/1)粘性土
(グライ化)
17．暗オリーブ灰色(5GY4/1)土
18．暗オリーブ灰色(5GY4/1)土(グライ化、
緑灰色(10GY6/1)基盤土ブロック含)
19．灰色(5Y4/1)粘質土(オリーブ
黄色(5Y6/4)土斑含)
20．黄灰色(2.5Y5/1)土(ややグライ化)
21．灰黄褐色(10YR4/2)土
22．にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土
23．灰白色(5Y7/2)砂質土
24．暗灰黄色(2.5Y4/2)土(粗砂混る)

第５図　調査区各地点の土層(1)



1．浅黄色(2.5Y7/3)砂
2．灰黄色(2.5Y6/2)土
3．黄灰色(2.5Y5/1)粘質土
4．灰色(5Y5/1)粘質土
5．灰色(7.5Y6/1)粘質土
6．オリーブ黄色(5Y6/3)砂〈洪水砂〉
7．暗灰黄色(2.5Y5/2)土
8．暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土
9．灰黄褐色(10YR4/2)土
10．にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土
11．灰白色(5Y7/2)砂質土

1．近現代砂
2．黄灰色(2.5Y5/1)粘質土
3．灰色(5Y5/1)粘質土
4．灰黄色(2.5Y6/2)土（粗砂多含）
5．灰黄色(2.5Y6/2)土と浅黄色(2.5Y7/3)土がブロック状に入る
6．黄灰色(2.5Y4/1)土
7．黄灰色(2.5Y5/1)土
8．暗灰黄色(2.5Y5/2)土
9．灰黄褐色(10YR4/2)土
10．にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土
11．灰白色(5Y7/2)砂質土
12．灰白色(5Y7/2)砂
13．黄灰褐色(2.5Y4/2)砂(グライ化)

第６図　調査区各地点の土層(2)

兼基遺跡は弥生時代から中近世にかけての複合遺跡であるが、とりわけ弥生時代中期から後期と古墳時代中期の遺構と遺物が主であり、微高地上の住居や建物・井戸・溝などと低位部における弥生水田からなる。なかでも注目すべきものとしては、弥生時代後期の土器溜りから出土した人形土製品や装飾性にとむ土器類、および古墳時代中期の掘立柱建物群がある。（弘田）

第２節　遺構・遺物の概要

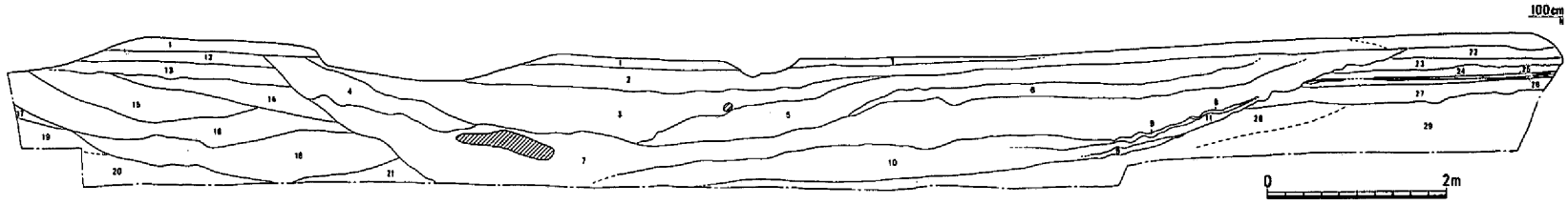
１．弥生時代の遺構・遺物

(1)　旧　河　道（第７・８・11～13図、巻頭図版２、図版１・11・13・15）

兼基遺跡の西端で検出した自然河道である。これは、303 ・304 ｏ～ｔ区をほぼ南西－北東方向に流走するもので、その南側は調査区外に延び、北側は低水路で掘削される。なお、平面的に検出したのは、ｏ～ｑ区の北西岸とｑ区・ｔ区の南東岸の一部であり、後はトレンチで確認している。また、埋土の掘り下げは第７図の５層までに止め、以下の確認もトレンチによる。

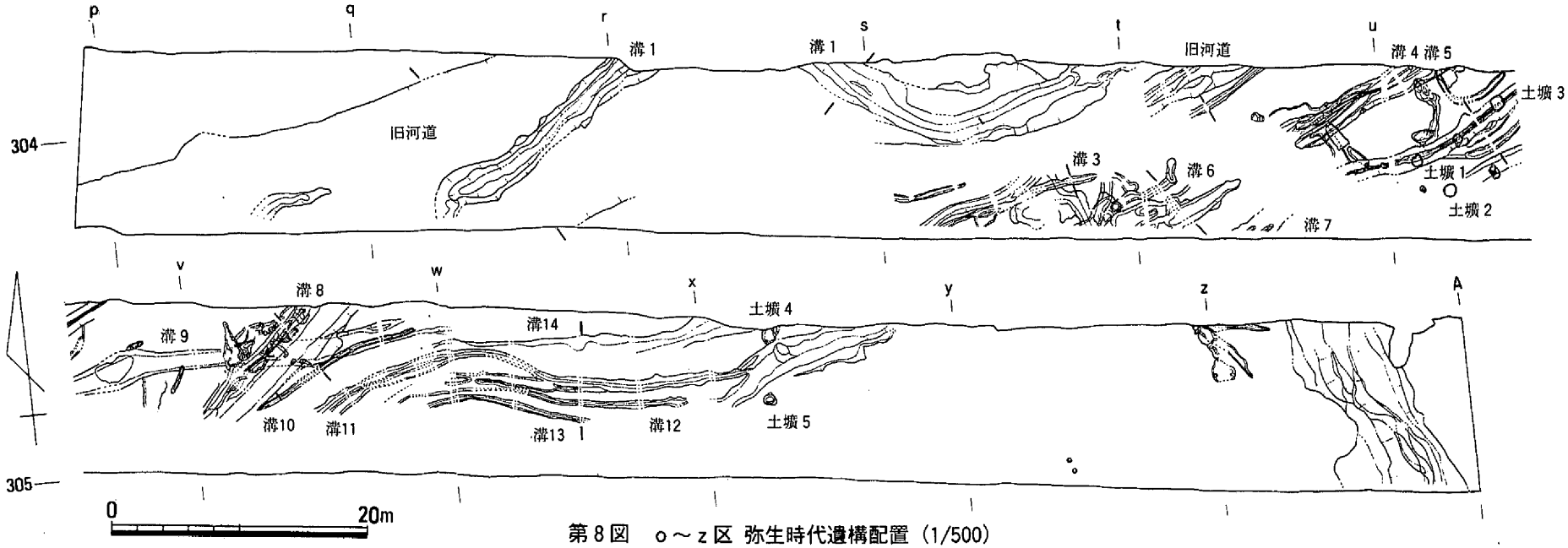
河道は幅15m、検出面からの深さは２m以上を測るが、標高-100cm前後での湧水のため、明確な底は確認していない。その断面を示した第７図によると、埋土は上層（３～11層）と下層（12～18・21層）に大別できる。上層は、中期段階の流路と考えられるもので、その上幅は12mを測る。下部は粗砂の堆積だが、上部の３・４層は植物遺体を多量に含み、図示した木器と、ほぼ完形の広口壺２が標高０m付近から出土している。下層は、前期段階の流路であったと考えられ、特に16・18層は粗砂と細砂が薄く縞状に堆積し、激しい流水を想起させる。なお、18層と21層は類似することから、下層の溝底はさらに深くなるものと考えられる。また、１・２層は旧河道の両肩を削平して水平堆積するもので、水田層の可能性を指摘しておきたい。その時期は中期後葉以降、後期の溝１以前である。

出土遺物には、弥生前・中期の土器、石器、木器、種子等があるが、縄文土器は出土していない。

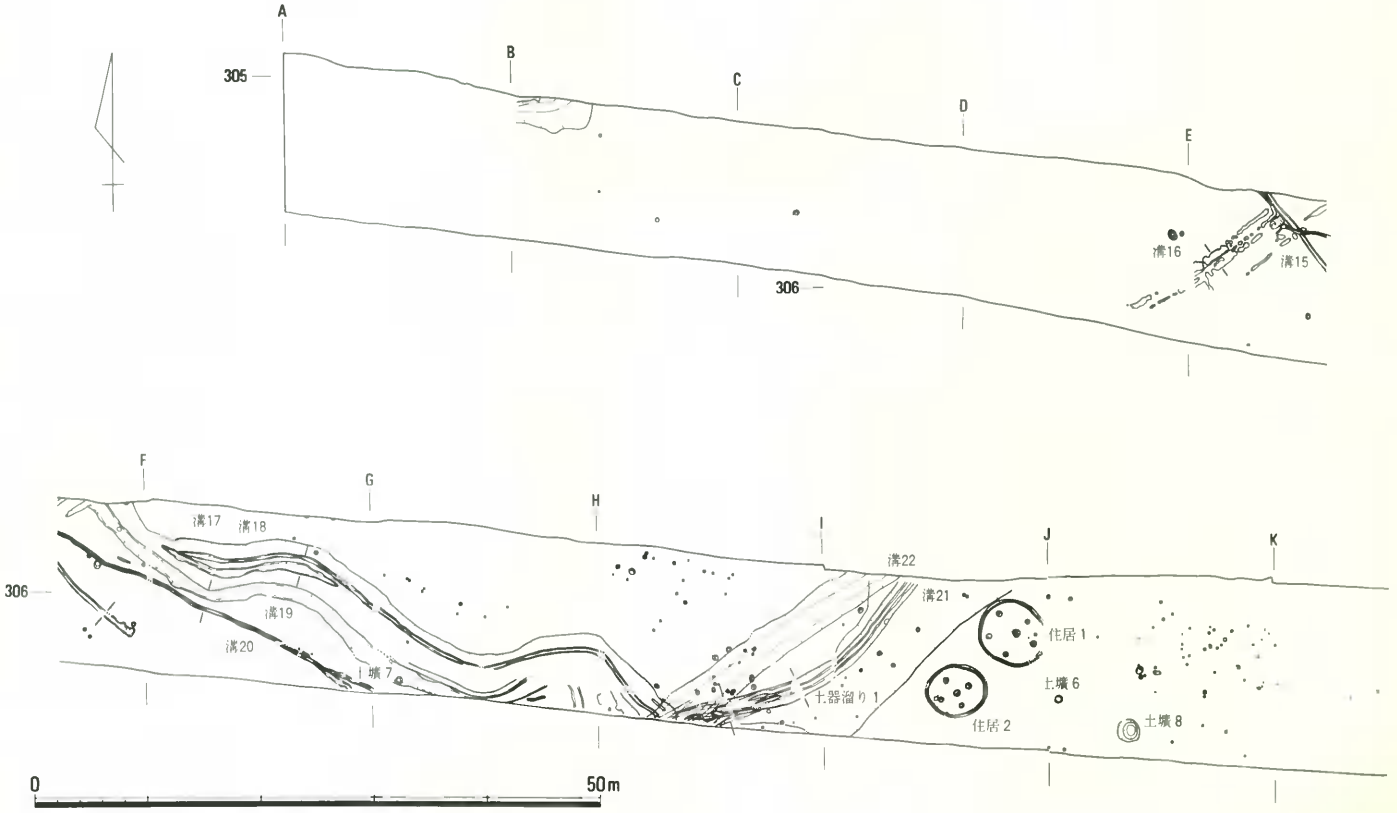


1．緑灰色(5G6/1)粘質微砂土
2．緑灰色(5G6/1)粘質土
3．緑灰色(2.5GY6/)砂質土
（木片多く含む）
4．明緑灰色(10GY7/1)粘質土
5．緑灰色(10G5/1)粘質土
6．緑灰色(5G6/1)粘質土
7．緑灰色(10GY5/1)粗砂(炭、木片含む)
8．青灰色(10BG6/1)粘質土
9．明青灰色(5BG7/1)砂
10．緑灰色(10GY5/1)粗砂
11．オリーブ灰色(10Y4/2)粘質土
12．緑灰色(5G6/1)粘質土
13．明緑灰色(7.5GY7/1)粘質土
14．緑灰色(7.5GY5/1)粘質土(微砂少量含む)
15．緑灰色(7.5GY5/1)粘質土(微砂多量含む)
16．緑灰色(10GY5/1)粗砂
17．青灰色(10BG6/1)粘土(微砂少量含む)
18．緑灰色(10GY5/1)細砂(木片多く含む)
19．灰オリーブ色(7.5Y5/2)粘質土
20．緑灰色(10GY5/1)粗砂
21．緑灰色(10GY5/1)粗砂
22．緑灰色(10G6/1)粘質土(微砂含む)
23．暗緑灰色(10GY4/1)粘質土
24．23層・25層・炭層の互層
25．緑灰色(5G6/1)粘質土
26．暗オリーブ色(7.5Y4/3)粘質土
27．オリーブ灰色(5GY5/1)粘質土
28．オリーブ灰色(2.5GY5/1)粘質土
29．暗緑灰色(5GY4/1)粘質土

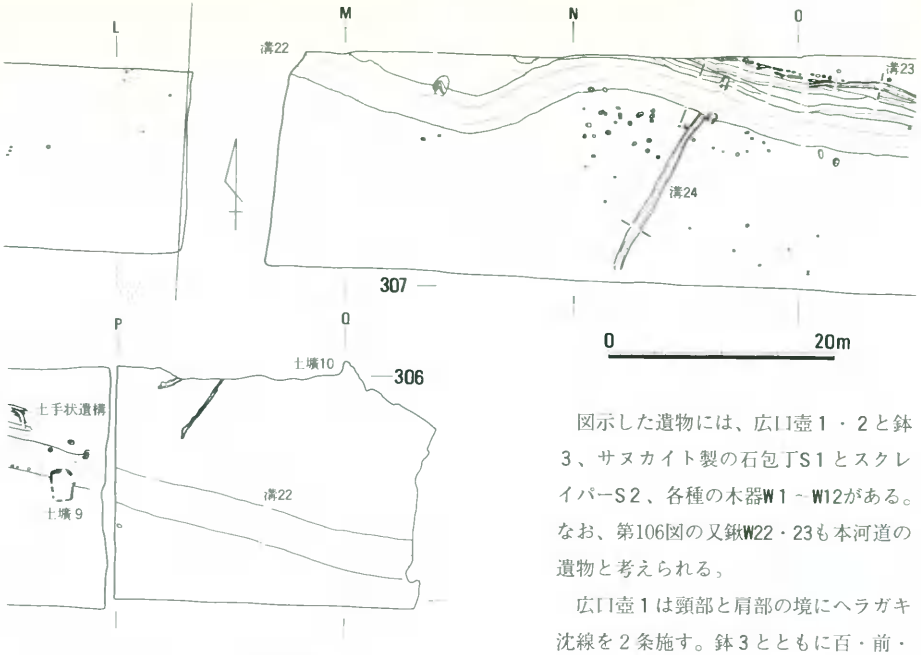
第７図　旧河道断面（1/80）



第８図　ｏ～ｚ区 弥生時代遺構配置（1/500）



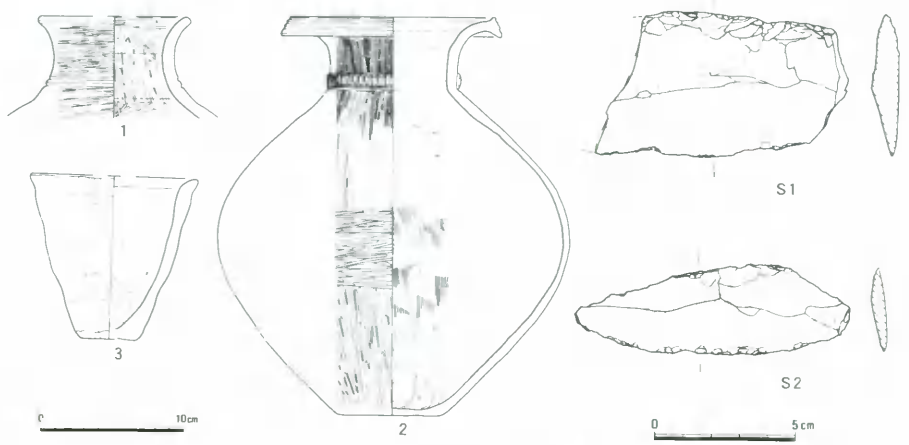
第9図　A～K区 弥生時代遺構配置（1/500）



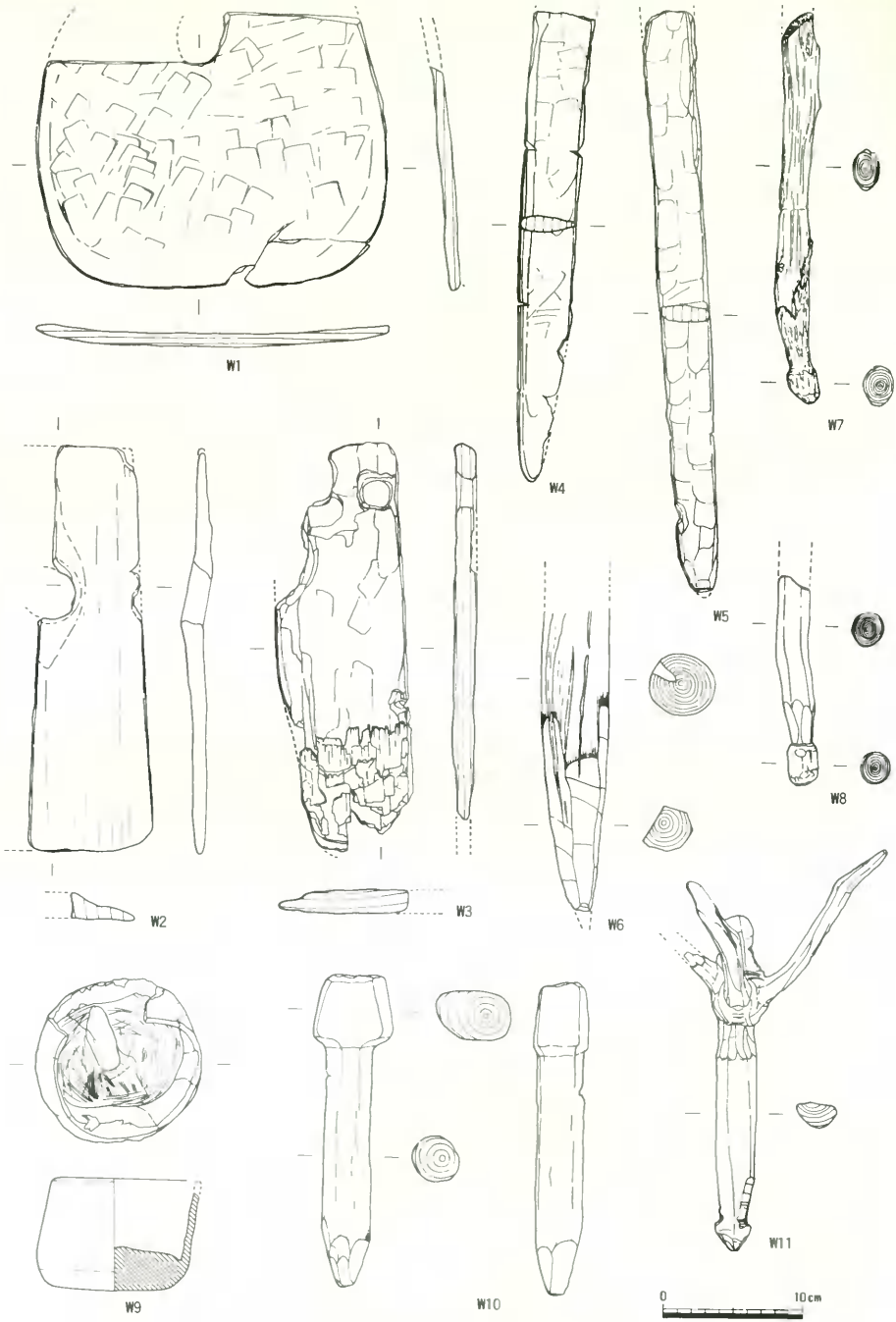
第10図　Ｋ～Ｑ区 弥生時代遺構配置（1/500）

図示した遺物には、広口壺１・２と鉢３、サヌカイト製の石包丁Ｓ１とスクレイパーＳ２、各種の木器Ｗ１～Ｗ12がある。なお、第106図の又鍬Ｗ22・23も本河道の遺物と考えられる。

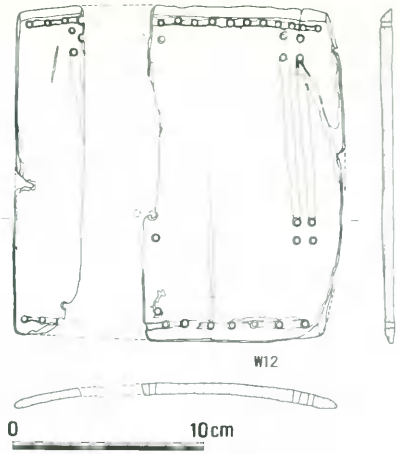
広口壺１は頸部と肩部の境にヘラガキ沈線を２条施す。鉢３とともに百・前・Ⅱと考えられる。広口壺２は口縁部が大きく開き、その端部を肥厚させて凹線を３条施し、頸部と肩部の境には刻目突帯文を貼り付ける。また、内面の胴部下半は工具ハケによる調整で、百・中・Ⅱの新相である。泥除けＷ１は上部を欠くものの柄穴の一部が残る。直柄広鍬Ｗ２も欠損品で、柄穴周辺の舟形隆起の痕跡が残る。Ｗ３は穿孔をもつ加工板でその器種は不明である。Ｗ４・５は又鍬の刃部。Ｗ７・８は丸木弓の弭部分と考えられる。Ｗ10は男根状木器として祭祀具とも考えた



第11図　旧河道 出土遺物(1)



第12図　旧河道 出土遺物(2)



第13図　旧河道 出土遺物(3)

が、類例から推して柊としたい。W11については、『百間川原尾島遺跡４』「旧河道２」で同器種が出土している。漁具あるいは衣笠とする説があり、衣笠とすれば図の天地を逆転しての使用法が考えられる。樹種はカヤである。W12は組み合わせ式木製短甲の札である。中程を欠失するものの、方～長方形を呈すると考えられ、体の線に合わせて丸味を持つ。上下長は17.8cm、厚さ６㎜を測る。上・下端を斜めに面取りし、左側辺は直線的に、右側辺は弧状に加工する。その表面は平滑に仕上げた後に黒漆を塗布し、裏面には加工痕を残す。上下の各辺に沿う孔列は綴孔で、径３～４㎜で６㎜程度の間隔をおく箇所が多い。表面の一部に綴皮が残り、裏地等を綴付けた後に漆を塗布したことがわかる。これに対して２～４個を単位とする紐孔は、孔列に接する位置と中央のやや下方にみられ、径４～５㎜で綴孔よりもやや大きい。５㎜程の幅で孔を結ぶように漆面が光沢をもつ箇所は、威紐の痕跡と考えられる。

以上のことから、検出した河道の流走時期は前・Ⅱ～Ⅲから中・Ⅱ頃までで、埋没後は水田化したものと考えられる。また、上層から出土した木器の廃棄時期もほぼ中・Ⅱに収まるものであろう。

なお、304・305ｚ区においても北西－南東方向に流走する前～中期の旧河道を検出している。第８図はその中期段階の流路を示し、規模は幅４～８ｍ、底の標高は-30cmを前後する。出土遺物には百・中・Ⅰ・Ⅱの特徴を示す土器片と、第105図に示したS47・48の石包丁、又鍬、鋤、杭、加工材等の木器がある。前期段階の南西岸の肩は、中期のそれとほぼ同位置だが、北東肩は中世の溝32に切られることから検出していない。百・前・Ⅱ～Ⅲの土器片が数点出土している。ｏ～ｔ区の河道とは約120ｍも離れるため、両者の関係は明らかでないが、遺物の出土状況等に共通点がある。　（高田）

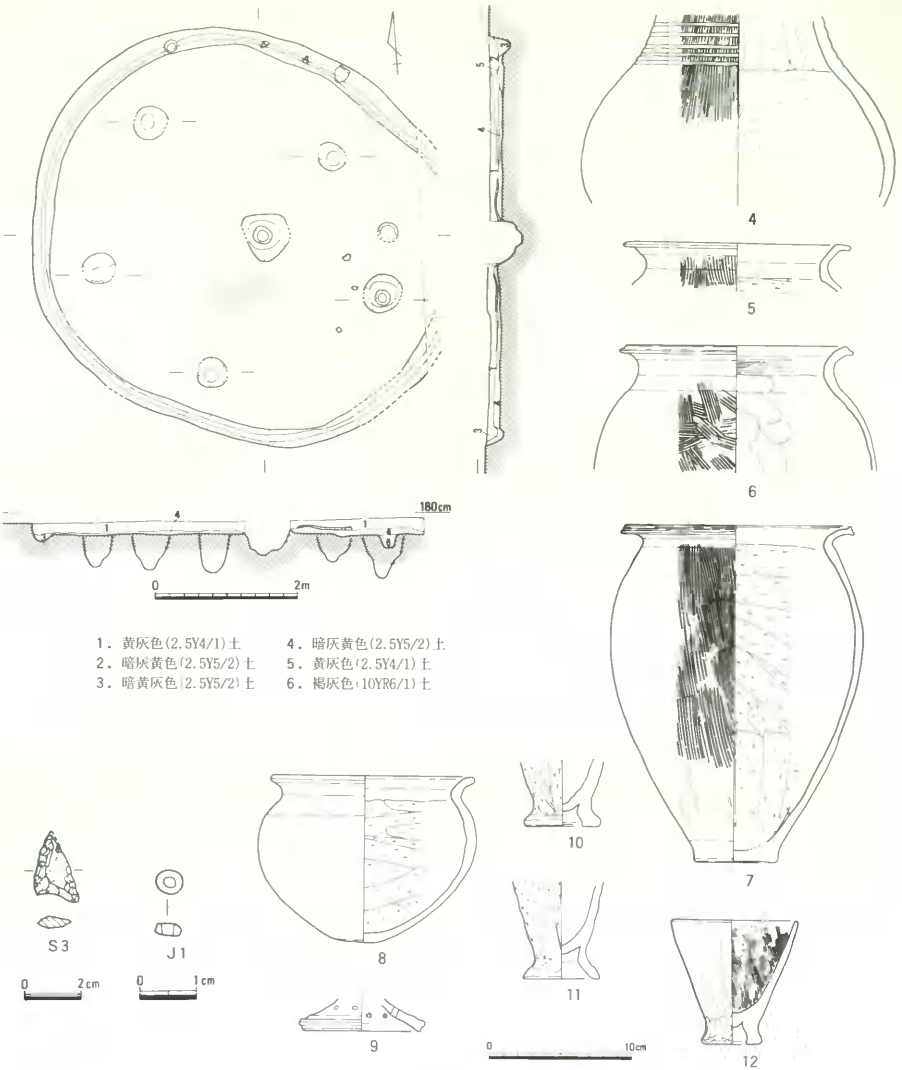
(2) 竪穴住居

竪穴住居１（第９・14図、図版１・11・13）

306Ⅰ区に位置し、直径は5.8～6.3ｍとやや歪な円形のプランを呈する住居である。主柱穴は５本で構成し、住居の中央部分には中央穴を設けている。床面はほぼ全面に貼り床（第４層）を行っており、柱穴はそれを除去後に検出している。床面には中央付近においてやや盛り上がった箇所があったことから、本来は中央穴の周囲に土手帯がめぐっていた可能性がある。また、壁帯溝の埋土である３層は検出面まで立ち上がる箇所があり、壁材の痕跡と考えられる。

中央穴は平面形が不整円形を呈し、直径は70cm、深さが30cmである。底面の中央はさらに一段の落ち込みがある。この中央穴は柱穴に比べるとやや平面形で大きく、深さは浅い。さらに中央穴からわずか南に、薄い炭の集積層が長径100cm、短径45cmの範囲で認められた。

出土遺物は少ないものの、甕７はほぼ完形で壁に沿って立てかけられた状態で出土しているほか、



第14図　竪穴住居１、同出土遺物

製塩土器（10～12）が３個体みられる。土器以外の遺物には、石鏃S３やガラス小玉J１がある。

出土遺物からみてこの住居跡の時期は、百・後・Ⅱと考えられる。（弘田）

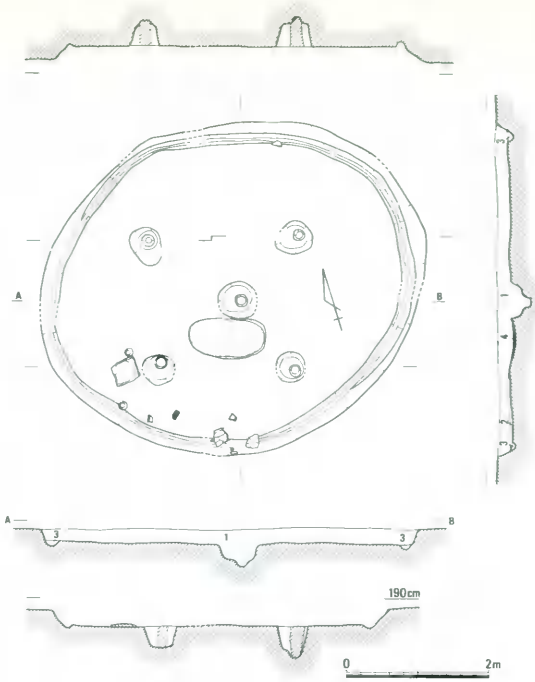
竪穴住居２（第９・15図、図版１・11）

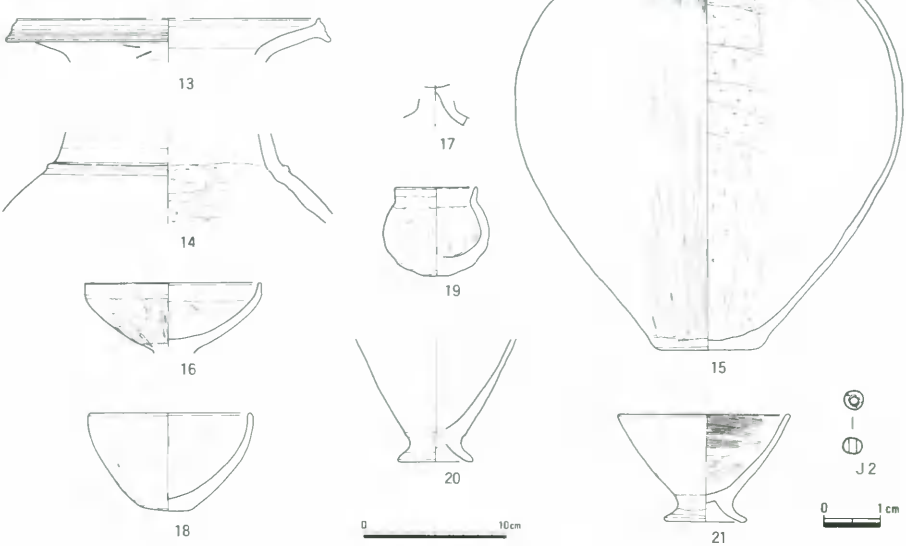
竪穴住居１の南西に近接して存在する住居址である。平面プランはやや楕円形で、直径は4.6～5.5m、深さは検出面から20cmを測る。

床面は、ほぼ水平で住居の南側にのみ貼り床（２層）が認められた。柱穴は深さが30cm程で、いず

れにも径20cm程の柱痕跡が明瞭に残っていた。中央穴の平面形態は円形であり、柱穴に比べると直径は大きいが、深さはやや浅く25cmである。また土壙底部の中心部分は、柱穴底部の柱の荷重による沈み込みと同様で一段落ち込む。また、中央穴の南側に接してなかに炭が堆積するくぼみがある。平面形は長円形を呈し、深さはきわめて浅い。中央穴には炭層は確認できなかったがこのくぼみに中央穴からの灰を掻き出したと考えられる。

遺物はわずかであるがいずれも床面上からの出土であり、このうち壺13・14は同一個体と思われ、口縁端は三条の凹線がめぐり、頸部に貼り付け突帯をめぐらす。高杯17は短脚





第15図　竪穴住居２、同出土遺物

化した脚部片、19は外面に指頭押圧痕がみられる手捏ね土器である。土器以外の遺物としてはガラス製の小玉J２が１点ある。

出土遺物からみてこの住居址の時期は、百・後・Ⅲである。（弘田）

(3) 土　　壙

土壙１（第８・16図）

304ｕ区の西寄りで検出した不整形な土壙で、その大半を後期と考えられる溝７に切られている。規模は現状で、99cm×87cm、深さ39cmを測る。平坦な底のほぼ全面には、１cm前後の厚さで植物遺体が敷かれており、壁はやや開き気味に急斜に立ち上がる。出土遺物には弥生土器片１点がある。

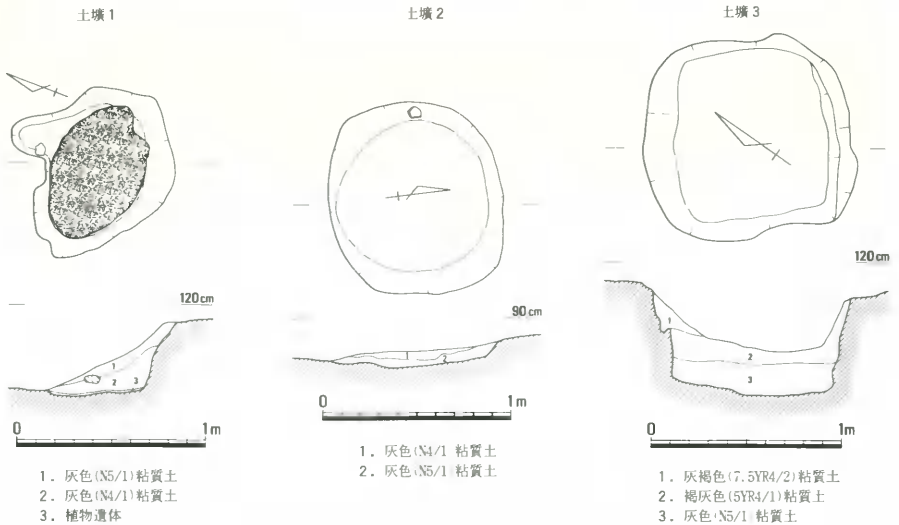
時期は、後述する土壙３と検出状況が類似することから、後期と考えられる。（高田）

土壙２（第８・16図）

304ｕ区の西寄りに位置する土壙で、大半を中世の溝32に切られ、底部のみの検出である。その平面形はほぼ円形を呈し、規模は上場で径100cm前後、底面で径80cmとなり、深さ15cmを測る。出土遺物は土器小片が１点みられるのみで、土壙の時期は検出状況から後期と考えられる。（高田）

土壙３（第８・16図）

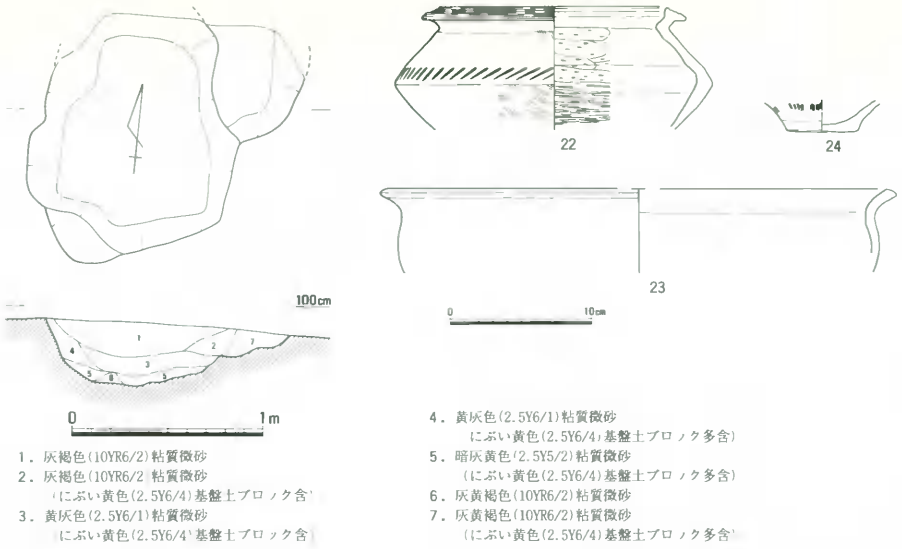
304ｕ区の中央で検出した土壙である。平面形は隅丸方形状を呈し、規模は一辺110cm前後、深さ60cmを測る。ほぼ平坦な底面は80cm×90cmの方形で、壁は垂直近くに立ち上がる。出土遺物には後期と考えられる土器片が少量ある。前述の土壙１とは、埋土が類似することと、いずれも溝７の幅内に収まることが共通点として指摘できる。以上のことから、土壙の時期は後期と考えられる。（高田）



第16図　土壙１～３

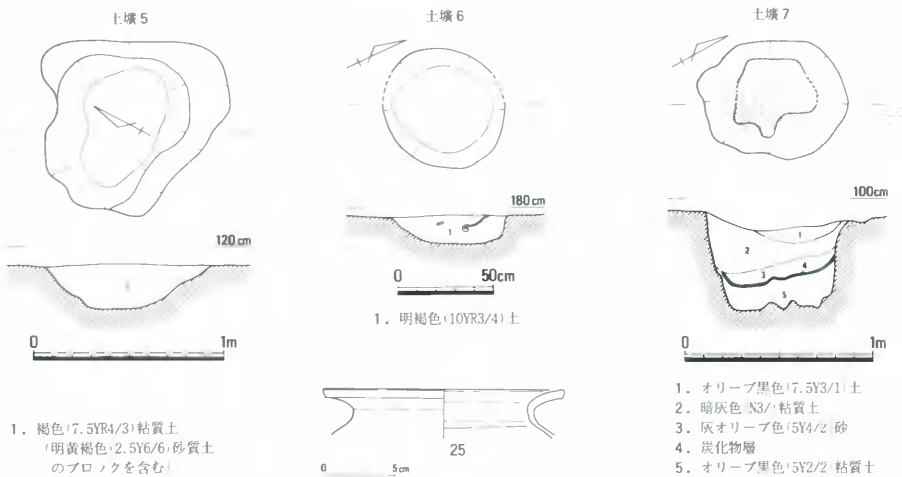
土壙４（第８・17図）

304ｘ区の南西隅で検出した不整形な土壙で、北側を低水路により切られている。その規模は、長



第17図　土壙４、同出土遺物

軸135cm×短軸110cmで、深さ35cmを測る。壁は丸みをもって急斜に立ち上がり、東側の一部が張り出している。埋土は、最上層を除いて基盤土ブロックを含む。特に４層以下は基盤土で充填してあり、人為的に埋め戻した状況であった。22は台付鉢になると考えられ、外面肩部にヘラ先による刺突文を施し、内面を頸部までヘラケズリする。土壙の時期は、百・後・Ⅰと考えられる。　（高田）



第18図　土壙５～７、土壙６　出土遺物

土壙5（第8・18図）

304x区の南西隅で検出した不整形な土壙で、土壙4の5m南に位置する。規模は径100cm前後、深さ23cmを測り、壁は段を持ちながら急斜に立ち上がる。埋土には基盤土ブロックを含む。出土遺物には土器小片が若干みられるのみで、土壙の時期は検出状況から後期と考えられる。（高田）

土壙6（第9・18図）

306J区にあり、先述した竪穴住居2の東方6mに位置する。弥生時代後期末の洪水砂層を除去後に検出した土壙である。

平面形は円形で、直径が64cmである。断面形状はⅢ状を呈し、深さは18cmを測る。

出土した遺物は磨滅した弥生土器甕が1片のみであり、弥・後・Ⅲに属すると思われる。（弘田）

土壙7（第9・18図）

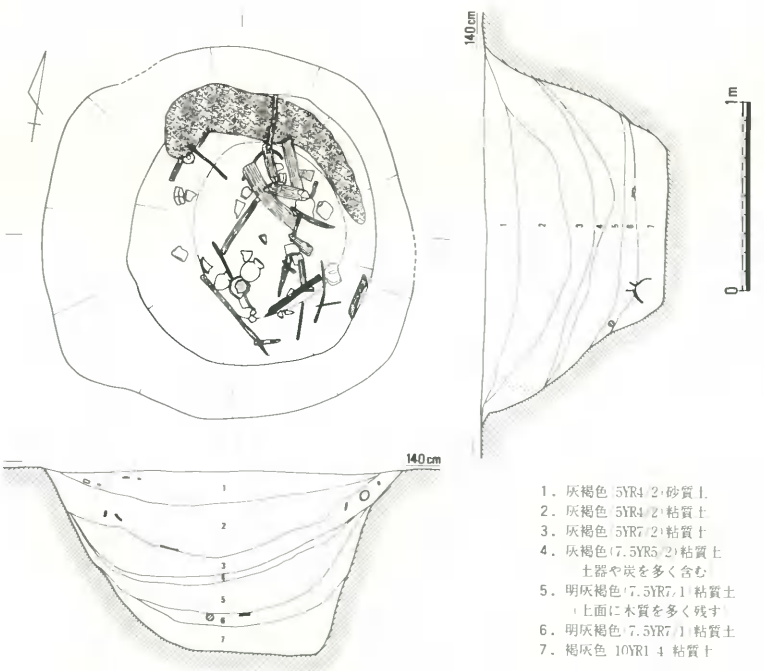
306G区の西南隅近くにあり、弥生時代後期の水田層を除去後に検出した。平面形は楕円形で、長径は81cm、短径が63cmである。深さは49cmを測り、壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。

埋土は4層に分かれ、そのうちの4層は厚さ0.2～1cmの炭化物層がほぼ一面に敷きつめられていた。

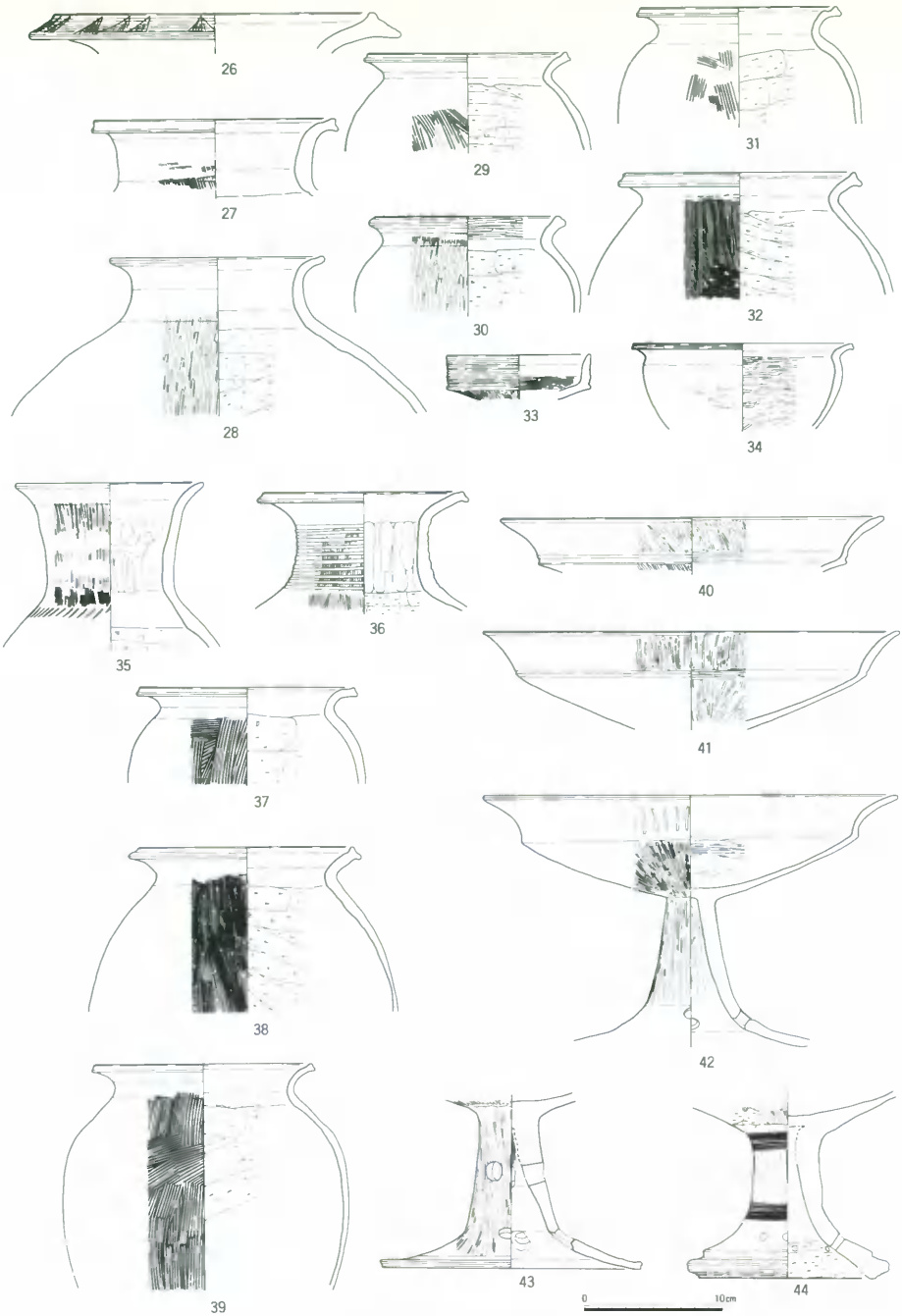
出土遺物は皆無であるが、弥生後期水田に先行する。（弘田）

土壙8（第9・19～21図、図版1・11）

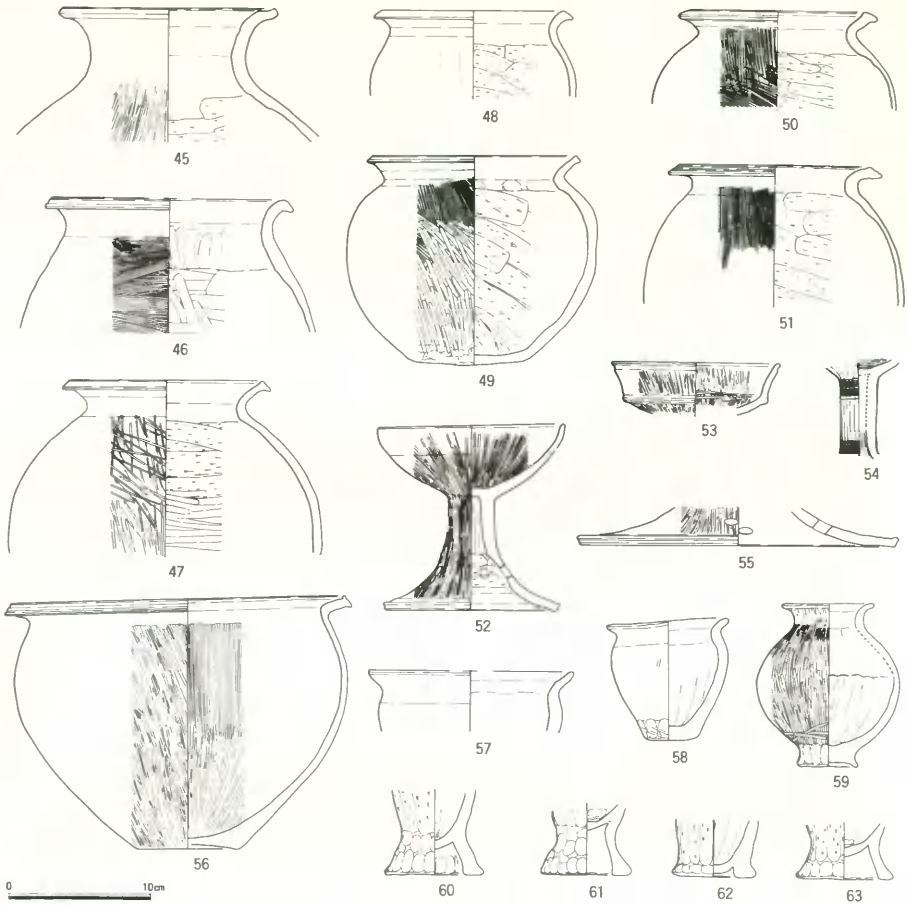
306J区の中央よりやや南に位置する大形の土壙である。平面形は直径が196cmの円形で、断面形は深鉢形を呈し、深さは101cmを測る。



第19図　土壙8



第20図　土壙８　出土遺物(1)



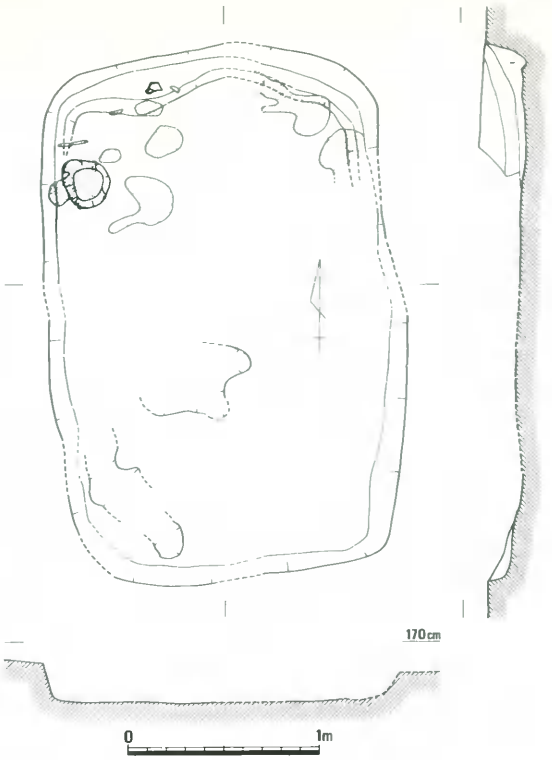
第21図　土壙８　出土遺物(2)

埋土は凹レンズ状に堆積しており、７層に分けられる。各層から土器が出土しているが、このうち４層と５層には土器片とともに炭の集積層や多くの木質・板材を含んでいた。

出土遺物は主に弥生土器であり、上層（１・２層）26～34、中層（３～５層）35～44、下層（６・７層）45～63がある。このうち高杯は杯部の形態で杯部上半が外湾するもの40～42と、内湾する52、口縁がほぼ真っ直ぐ立ち上がり、外面に細い凹線を施す33の三者が存在する。このうち33は百・後・Ⅰの系譜を引くと思われる。さらには、口縁部に凹線文を施す器台26や、高杯の脚部44は前様式からの系譜を引くものと思われ百・後・Ⅰに遡る。この他の土器類には、ミニチュアの甕58や壺59、製塩土器60～63などがある。

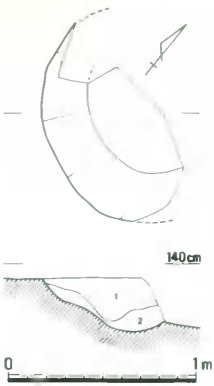
以上の各層に分けて取り上げたものの遺物はおおむね百・後・Ⅱの範疇にある。そこでこの土壙は先述した竪穴住居１など当該期の住居の廃絶にともない、ゴミ捨て場として利用されたものと考えることができよう。

（弘田）



1．オリーブ灰色(5GY5/1)土(下位に炭層堆積)

第22図　土壙９



1．暗灰黄色(2.5Y5/2)土
2．灰黄色(2.5Y6/2)土

第23図　土壙10

土壙９（第10・22図）

306Ｏ区の中央東よりに位置する土壙である。平面形が隅丸方形を呈し、規模は248×183cmを測る。断面形は皿状をなし、深さは25cmである。埋土は３層に分かれ、最上層は弥生時代後期末の洪水砂層であり、中層は黄色砂層である。床面には北側に壁溝状の掘り込みがあり、また炭の集積も数ヶ所に認められた。

出土遺物は皆無であったが、時期は弥生時代後期と考えてよいであろう。（弘田）

土壙10（第10・23図）

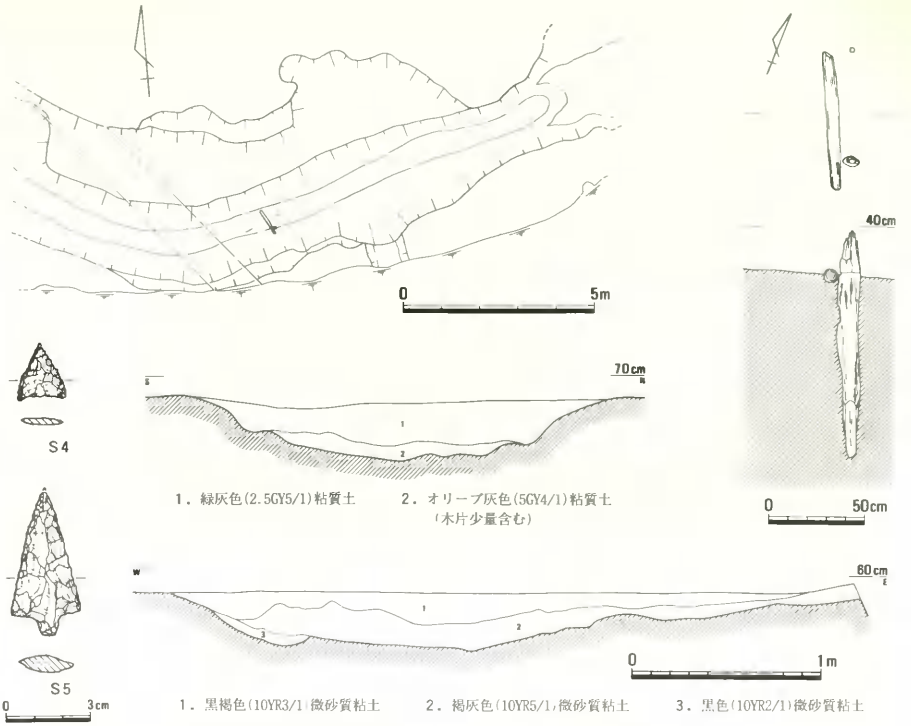
305Ｑ区の南東端で検出された土壙である。土壙の北東側は調査区外のため、平面形は明確でないが、楕円形を呈するものと考えられる。規模は残存部の東西が110cm、南北60cmを測る。埋土は２層に分かれる。時期については遺物がないため明確ではないが、検出面からみて弥生時代であろう。

（平井）

(4)　溝

溝１（第８・24図、図版13）

303・304ｑ～ｓ区を南西－北東方向に蛇行しながら流走する溝である。その北東端は低水路で切られ、南西端は調査区外に延びる。規模は上幅で２～３ｍ、深さ30～40cmを測るが、ｓ区において北側に浅く広がる部分では上幅が５ｍ前後を測り、壁は段を持ちながら緩やかに立ち上がる。溝底の標高は海抜20cmを前後し、調査区内での明瞭な高低差はみられない。なお、溝底には杭と横木を組み合わせた施設が遺存しており、この横木側を上流とすれば、南西から北東への流水が推定される。



第24図　溝１、同出土遺物、同内杭遺構

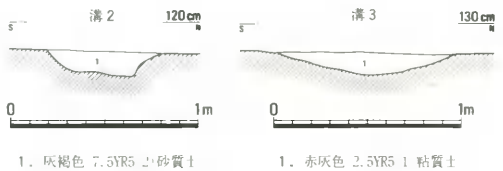
溝は、その蛇行の振幅が先述の旧河道の幅内に収まることから、旧河道の最終流路に部分的に手を加えたものと考えられる。出土遺物には、図示した２点のサヌカイト製の石鏃のほか、少量の弥生土器片があるのみで、時期を決する資料はない。しかし、後期水田層を除去して溝を検出した箇所があることから、水田の開田に比較的近い時期まで機能し、埋没したものと考えられる。　（高田）

溝２（第８・25図）

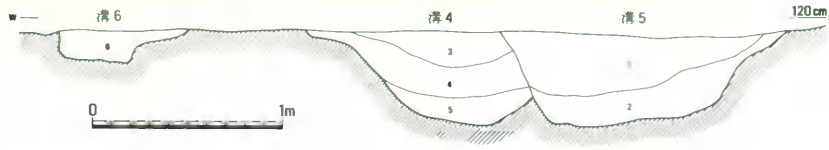
304ｔ区の北西部で検出し、旧河道に並行して南西－北東方向に流走する溝である。規模は幅60cm深さ15cmを測り、断面形は逆台形を呈する。時期は、検出状況から後期と考えられる。　（高田）

溝３（第８・25図）

後期水田層の除去後に検出した溝で、304ｓ区のほぼ中央を南西－北東方向に流走する。その南西端は調査区外に延び、北東端は中世の溝32に切られる。溝の規模は幅90cm、深さ15cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。出土遺物には少量の後期土器片があるのみで、このことと検出状況から溝の時期は、水田開田以前の後期と考えられる。　（高田）



第25図　溝２・３　断面



1．灰色(5Y5/1)砂質土(溝５)
2．灰色(5Y5/1)粘質土(溝５)
　(灰白色(5Y7/1)粘土ブロックを含む)
3．黄褐色(2.5Y5/3)砂質土(溝４)
4．黄灰色(2.5Y4/1)粘質土(溝４)
5．黄灰色(2.5Y4/1)粘質土(溝４
　(灰白色(5Y7/1)ブロックを含む)
6．灰色(5Y6/1)土(溝６)

第26図　溝４・５・６ 断面

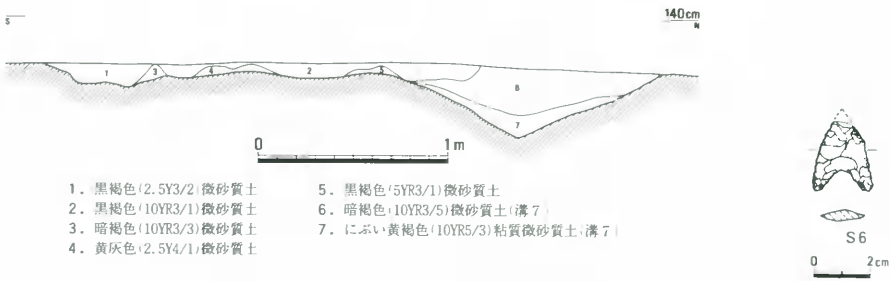
溝４・５・６（第８・26図）

いずれも後期水田層を除去後に検出した溝群である。304ｓ～u区を複雑に絡まりながら、北東から南西に流走するが、中間を中世の溝32に大きく切られている。溝４と５は北東側で重複して同一流路をとるが、南西側で再び並流する。規模は溝４と５が幅 150cm、溝６が70cmを測る。検出面からの深さは溝４が10～50cm、溝５が20～50cmを測り、いずれも南西側に急速に深くなるが、溝６は15cm前後と浅い。また、断面形は溝５と６が逆台形を呈するのに対し、溝４は丸みを持った底となる。

出土遺物は少量の土器片のみで、溝の時期は検出状況からいずれも後期と考えられる。　（高田）

溝７（第８・27図、図版13）

304ｔ・ｕ区に位置する溝で、後期水田層除去後に検出した。調査区内での底のレベルは顕著でないが、当地区の他の溝同様に北東から南西への流走が推定できる。規模は幅 160cm、深さ35cmを測り、断面形は溝の中央がＵ～Ｖ字形に一段落ち込み、その上部が逆ハ字形を呈する。出土遺物にはＳ６のサヌカイト製石鏃のほか、後期土器片がある。溝の時期は後期と考えられる。　（高田）

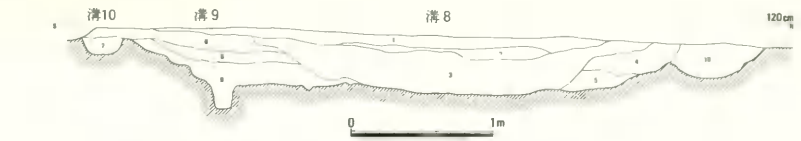


1．黒褐色(2.5Y3/2)微砂質土
2．黒褐色(10YR3/1)微砂質土
3．暗褐色(10YR3/3)微砂質土
4．黄灰色(2.5Y4/1)微砂質土
5．黒褐色(5YR3/1)微砂質土
6．暗褐色(10YR3/5)微砂質土(溝７)
7．にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質微砂質土(溝７)

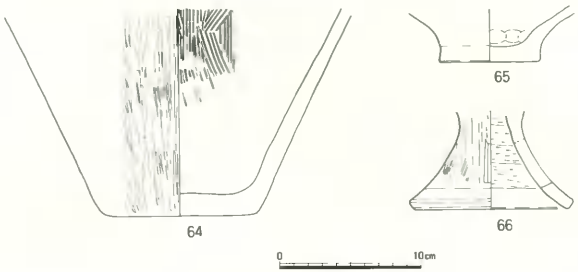
第27図　溝７ 断面、同出土遺物

溝８（第８・28図）

304ｖ区を北東－南西方向に直線的に流走する溝で、その両端は低水路と溝32にそれぞれ切られる。埋土は第28図の１～５層で、３層の埋没前に再掘削が行われた状況を呈す。また、２層は顕著な灰層で、溝の中位に一様にみられた。なお、７層は溝10、８・９層は溝９、10層は溝８の北西肩を流走する溝で、いずれも溝８より古いものである。溝８の規模は幅250～300cm、深さ45cmを測る。壁は幅広の底から湾曲しながら緩やかに立ち上がる。



1．褐灰色(10YR4/1)砂質土(溝8)
2．黒褐色(10YR3/1)灰層(溝8)
3．灰黄褐色(10YR5/2)砂質土(溝8)
4．灰褐色(5YR4/2)砂質土(溝9)
5．褐灰色(10YR5/1)粘質土(溝9)
6．灰褐色(7.5YR5/2)砂質土(溝9)
7．灰色(10Y4/1)砂質土(溝10)
8．灰オリーブ色(7.5Y5/2)砂質土(溝9)
9．灰黄褐色(10YR5/2)砂質土(溝9)
10．褐灰色(5YR5/1)砂質土



第28図　溝8～10 断面、溝8出土遺物

図示した土器は、64は壺の胴部から底部にかけてで、胴部の外面にはヘラミガキを施し、内面にはハケメとナデを施している。また、65は鉢の底部で、66は高杯の脚部である。以上の遺物の時期は、その特徴から概ね中期後半と考えられる。　（高田）

溝9（第8・28図）

304u・v区をほぼ東西方向に流走する溝で、周辺の溝の流水方向とはやや異なる。その両端は低水路と溝32にそれぞれ切られるものの検出長は約35mである。溝の規模は幅150～250cm、深さ30cm前後を測り、その断面形は底面がほぼ平坦な逆台形を呈する。出土遺物は少量の弥生土器片である。

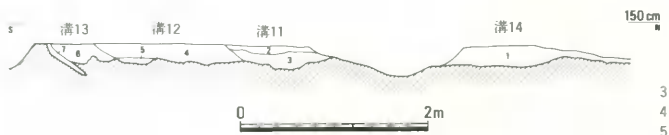
溝の時期は前述のように断面の検討から溝8よりも古いものと考えられる。　（高田）

溝10（第8・28図）

304v区を北東－南西方向に流走する溝で、その両端は低水路と溝32にそれぞれ切られる。溝の規模は幅35cm、深さ15cmを測り、断面形はU字形を呈する。出土遺物はないが、各断面の切り合い関係の検討から、溝8より古く、溝9よりも新しいことを確認している。　（高田）

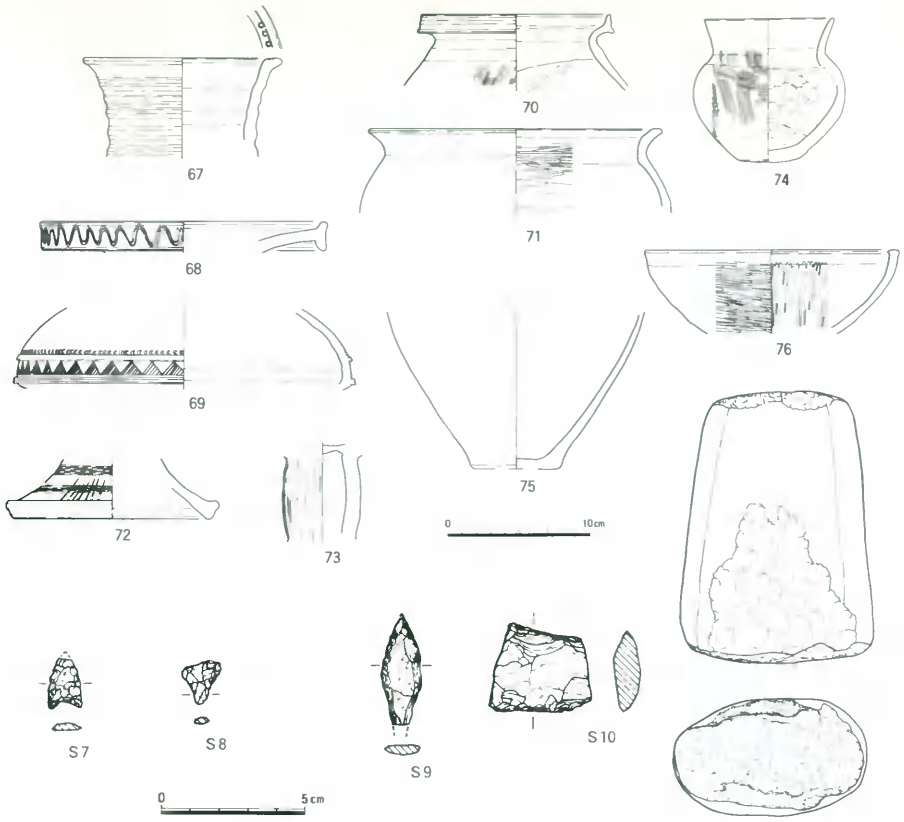
溝11・12・13（第8・29・30図、図版13）

304v～x区の南端を蛇行しながら東西方向に流走する溝である。低水路や中世の溝により掘削された部分が多く、その両端についても不明であるが、w区では3条が平行し、x区では1条に収束した状態で検出している。その検出面は、t～z区における基盤層のにぶい黄色砂質土上面であるが、いくつか設けた断面を観察すると、溝はさらに上層から掘り込まれたことがわかる。つまり、第29図



1．灰白色(10YR7/1)微砂質土(溝14)
2．褐灰色(10YR5/1)微砂質土
3．褐灰色(10YR4/1)微砂質土(溝11)
4．褐灰色(7.5YR5/1)微砂質土(溝12)
5．褐灰色(10YR4/1)微砂質土(溝12)
6．褐灰色(10YR5/1)微砂質土(溝13)
7．褐灰色(10YR6/1)微砂質土

第29図　溝9～14 断面



第30図　溝11・12・14 出土遺物

では、２・３層が溝11、４・５層が溝12、６層が溝13となり、溝13から溝12、溝11と順次埋没している状況を示す。また、これら３条の溝底のレベルを比較すると、溝13から溝11へと深くなっている。以上のことから、本来は１条の溝として機能したものが、w区ではその改修の度に流れを北側に寄せていったものと推定される。なお、w区ではこれらの溝が埋没した後に後期末の洪水砂が堆積していたことから、少なくとも後期末にはこれらの溝がその機能を完全に失っていたということと、後期末の段階に水田化されていなかった地区であるということを示している。つまり、周辺の他の溝と合わせて、水利に重要な用排水路の集まる地区として水田化されなかったと考えられる。これは、後述するｓ・ｔ区やｙ区における水田が微高地縁辺部の状況を呈することとも矛盾しない。

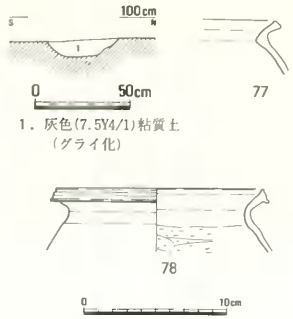
図示した遺物は、土器（67～74）と、石鏃（S９）、楔形石器（S10）、砂岩製の磨製石斧を転用した敲石（S11）であるが、この他に百・後・Ⅰ・Ⅱを中心にⅢまでの土器が２箱程度出土している。

溝は、後期前半以降に掘削・改修され、百・後・Ⅲの中で埋没したものと考えられる。　（高田）

溝14（第８・29・30図）

304　ｖ～ｘ区で検出した溝で、東西方向に流走する。東端は低水路により掘削され、西端～南半は

溝35に掘削され不明である。状態の良い箇所での規模は、幅２ｍ、深さ30cmを測り、断面形は浅い椀形で、溝の埋没後に洪水砂がみられる。図示した遺物には土器（75・76）と石鏃（S7）、石錐（S8）がある。溝は、前述の溝11～13と相前後した時期に機能し、埋没したものであろう。　（高田）



第31図　溝15 断面、同出土遺物

溝15（第９・31図）

305・306区において北西から南東にかけて直線的に延びる溝で、弥生時代後期の水田層を除去後に検出した。幅は12cm、深さは10cmを測る。水田造成時にはこの溝をほぼ踏襲した小畦畔がつくられており、この溝が水田開墾前の旧地形を反映している可能性がある。

出土した遺物には弥生土器の甕が２点あり、百・後・Ⅱとみられる。　（弘田）

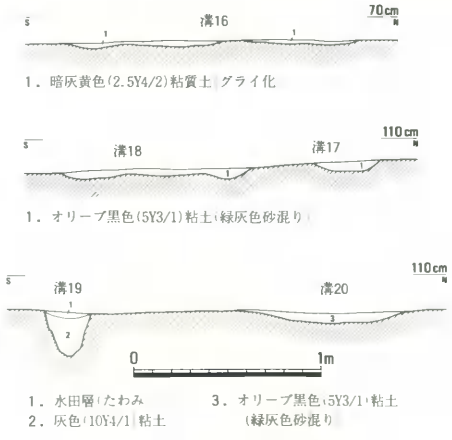
溝16（第９・32・33図、図版13）

305・306Ｄ・Ｅ区において水田層直下で検出した溝である。２ないし３列の不定形の浅いくぼみが断続的に続くもので、近在する同様の溝15や17～19とは直交する方向をとる。この溝の直上には後期水田の大畦畔が存在しており、この溝は畦畔の造営にともなう耕作痕と考えられる。出土した土器は百・後・Ⅱであり、水田畦畔造成の上限を押さえることができよう。　（弘田）

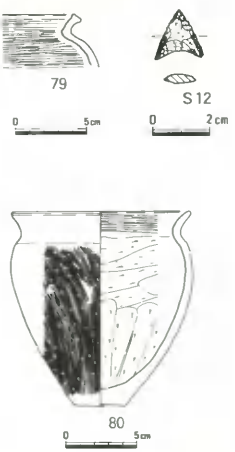
溝17・18・19（第９・32図）

305・306Ｅ・Ｇ区にかけての溝であり、北西から南東方向に蛇行する溝群である。弥生時代後期の水田層を除去後に検出し、幅は30～120cm、深さは検出面から約10cm程度を測るものである。溝底のレベルや埋土が水田土に近いことから流路とは考えにくい。むしろ微高地と水田との境界線に並行していることから、洪水禍より古い段階での微高地端部における水田開墾作業に係わった痕跡、つまりある段階での微高地端を示した溝ではないかと思われる。

細片ながらも溝19に百・後・Ⅱの土器片が出土しており、溝17・18も同時期とみられる。（弘田）



第32図　溝16～20 断面



第33図　溝16・20 出土遺物

溝20（第９・32・33図）

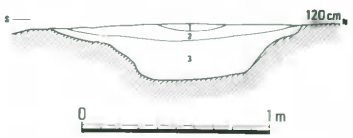
305・306Ｅ・Ｆ区にかけて北西から南東に流れる溝である。南東端付近では２条に分流し、北西端では先述した溝15を切っているがその先は不明瞭であった。

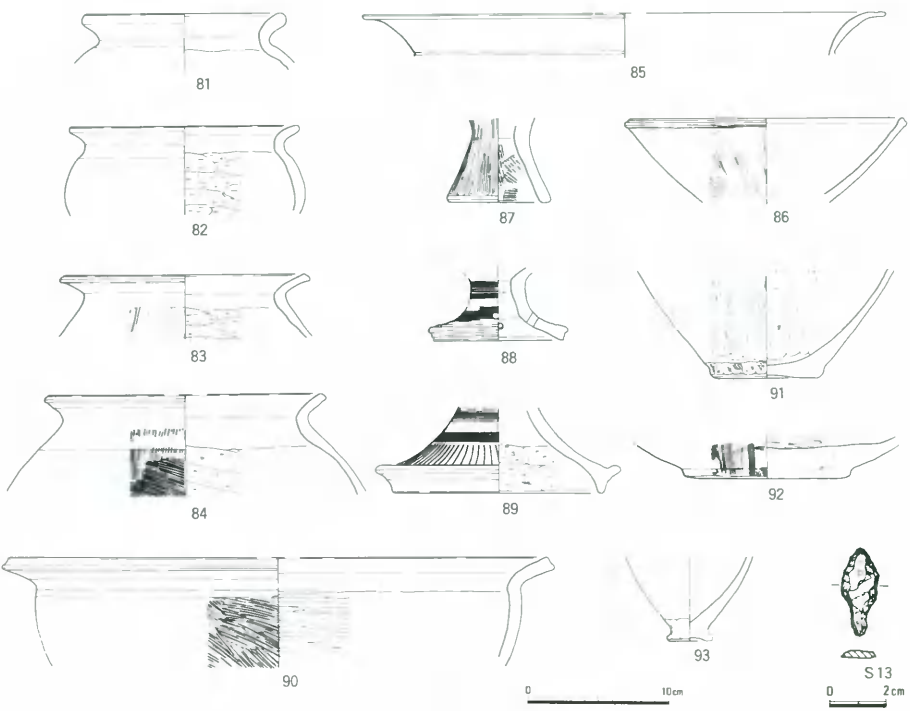
溝の規模は、幅が20～30cmに対し、深さは20cmと周辺の溝群に比べ深い。

出土遺物には弥生土器の甕80があり、百・後・Ⅱに属する。（弘田）

溝21（第９・34・44図、図版１・13）

306－Ｈ・Ｉ区を北東から南西に向けてやや蛇行気味に走り低位部に流れ込む溝で、「百間川兼基遺跡２」の溝27につながる。溝の幅は1.4～1.8m、深さは60cmを測る。この溝は低位部出口付近で分岐しているが、溝Ａ（４・５層）が古く、後述する土器溜り形成時にはすでに埋没していた。溝Ｂ（１





第34図　溝21 断面、同出土遺物

～３層）は埋土が２層に分かれ、上層は厚さ30cmの洪水砂でおおわれている。ともに大洪水時以前に基本的に溝としての機能は果たしていなかったと思われる。

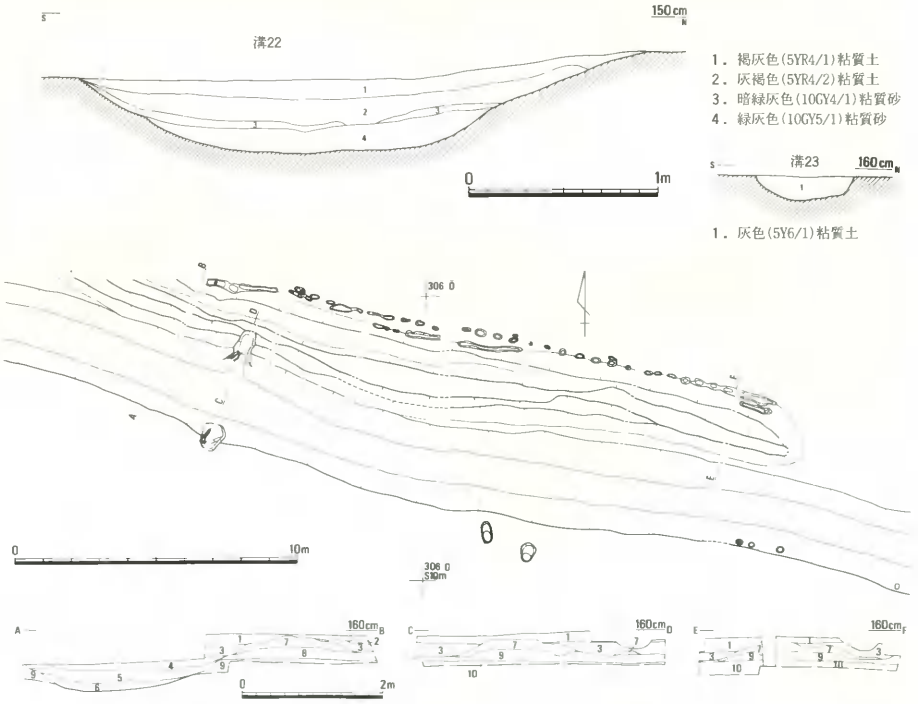
出土遺物には、弥生土器と石鏃S13がある。甕83・84は溝Ｂの上層（洪水砂）から出土しており、百・後・Ⅳである。溝Ａにおいては高杯88・89があり後・Ⅰであるほか、中期の高杯87もみられる。溝の性格としては、集落の中心域からの生活排水を低位部に流す水路であろう。　（弘田）

溝22・23（第９・10・34～36図、図版１・13）

溝22は「百間川兼基遺跡２」の溝25・26に繋がる溝であり、305・306－Ｈ・Ⅰ区と306－Ｌ～Ｐ区において検出した。幅が３ｍ、深さは50～60cmを測る。埋土は大きく３層に分かれ、最上層の上面をさらに洪水砂層が覆っていた。306Ｎ区において、両岸から外に向かって突起状に張り出す箇所があり、その部分の底面には幅10cmの窪みがある。この箇所に板材を渡し、堰としていた可能性が考えられる。

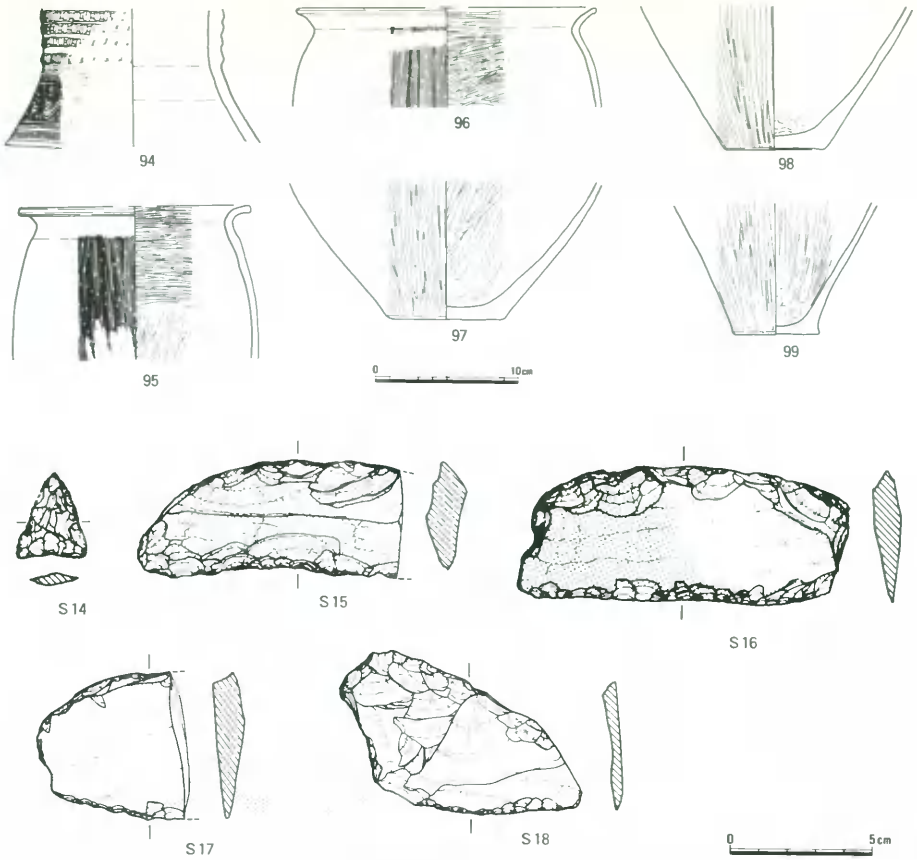
この溝22の北に接して一部分ではあるが灰色土（７層）が土手状に盛り上げられたところがあり、さらにその北に溝23が並行してある。この溝は、２条のきわめて浅い窪みが断続的に続くものであるが、土手状の盛土とともに性格は不明である。

溝22からはわずかながらも弥生土器と石器が出土している。図示したものはいずれも下層より出土



1．灰黄色（2.5Y6/2 土
2．暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質土
3．灰色（5Y5/1）粘質土
4．褐灰色（5YR4/1）粘質土
5．灰褐色（5YR4/2）粘質土
※暗緑灰色（10GY4/1）粘質砂がブロック状に入る
6．緑灰色（10GY5/1）粘質砂
7．灰色（5Y4/1）土
8．褐灰色（10YR4/1）土、淡黄色塊含
9．灰白色（5Y7/1）砂質土
10．灰白色（5Y7/2）砂

第35図　溝22・23、土手状遺構



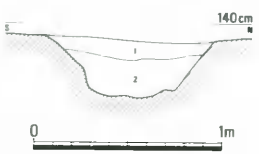
第36図　溝22 出土遺物

したもので上層からは弥生時代後期後半の土器が出土している。壺94は頸部に刻目貼付突帯をめぐらせ、体部は波状文で飾る。甕96・97は口縁端部は丸く終わり、口縁部内面にはヘラミガキを行う。甕の底部97～99は内面にヘラミガキを行いヘラケズリは認められない。石器にはサヌカイト製の石鏃S14、打製石包丁S15～17、スクレイパーS18がある。石包丁S15・16はケイ酸による磨滅痕が顕著である。これらの遺物から溝の埋没時期は百・中・Ⅱの古相に求められよう。（弘田）

溝24（第10・37図）

306N区に位置し、溝22に対して直交するほぼ南北方向の溝である。幅が90cm、深さは30cmを測る。先述した溝22の堰状部のすぐ上流部分に接続しており、この箇所を止めて水を南側に分流する機能を果たしたと考えられる。

出土遺物はないものの、溝22と同時期で弥生時代中期と見なしてよいだろう。（弘田）

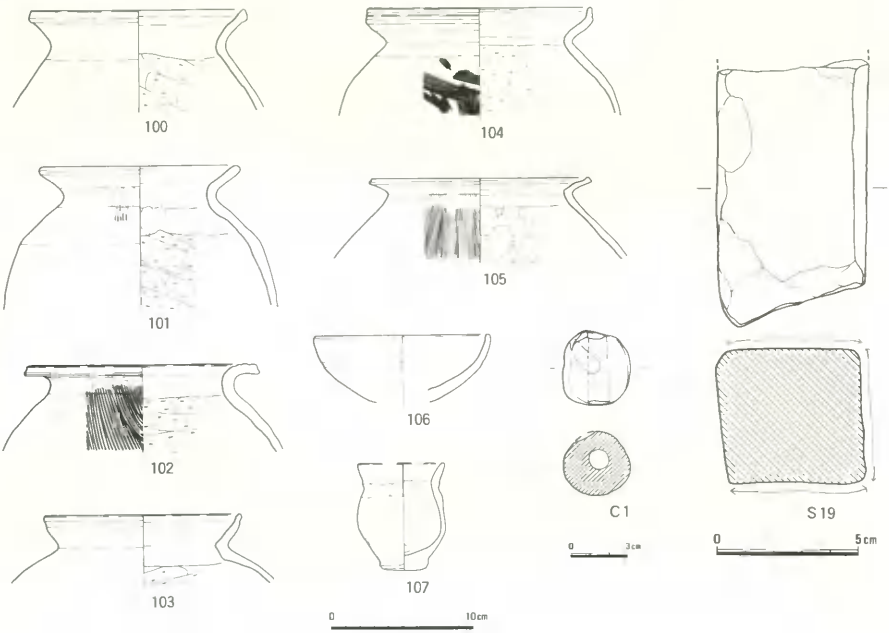


第37図　溝24 断面

(5) 洪水砂層（第38図）

洪水砂層は弥生時代後期の水田層を完全に覆っているばかりでなく、微高地上の後期以前の遺構の上層や自然の窪みを中心として調査区のほぼ全域において認められた。とりわけ水田層上が顕著であり、灰色砂（上層）と灰オリーブ色砂（下層）の2層に分かれて、20cm余りの厚さで堆積する。

洪水砂層から出土した遺物には、弥生土器の他に土錘C1や砂岩製の砥石S19がある。弥生土器は高杯106と小形壺107が下層に含まれる可能性があるほかはすべて百・後・Ⅳであり、従来より考えられている洪水砂層の年代観とも矛盾するものではない。（弘田）



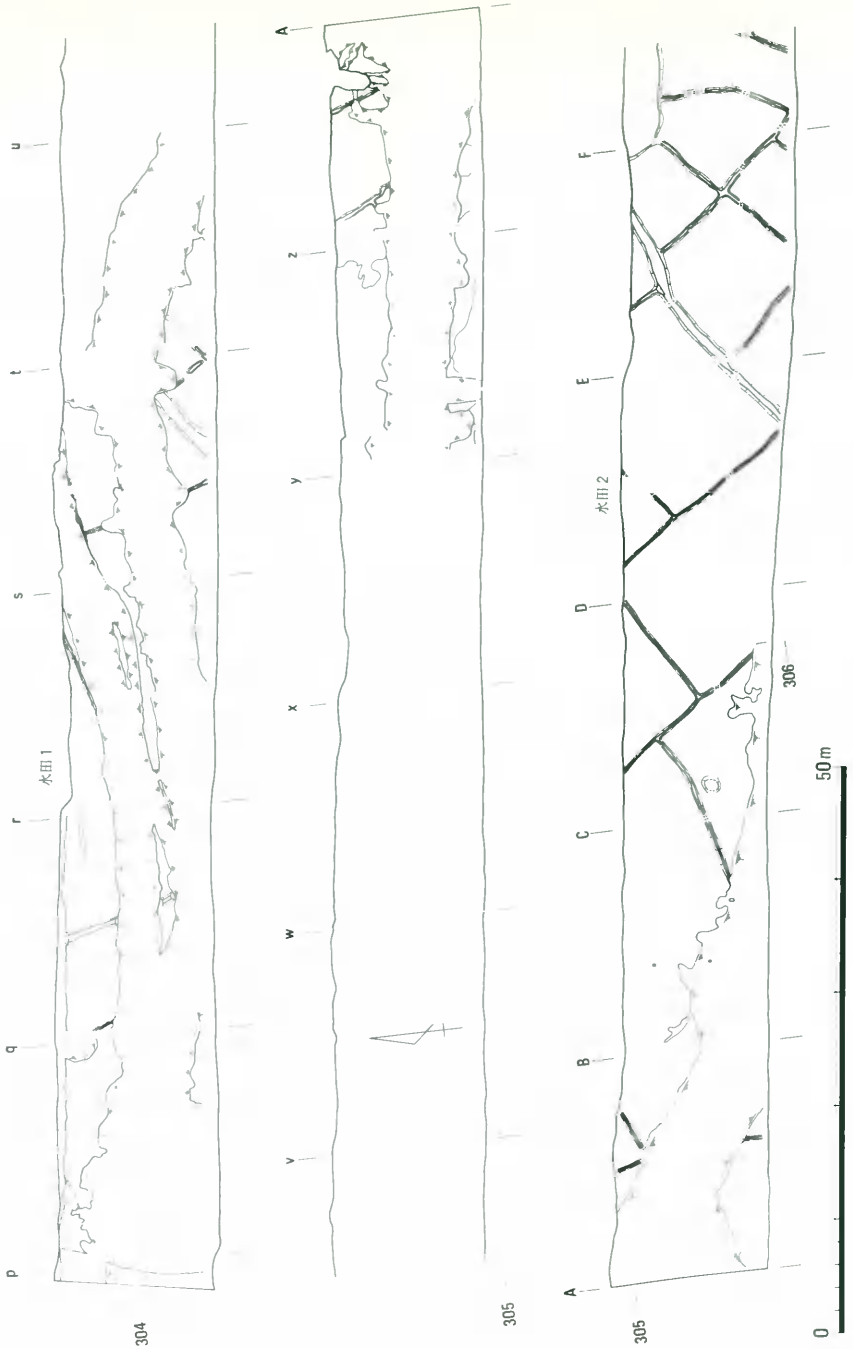
第38図　洪水砂層 出土遺物

(6) 水田・水路

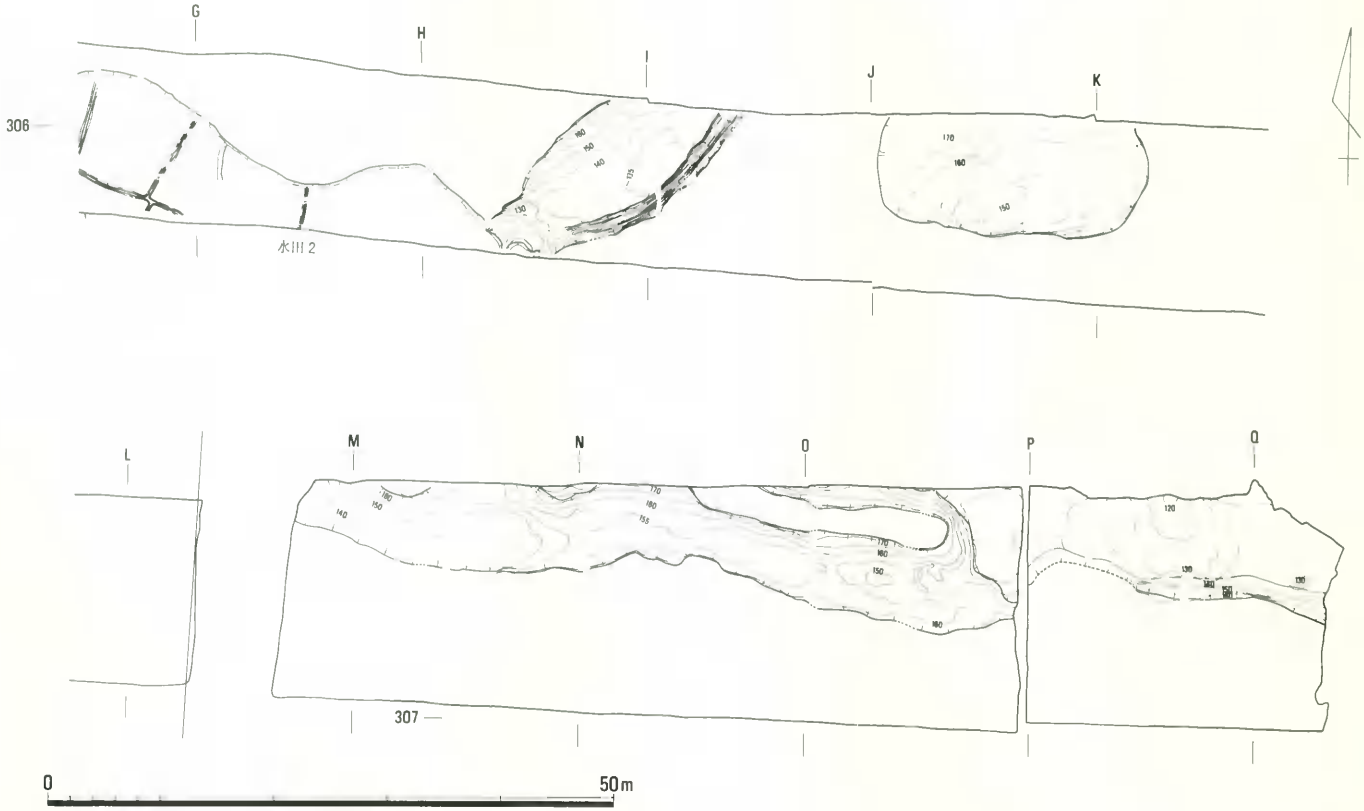
水田1（第39・41・43図）

後期末の洪水砂を除去して検出した水田で、303・304 o ～ t 区に展開する。西側は本報告の沢田遺跡分となり、東端は後世の削平で不明となる。また、大半が古代以降の溝の掘削を受けている。

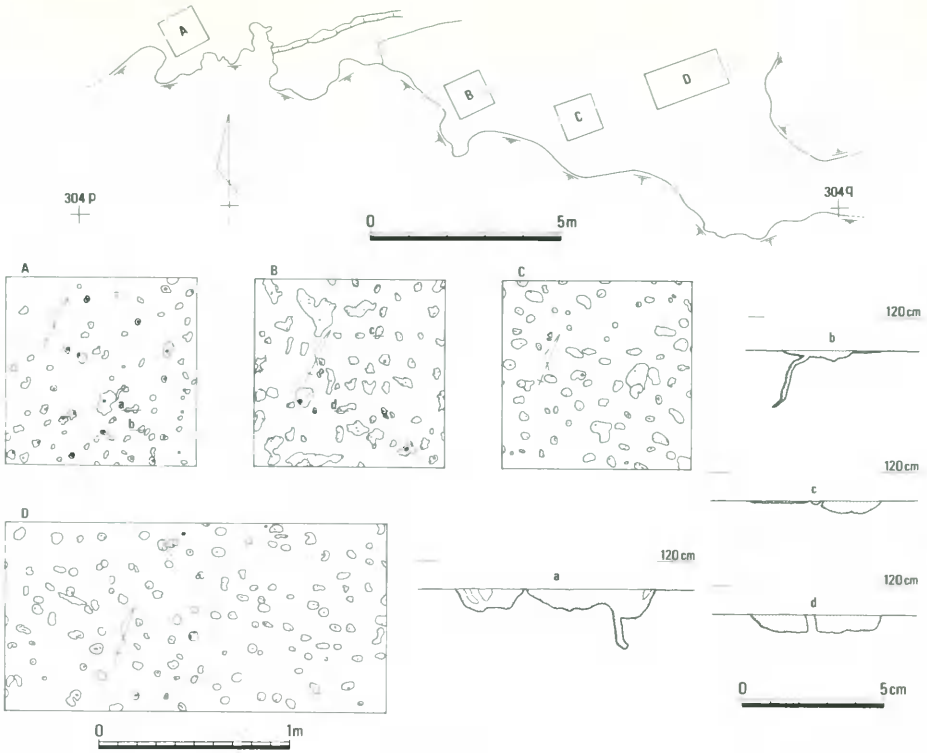
水田層はq・r区で厚さ30～40cm、s・t区南半が10cmを測る。田面のレベルもp～s区で標高90～100cm前後だが、s区の大畦畔以東では125cmとなる。これは下層に旧河道が存在するためで、畦畔の規模や位置、方向にも大きく影響していると考えられる。すなわち、旧河道の南東岸の位置に幅150cm、高さ15cmの大畦畔が設けられ、以東の高所が小区画となり、q区でも旧河道と直交する位置に大畦畔が設けられているのである。なお、p・q区の田面では稲株痕跡が明瞭であった。（高田）



第39図　ｏ～Ｆ区 弥生時代後期水田（1／500）

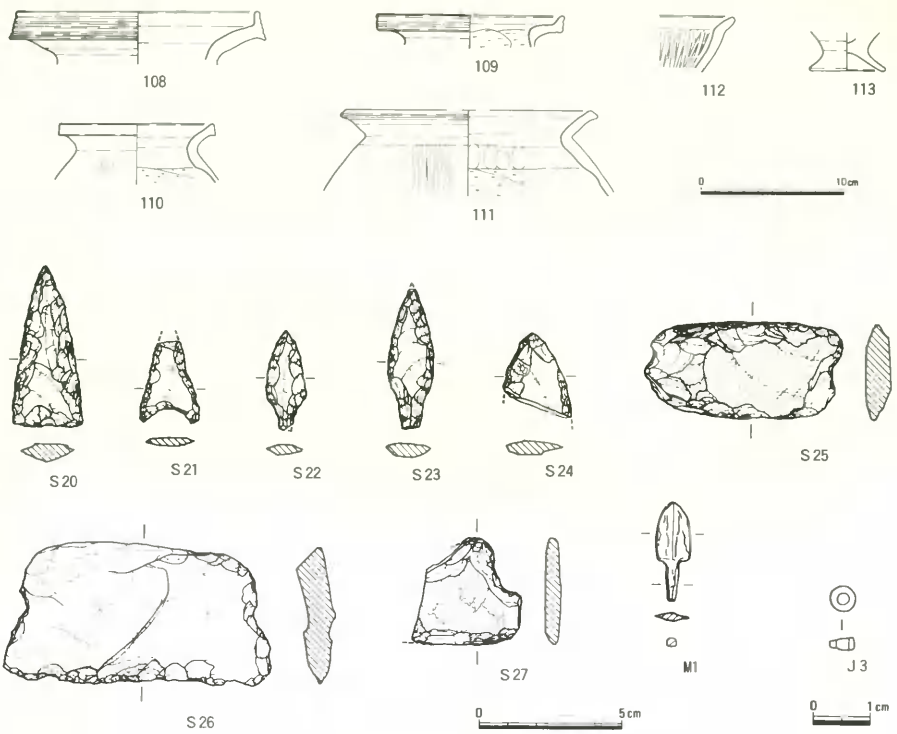


第40図　F～Q区 弥生時代後期水田・水路、同期自然地形（1／500）



第41図　水田１（ｐ区）稲株痕跡、同断面

第42図　水田２（Ａ区）稲株痕跡



第43図　水田層 出土遺物

水田２（第39・40・42・43図、図版２・13・16）

304～306ｘ～Ｈ区に展開する洪水砂埋没水田である。西端からｘ～Ｃ区にかけては、後世の削平や溝32の掘削を大きく受け、東側は25cmの段をもって微高地となる。なお、端から約２ｍの範囲の微高地上も洪水砂で覆われていた。水田層はＡ～Ｄ区で厚さ25～30cm、ｙ区や微高地縁辺で10cmを測る。田面のレベルはＣ・Ｄ区で標高50cm前後と最も低く、ｙ区で125cm、微高地縁辺で100cm前後を測る。

以上の知見と既報告の成果から、Ａ～Ｅ区が田の字状に整然と畦畔を設けた大区画の水田で、Ｅ～Ｈ区の微高地縁辺には不整形な小区画水田が広がっていたと考えられる。また、ｘ区で水田層が急に上がることと、溝11～13の検出状況から、ｘ～ｚ区は小区画水田であった可能性が高い。（高田）

洪水砂除去後の自然地形（第40図）

弥生時代後期末における大洪水による土砂の堆積は、層位的に重要な鍵層であるばかりでなく、それ以前の地形や遺構の状況を正確に保存するといった役割をもっている。

今回報告の調査区における洪水前の自然地形は、微高地が安定し比較的平坦な地形のなかでの、306Ｊ・Ｋ区の長円形の窪みや306Ｈ・Ｉ区や306Ｌ～Ｏ区にみられる、短い間隔で直線的にコンターが走り窪み地形といった形態をとる。後者の由来は、その下層にほぼ埋没した弥生時代中・後期の溝が存在していることによる。ここでは、同一微高地上でも西側（今谷遺跡）にみられるような島状の高まりなどはみられなかった。（弘田）

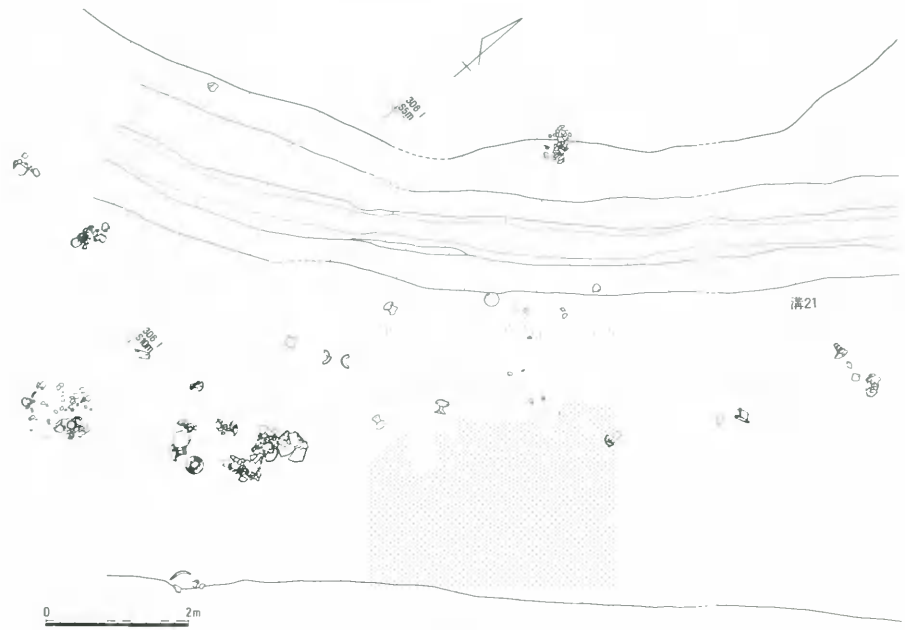
(7) 土 器 溜 り

土器溜り１（第９・44～46図、図版１・11・16）

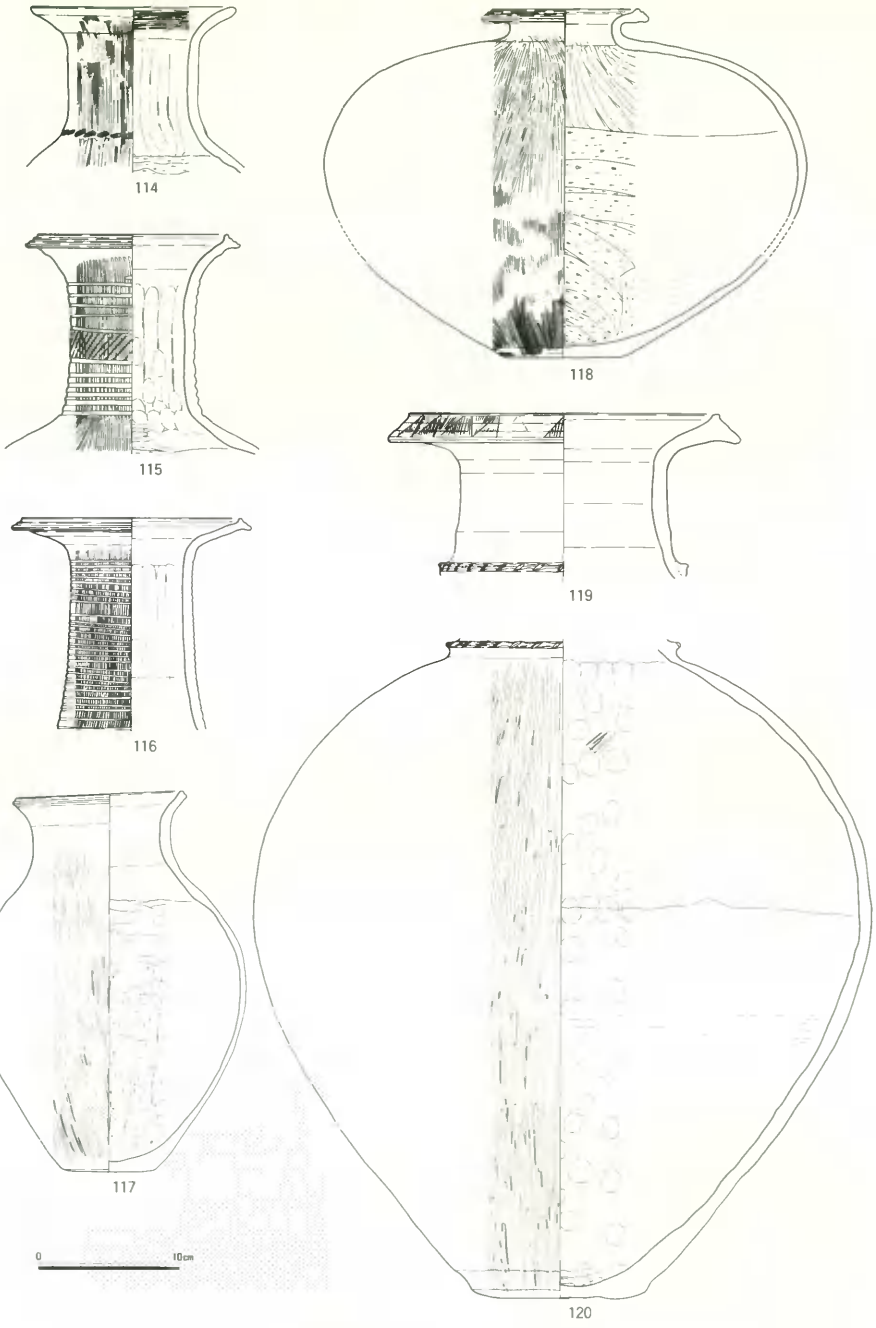
306－Ｈ・Ｉ区において検出したものである。幅６～７ｍあまりのたわみに堆積した暗灰黄色砂層は弥生土器を多く含んでおり、たわみの底面には数点の破片や完形品からなる13の土器の集積ブロックが存在していた。

出土したのはほとんどが弥生土器であり、それ以外の遺物としては土製の紡錘車C２がある。高杯脚134は外面に煤が付着したもので蓋として転用されたと思われる。なかには日常的あるいは実用品と思われないものもいくつかみられる。長頸壺は114～117以外に大形の119と120がある。接合はしないが同一個体であり、頸部には刻目突帯をめぐらし、拡張した口縁端部に複合鋸歯文を施す。そのほかにも最大径が体中央にあり楕円形の体部をもつ壺118や細頸壺122・123、脚付き鉢132・133などがある。細頸壺122は頸部に貼付け突帯を付すもので、内外面ともにヘラミガキを行っており、真備町黒宮大塚墳丘墓の石室上面出土のものに類似する。123は平底気味で玉ねぎ形の体部をもち122に比べると径が大きくかつ短い口縁部をもち、内面の調整はナデおよび指頭押圧である。ともに集落において一般的にみられるものではなく墳墓などの供献土器として見受けられるものである。さらに甕124は口縁部内面に矢印状のヘラ記号を付す。

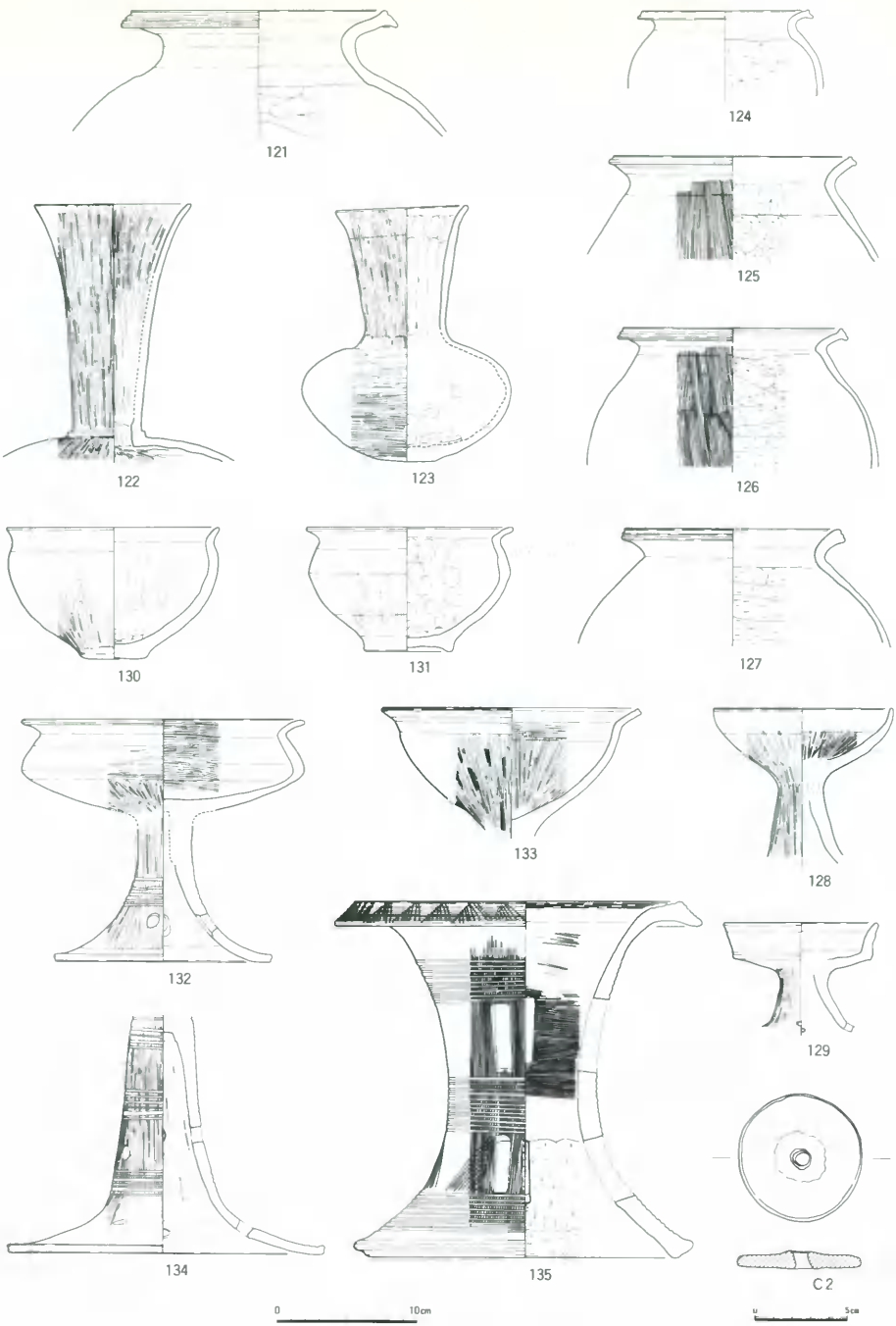
土器溜り形成の時期は百・後・Ⅱを中心とするが、壺118や高杯129は後・Ⅰに遡る可能性があり、細頸壺122は後・Ⅲに入るとみられる。この土器溜りは、人形土製品の出土した「百間川兼基遺跡２」報告の土器溜り３・４と一連のものと思われ、祭祀が執り行われた場所と理解できよう。　（弘田）



第44図　土器溜り１



第45図　土器溜り1　出土遺物(1)



第46図　土器溜り１　出土遺物(2)

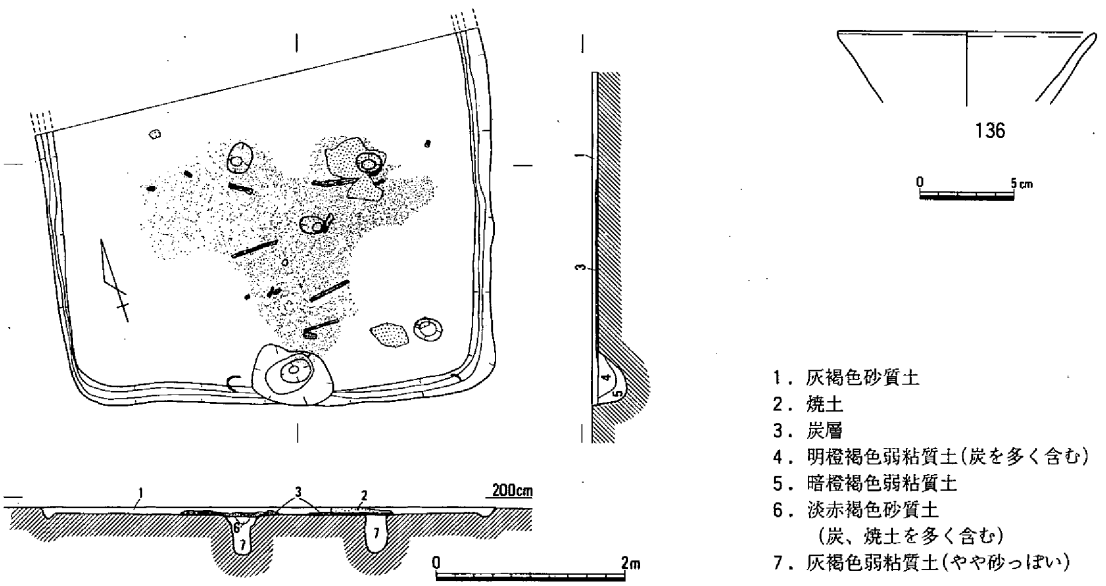
2．古墳時代の遺構・遺物

(1) 竪穴住居

竪穴住居３（第47・48図、図版３・４）

306－Ｈ区の北東隅に位置し、住居の北側は低水路によって破壊されていた。現存部分で一辺4.5mを測るほぼ正方形の住居である。検出面からの深さは８cm程と後世の削平が著しい。柱穴は中心からやや北東方向に偏った位置で２本確認した。深さは約40cmである。また、住居の南側壁の一辺のほぼ中央に接して土壙があり、壁帯溝はこの箇所で途切れていた。この土壙は平面形は不整な方形を呈し、規模は長辺で86cm、短辺が56cm、深さは26cmである。埋土は２層に分かれ上層には炭が多く含まれていた。また、床面上には炭化材と炭層が広く散布し、その上には部分的に焼土が確認できたことから、この竪穴住居は焼失家屋であろう。

出土遺物は、土師器高杯の杯部片が１点のみであった。時期は、百・古・Ⅲとみてよい。（弘田）

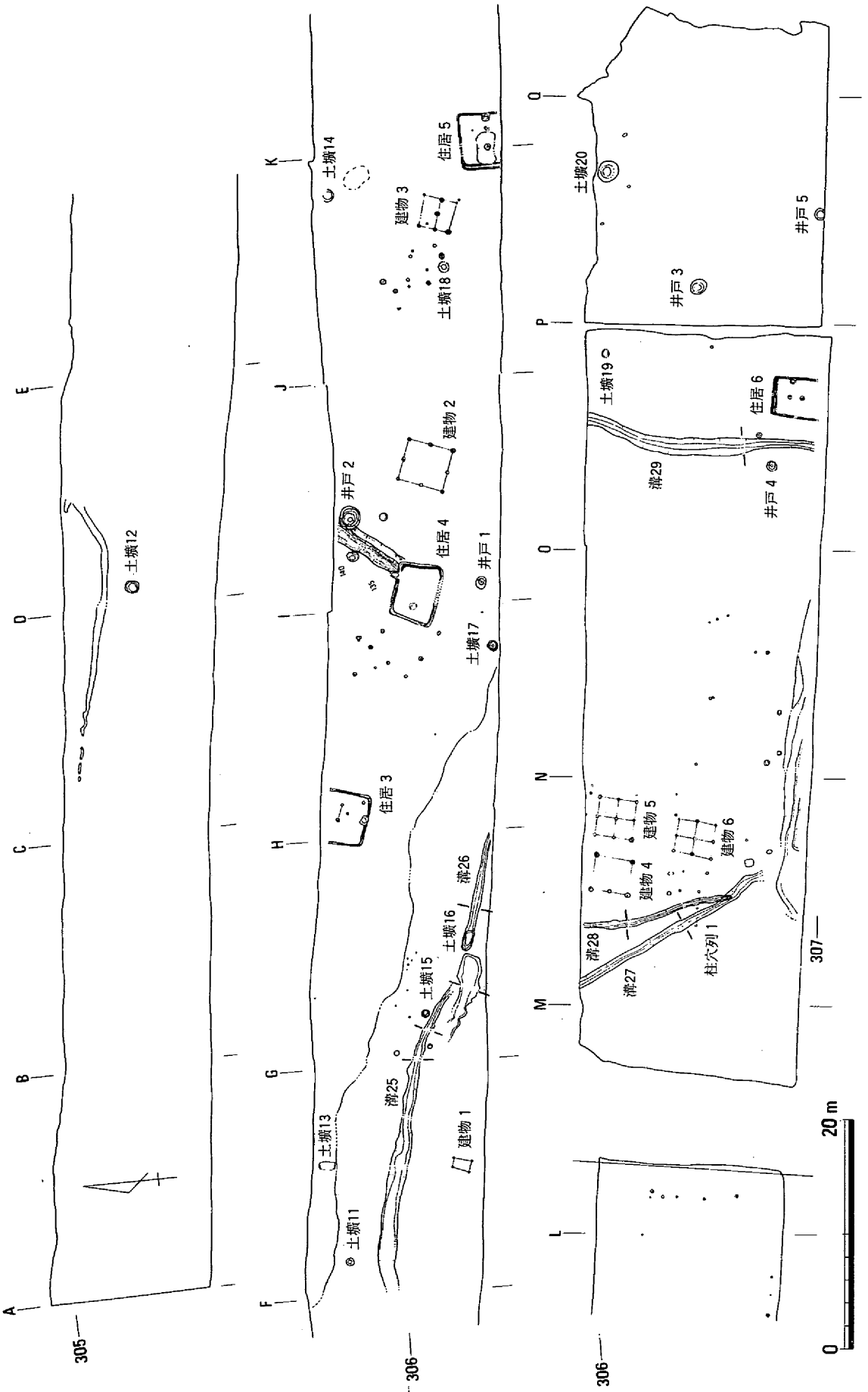


第47図　竪穴住居３、同出土遺物

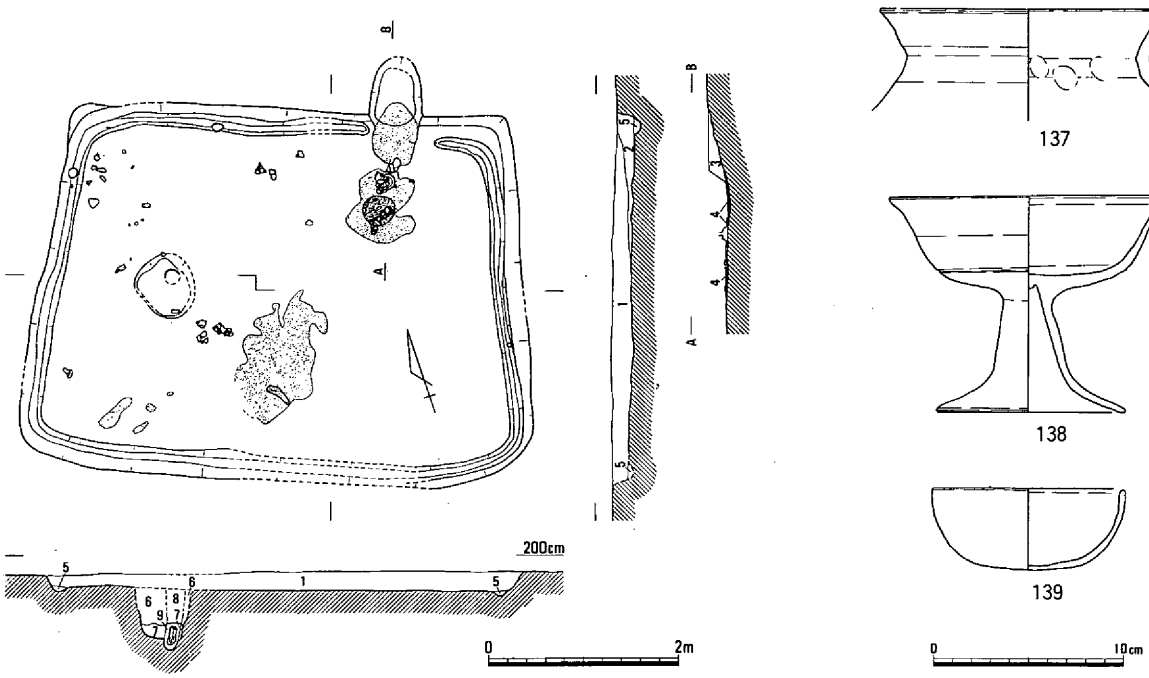
竪穴住居４（第48・49図）

306－Ｇ・Ｈ区のＨライン上にある、１辺3.9m程の歪な方形をした竪穴住居である。検出面からの深さは20cmと周辺の古墳時代竪穴住居と比べ良い。柱穴は１本しか確認できなかったが柱材の芯が残っていた。柱穴は住居の中軸ライン上にあり、２本主柱と思われる。また、住居北辺のやや東によった位置にカマド状遺構を検出した。住居外に向かって煙道状の張り出しがあり、土手は残っていないものの推定焚口部では炭層が拡がり、そこには高杯を倒立させた支脚が存在していた。なお、これとは別に住居の中央南の床面上にも炭の散布が認められた。

出土した遺物には土師器の甕、高杯、椀がある。甕の口縁端部はかすかに内傾する面をもつ。高杯は支脚に用いられたもので、杯部の稜線と脚裾の開きはシャープさを欠く。土器からみて、この住居の廃絶の時期は、百・古・Ⅲとみられる。（弘田）



第48図　A～Q区 古墳時代遺構配置（1/500）

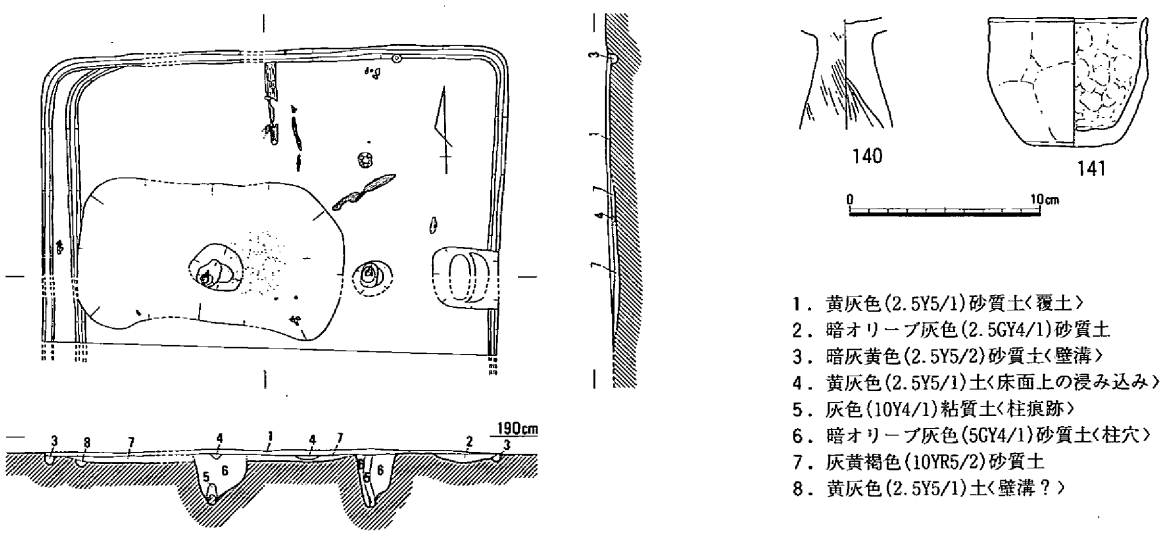


1．黄褐色(2.5Y5/4)砂
2．黄褐色(2.5Y5/3)砂質土
3．黄褐色(2.5Y5/4)砂
4．炭層
5．淡黄褐色砂質土
6．灰色(10Y4/1)粘質土
7．暗オリーブ灰(2.5GY4/1)粘質土
8．灰色(7.5Y4/1)粘質土
9．暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘質土(柱痕あり)

第49図　竪穴住居４、同出土遺物

竪穴住居５（第48・50図、図版３）

306Ｊ・Ｋ区にまたがって検出された方形の竪穴住居である。南側は調査区外となるが、残存部で一辺4.9m、深さ４～10cmを測る。床面には柱穴２本と東壁の中央に接して平面が隅丸方形の土壙が１基ある。柱穴は深さが50cm余りで、わずかに柱材も残る。土壙の規模は長辺が69cm、短辺は62cmで、深さが11cmときわめて浅いものである。また、西側の柱穴を中心にして床面がわずかな窪みをなしていた。さらに、壁帯溝は西側で２条となっており、切り合い関係から住居の拡幅が考えられる。なお、



1．黄灰色(2.5Y5/1)砂質土〈覆土〉
2．暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)砂質土
3．暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土〈壁溝〉
4．黄灰色(2.5Y5/1)土〈床面上の浸み込み〉
5．灰色(10Y4/1)粘質土〈柱痕跡〉
6．暗オリーブ灰色(5GY4/1)砂質土〈柱穴〉
7．灰黄褐色(10YR5/2)砂質土
8．黄灰色(2.5Y5/1)土〈壁溝？〉

第50図　竪穴住居５、同出土遺物

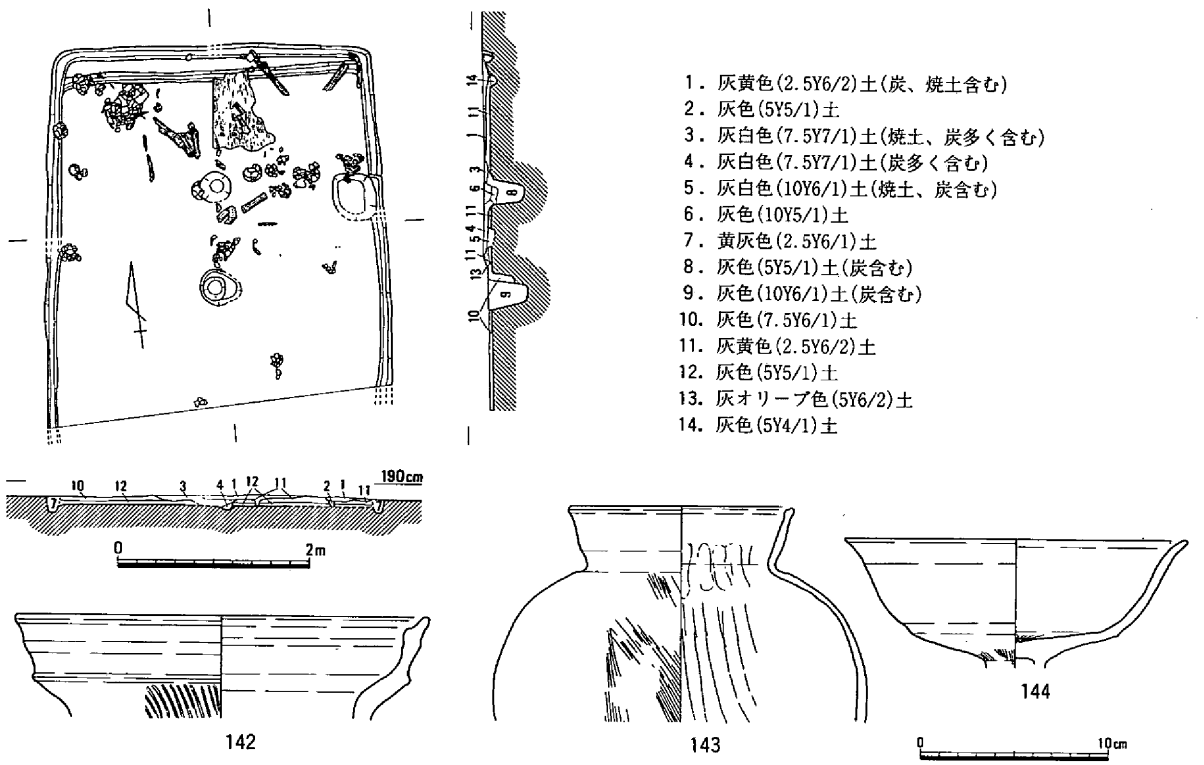
出土遺物の、高杯140は弥生土器で、手捏ね141が住居の時期を表し百・古・Ⅲである。

床面には炭化材が数本残っていたことから、焼失家屋であった可能性がある。　（弘田）

竪穴住居６（第48・51図、図版３）

306Ｏ区で検出された竪穴住居で、平面形は方形を呈する。規模は東西で最大が3.7m、南北は南端が調査区外へ拡がるため明確でないが、残存部で3.9mを測る。住居内には外壁に沿って溝がめぐるが、北辺についてはやや内側にさらに一条の溝が認められることから、建て替えがあったものと考えられる。柱穴は中央部の南北に２本みられる。また、東辺の中央よりやや北寄りには土壙が穿たれている。

検出面から住居の床面までの深さは浅かったが、炭化材が認められたことから、焼失した住居である可能性が高い。床面には土器片が残存していたが、量は余り多くない。いずれも土師器で、時期は百・古・Ⅲと考えられる。　（平井）



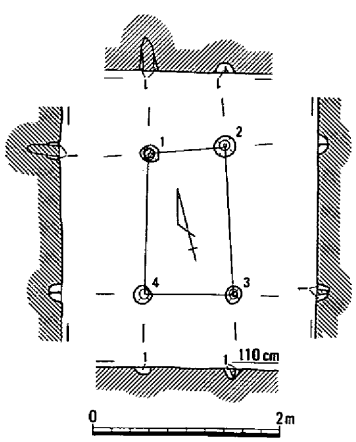
第51図　竪穴住居６、同出土遺物

(2)　掘立柱建物・柱穴列

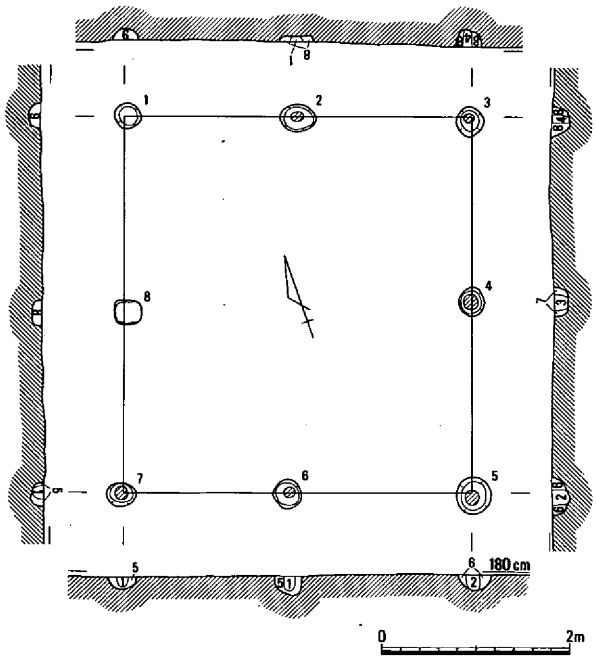
建物１（第48・52図）

306Ｆ区の調査区南端にある。１×１間の建物で東西81・93cm、南北150・156cmと南北がやや長く、不定形な柱配置である。規模がほかの建物と比べると小さく、床の削平された竪穴住居の柱の可能性がある。柱穴掘り方はすべて10cm位と浅いが、Ｐ１のみ柱痕跡が深さ36cmまで沈みこんでいた。埋土は黒褐色土。

出土遺物はないが、古墳時代の包含層を除去し洪水砂層の上面で検出したことから古墳時代と考えて差し支えない。　（弘田）

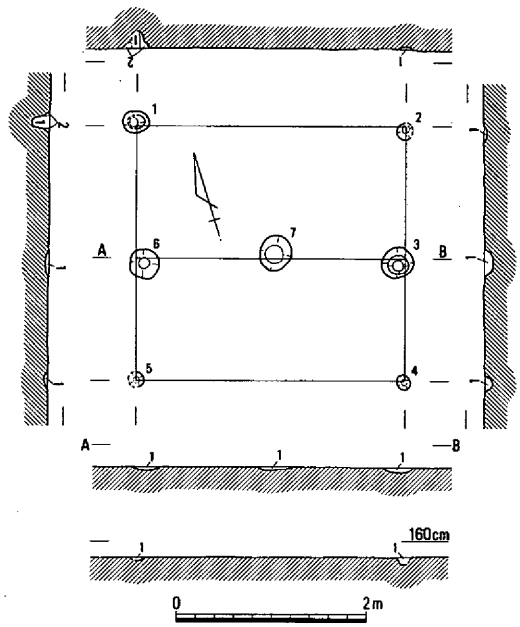


第52図　建物１



1．暗褐色(10YR3/4)土
2．黒褐色(10YR3/2)粘質土
3．黒褐色(10YR3/1)粘質土
4．暗灰褐色(2.5Y4/2)粘質土
5．褐色(10YR4/4)土
6．暗褐色(7.5YR3/3)土
7．暗褐色(10YR3/3)土
8．褐色(10YR4/4)土
9．暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土

第53図　建物２



1．灰色(7.5Y4/1)砂質土
(灰色(10Y5/1)粘土混入、
木質残存)〈柱痕跡〉
2．灰色(10Y4/1)砂質土
※1、2ともグライ化

第54図　建物３

建物２（第48・53図）

306Ｉ区の中央で、竪穴住居４の東６ｍに位置する２間×２間の建物である。古墳時代の包含層を除去後に検出しており、柱穴は径が30cmくらいで、検出面からの深さが５～20cmを測る。Ｐ２～７には径15cm程の柱痕跡が残っていた。

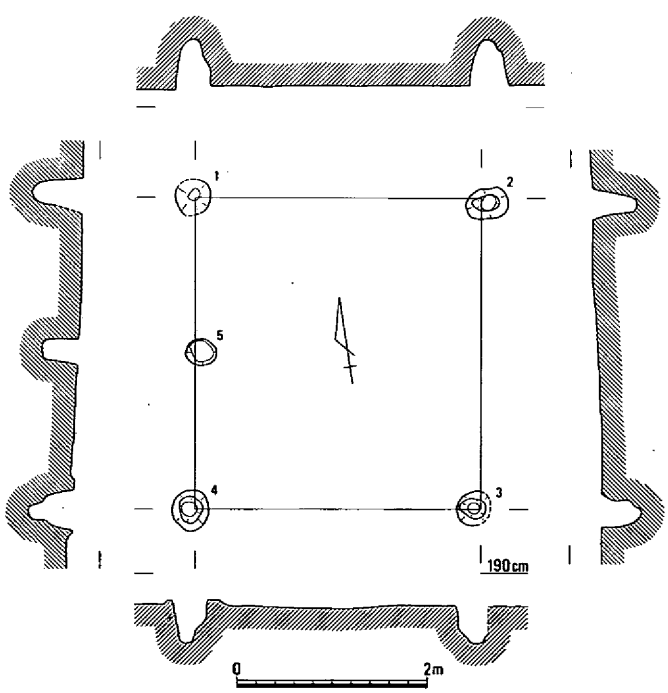
出土遺物はなく時期の決定に困難を覚えるが、近接する竪穴住居４や井戸１・２と時間的に近接しているとすると百・古・Ⅲであろう。　（弘田）

建物３（第48・54図、図版３）

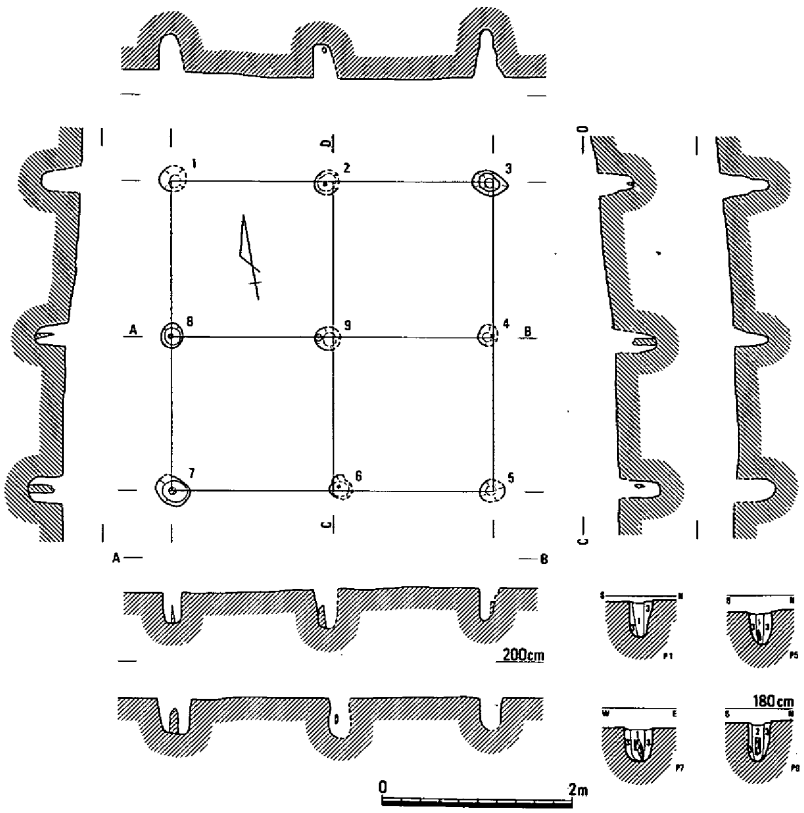
306Ｊ区で、竪穴住居５の北東３ｍの位置にある。１間×１間の建物で、東西方向に間仕切り状の柱列がある。この柱列（Ｐ３・６・７）は隅柱より径が大きくこの建物にともなわない可能性もある。

遺物は出土していないが埋土や周囲の遺構の時期から百・古・Ⅲとみてよいであろう。　（弘田）

建物４（第48・55図、図版３）

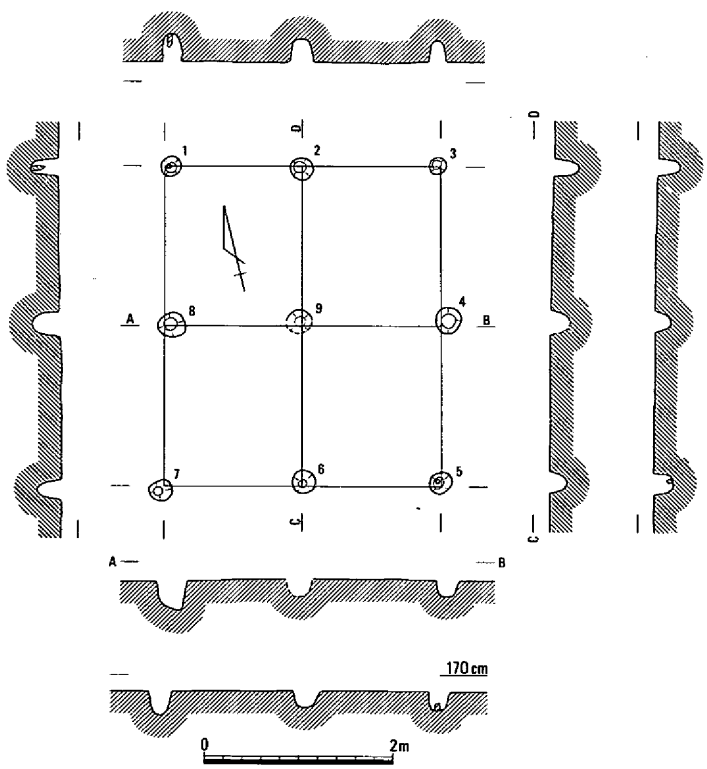


第55図　建物４



1．黄灰色(2.5Y4/1)砂質土
2．黄灰色(2.5Y4/2)砂質土　　3．黄灰色(5Y5/2)砂質土

第56図　建物５



第57図　建物６

306M区に位置する、１間×１間の建物であり、西側柱列のみ束柱（Ｐ５）がみられる。柱穴の掘り方は径が40cm、深さは45～50cmを測る。

Ｐ２・３・５から土師器片が出土しているが時期は特定できない。ただ、層位およびすぐ北に位置する「百間川兼基遺跡２」の建物４に軸線がそろうことから百・古・Ⅲとしてよいであろう。（弘田）

建物５（第48･56図、図版３）

306M区の北端で検出した掘立柱建物で、建物４の東1.5ｍに近接して位置する。２×２間の総柱建物であり、桁行・梁間とも3.3ｍ位にそろう正方形の建物である。柱穴は径が30cm前後、深さは40～50cm程を測る。Ｐ１・３・５・７には径15cmの柱根跡がみられ、Ｐ２・４・６～９には柱材が遺存していた。

Ｐ５・６・８から土師器の細片が出土しているが時期は不明である。層位や周辺遺構との関連から百・古・Ⅲである可能性が高い。（弘田）

建物６（第48・57図）

306M区にあり、建物５から南に５ｍ離れて位置する。洪水砂上で検出し、各柱穴は直径、深さともに20～30cm位である。柱間は東西が2.8ｍ前後に対し南北が3.3ｍ前後と南北方向に長い建物で、建物５と比べると東西の柱間が20cm短くなり、建物４とは同規模である。Ｐ１・５には材の木質が遺存していた。

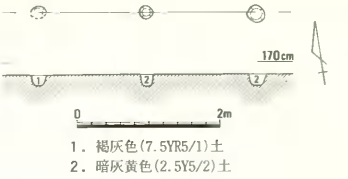
この建物は周囲の建物４・５と軸

線をそろえており、１つの建物群を構成していたと思われる。時期は百・古・Ⅲとみて良いだろう。　（弘田）

柱穴列１（第48・58図）

306M区の建物６の西側に位置する。建物４～６とともに建物群を構成していたと考えられる。

遺物は出土していないが、時期は周辺の建物と同様に百・古・Ⅲであろう。　（弘田）



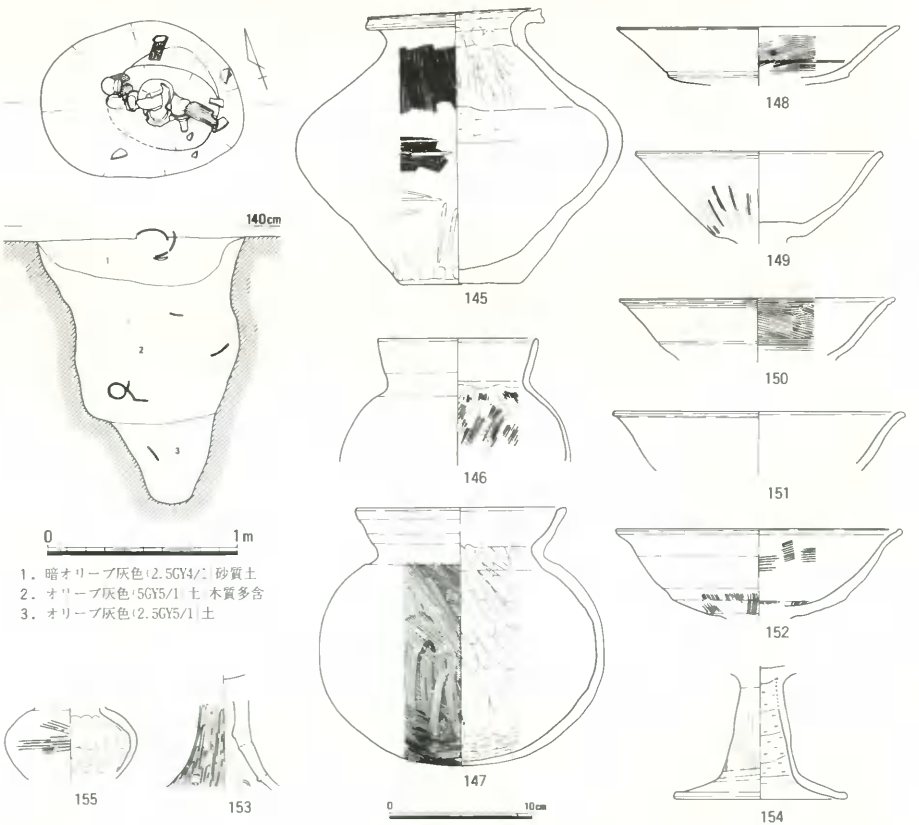
第58図　柱穴列１

(3)　井　　戸

井戸１（第48・59図）

306Ⅰ区の南西隅において検出した井戸で、竪穴住居４の南３mの位置にある。平面形は楕円形を呈し、上面径が長径2.1m、短径は1.75mを測る。深さは２mで、検出面から下１mまではほぼ垂直に近い壁面であるのに対し、それより下では一旦平坦面をつくりそこからやや緩やかな傾斜で底に至る。

埋土は大きく３層に分けられ、このうち２層からは板あるいは柱材と思われるかなり朽ちた木質を



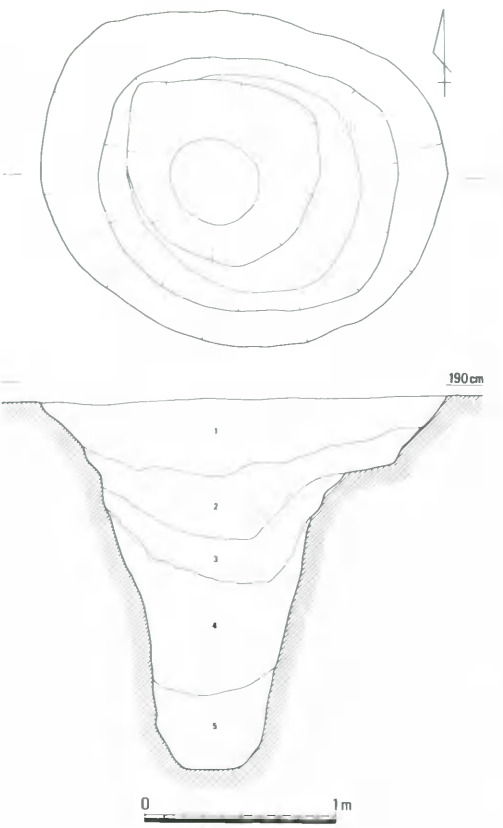
第59図　井戸１、同出土遺物

含むほか、１～３の各層ともに土器が出土している。

この井戸は、弥生時代後期の土器溜り１を精査中に検出したものであり、弥生土器である壺145と高杯153は混入と考えられるがそれ以外はすべて土師器である。甕の口縁には真っ直ぐ立ち上がり端部が丸く終わるもの146と、内湾気味に立ち上がり端部が内傾する面をもつ147がある。高杯の杯部には外上方に真っ直ぐ延びる148・149と内湾気味に立ち上がり端部付近で外に開く150～152がある。高杯脚154は長い脚柱部をもち脚裾は強くハの字に開き、脚内面はヘラケズリを行う。以上の土器からみて井戸の廃絶の時期は百・古・Ⅲである。（弘田）

井戸２（第48・60～62図、図版３・11・12）

306Ｉ区の中央やや北よりで、竪穴住居４の北東５ｍの地点に位置する。平面形は楕円形を呈し、上面の径は1.7～2.1ｍで、深さは２ｍを測る。断面の形状は検出面から0.4ｍ下までが緩やかなⅢ状を呈し、それより下は垂直に近い傾斜をもって底部に至る。

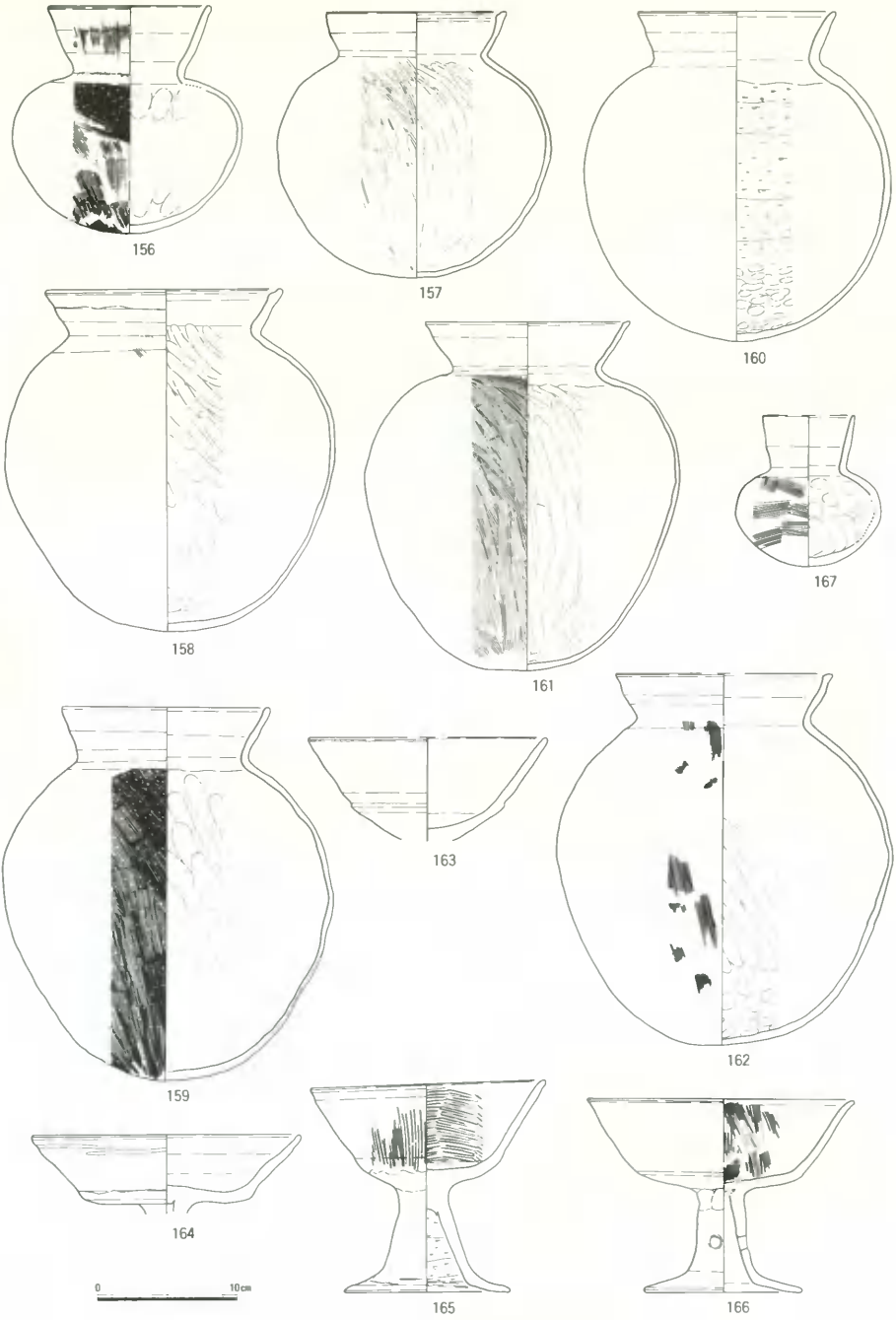


第60図　井戸２

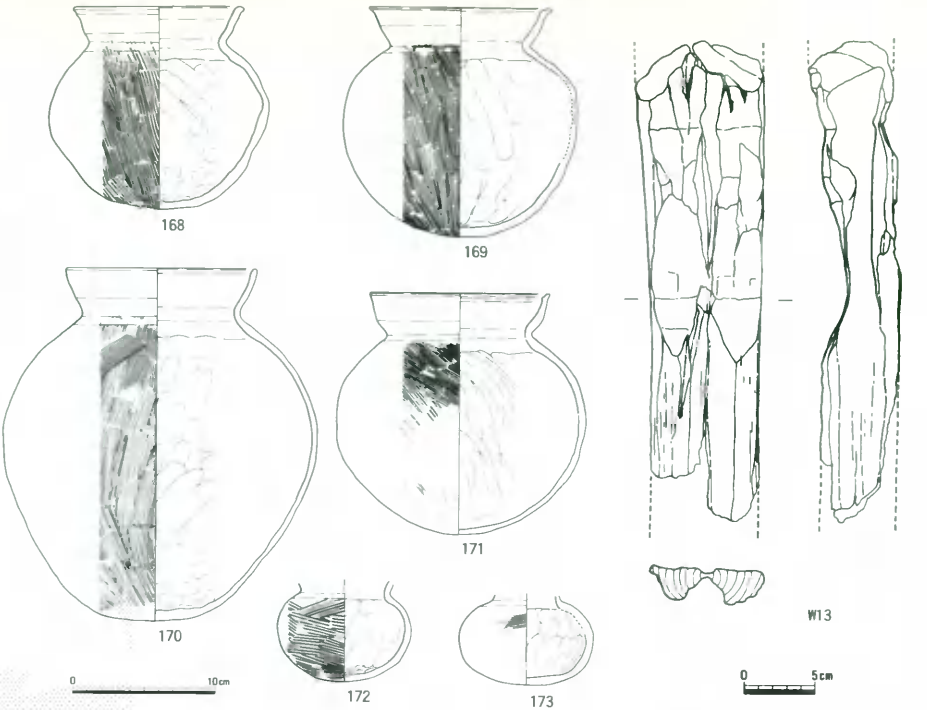
埋土は５層に分かれるが、４層堆積後に一定の時間の経過があったとみられ、そこを基準に上層と下層に分けられる。４層の上面には建築部材と思われるW13のほかにも多くの木質が遺存していた。そこより２層にかけては土器類も多い。下層では４層の下から５層にかけて多くの土器を含んでいた。

出土した遺物はすべて土師器で、上層（１～３層）出土の156～166と、下層（４・５層）出土の168～173がある。甕は、内面ユビナデ調整の個体が大半であるが、160のようにヘラケズリを施すものがある。159や161・162は外面のハケ調整が粗となり、器表面の凸凹が著しく粘土紐の継ぎ目が看取できる。肩が強く張る161となで肩で胴部最大径が中位にある160は新古関係として捉えられよう。下層の小型甕168・169と171は口縁部が内湾気味に立ち上がる。このうち171は、口縁端部に内傾する面をもつ。高杯には脚部に透かし孔をもたず、内面にヘラケズリをおこなう165と脚内面はナデ、脚中部に透かし孔をもつ166がある。このほかにも、手捏ね172・173がある。

上・下層の遺物はともに百・古・Ⅲのなかに収まる。（弘田）



第61図　井戸２　出土遺物(1)



第62図　井戸２　出土遺物(2)

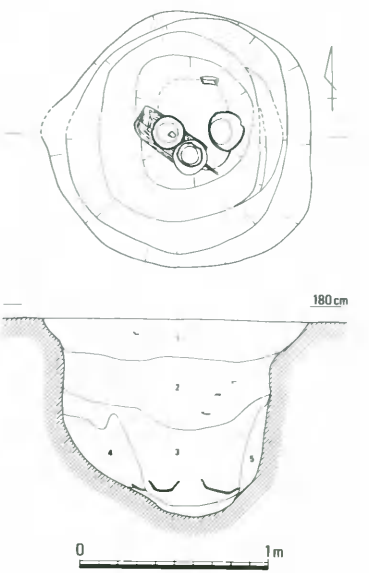
井戸３（第48・63・64図）

306Ｐ区の西よりで検出された井戸で、平面形はほぼ円形を呈する。

規模は径135cm、検出面からの深さ105cmを測る。底部は中心が深く、壁に向かって緩やかに立ち上がる。壁は底部の直上で段を有し、そこからほぼ垂直に、立ち上がるが検出面近くでは拡がりながら緩やかに立ち上がる。

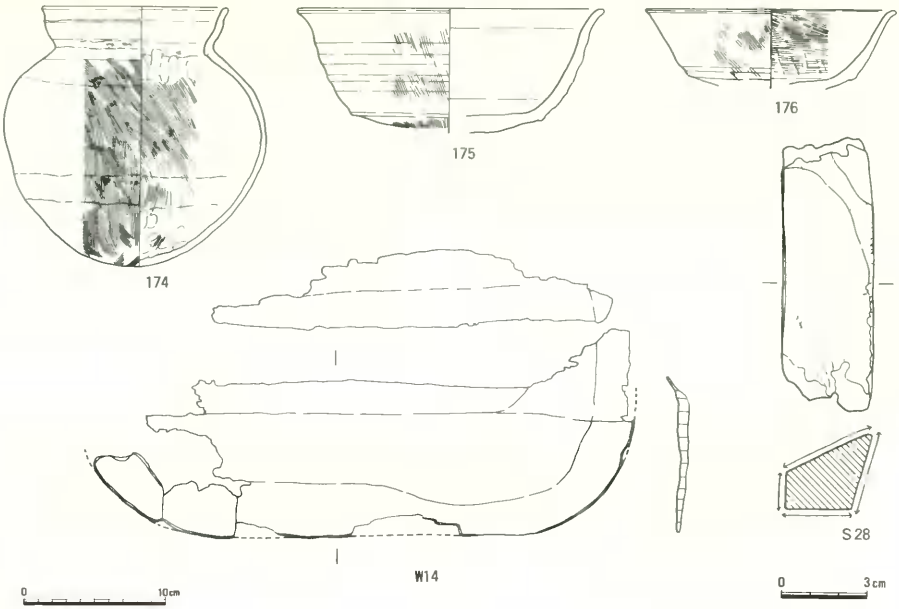
埋土は５層に分かれるが、最下層は堆積が薄い。このうち遺物を多く含んでいたのは３層で、盆状の木製品、土師器、砥石などが出土した。

W14は周辺が特に立ち上がるような加工が施されているわけではないが、左側はやや尖り気味に、右側はやや



1．にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
2．黄褐色(2.5Y5/3)土
3．灰色(10Y4/1)粘質微砂
4．緑灰色(10GY6/1)粘質微砂
5．緑灰色(10GY6/1)粘質微砂

第63図　井戸３



第64図　井戸３　出土遺物

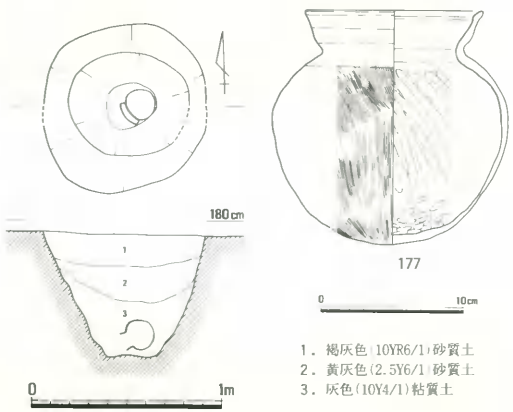
丸みをもつ短辺に仕上げており、盆状の木器と思われる。土師器の特徴から、井戸の埋没時期は百・古・Ⅲであろう。（平井）

井戸４（第48・65図）

306O区の南西よりで検出された井戸で、平面形はほぼ円形を呈する。規模は径85cm、深さ65cmを測る。底部は径20cmあまりの小さなもので、壁は外傾しながら立ち上がる。

埋土は３層に大別され、上半部は砂質土であるが、下半部は粘質土になる。遺物は土師器の甕１個体分が、ほぼ底部に接する位置から出土した。

177は土師器の甕で、口縁端部は内傾する面を持つ。内面は底部に指頭圧痕を残し、胴部はナデ上げている。時期は百・古・Ⅲと考えられる。（平井）



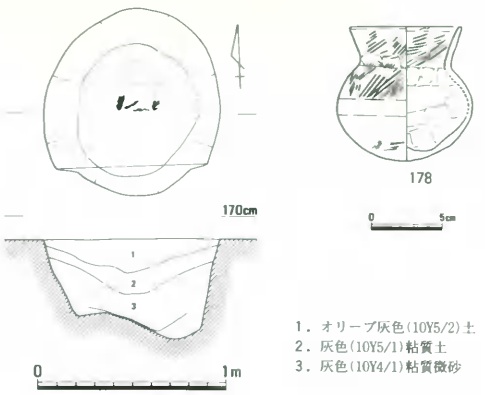
第65図　井戸４、同出土遺物

井戸５（第48・66図）

306P区の南端で検出された井戸であるが、明確な井戸とする根拠はない。平面形はほぼ円形を呈し、南側は側溝によって一部削られている。規模は径100cmを測るが、南北に比べて東西はやや小さい。底

部は平坦でなく、東側が高くなる。壁は急傾斜で立ち上がる。

埋土は３層に大別され、最下層の底部に接する位置に薄い炭層が認められた。また、２層の下部にはＶ字状に編んだ組織が２列に並び、その間にも編物と思われる炭化した組織が認められた。カゴ状のものと考えられるが、残存状態が悪いため明確でない。土器は完形の小型丸底坩が１点出土した。概して粗雑な調整であり、時期は百・古・Ⅲと考えられる。　（平井）



第66図　井戸５、同出土遺物

(4)　土　　壙

土壙11（第48・67図）

306Ｄ区にある。この位置は低位部にあたり、古墳時代の斜面堆積を除去し洪水砂の上で検出した。

平面形は楕円形を、断面は皿状を呈す。規模は長径が118cm、短径は100cmで、深さは南側がさらに１段深くて検出面から15cmを測る。出土遺物はないが、時期は古墳時代であろう。　（弘田）

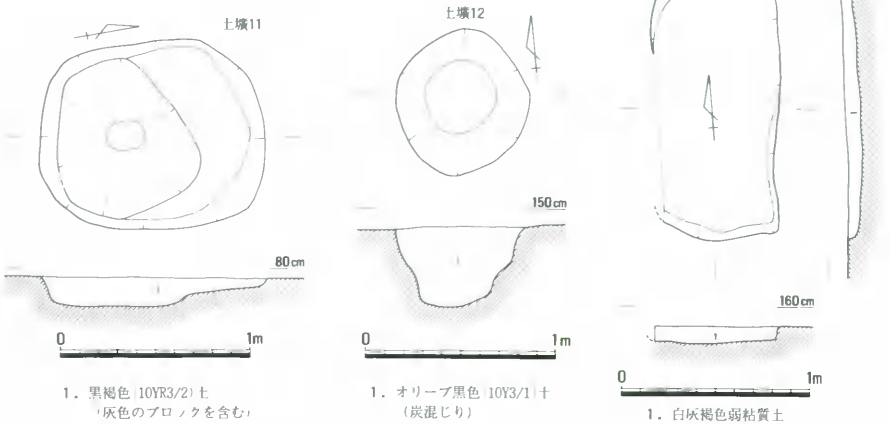
土壙12（第48・67図）

305Ｄ区のＤライン近くで、土壙11と同じく低位部にある土壙である。平面形は円形を呈し、直径が70～77cmで、断面形は深鉢状をなし、深さは43cmを測る。

遺物は出土していないが、層位からみて古墳時代と思われる。　（弘田）

土壙13（第48・67図）

305Ｆ区の微高地縁辺に位置する土壙である。平面形は、隅丸長方形を呈し、長径が139cm、短径が66cmである。断面形は皿状を成



第67図　土壙11～13

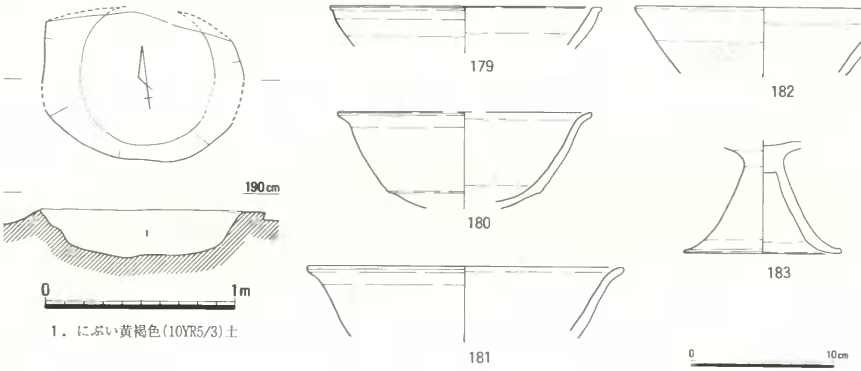
し、深さは17cmを測る。

層位からみて古墳時代の土壙であろう。（弘田）

土壙14（第48・68図）

306Ｊ区の北東隅で検出した。古代以降の畝状遺構に切られる。平面形は円形で、長径は107cm、短径が80cmである。深さは25cmを測り、断面形は皿状を呈す。

出土遺物のうち図示できたものはいずれも土師器で、甕の口縁部179と高杯180～183がある。183の脚柱部内面には工具ナデがみられる。時期は百・古・Ⅲである。（弘田）



第68図　土壙14、同出土遺物

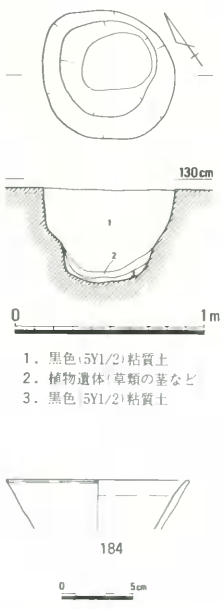
土壙15（第48・69図、図版４）

306Ｇ区のうち低位部内にある土壙である。平面形は円形で径は約70cm、断面は深鉢状で、深さは57cmを測る。埋土は３層からなり、最下層である黒色粘質土上に厚さ５cmの植物遺存体が堆積していた。

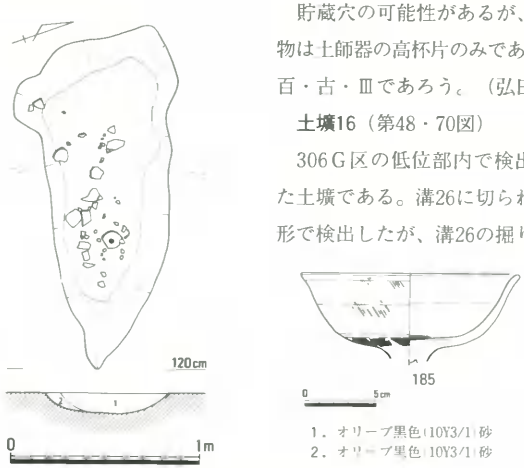
貯蔵穴の可能性があるが、遺物は土師器の高杯片のみである。百・古・Ⅲであろう。（弘田）

土壙16（第48・70図）

306Ｇ区の低位部内で検出した土壙である。溝26に切られる形で検出したが、溝26の掘り残



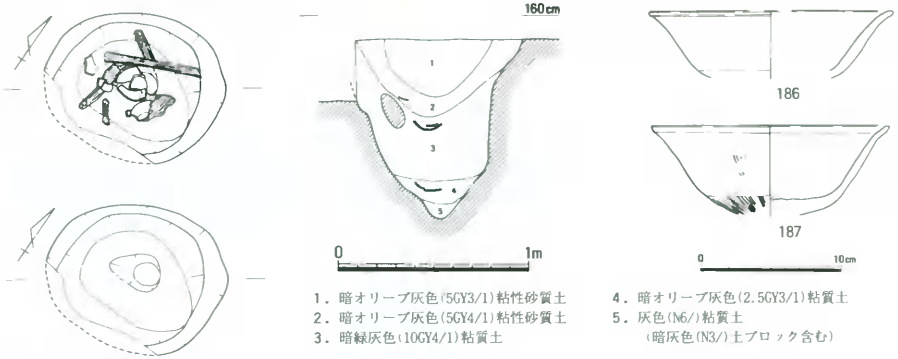
第69図　土壙15、同出土遺物



第70図　土壙16、同出土遺物

しの可能性もある　平面形は不整三角形で、長径が173cm、短径は83cmである。断面形状は皿状をなし、深さは12cmを測る。

出土遺物には土師器の高杯があり、時期は、百・古・Ⅲである。　（弘田）

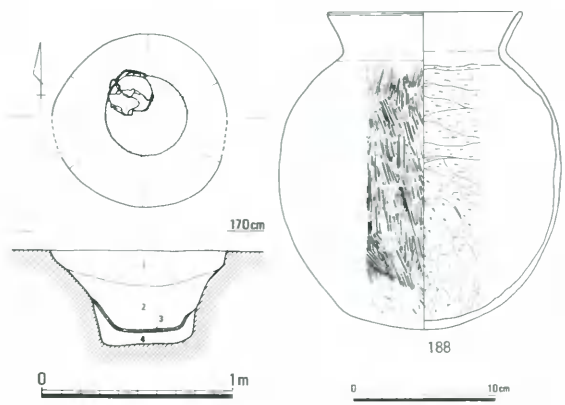


第71図　土壙17、同出土遺物

土壙17（第48・71図）

306Ｈ区の微高地端部に位置し、南端は調査区外にでる。平面形は楕円形を呈し長径が95cm程、短径は約85cmである。深さは１ｍ余りあり、断面は上部が皿状をなすが、中位ではほぼ垂直に落ち、最下部で再び緩やかな傾斜となる。埋土は５層に分けられ３層以上は急激に埋められた様相を呈す。各層には土器とともに木質や石を含んでいた。断面形状から井戸の可能性がある。

土師器の高杯が出土しており、それからみて土壙の埋没時期は百・古・Ⅲである。　（弘田）



第72図　土壙18、同出土遺物

土壙18（第48・72図）

306Ｊ区の中央付近で、建物３の西2.5mに位置する。

平面形は円形を呈し、径は90cm程、深さは47cmを測る。断面形は深鉢状を呈し、中位までは逆ハの字状にすぼまるがそれから下はほぼ垂直に落ちる。

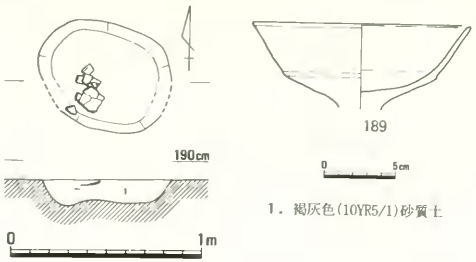
埋土は４層に分かれる。最下層（４層）の堆積後にその上面全体を覆うように薄い炭層が乗っており、さらにその上ではほぼ完形となる土師器の甕188が出土している。

出土遺物からみて、この土壙の時期は百・古・Ⅲである。（弘田）

土壙19（第48・73図）

306O区の北東寄りで検出された土壙である。平面形は楕円形を呈し、規模は長さ70cm、幅58cm、深さ13cmを測る。底部は平坦でなく、西側が一部窪んでいる。壁は急傾斜で立ち上がる。

埋土は1層で、検出面に近い位置から土師器片がまとまって少量出土した。189は高杯で、百・古・Ⅲと考えられる。（平井）

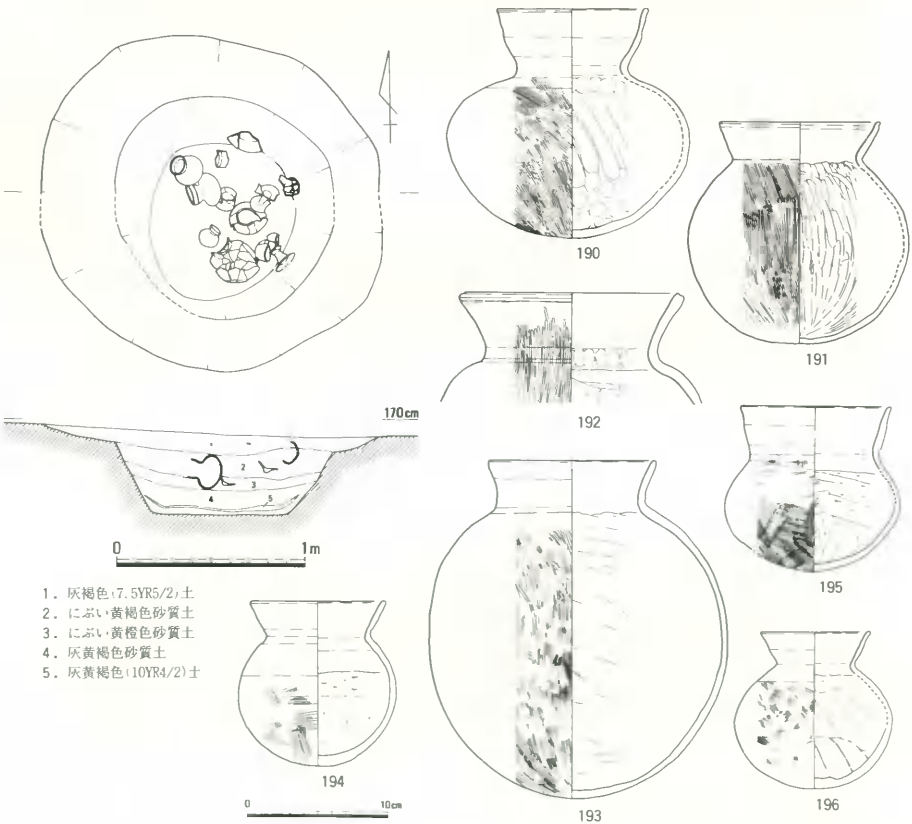


第73図　土壙19、同出土遺物

土壙20（第48・74・75図、図版3）

306P区の北端で検出された土壙で、平面形はほぼ円形を呈する。規模は径190cm、深さ42cmを測る。2段に掘り込まれており、上段は緩やかな立ち上がりに対し、下部は急傾斜に壁が立上がる。底部はほぼ平坦である。

埋土は4層に大別されるが、第4層の底部近くには薄い層が介在する。またいずれの層にも炭化物

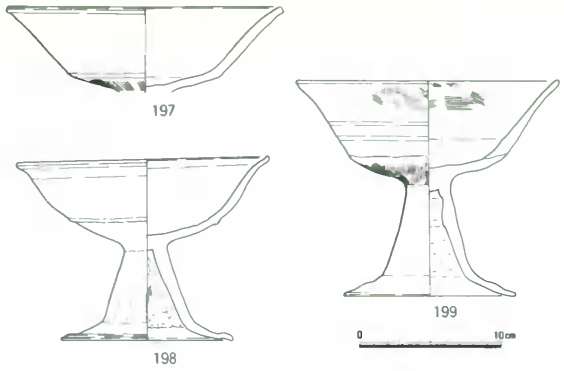


第74図　土壙20、同出土遺物(1)

が含まれる。遺物はすべて土器で、各層に認められるが、土壙内の中央部にまとまる傾向がある。土師器は完形ないし完形に復元できるものが多い。

190の壺は、口縁部に二重口縁の特徴を残している。194～196は小型丸底坩で、口縁部は外反気味に立上がるが、くびれ部近くを厚くする特徴を持つ。

土器の時期は百・古・Ⅲと考えられる。　（平井）

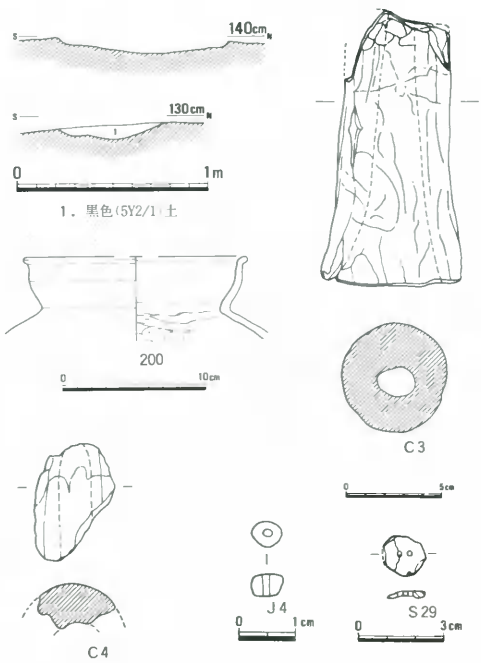


第75図　土壙20 出土遺物(2)

(5)　溝

溝25（第48・76図、図版４・16）

305・306Ｆから306Ｇ区にかけての低位部にあり、古墳時代の斜面堆積層を除去後に、微高地端に沿った形で東西方向へ30mにわたって検出された溝である。溝は、最大幅が90cm、深さは８cmを測り、埋土は黒色土１層で埋まる。



第76図　溝25 断面、同出土遺物

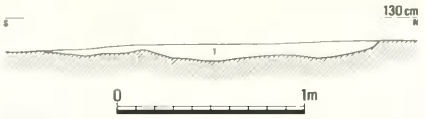
出土遺物には土師器甕200、土製品では羽口C３・４がある。C２は現存長14.7cm、径5.6cmを測る。そのほかには、ガラス製小玉J４、有孔円板S29がある。この溝の時期は百・古・Ⅲである。　（弘田）

溝26（第48・77図）

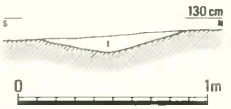
306Ｇ区にあり、長さ10mにわたって検出した溝である。溝25とは検出状況が同じであり、かつ溝25の延長方向にあることから本来は同一の溝であった可能性がある。

出土遺物のうち、甕は大201・202と小203・204がある。両者ともに口縁端部は丸く収める。高杯の杯部には小型で口縁が外上方に真っ直ぐ延びる205と、大型で口縁部の外反する206・207がある。高杯脚208は長脚で裾はハの字に強く開く。内面の調整は顕著ではなく、絞り痕が残る。

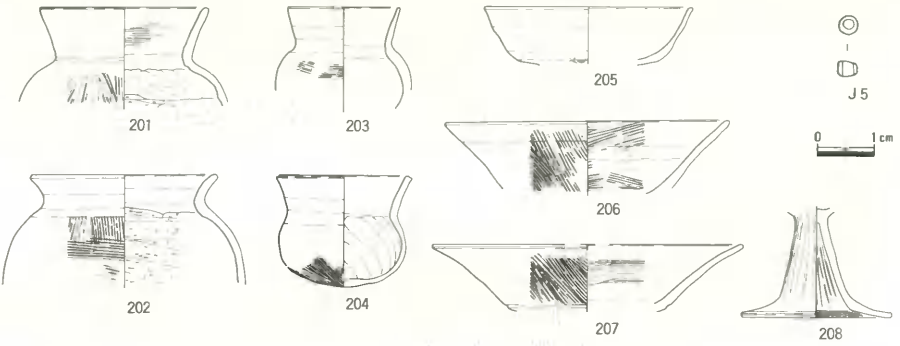
溝の時期は百・古・Ⅲの中に収まる。また、土器以外の遺物には滑石製の臼玉J５がある。　（弘田）



1．オリーブ黒色(10Y3/1)土(グライ化)



1．オリーブ黒色(10Y3/1)土



第77図　溝26 断面、同出土遺物

溝27（第48・78図、図版４）

306M区において、検出された南北方向の溝で、幅が90cm前後、断面形はＶ字状を呈し、深さは50cmを測る。

この溝は「百間川兼基遺跡２」の溝50に繋がるもので南流し調査区南端の落ちに流れ込んでいたと思われる。遺物は土器片のみで時期の判断は困難であるが、既報告通り百・古・Ⅲとして良いだろう。　（弘田）

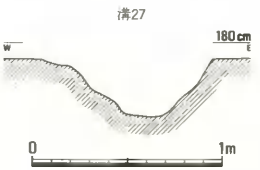
溝28（第48・78図、図版４）

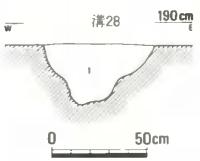
溝27の東に位置する南北方向の溝であり、調査区南で溝27に合流する。溝の幅は60cm、深さは50cmを測る。

この溝は「百間川兼基遺跡２」の溝51に繋がるものである。遺物は土器細片のみであるが、既報告の通り百・古・Ⅲとして良いであろう。　（弘田）

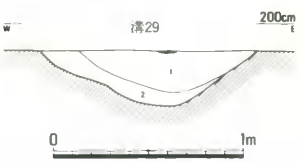
溝29（第48・78図）

306O区で検出された溝で、ほぼ南北に流走する。溝は調査区の中央部がやや幅広く、南北両端は幅が狭くなる。規模は中央部で幅150cm、北端で103cm、南端で70cm、深さは30cm前後を測る。この溝は北側の「兼基・今谷遺跡２」の溝52およびさらに北側の「兼基・今谷遺跡１」の溝46・47に続く。溝の時期はおそらく百・古・Ⅲと思われる。　（平井）





1．褐灰色(5YR5/1)土(斑浅黄色)



1．黄灰色(2.5Y5/1)土
2．灰黄色(2.5Y6/2)土

第78図　溝27～29 断面

３．古代・中世の遺構・遺物

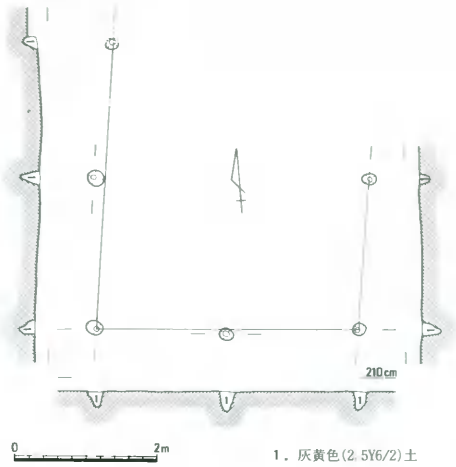
(1)　掘立柱建物

建物７（第79・83図）

305・306H区にまたがって検出した掘立柱建物である。北半は低水路によって削平を受けており、全容は不明であるがおそらくは南北棟の建物と推測される。

梁間は２間で全長は366cm、桁行の柱間は195cmと210cmである。柱穴の掘り方は円形で、深さはそれぞれ検出面から８～25cm位である。

正確な時期は不明であるが、畝状溝より古く、古墳時代の包含層下で検出しており、中世の範疇に入る。　（弘田）

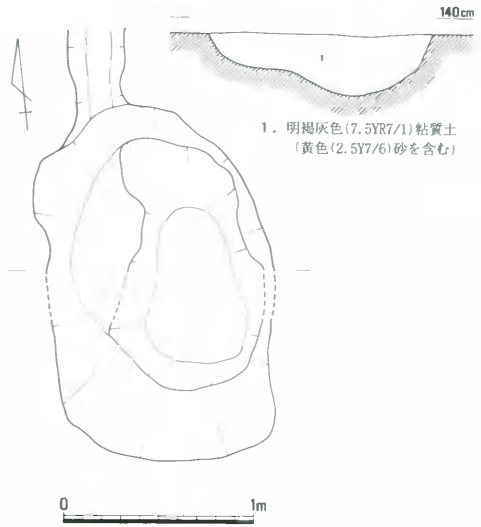


第79図　建物７

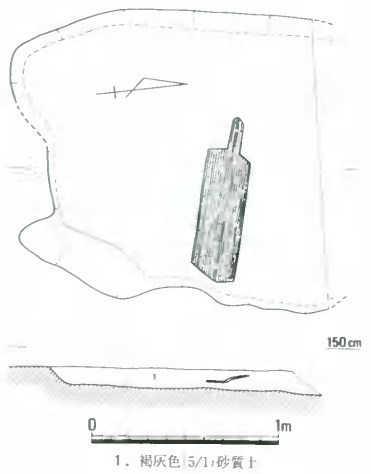
(2)　土　　壙

土壙21（第80・82図）

304ｘ区の南東部で検出した土壙である。その平面形は、丸い北部と直線的な三辺からなる不整形なもので、長軸を南北にもつ。規模は長軸190cm、短軸120cm、深さ30cmを測り、底が二段に落ち込んでいる。土壙の北西部から長さ40cm、幅30cm

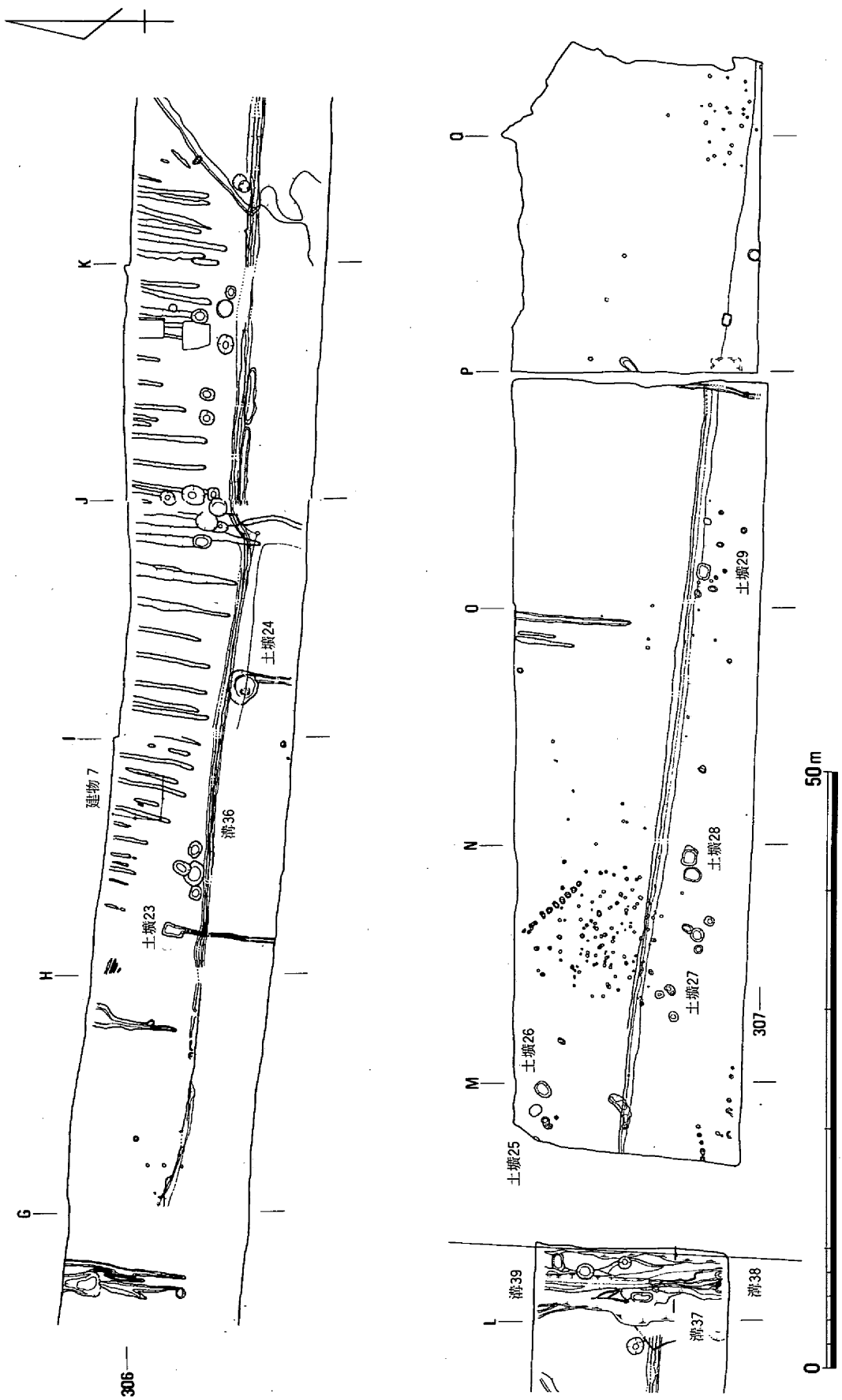


第80図　土壙21



第81図　土壙22

第82図　o～F区　古代・中世遺構配置（1/500）



第83図　F～Q区 古代・中世遺構配置（1/500）

の浅い小溝が派生し、その先は溝35に接続する。このことから、土壙の性格は溝35と有機的な関係にある灌漑用の溜め井と考えられる。出土遺物はないものの、時期は中世である。（高田）

土壙22（第81・82図）

304ｘ区の南東部で検出した土壙である。北部を低水路で掘削され、上部も後世の削平を受けるため残りは悪い。平面形は現状で不整ながらも方形を呈し、その規模は一辺150cm、深さ10cmを測る。底はほぼ平坦で、90×22cmの薄い杉板材が残存していたが、土壙の具体的な用途は不明である。

時期は埋土と検出状況から、中世以降と考えられる。（高田）

土壙23（第83・84図）

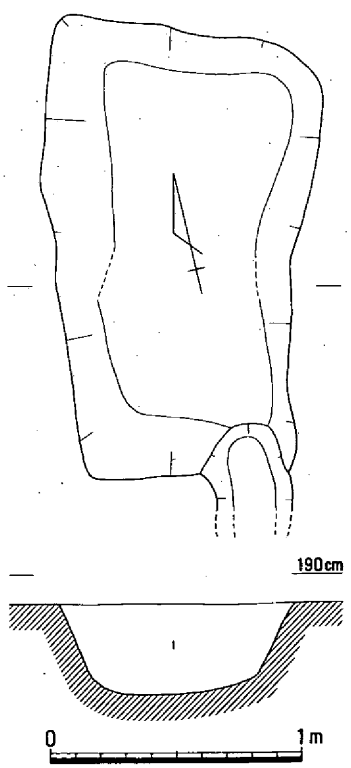
306Ｈ区にあり、近世水田より下層かつ古墳時代の斜面堆積層上から検出した土壙である。平面形は隅丸長方形を呈し、長径が178cm、短径は110cmを測る。深さは46cmで、断面形は椀状を呈す。この土壙から南に延びる幅30cmの溝が派生しており、接続部におけるレベル差は溝の方が25cm高い。この土壙の性格は灌漑用の水溜と考えられる。遺物はないが、中世であろう。（弘田）

土壙24（第83・85図）

306Ｉ区の南西部に位置する。土壙23と同一の面で検出しており、同様に南へ派生する幅50cm、深さは15cm程の溝をもつ。性格は、灌漑用水溜である可能性が高い。

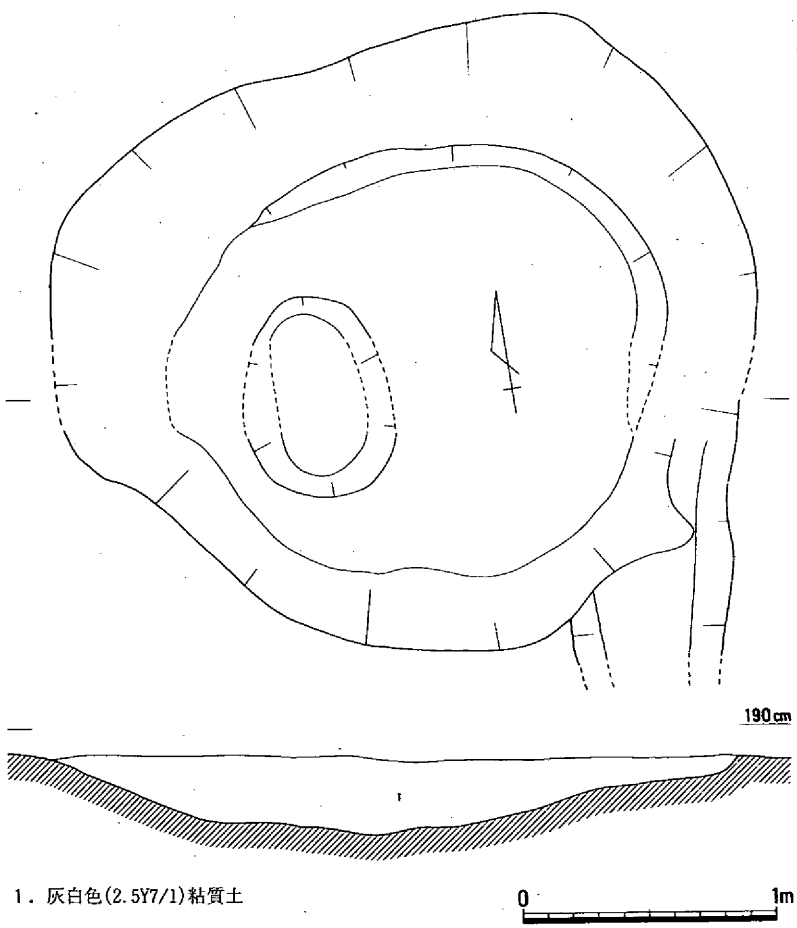
この土壙の平面形は不整円形であり、規模は長径が250cm、短径は228cm、深さが30cmである。断面形は皿状をなす。

室町時代の水田層と同じレベルにあり、時期も近いとみられる。（弘田）



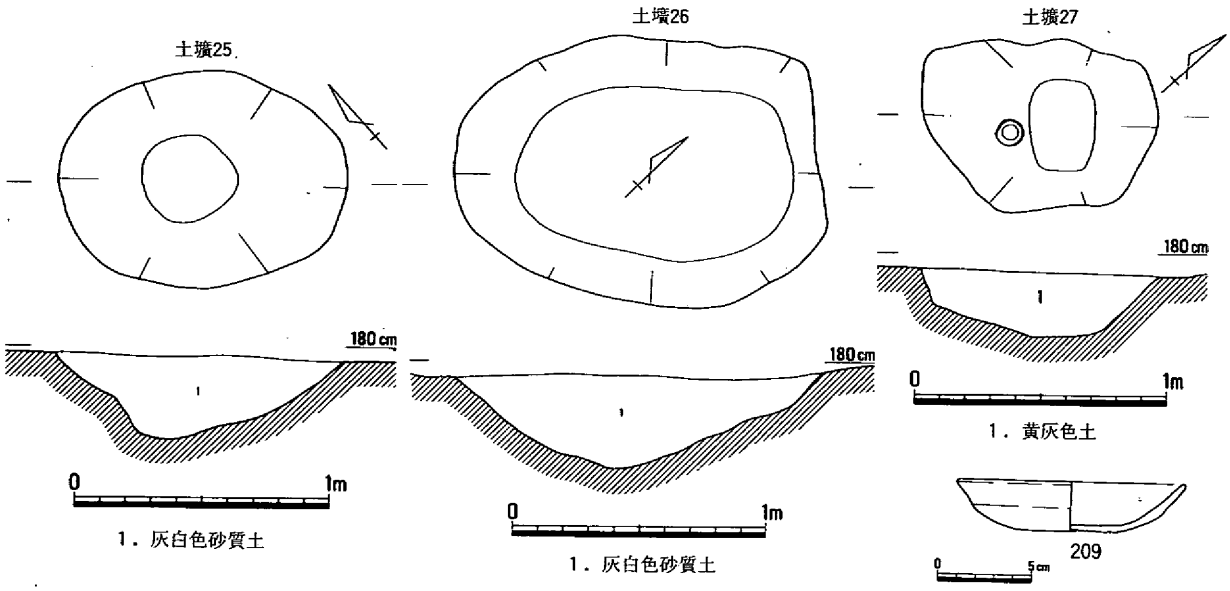
1．灰オリーブ色(5Y5/2)土

第84図　土壙23



1．灰白色(2.5Y7/1)粘質土

第85図　土壙24



第86図　土壙25～27、土壙26 出土遺物

土壙25・26（第83・86図）

306Ｌ区の北東隅に接して位置する。ともに平面形が楕円形を、断面形が椀状を呈する土壙である。土壙25が長径は112cm、短径が85cm、深さは34cmを測る。土壙26は長径が145cm、短径は104cm、深さが39cmを測る。

両土壙とも時期を判別できる遺物はないが、埋土や位置関係からみて中世であろう。　（弘田）

土壙27（第83・86図）

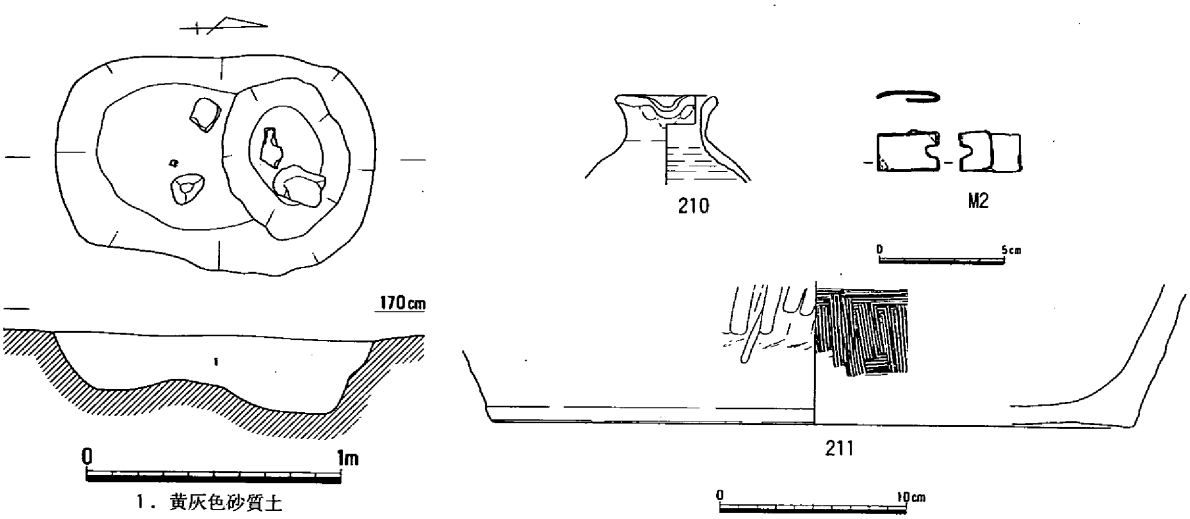
306M区に位置する。平面形は不整形で、断面は皿状を呈す。規模は長径が96cm、短径は71cm、深さは26cmを測る。

完形の土師器皿が一点出土しており、時期は中世と思われる。　（弘田）

土壙28（第83・87図）

306M区の南東隅に位置する土壙で、平面形が楕円形、断面形は皿状を呈する。

規模は、長径が142cm、短径は112cmを測り、深さは47cmである。



第87図　土壙28、同出土遺物

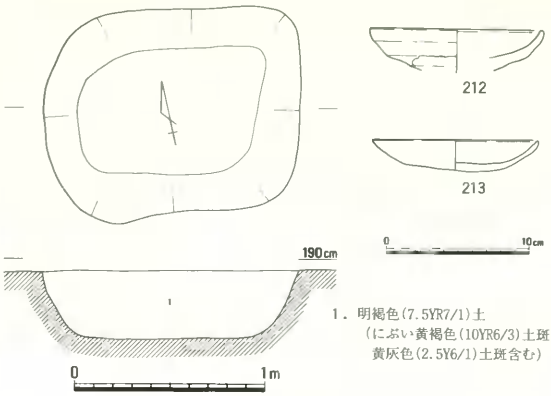
出土遺物の210は備前焼のすずめ口壺、211は備前焼の甕である。M2は長方形で中央に円孔の開く銅板を2つに折りまげたもので銅製の留め金具であろう。

室町時代後半である。（弘田）

土壙29（第83・88図）

306O区の南西部に位置する土壙である。

平面形は隅丸方形状、断面形は北半が一段深い皿状を呈し、規模は長径が133cm、短径が104cm、深さは40cmを測る。



第88図　土壙29、同出土遺物

遺物のうち、212は肥前産の施釉陶器で鉄絵碗である。213は土師器皿で2次焼成を受け、煤が付着する。以上からこの土壙の時期は中世末から江戸時代初めであろう。（弘田）

(3)　溝

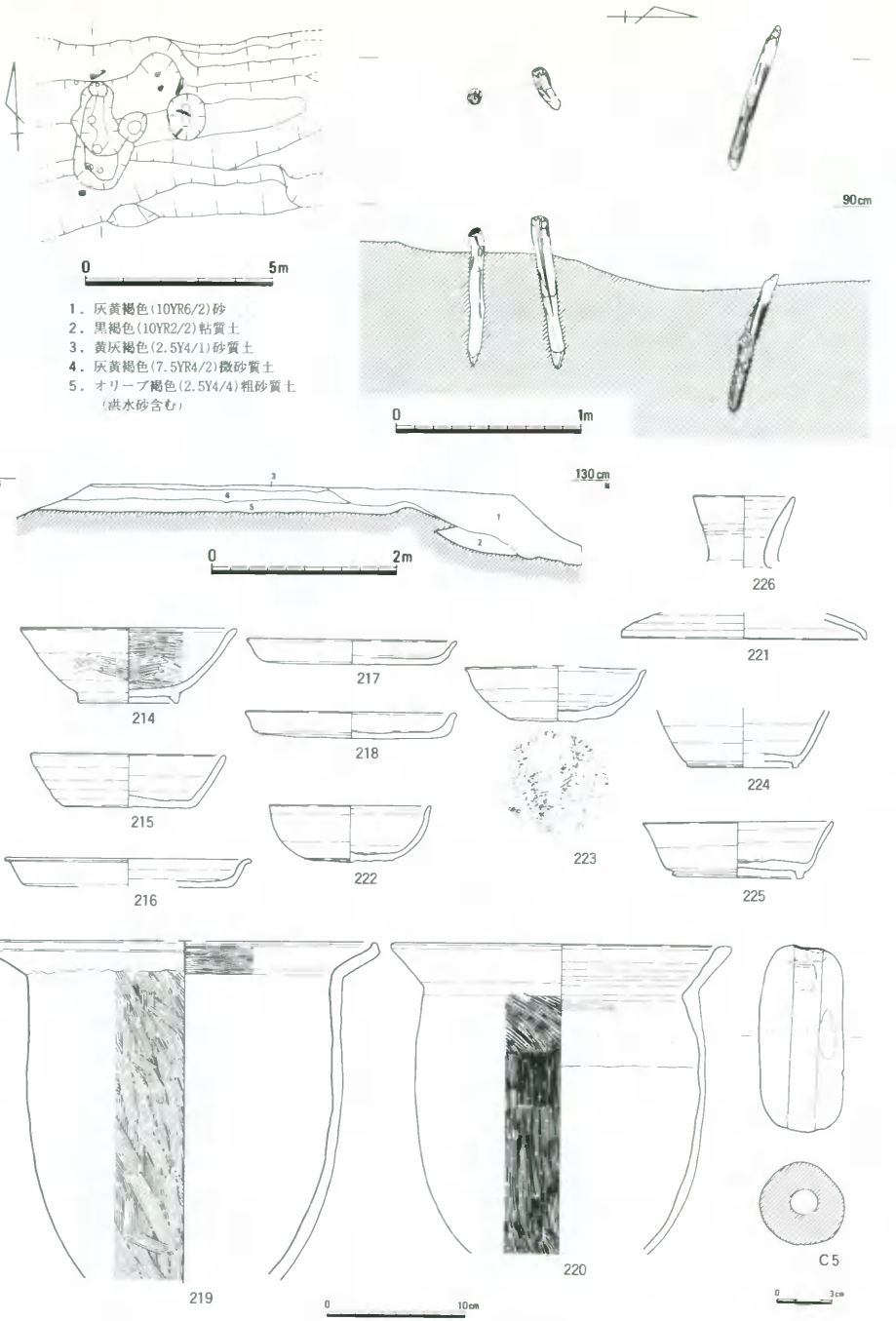
溝30（第82・89～91図、図版4・12・16）

303・304pからs区かけて長さ80mにわたって検出した東西方向の溝である。幅は約5m、深さは約70cmを測る。この溝は一旦調査区外にでるものの、下流では305A・B区を北西から南東に流れる溝2条のうちの1つに繋がると思われる。

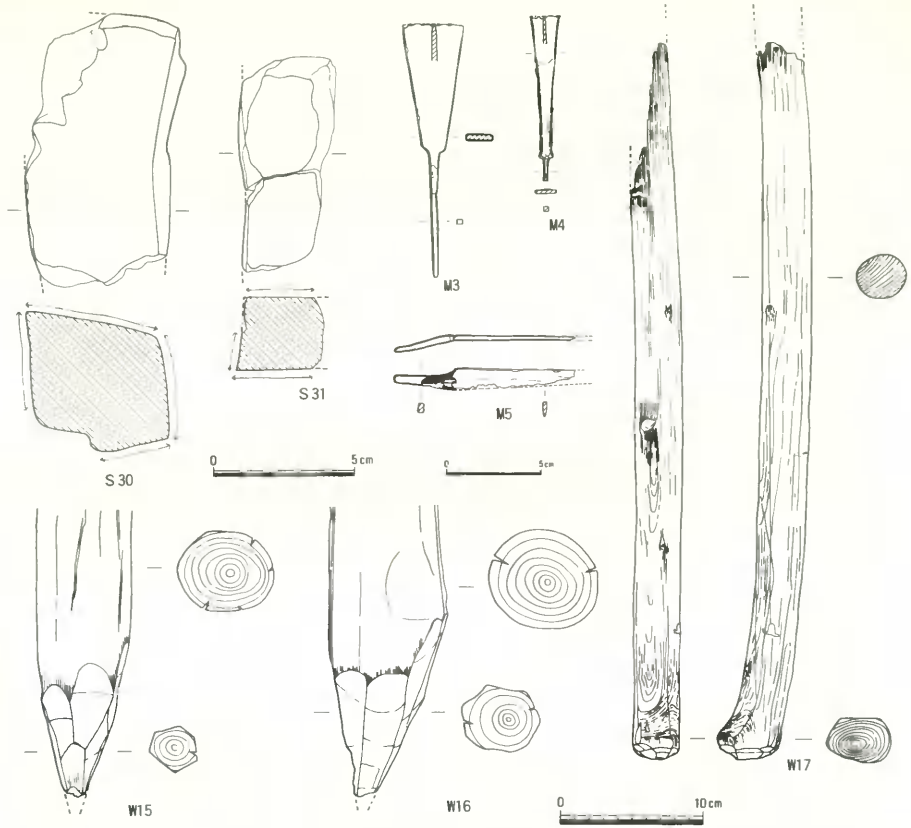
304q区の中央あたりの溝底では、溝の方向と直交して長径が6m、短径は3m、深さ20cm程の土壙状の落ちがあり、杭が溝と直交方向に3本打ち込まれていた。これより東へ3mの所においても楕円形状の落ちがあり、その内外に杭が数本打ち込まれていた。遺存状況は悪いが、しがらみ遺構もしくは橋の可能性がある。

出土遺物には、土師器214～220と須恵器221～225、および土錘C5、砥石S30・31、鉄鏃M3・4、刀子M5、杭W15・16と木製の柄W17がある。214は土師器椀で、内外面ともヘラミガキを施す。色調は灰白色を呈し、高台は面をもって接地する。215は須恵質土師器の杯であり、外底部はヘラ切り後ナデて仕上げる。皿216～218は内外面ともナデて仕上げるが、218の外底部にはハケメもみられる。

第89図　溝30



第90図　溝30 杭列、同出土遺物(1)



第91図　溝30 出土遺物(2)

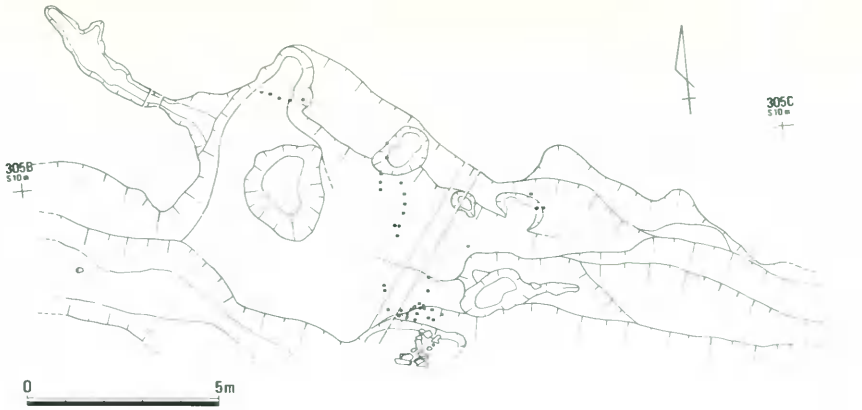
216・217は赤色顔料が塗布されている。219・220は長胴甕であり、220には内面に炭化物の付着が認められる。222・223は須恵器の椀で、底部はヘラ切り調整である。223の底部には「×」のヘラガキがある。須恵器は壺226・224、蓋221、杯225がある。222・223は古い特徴を持つが、そのほかの遺物はすべて９世紀のなかで収まり、９世紀の後半には溝は完全に埋没していたと考えられる。（弘田）

溝31（第82・92・93図、図版４・12・15・16）

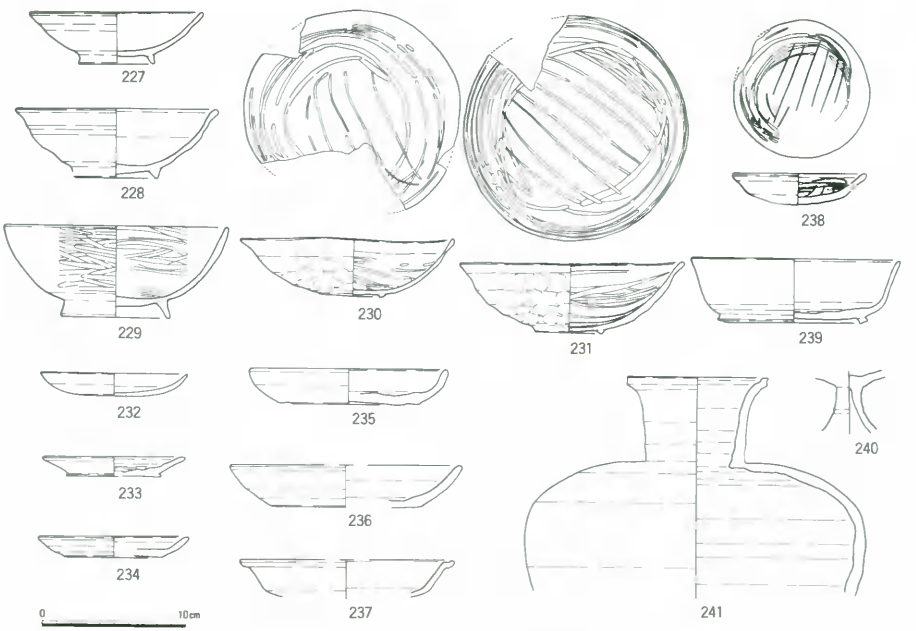
303・304ｐ区および305Ａ区で検出した溝で、幅が約３ｍ、深さは約１ｍを測る。先の溝30を切っており、後述する溝32に切られている。溝底には杭が打ち込まれたしがらみ状施設があり、用水路と考えられる。埋土は、粗砂層であり、遺物とともに流木や木葉が多く含まれていた。

出土遺物には、土師器椀227・228、黒色土器椀229、瓦器椀・皿230～233、土師器小皿232～234と杯235～237や須恵器の杯239、高杯240、壺241がある。

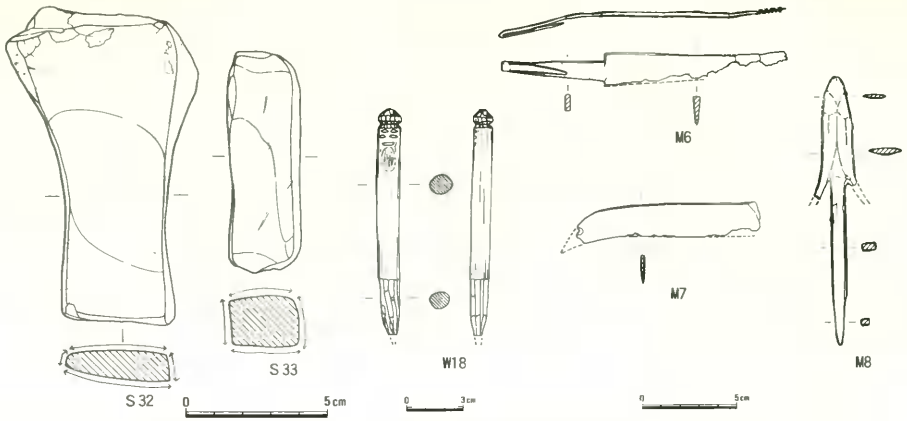
土器以外には砥石S32・33と木製品W18、刀子Ｍ６、曲刃鎌Ｍ７、鉄鏃Ｍ８がある。W18は円柱状の棒で一方の端を尖らし、一方の端近くには抉りを入れるが、その先は欠損していた。また抉りの下には顔を表現したものか横方向の細い刻みが入る。小型の卒塔婆であろう。



1．暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土
2．黄灰色(2.5Y6/1)砂質土
3．灰色(5Y5/1)粘性砂(貝殻痕跡顕著)
4．黄灰色(2.5Y6/1)砂(粘土混り貝殻痕跡顕著、グライ化)
5．暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘土(粗砂混り)
6．暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)砂
7．オリーブ灰色(5GY5/1)粗砂
8．暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘質土(貝殻痕跡顕著)



第92図　溝31、同出土遺物(1)



第93図　溝31 出土遺物(2)

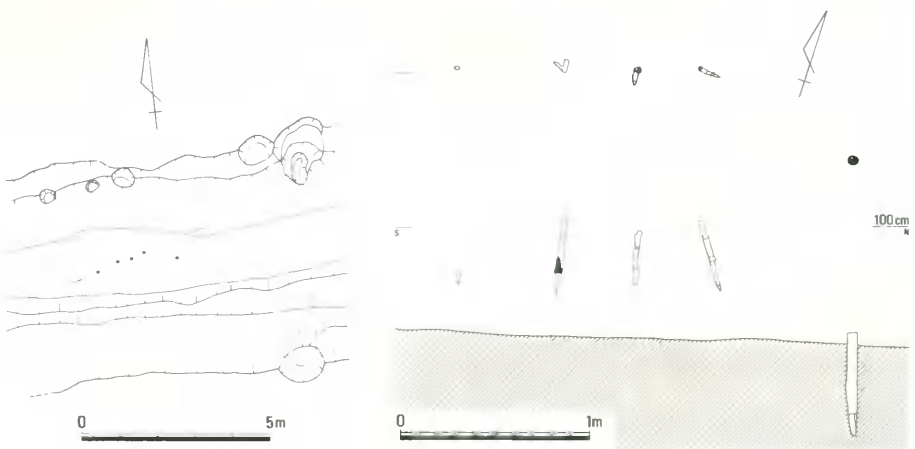
溝の時期であるが、遺物には大きく３時期のものが認められる。須恵器は９世紀に遡り、黒色土器や小皿、杯は11世紀以降である。さらに高台付き椀と瓦器椀は13世紀末から14世紀にかけてのものである。そこで溝30や32との切り合いからも判断すると、この溝は平安時代後半を中心にし、14世紀には完全に埋没したと思われる。なお、鉄製品３点は古墳時代に遡る可能性がある。　（弘田）

溝32（第82・94～98図、巻頭図版２、図版４・12・16）

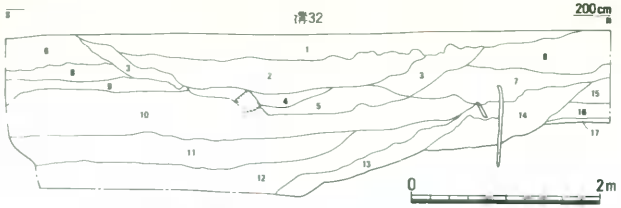
303・304ｐ区から305Ｃ区にかけて検出した、調査区の大半を占める大溝である。この間ではやや蛇行しながらもほぼ東西方向に流れる。幅は最大で７ｍ、深さが１ｍを測る。

304・305ｒ区では溝底に杭列が検出された。その箇所は溝30を切っている部分であり、杭列の方向は溝30に沿っていることから溝30の護岸施設の可能性が強い。

遺物は埋土の上層242～267と下層268～299で分けている。上層には土師器椀242～256、黒色土器

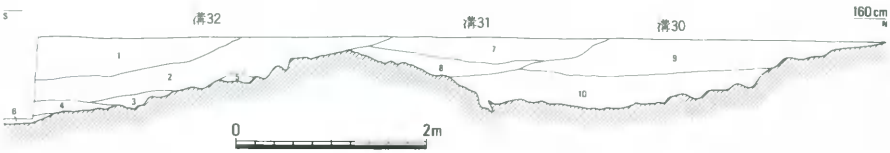


第94図　溝32（ｒ区）杭列（1／150、1／30）



1．灰オリーブ色(5Y4/2)粘質微砂土
2．灰オリーブ色(5Y5/2)砂質土
3．明緑灰色(7.5GY7/1)粘質土
4．褐灰色(10YR6/1)粗砂
5．緑灰色(10GY5/1)粘質土
　粗砂ブロック、木片少量含む)
6．灰黄褐色(10YR4/2)砂質土(木片含む)
7．暗灰黄色(2.5YR4/2)砂質土(木片含む)
8．灰オリーブ色(5Y5/2)粘質土(微砂含む)
9．オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質土
10．緑灰色(10GY5/1)粘質土(炭片微量)
11．灰オリーブ色(7.5Y5/2)粘質土(炭片、木片多量含む)
12．暗オリーブ色(5Y4/3)粘質微砂土
13．青灰色(5B6/)粘質土
14．灰オリーブ色(7.5Y5/2)粘質土
15．暗緑灰色(10GY4/1)粘質土
16．明緑灰色(10GY7/1)粘質土
17．灰オリーブ色(5Y5/3)粘質微砂土

1．暗灰黄色(2.5Y5/1)粘質土
2．暗灰黄色(2.5Y5/1)粘質土
3．褐灰色(10YR4/1)粘質土
4．褐灰色(10YR5/1)粘質土
5．灰色(10Y5/1)細砂
6．灰色(10Y6/1)粗砂
7．灰色(10Y5/1)粗砂

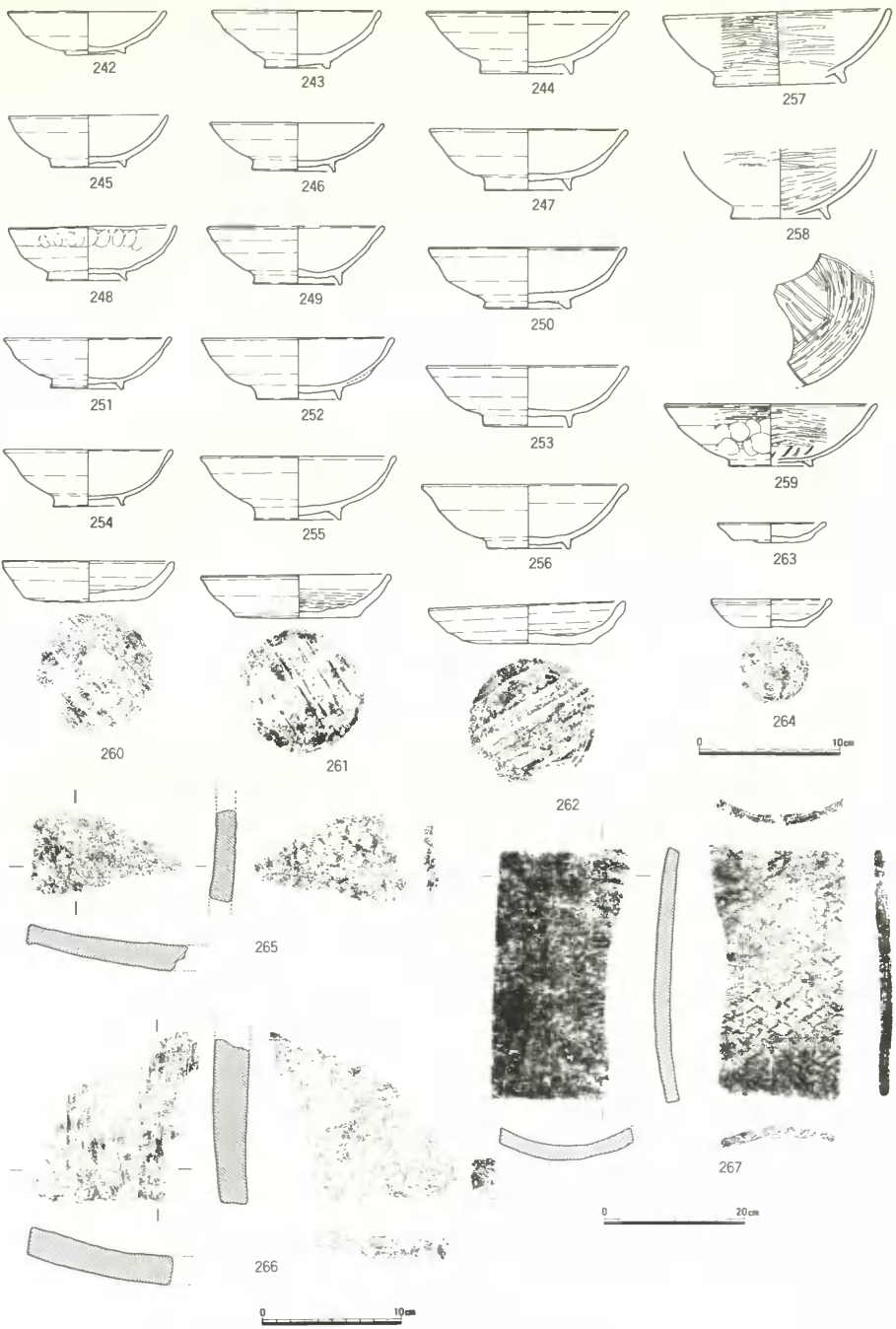


1．灰黄色(2.5Y6/2)砂質土(溝32)
2．暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘質微砂(溝32)
3．暗オリーブ灰色(2/5GY5/1)粘質微砂(溝32
4．暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粗砂(溝32)
5．暗オリーブ灰色(2.5GY5/1)粘質微砂
　粗砂少含)(溝32)
6．灰色(5Y6/1)微砂と粘土の互層(溝32)
7．黄灰色(2.5Y6/2)粘質微砂(溝31)
8．緑灰色(5G5/1)粘質微砂(溝31
9．灰黄褐色(10YR6/2)粘質土(溝30)
10．暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘質土
　(浅黄色(5Y7/3)斑、貝殻痕？含
　(溝30)

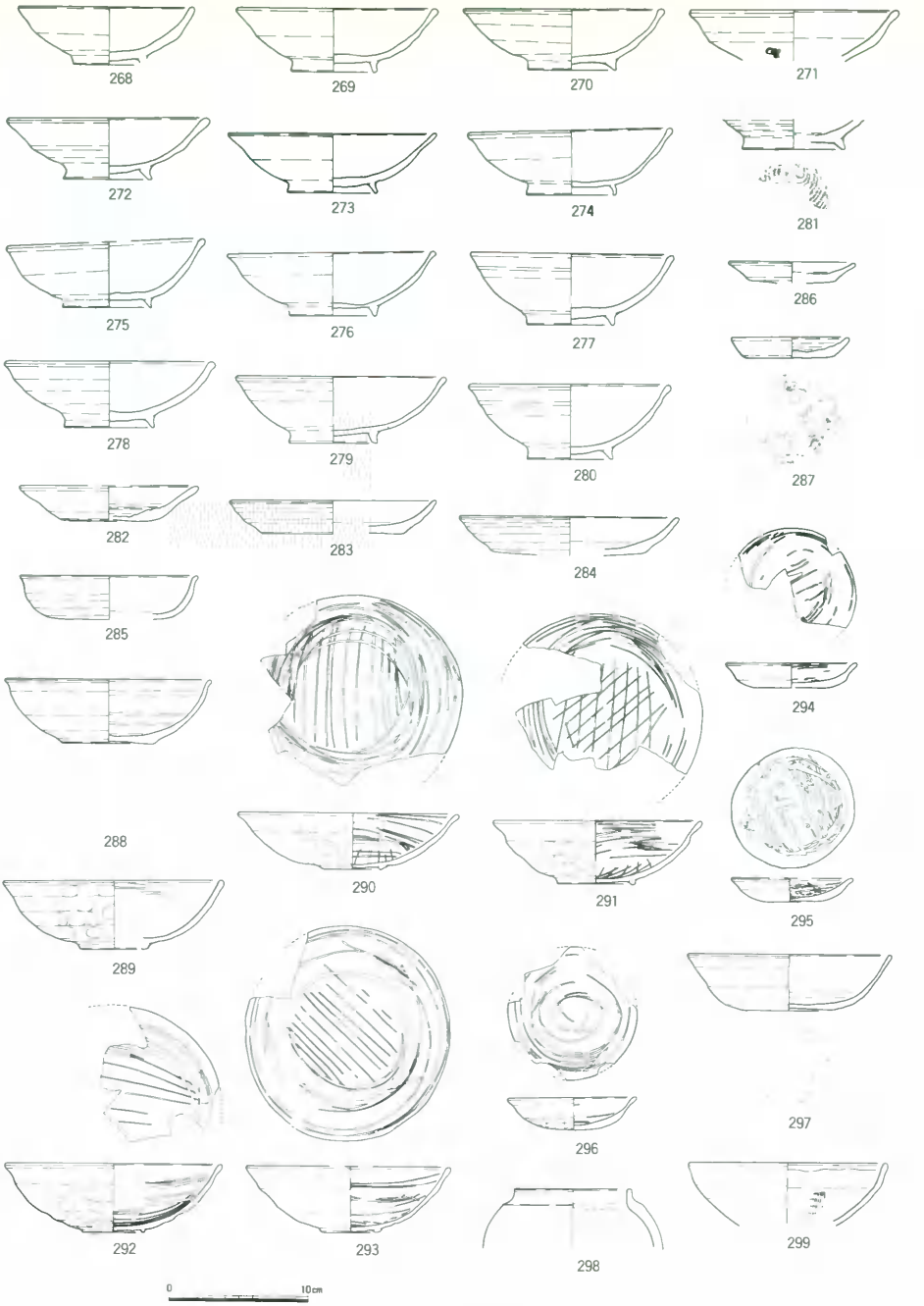
第95図　溝30～32 断面

257・258、瓦器259、土師器杯260～262、小皿263・264、瓦265～267があり、下層には土師器椀268～281、杯282～285、小皿286・287、瓦器椀・皿289～296、勝間田焼椀288、備前焼杯297、須恵器壺298や青磁碗299がある。上・下両層の時期差を土師器椀を検討すると、口径が11.1～15.6cm、器高で3.2～5.6cmの間に上・下層ともに混在するが、242～246のように小型の一群が存在することから、上層には相対的に新しい傾向がみられる。これは下層の瓦器290～296が和泉型の３期（註１）にはいり、13世紀前半の年代が与えられることからも首肯される。土器以外には、漆椀W19や独楽W20、土錘C６、、直刀M９、鋤先M10、釘M11、工具M12がある。図示した以外にも桃の種や獣骨、白色粘土化した貝殻痕跡が多く認められた。

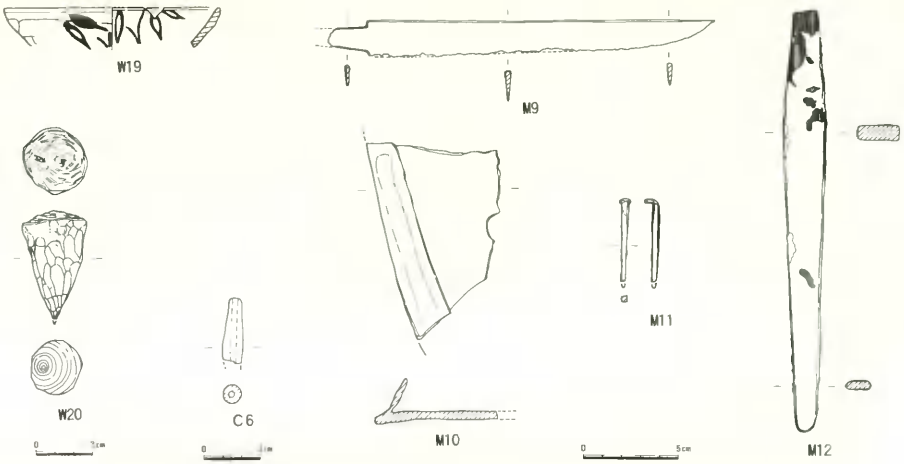
遺物の年代からみて、この溝は13世紀代を中心に利用されるが、14世紀には完全に埋没していたといえよう。また、この溝には溝33以下の南北方向の小溝が接続しているほか、下流では「今谷遺跡２」の溝71につながる可能性が高く、運河としての機能が考えられる。　（弘田）



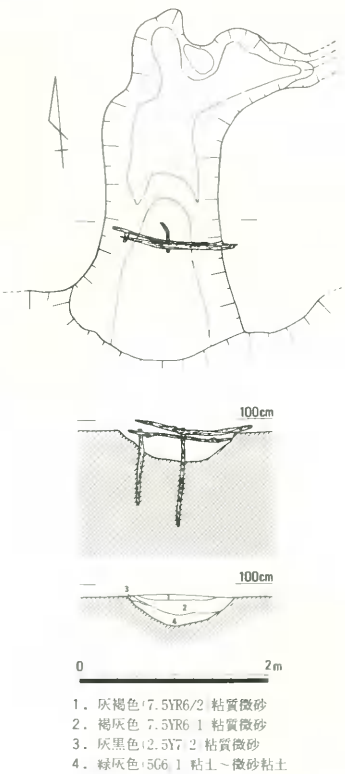
第96図　溝32 出土遺物(1)



第97図　溝32 出土遺物(2)



第98図　溝32 出土遺物(3)



第99図　溝33

溝33（第82・99図）

304・5ｚ区において検出した、溝32の北岸に直角に取りつく溝であるが、北部は細くなり東側に折れている。その規模は幅120cm、深さ30cmで、断面形は椀形を呈する。溝32に取りつく直前に設けられたしがらみは、溝に直行する２本の横木と、その南側に打ち込まれた２本の杭や蔓で構成されており、この部分から南側の溝底が一段低くなっている。杭先が北に向くことと、杭の上部が南側に折れ曲がるなどから、南流に対して設けられたものと考えられる。

時期は、溝32の存続期間内に収まる。　（高田）

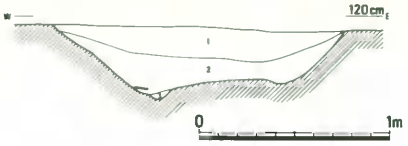
溝34（第82・100図）

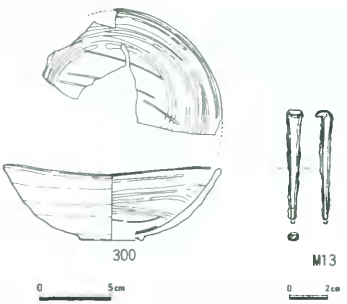
304ｕ区において検出した溝である。南北に直流し、北端は低水路に切られ、南端は溝32の北岸に取りついている。その規模は幅150cm前後、深さ30～40cmを測り、断面形は逆台形を呈し、底が一段落ち込む。溝32に取りつく箇所には杭や杭穴列があり、その周辺は複雑に窪み、水流によって激しく洗われた状況を呈す。

出土遺物には、300の瓦器椀とM13の鉄釘がある。溝32と同様に13世紀前半代の時期が与えられよう。（高田）

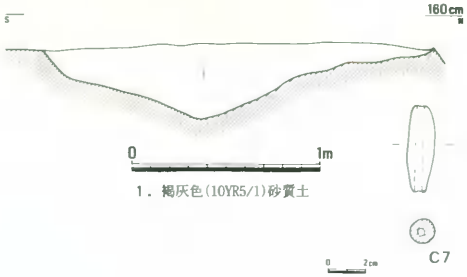
溝35（第82・101図、図版４）

304ｕ～ｘ区において検出した溝で、東端は低水路に切られ、西端は立ち消えとなる。また、溝32とは約２～





第100図　溝34 断面、同出土遺物



第101図　溝35 断面、同出土遺物

６mの距離をおいてほぼ並走する。規模は幅２m、深さ40cmを測り、その断面形はｕ区付近が椀形、ｖ区以東が浅いＶ形で二段に落ち込む。溝32に取りつく溝34等と直交するが埋土に差異はなく、それらとは有機的な関係にあったと考えられる。以上のことから溝の時期は、溝32の存続期間内に収まるものと考えられる。

（高田）

溝36～39（第83・102図、図版４）

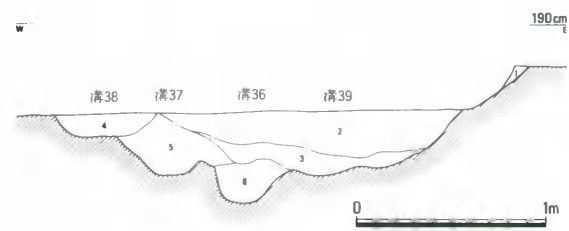
306Ｋ・Ｌ区において南北方向に流走する溝群であり、長さ16mにわたって検出している。「百間川兼基遺跡２」の溝41から44に繋がる。

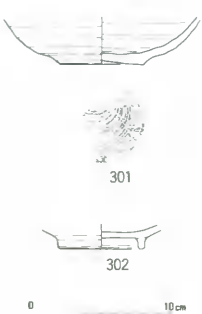
最大で幅が2.5m、深さは0.7mを測るが、３回の改修が認められ、長期間の使用が認められる。最も古いものから溝36（６層）→37（５層）→38（４層）→39（１～３層）の順に新しくなる。

溝36からは平高台で糸切り底の勝間田焼椀301と土師質高台付き椀302が出土しており、埋没の開始が12世紀末から13世紀代であることを示している。

この溝は市道の造成によって上部が削平されており、この西で検出された中世水田との関わりは明確でないが給排水路としての機能は果たしたであろう。また、この溝36の掘削時期は古代にまで遡ることも考えられ、溝の方向性とも相まって条里地割との関連も指摘できる。

（弘田）





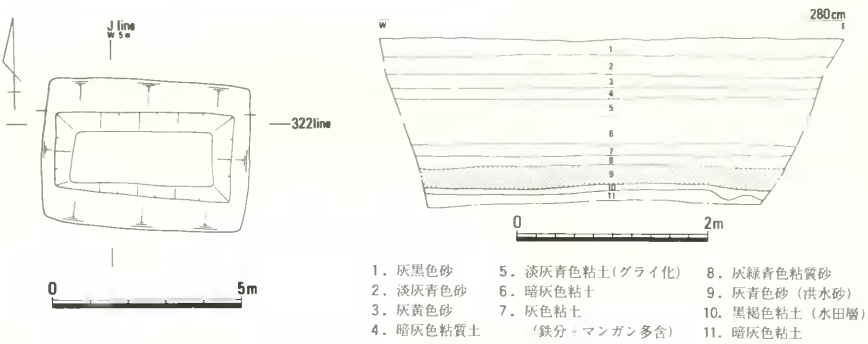
第102図　溝36～39 断面、溝39 出土遺物

4．その他の遺構および包含層等の遺物

(1) 左岸調査区の遺構

321・322Ⅰ区に位置する調査区で検出された水田である。東西5.5m、南北４mの小さな調査区で、９層で百間川遺跡群で一般的に認められる、弥生時代後期の水田を覆う洪水砂が確認されたことから10層は水田層と考えられる。洪水砂層は20cmあまりで、その直下には黒褐色粘土の水田層がみられるが、畦畔は検出されなかった。洪水砂の直上には古墳時代の層があり、さらに上部の５・６層は中世の層と考えられる。

なお、水田層以下については調査区が狭いため、掘り下げを行っていない。（平井）

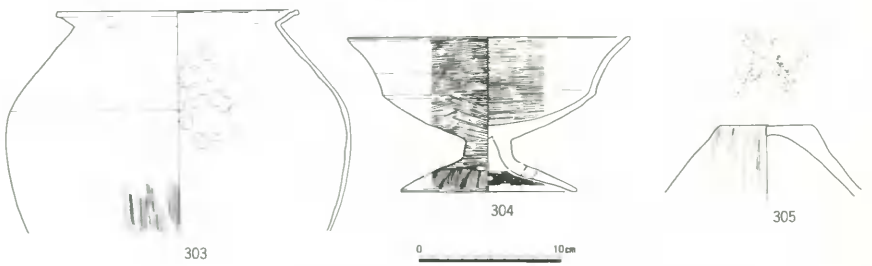


第103図　左岸階段調査区の水田遺構

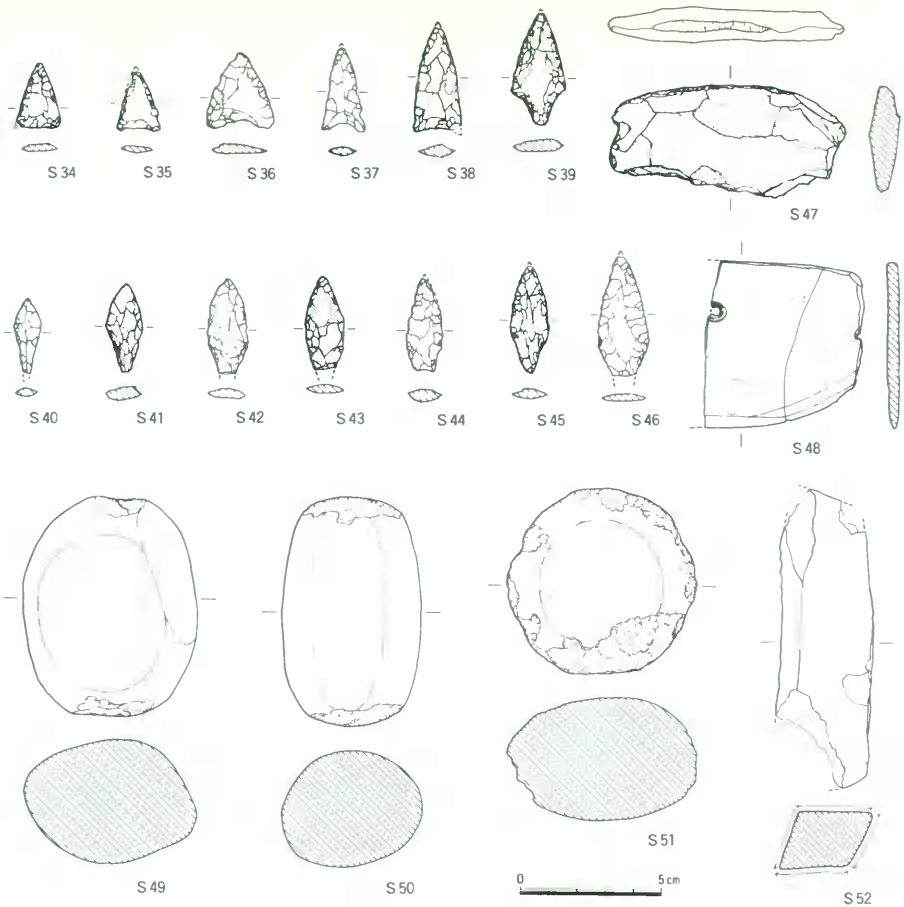
(2) 包含層等の遺物（第104～110図、巻頭図版１、図版13・16）

包含層の遺物を中心に、本文中に掲載できなかった遺構の遺物や新しい時期の遺構に混入したとみられる遺物のうち注目すべきものを取り上げる。

弥生土器303は外面はハケ調整が、内面には指頭押圧がみられる。色調が暗茶褐色を呈し、胎土に角閃石を含むことから讃岐産の甕であろう。百・後・Ⅳに並行すると思われる。304は百・後・Ⅳ古相の高杯で百間川遺跡群における大洪水砂の時期を示すものである。305は水田層下から出土した蓋で、外



第104図　包含層等 出土遺物(1)

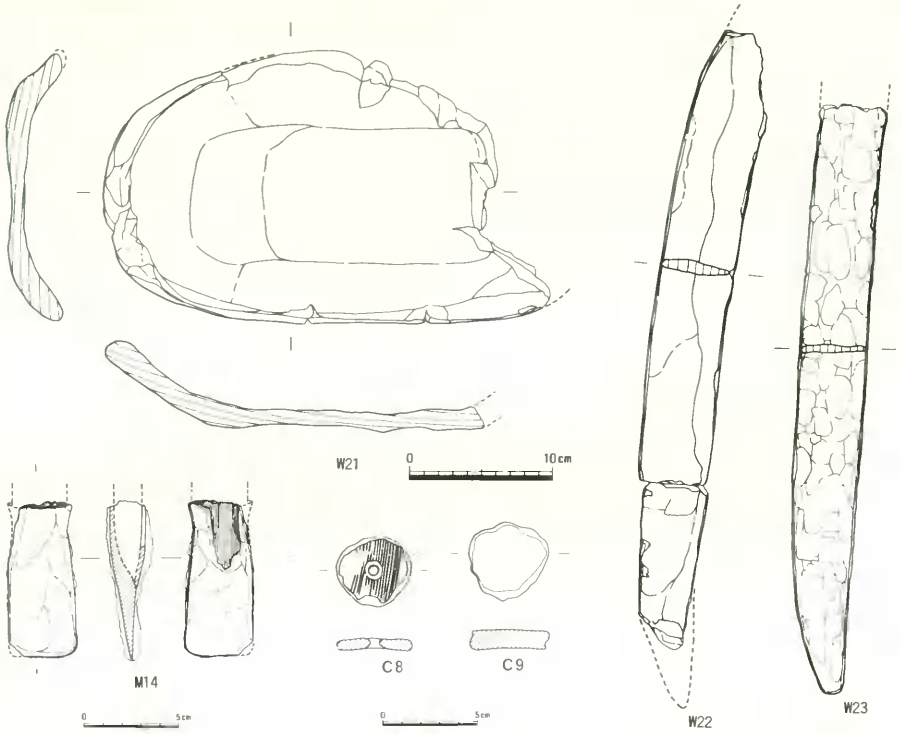


第105図　包含層等 出土遺物(2)

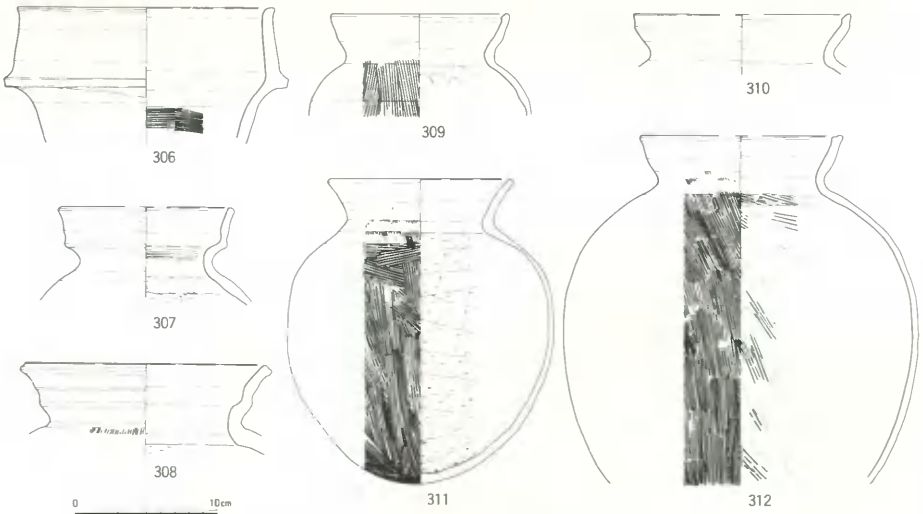
面はミガキ、内面はナデて仕上げる。上面には有軸木葉文をヘラで刻み、前期に遡るとみられる。

石器は弥生包含層以外に中世の水田層や溝からも出土している。石鏃はすべてサヌカイトでS34～S46の各形式がある。石包丁にはサヌカイト製の打製石包丁S47と頁岩製の磨製石包丁S48がある。S49は石錘、S50・51は敲石、S52は砥石である。S49・51の材質は花崗岩である。木製品では、容器W21や、水田層下より出土した又鍬W22・23がある。W23は樹種がアカガシで表面にハツリ痕が残る。M14は中期溝22の上面において、百・中・Ⅲの土器を伴って出土した袋状の鉄斧で、基部に木質を残す。刃部幅3.7cm、現存長8.3cmを測る。県下でも中期に遡るものとしては例が少ない。C８は土製紡錘車、C９は土製円板である。

古墳時代の土器類には、土師器306～326、須恵器327～345がある。微高地上から低位部にかけての斜面堆積層から大量に出土しており、時期は百・古・Ⅲを中心としている。土師器壺は二重口縁の



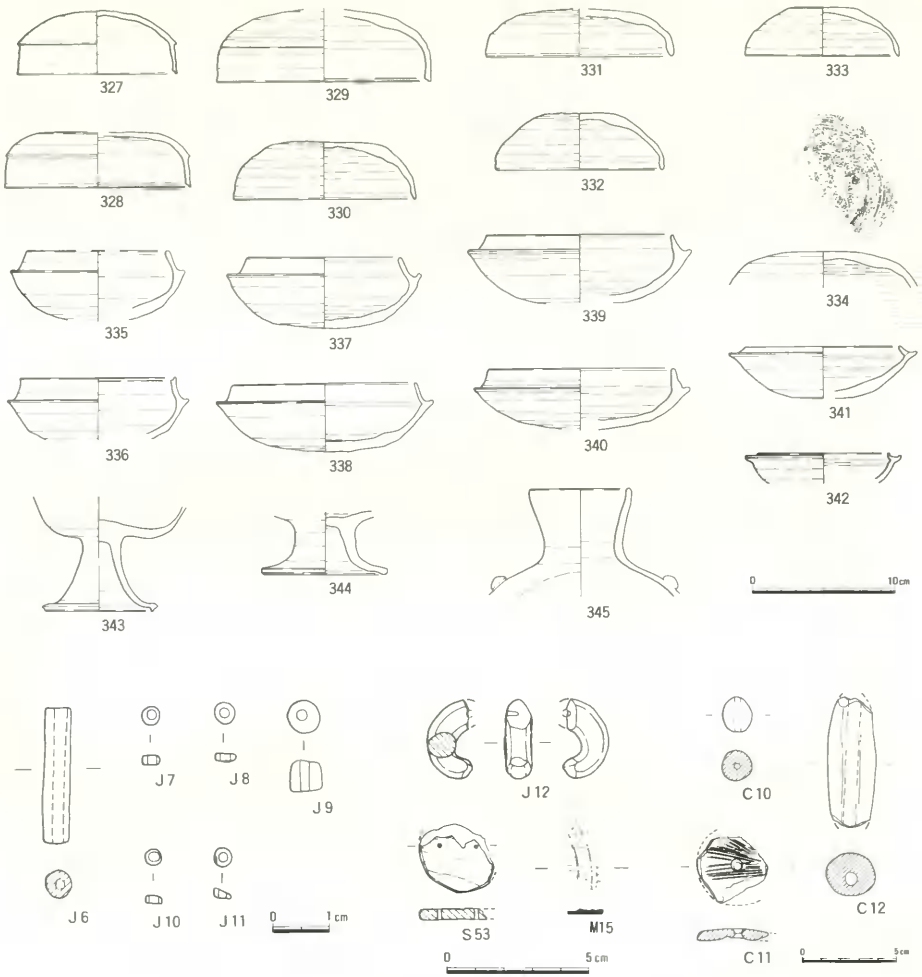
第106図　包含層等 出土遺物(3)



第107図　包含層等 出土遺物(4)

306～308があり、306は内傾しながら立ち上がる口縁部をもち、備後地域からの搬入品である。307・308は二重口縁の系譜を引く壺で百・古・Ⅲでも古相である。甕は端部に内傾する面をもつ309・310・312と丸く納める311がある。内面調整は309～311がケズリであるが、312は内面にユビナデのちハケを施す。高杯には、杯部が内湾気味に立ち上がり、端部あたりで強く外反する315・316・319があり、319は口縁端を上につまみ上げる。一方、杯口縁が外上方に真っ直ぐ延びる313と320は供に脚部に透かし孔をもち、脚端は上方に肥厚するほどにつよくナデる。313・318・319には脚部内面をヘラで削る。また、椀322・323や手捏ね324～326も百・古・Ⅲにおいて典型的な土器である。

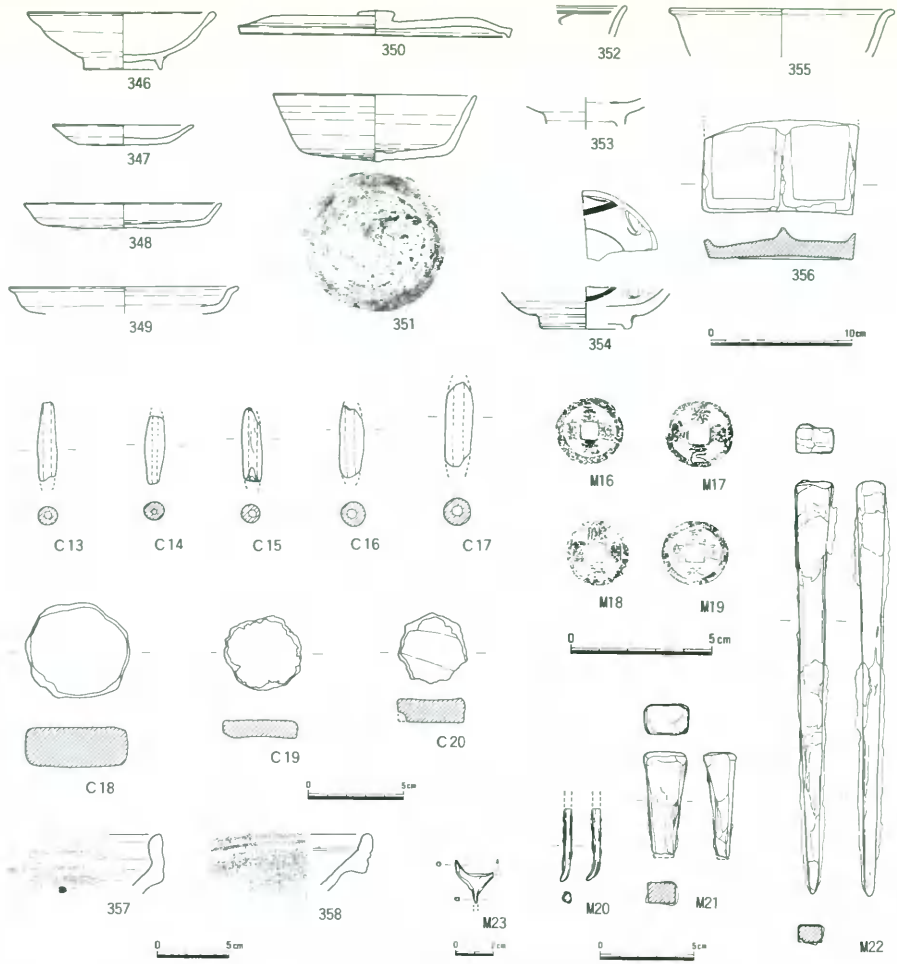
第108図　包含層等 出土遺物(5)



第109図　包含層等 出土遺物(6)

須恵器蓋杯類では６世紀代のものを中心とするが５世紀末葉の327や天井部･底部がヘラ切り後未調整の332・341など７世紀にはいるものがある。なかでも342は７世紀の中葉に下る。334の天井部にはヘラ記号「人」がある。ほかには高杯343や344、提瓶345も７世紀代に含まれる。ただし､遺跡全体では須恵器の出土量はきわめて少ない。装身具の材質は、管玉J６や臼玉J７・８・10・11と勾玉J12が滑石製で、双孔円板S53は緑色片岩製であり、J９のみがガラス製小玉である。M15は305Ｏ区の古墳時代包含層より出土した鏡片である。２条の圏線の内から櫛歯文・珠文・鋸歯文をめぐらす。外区の鋸歯文は大きいことから漢式鏡の可能性もあるが､鋳上がり状態からみると小型の倣製鏡であろう。土製品では練玉C10、表面に鋸歯文を刻む紡錘車C11、土錘C12がある。

古代以降の土器類では、13世紀後半の高台付き土師器椀346と平安時代の皿347～349や須恵器蓋350



第110図　包含層等 出土遺物(7)

・杯351、ならびに青磁碗352～355がある。348は内外面に赤色顔料を塗る。351は底部外面ヘラ切り後未調整である。青磁碗352や354は見込みに内草花文を陰刻する。356は瓦質の硯である。硯面は狭広の２面にわかれ、幅広の面側が片減りする。「百間川兼基遺跡２」の溝71に同様の品がある。土製品のC13～17は土錘、C18～20は土製円板で、中世水田層よりの出土であるが弥生時代の可能性が強い。銭貨は、至和元宝M16や熙寧元宝M17・18と寛永通宝M19がある。鉄製品には釘M20とタガネM21・22がある。

305・6H～K区においてみられた畝状遺構から出土した遺物には、備前焼すり鉢357・358と雁又の鉄鏃M23がある。室町時代末から近世初頭とみられる。　（弘田）

註１　尾上　実他「６．瓦器椀」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　1995年

第3節　まとめ

今回報告するのは百間川兼基遺跡（以下、百間川を略す）の低水路調査区南端部分である。遺跡は微高地と弥生水田の展開する低位部に分かれており、306Ⅰラインに沿って南北方向の微高地端のラインは、今回の調査地で大きく東に回り込んでおり、この辺りが微高地南端であることを示している。また、弥生時代や古墳時代の遺構は微高地西端近くに多く存在しており、その箇所が自然堤防状の高まりを呈していたと考えられる。

遺構密度は高くはないが、検出した遺構は弥生時代中期から近世におよび、とりわけ弥生・古墳時代の遺構と遺物が主体となって注目すべきものがある。

弥生時代中期の遺構には、溝が3条ある。なかでも溝22は幅3mあまりの大溝であり、出土した土器は百・中・Ⅱの古相を示している。この溝は集落の中心からは少し離れており、周囲に同時期の水田も検出されていないが、堰状遺構とそこから分流する溝24の存在から灌漑用の水路とみられる。袋状鉄斧M14はこの溝の上面において中・Ⅲの土器に伴って出土している。また、最古の遺物としては弥生後期水田下の自然河道より出土した前・Ⅱ～Ⅲから中期にかけての土器と、中・Ⅱ～Ⅲの土器に伴う木製品がある。このうち、表面に黒漆を塗る長方板W12は、同様のものが岡山市南方遺跡（註1）にあり、組合わせ式木製短甲とみてよい。現在、弥生時代の短甲資料は5例を数える（註2）が長方形板組合わせ式は南方遺跡例と本例のみである。伴出した土器は中・Ⅱ～Ⅲで、短甲としては最古の例となる。このほかにも、容器・農具・栓・蓋などがみられる。

弥生時代後期の遺構としては微高地上に竪穴住居2軒、土壙10基、溝22条があり、低位部には水田が拡がる。住居は1が百・後・Ⅱ、2は後・Ⅲで新古関係にあり、集落内では孤立した位置にある1世帯とみられ、周辺の土壙や土器溜りはこの住居に伴うと考えてよい。

水田域では沢田遺跡との間に狭長な微高地が介在する事がわかり、そこには上部が洪水砂で埋まる水路を3条検出している。その方向からみて「兼基遺跡1」の畎畝かその下層の溝群（溝10～19）につながるであろう。いずれにせよ灌漑用水路と思われる。また、下層溝20や大畦畔を造る際の耕作痕跡である溝16から出土した遺物からみて百・後・Ⅱの時期には既に開墾が始まり、大洪水に見舞われるまでの間、微高地を浸食するように開田が行われており、溝17～19はその痕跡と考えられた。微高地に近いほど水田層は薄く、区画も小さい傾向がある。またo・p区とz・A区の水田面には稲株痕と足跡が明瞭に残っていた。耕作地と休耕地の違いを示すものであろうか。

古墳時代の遺構には竪穴住居4軒、掘立柱建物7棟（柱列1を含む）、井戸6基（土壙17を含む）、土壙9基と溝5条がある。竪穴住居のうち、住4はカマド状の突出部を備えており、「原尾島遺跡4」住10とともに県下におけるカマドの初現例である。ほかの3軒は、ともに住居の一辺に方形土壙を設ける。また住居4が建物2と井戸2を伴い、住5が建3を住居6が井戸4を伴うように、ここでは各世帯に倉庫と井戸が付随したと考えられる。さらに建物4や5・6（総柱建物）と柱穴列1は北接する「兼基遺跡2」の建物4を併せて建物群を構成していたとみられる。

遺構の時期はすべて百・古・Ⅲであり、それ以前の遺構は兼基遺跡内ではわずかに黒中調査区（左岸用水）に竪穴住居1軒と井戸2基と溝1条があるのみであった。また、須恵器は斜面堆積層などから出土するものの、現段階では須恵器を伴出する遺構は確認していない。なお、竪穴住居は4軒のう

ち３軒までが炭化材が残る火災住居であり、古・Ⅲの時期に一挙に集落を放棄したとも考えられる。

同時期の遺構は本調査区より北に展開し、総数で住居９軒、建物21棟、井戸10基があり、一集落を形成していたとみられる。とりわけ「百間川兼基遺跡１」では12軒の掘立柱建物があり、総柱建物を中心とした倉庫群とみられる。倉庫群の存在が示す集落の性格も重要な検討課題といえる。

遺物には井戸を中心とした土師器の一括資料があり、口縁端が肥厚する布留系の甕を主体とする。その中でも時期幅が考えられるが、川入遺跡大溝上層の時期に先行し、百・古・Ⅲの古相のものが多い。そのほかに、古墳時代中期を代表する遺物である小型倣製鏡片や滑石製勾玉・臼玉・有孔円板がある。

近隣の遺跡に注目すると、原尾島遺跡は兼基遺跡とは逆の動きをとり、百・古・Ⅰ～Ⅱや須恵器を伴う時期の集落が営まれているが百・古・Ⅲの時期は竪穴住居は３軒と乏しく、また、沢田遺跡では古・Ⅰ～Ⅱの後に集落が途絶える。これらの遺跡から兼基遺跡への集落の移動が行われた可能性がある。現在県下で、古・Ⅲに並行する時期の集落は判然としておらず、今後の調査例を待たねばならないが、これら百間川の三遺跡における、集落の動向と背後にある操山丘陵の金蔵山古墳など首長墳の出現と消長や土器の変化との関わりについては今後の検討課題としたい。

古代の遺構には溝が２条ある。溝内には井堰あるいは橋に使われた杭群が数ヶ所にみられ、かつ農具の柄と思われるW19もあることから、農業用水として利用されていたと考えられる。出土遺物は黒色土器や丹塗りの土師器など、平安時代全般に及ぶ。また、溝内からは径が１cmの円柱状で長さ12cmの小型の卒塔婆状木製品W18が出土しており、鉄鏃や刀子などと合わせて祭祀に用いられた可能性がある。これらの溝と兼基地内に残る「勅旨田」や「勅旨免田」といった字名は、平安時代の荒地開墾を想起させ、かつ荘園に係わった集落の存在をも想定することができよう。

中世以降では水田と畑やそれに関連する溝が中心であり、それ以外には掘立柱建物１棟、土壙数基があるのみであった。特に調査地の西半部では幅７m、深さ１mの鎌倉時代の大溝が調査区の大半を占める。また、この溝には南北方向に交差する多くの小溝がある。交差部に杭列のあるものもありこれらは給排水用の水路と考えられる。大溝の出土遺物には、和泉型の瓦器や瓦などがあり、河口の港から物資を運搬する運河としての役割を果たしていたと思われるが、14世紀には大量の貝の投棄とともに埋没している。室町時代以降は、旧微高地上に畑地とみられる畝状遺構が拡がるが、大半が水田域となる。近世には全域が水田化されている。　（弘田）

註

註１　扇崎　由・安川満「上伊福・南方（済生会）遺跡（南方蓮田調査区１・２）」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』岡山市教育委員会　1996年

註２　熊本県教育委員会文化課「柳町遺跡－遺跡出土木製短甲について」現地説明会資料　1995年

参考文献　正岡睦夫・高畑知功他「百間川兼基１・今谷遺跡１」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』51　1982年

柳瀬昭彦「百間川原尾島遺跡５－第４章　百間川原尾島遺跡のまとめ－」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』106　1996年

平井勝・柳瀬昭彦他「百間川兼基２・今谷遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』114　1996年

平井勝・岡本寛久他「百間川沢田遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84　1993年

二宮治夫・中野雅美他「百間川沢田遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』59　1985年

第４章　百間川今谷遺跡

第１節　遺跡の概要と調査区

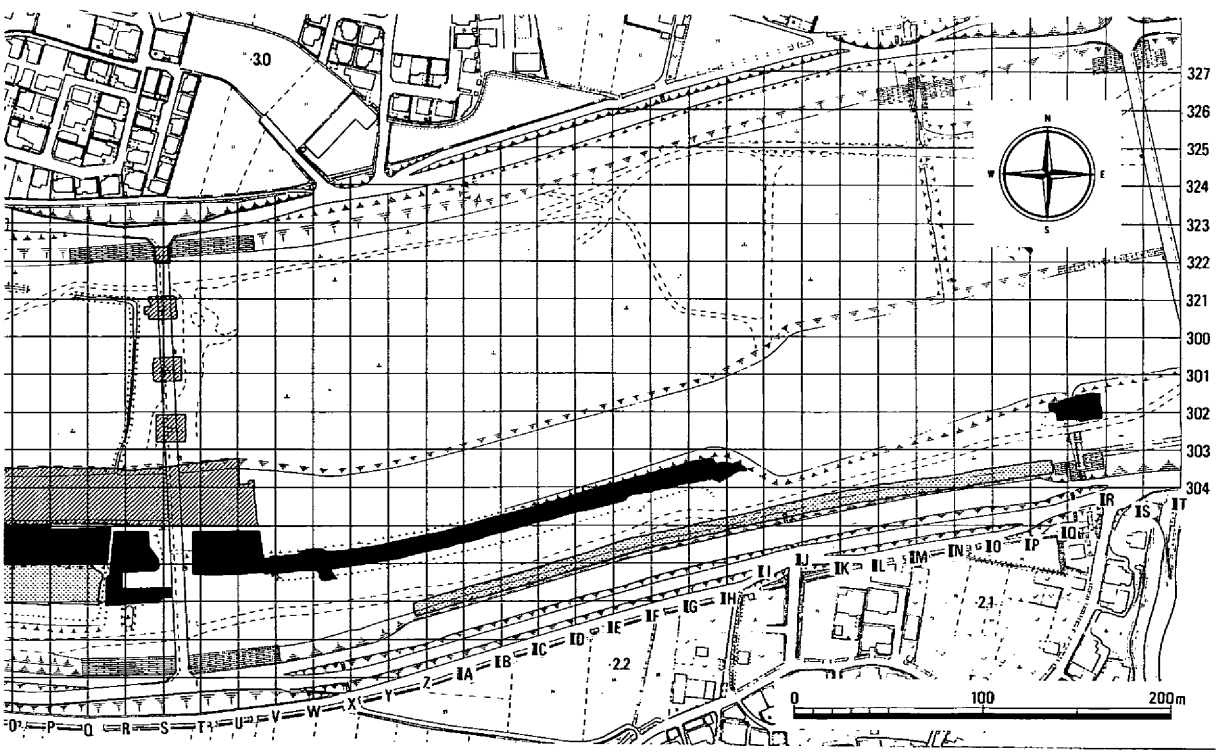
百間川今谷遺跡は岡山市今谷に所在する。しかし、遺跡としては西側に接する百間川兼基遺跡と一体化をなすものであり、百間川兼基・今谷遺跡と称されることが多い。

遺跡の中心をなす微高地は、百間川兼基遺跡と接する今谷橋（Ｓライン）付近にあり、その東側に広がる低位部には水田が広がっている。遺跡の東限については神下橋付近と推定される。

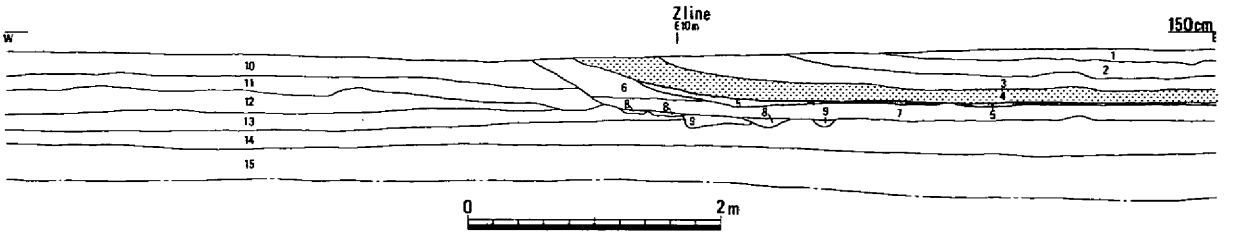
遺跡の時期は、弥生時代から中世までの遺構・遺物が認められるが、弥生時代中期を中心にして古墳時代前半期、そして中世が主体をなす。

本報告書の対象となった調査区は、護岸工事にかかる部分で、堤防の下端に接するほぼ東西に細長い範囲である。調査区の総延長は340m、幅８mあまりであるが、遺構検出面では幅2.5mあまりとなることから、遺構の様相が明確でない点は否めない。

調査区の基本層位は、弥生時代後期の水田が広がる西半部を見ると（第112図）、10～13層の微高地に接して低位部があり、そこには洪水砂（４層）が堆積している。そして、この洪水砂の直下には弥生時代後期の水田層がある。水田層の直下には微高地から続く粘質土（14層）があり、その下には湿地ないし旧河道であったと考えられる粘土と砂の互層がみられる。

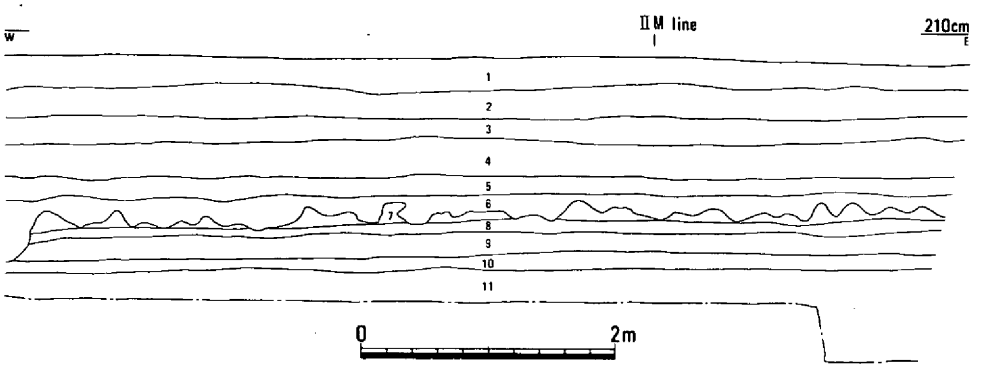


第111図　百間川今谷遺跡の調査区



1．緑灰色(10G6/1)粘質土
2．灰色(5Y4/1)砂質土
3．灰色(10Y6/1)砂
4．灰色(5Y6/1)砂〈洪水砂〉
5．黄灰色(2.5Y4/1)粘質土〈弥生後期水田層〉
6．緑灰色(7.5GY6/1)土
7．灰色(5Y5/1)粘土
8．灰色(7.5Y5/1)土
9．灰色(7.5Y4/1)土
10．緑灰色(7.5GY6/1)粘質土
11．暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)土
12．オリーブ灰色(5GY6/1)粘質土
13．緑灰色(7.5GY6/1)粘質土
14．明緑灰色(7.5GY7/1)粘質土
15．黄灰色(2.5Y5/1)粘土と
灰白色(10Y7/1)砂の互層

第112図　Ｙ～ⅡＡ区 断面



1．にぶい黄橙色(10YR7/3)砂(マンガン粒沈着)
2．にぶい黄橙色(10YR6/3)砂
3．緑灰色(7.5GY5/1)砂(鉄分沈着)
4．緑灰色(10GY5/1)粘性砂(下半にオリーブ
灰色 (10Y6/2)の沈着あり(Feか？))
5．緑灰色(10GY5/1)砂と
灰色(5Y4/1)砂が混る
6．灰色(5Y4/1)粘性砂(木質多含)
7．オリーブ灰色(5GY6/1)粘土
8．明オリーブ灰色(2.5GY7/1)粘土
9．灰色(5Y4/1)粘土
10．灰色(5Y4/1)粘土と
灰色(7.5Y4/1)粘土が混る
11．灰色(7.5Y4/1)粘土

第113図　ⅡＬ～ⅡＭ区 断面

東半部の弥生時代後期の水田層が認められない部分では（第113図)、中世包含層（２～４層）の下には古墳時代の包含層（６～８層）が認められる。９層以下には遺物は認められない。なお、遺構検出は９層上面までで終了した。　(平井)

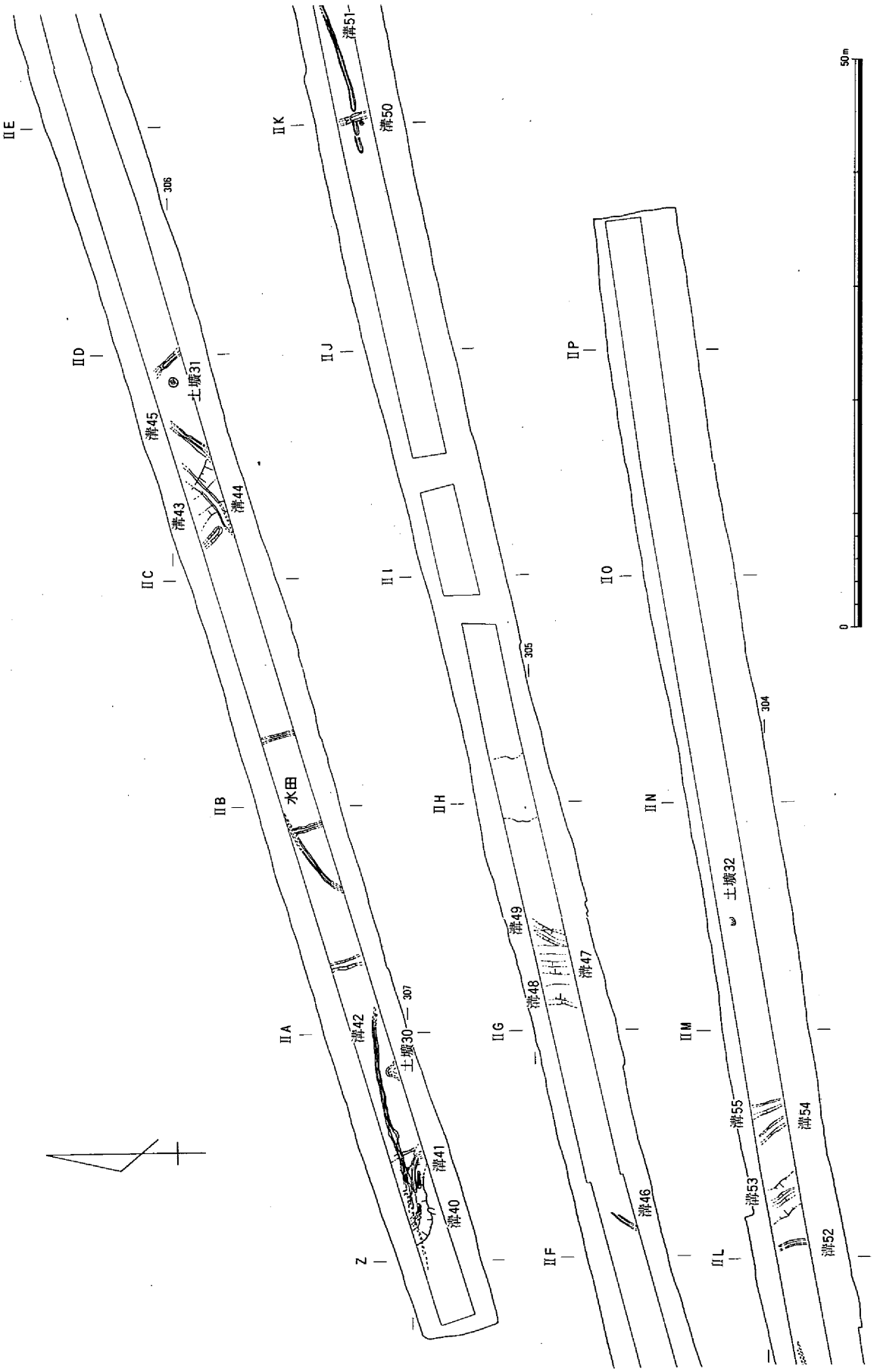
第２節　遺構・遺物の概要

１．古代以前の遺構・遺物

(1) 土　　壙

土壙30（第114・115図）

306Ｚ区の南東端で検出された土壙である。土壙の南側は側溝で削られているが、南壁の断面まで大きく広がりながら続く。規模は南壁断面で幅117cm、深さ10cmあまりを測る。底部は平坦でなく、壁は急傾斜に立ち上がる。時期は遺物がないため明確でなく、古代以前と考えられる。　(平井)



第114図　Y～ⅡP区 古代以前遺構配置（1/500）

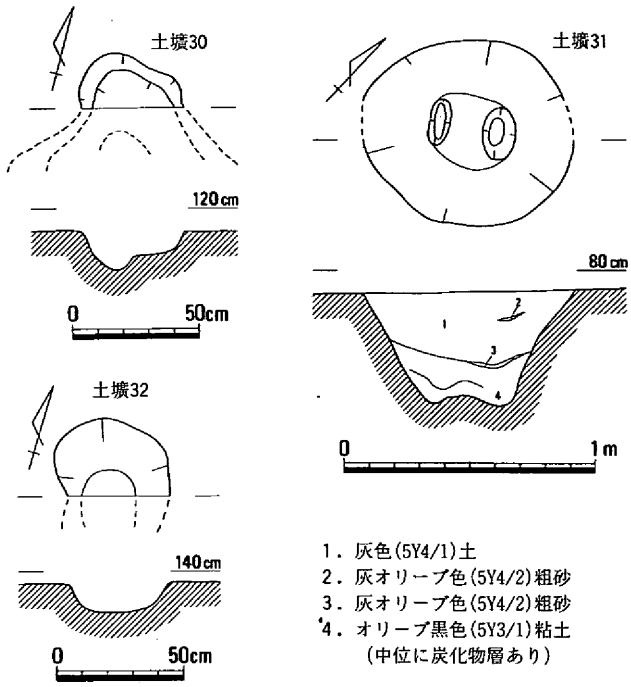
土壙31（第114・115図）

305ⅡＣ区の南東端で検出された土壙である。平面形は楕円形を呈し、規模は長さ85cm、幅74cm、深さ40cmを測る。底部の長軸両端には浅い凹みがみられる。壁は急傾斜で立ち上がる。埋土は二層に大別され、下層には薄い炭化物層が広がっていた。時期は弥生時代と考えられる。　（平井）

土壙32（第114・115図）

303ⅡＭ区の南寄りで検出された土壙である。土壙の北側は側溝で削られているが、北壁の断面まで続く。平面形は楕円形と推定され、規模は南北90cm、東西80cm、深さ12cmを測る。

時期は古代以前と考えられる。（平井）



第115図　土壙30～32

(2)　溝

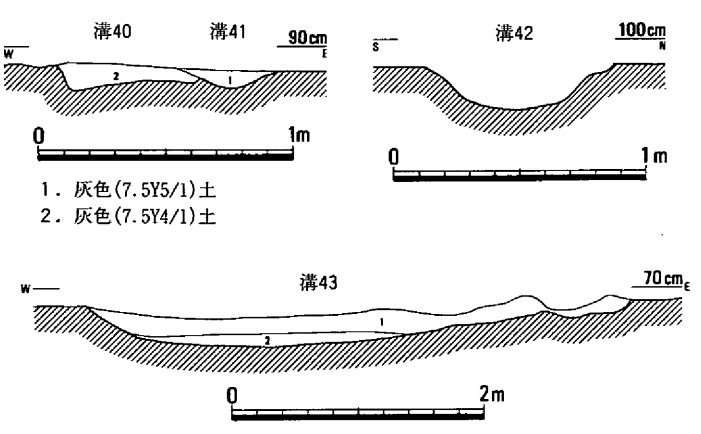
溝40・41（第114・116図）

306Ｚ区の南端で検出された溝である。溝40は溝41を切って北西から南東方向へ流走するが、北東方向へは３ｍで途切れる。規模は幅65cm前後、深さ６cmを測る。

溝41はほぼ南北に流走する溝で、規模は幅160cm、深さ８cm前後を測る。遺構の時期は、弥生土器も少量含むが、古墳時代前半期の土師器を含むことから、古墳時代と推定される。　（平井）

溝42（第114・116図）

306Ｚ・ⅡＡの南端で検出された溝である。溝はほぼ東西に流走し、規模は幅20cm前後、深さ20cm前後を測る。断面はＵ字形を呈する。溝の途中にはコブ状に広がる場所があるが、特別な施設は見当たらない。遺物は弥生土器や古墳時代前半期土師器を含むことから、遺構の時期は古墳時代と考えられる。　（平井）



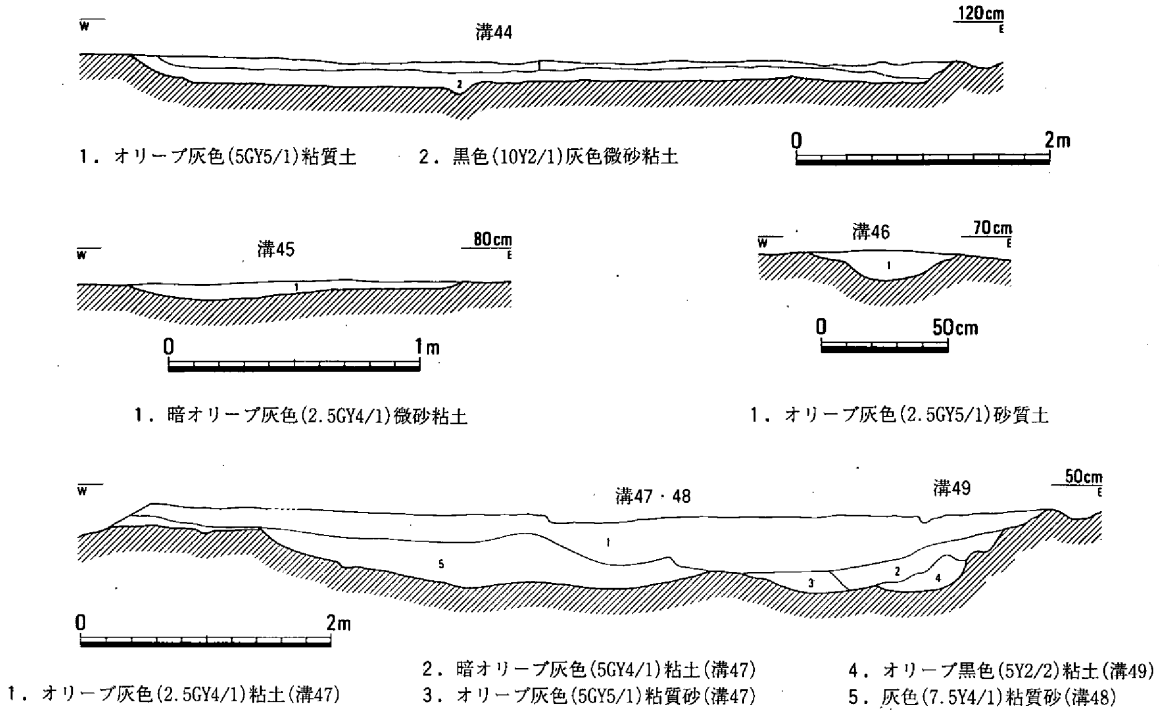
第116図　溝40～43 断面

溝43（第114・116図）

306ⅡＣ区で検出された溝で、ほぼ南北に流走する。幅は340cm前後と広いが、深さは40cm前後と浅く、緩やかに立ち上がる溝である。溝の時期は古代以前と考えられる。　（平井）

溝44・45（第114・117図、図版５）

306ⅡＣで検出された溝で、２条が接しながら北東から南西方向に流走する。溝44は溝45の西側に接する幅広い溝で、規模は幅210cm前後、深さ６cm



第117図　溝44～49 断面

前後を測る。底はほぼ平坦で、両壁は緩やかに立ち上がる。溝45は溝44の東側に接し、幅40cm前後、深さ５cm前後を測る。

溝の時期は、検出面から古代以前であるが、溝45は古墳時代前半期の可能性が高い。　（平井）

溝46（第114・117図）

305ⅡＦ区で検出された溝で、北東から南西方向に流走する。溝は北東部を溝57で切られ、南西部の調査区外へ延びる。規模は幅30cm、深さ４cm前後を測る。底部はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立ち上がる。溝の時期は明確でないが、古代以前と考えられる。　（平井）

溝47・48・49（第114・117図）

305ⅡＧ区で検出された溝で、３条が重複して南北方向に流走する。溝49は溝47・48と流走する方向が少し異なり、北側は北東方向へ向く。南側は溝47・48に切られ、底部のみが残存している（４層）。

溝47・48は底部の中央が土手状になっていることから２条の溝を想定したが、土層を見る限り、明確に２条の溝が切り合っている証拠は得られない。溝の時期は検出面から古代以前か。　（平井）

溝50・51（第114・118図、図版５）

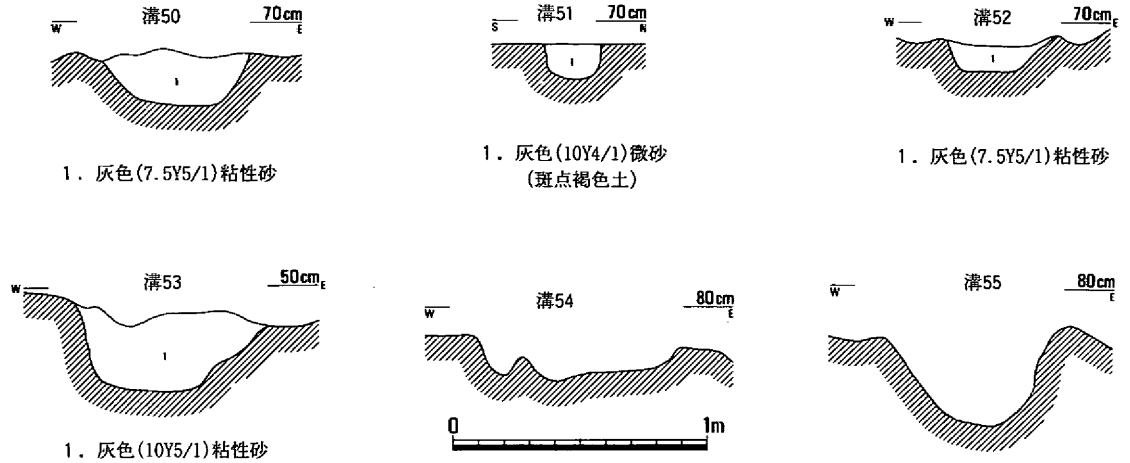
どちらもおもに304ⅡＫ区で検出された溝で、溝50はほぼ東西方向の溝51を切って、ほぼ南北方向に流走する。規模は幅60cm前後、深さ10cm前後を測る。底部はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立ち上がる。

溝51は西端近くを溝50によって切られている。規模は幅30cm前後、深さ15cm前後を測る。

溝の時期は、どちらも明確でないが、検出面や埋土から古代以前と考えてよい。　（平井）

溝52～55（第114・118図）

303・304ⅡＬ区で検出された溝である。溝52はほぼ南北に流走し、幅40cm、深さ４cm前後を測る。溝53・54は北西から南東方向に流走し、前者は幅約２m、深さ60cm前後、後者は幅約80cm、深さは約30cmを測る。溝55は南北方向に流走し、規模は溝54と大差はない。



第118図　溝50～55 断面

それぞれの溝の時期は、検出面から古墳時代と考えられる。（平井）

(3)　水　　田（第114図、図版５）

本調査区のほとんどは低位部であるが、西端部で一部微高地が検出された。この微高地に接する東側には10～15cmあまりの洪水砂が堆積し、その直下に厚さ５cm前後の水田層が認められた。この洪水砂は、百間川遺跡群で一般的に認められる水田を覆う洪水砂と同一のもので、水田の時期も弥生時代後期とみてよい。

水田の広がりは、305ⅡＥ区まで水田層が確認されることからこの付近までは確実に水田域といえる。しかし、洪水砂はさらに東側へも広がっており、その直下には水田層に類似した土であるが、上面の凹凸が著しい土層が認められる。この土層は水田化される以前の状態であるのか、あるいは洪水砂に覆われた年に休耕していたためこうした状態になったものかは明らかにし得ないが、水田に隣接した地域であり、今後注意を要する。

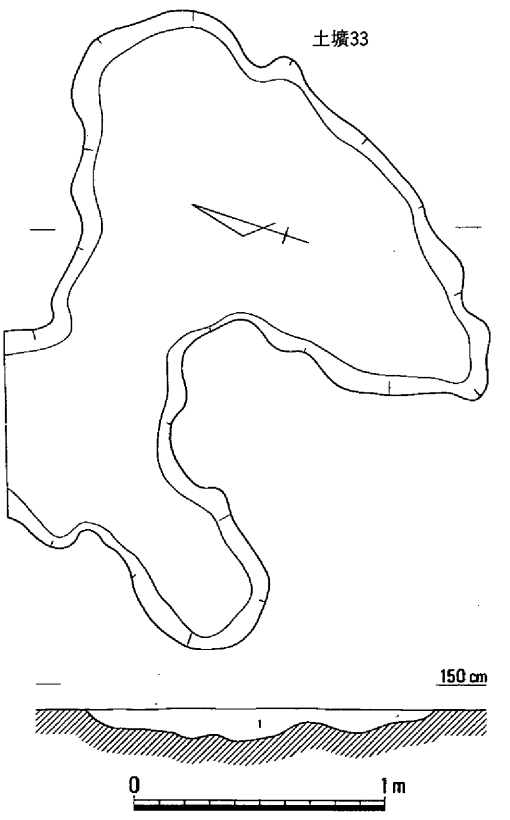
さて、水田は微高地から約40cmあまり低い場所にあり、水田面の６ヵ所に畦畔が認められた。しかし、調査区が狭いため区画の全容は明らかでない。（平井）

２．中世以降の遺構・遺物

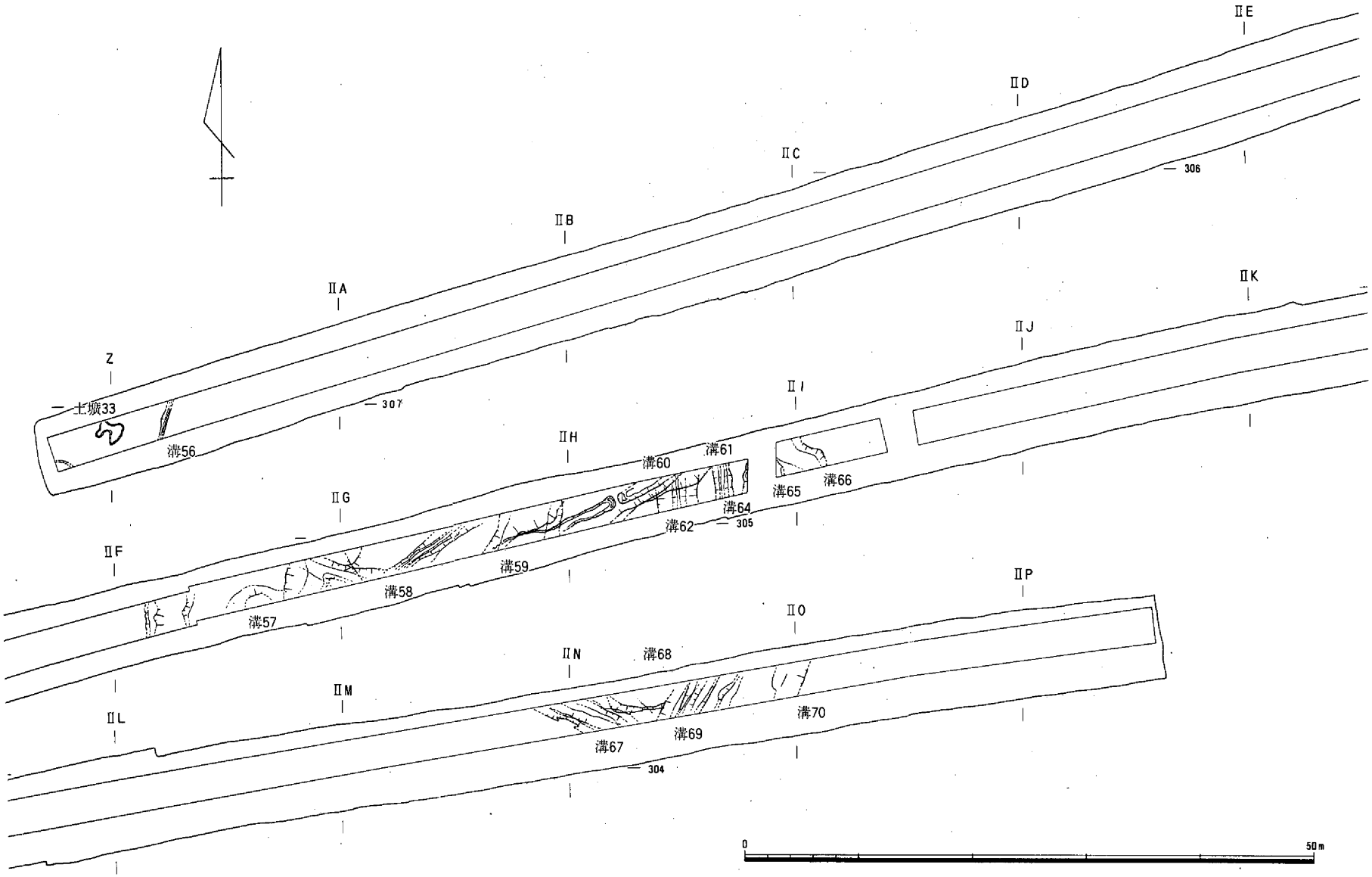
(1)　土　壙

土壙33（第119・120図）

307Ｙ・Ｚ区で検出された土壙である。平面形は、北側が一部側溝によって削られているため明確でない



第119図　土壙33



第120図　Y～ⅡP区 中世以降遺構配置（1/500）

が、アメーバー状の不定形なものである。底部は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。

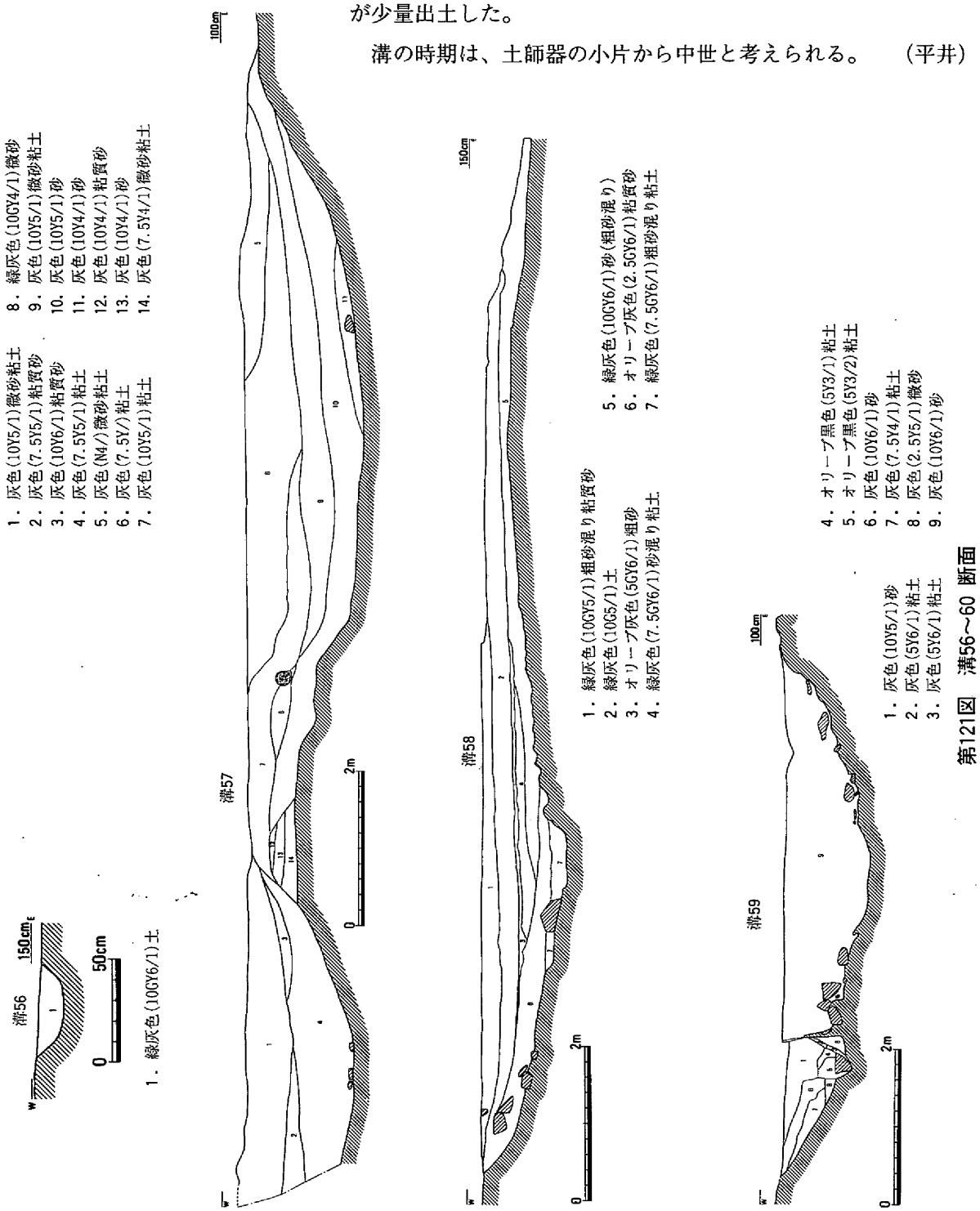
土壙の時期は埋土から中世と考えられる。　（平井）

(2)　溝

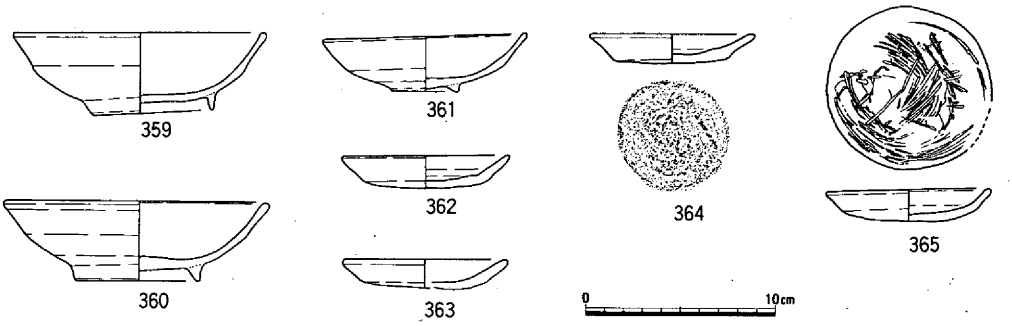
溝56（第120・121図）

306・307Ｚ区で検出された溝で、北東から南西方向に流走する。規模は幅45cm、深さ15cm前後を測る。溝の底部は平坦で、壁は急傾斜で立ち上がる。遺物は土師器が少量出土した。

溝の時期は、土師器の小片から中世と考えられる。　（平井）



第121図　溝56～60 断面



第122図　溝57 出土遺物

溝57（第120～122図、図版12）

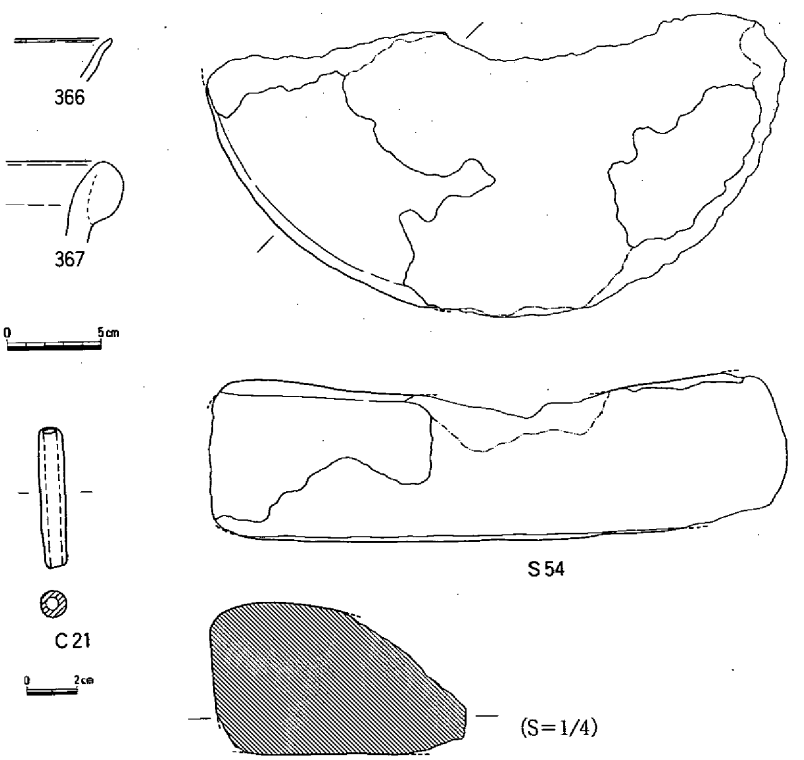
305ⅡＦ・Ｚ区で検出された溝である。調査範囲が狭いため流路の方向を明確にし得ないが、大きく蛇行しながらほぼ東西方向に流れる可能性が強い。溝の底は中央部が最も深く、壁の下端に向って徐々に高くなる。壁は緩やかに立ち上がる。

溝内には20～30cm大の礫が比較的多く認められた。遺物は土師器、須恵器、瓦器などが出土した。土器の時期は13～14世紀初め頃までと考えられる。（平井）

溝58（第120・121・123図、図版16）

305ⅡＦ・Ｇ区で検出された溝である。調査範囲が狭いため明確でないが、溝57の続きとも考えられ、蛇行しながらほぼ東西方向に流走するのではなかろうか。溝内には20～30cm大の礫が比較的多く認められた。

遺物は備前焼、土師器、須恵器などの小片とともに石臼や土錘などが出土した。時期は室町時代と考えられる。（平井）



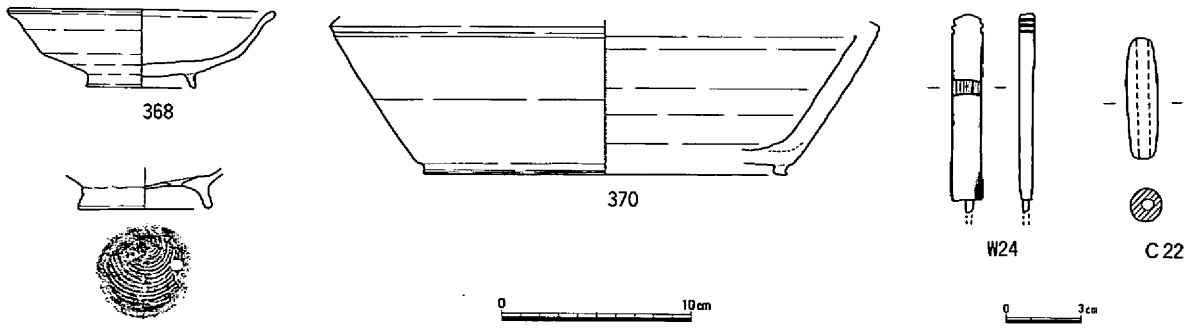
第123図　溝58 出土遺物

溝59・60（第121・124図、図版５・16）

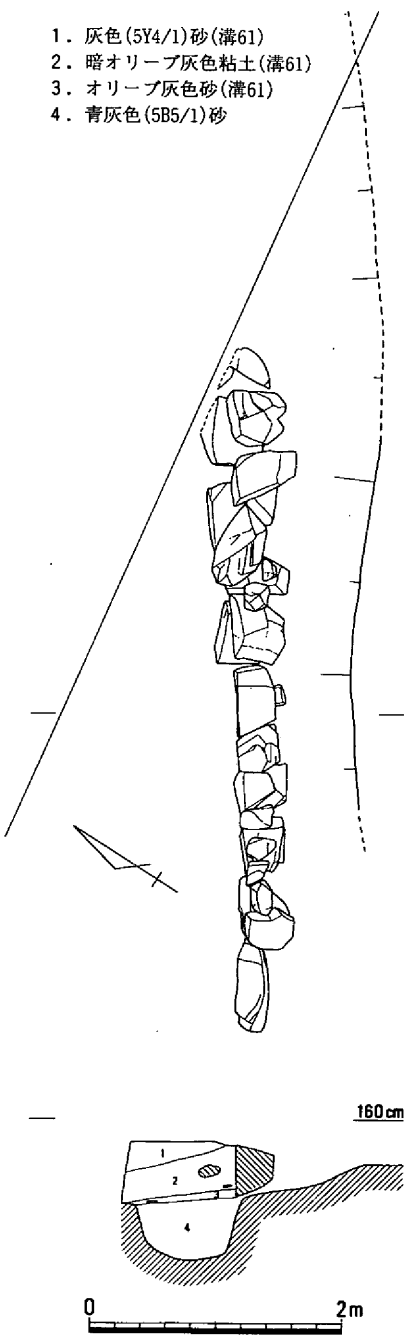
304・305ⅡＧ・Ｈ区で検出された溝である。

溝59はほぼ南北方向に流走する溝で、南端は東西方向に流走する溝60が重複する。規模は幅5､5ｍ、深さ50cm前後を測る。溝内には30cm前後の礫が多量に認められたが、東岸の壁上部に貼りついた礫の下には小枝が多数流走方向に向けて敷かれていた。遺物は土師器、須恵器、瓦器などが出土した。時期は13～14世紀初め頃と考えられる。

溝60は北東から南西方向に



第124図　溝59 出土遺物



第125図　溝61

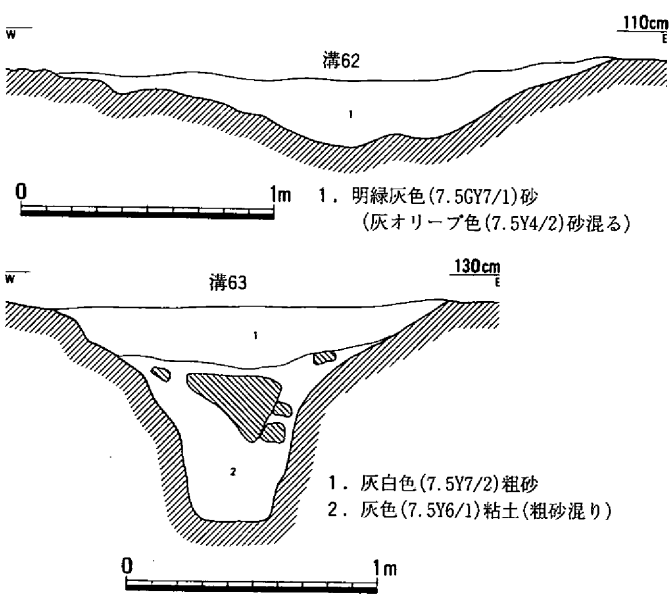
流走する溝で、途中で一端途切れる。溝内には20cm大の礫が集中している場所が認められた。遺物は土師器などがわずかに出土した。溝の時期は中世であるが、溝59が埋没した後に掘られている。　（平井）

溝61（第120・125図、図版５）

304ⅡＨ区で検出された溝で、北東から南西方向に流走する。溝の下場には列石があり、場所によっては２段に積まれていた。用いられた石は50～60cm大である。なお列石の北側にそって溝60が流走している。時期は中世以降で溝60より新。　（平井）

溝62・63（第120・126図）

304ⅡＨ区で検出された溝で、２条ともほぼ南北方向に流走する。溝62は北端を溝61に削られている。幅3.5m、深さ40cm前後を測る。溝の底部は平坦でなく、壁は緩やかに立ち上がる。溝63は溝下半がＵ字形の断面になるのに対し上半は大きく開いて緩やかに立ち上がる。埋土は二層に大別され、下層には60～



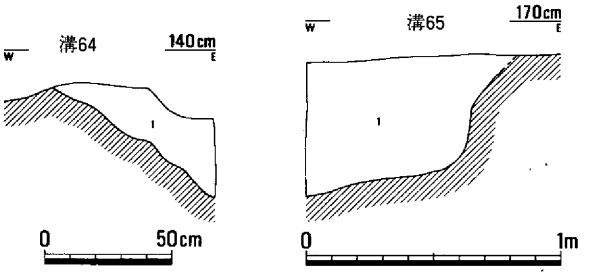
第126図　溝62・63 断面

70cm大の石が多く認められた。

２条の溝の時期は埋土などから中世と考えられる。（平井）

溝64・65（第120・127図）

304ⅡＨ区で検出した溝である。２条の溝の間は調査不可能であったことから、別々の溝として考えていたが、１条の溝の西岸と東岸である可能性も考えられる。時期は埋土などから中世とみてよい。（平井）

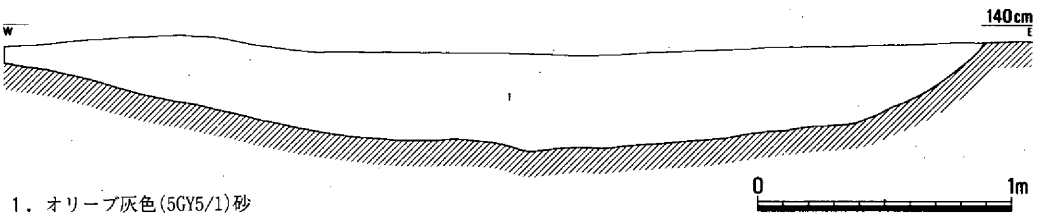


第127図　溝64・65 断面

溝66（第120・128図）

304ⅡＨ・Ｉで検出された溝で、ほぼ北西から南東方向に流走する。規模は幅が３ｍ以上、深さは30cm前後を測る。埋土は単一層で、20cm前後の石を多く含む。

遺物は土師器などがわずかに出土しており、中世に属する。（平井）

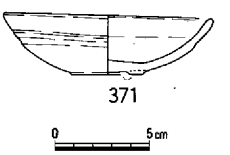


第128図　溝66 断面

溝67・68（第120・129・131図、図版12）

303ⅡＮ区で検出された溝である。溝67は北東から南西方向に流走する溝で、規模は幅190cm、深さ50cm前後を測る。遺物としては土器が少量出土した。371は土師器の椀で、小さな高台がみられる。

溝68は北西から南東方向に流走する溝で規模は幅3.5m以上、深さ30cm前後を測る。溝の時期は中世と考えられる。（平井）



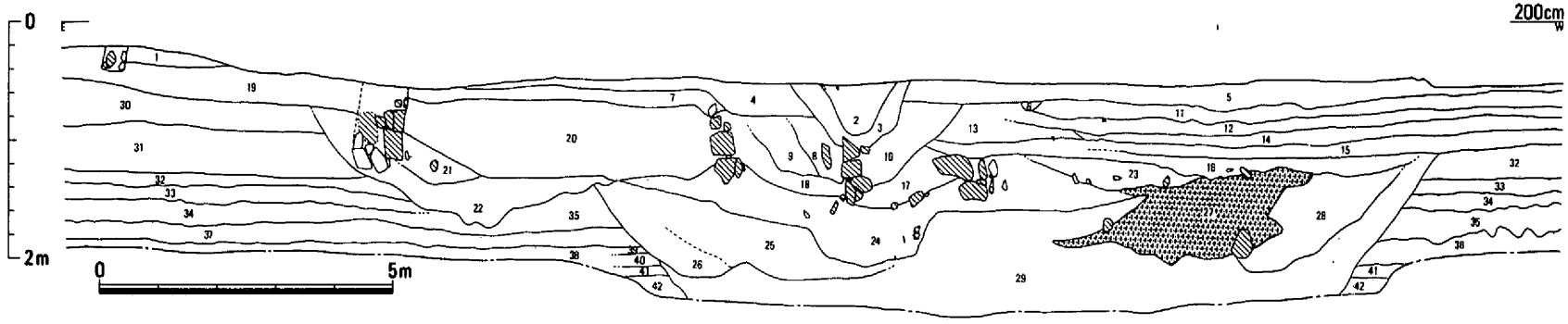
第129図　溝67 出土遺物

溝69（第120・131・132図、図版５）

303ⅡＺ区で検出された溝で、北東から南西方向に流走する。規模は幅4.5m、深さ80cm前後を測る。溝内には底部に接して石列が認められた。東岸寄りの底部は西岸に向ってやや低くなっているが、平坦面が形成されており、その上に多くの石が置かれていた。しかし、その石は一番西側の石列を除けば、整然と置かれた状態ではなく、雑然としている。一番西側は、西岸側に面をそろえるように石を２段ないし３段積み上げており、その上段はほぼ検出面の高さになる。この石列の西側は溝の底部がやや深くなっており、さらに西岸の壁にも石が多く見られた。ただ西岸の石は一部石列をなしているようにもとれる場所もあるが、概して雑然と置かれたような状態であった。用いられている石は小さいもので20cm、大きいもので60cm大である。

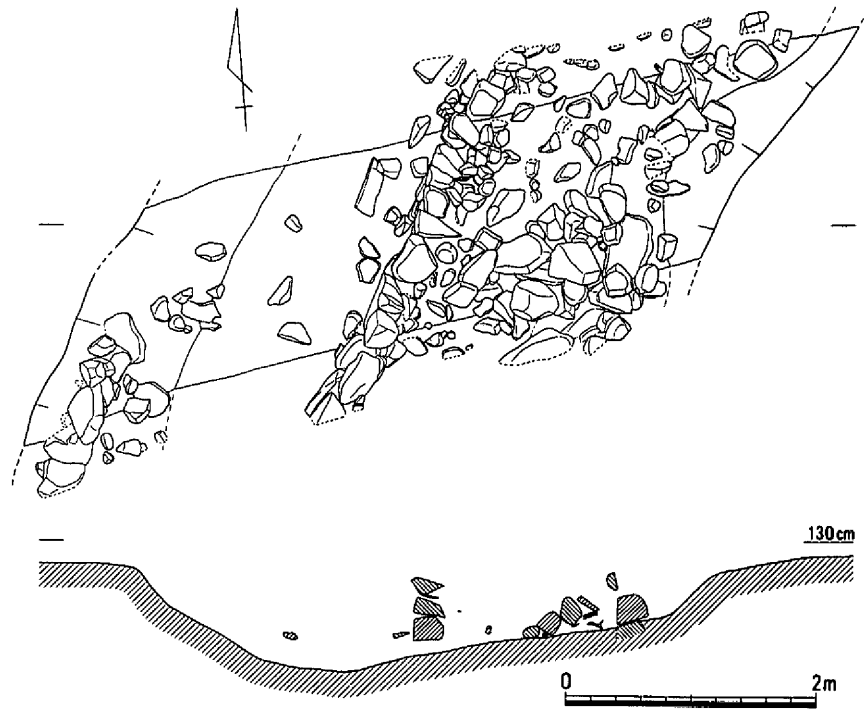
遺物は土師器、須恵器、磁器などが出土している。遺物の時期は13世紀以降から近世に至るものが出土しており、長期間にわたる使用が考えられる。（平井）

溝70（第120・131・132図、図版12・15）

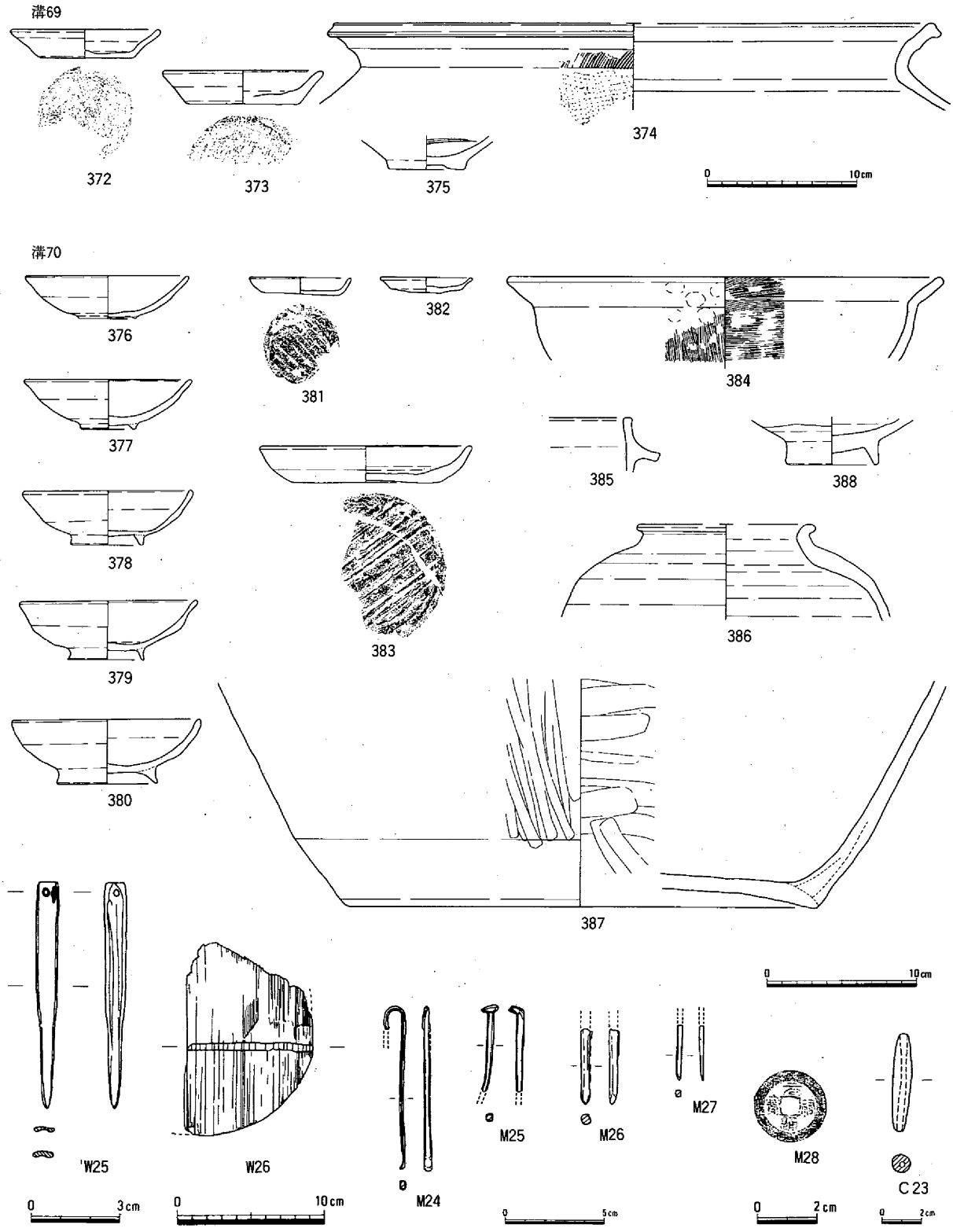


1．黄橙色(10YR6/3)砂(鉄・マンガン含)
2．暗灰黄色(2.5Y5/2)砂
3．灰オリーブ色(5Y6/2)砂
4．にぶい黄橙色(10YR6/3)砂(鉄・マンガン含)
5．オリーブ黄色(5Y6/3)砂
6．にぶい黄色(2.5Y6/3)砂
7．灰黄色(2.5Y6/2)砂(鉄・マンガン含)
8．オリーブ灰色(2.5GY5/1)粘土
9．灰色(5Y5/1)粘性砂
10．灰オリーブ色(5Y2/6)砂(粗砂混る)
11．灰オリーブ色(5Y6/2)砂(マンガン沈着)
12．灰オリーブ色(7.5Y6/2)砂質土
（マンガン沈着）
13．灰黄色(2.5Y6/2)砂
（粗砂混る、マンガン含）
14．緑灰色(7.5GY5/1)粘性砂
15．暗緑灰色(10GY4/1)砂
16．灰色(10Y6/1)粘性砂
17．オリーブ灰色(5GY5/1)粘性砂
18．オリーブ灰色(5GY5/1)粘性砂
19．浅黄色(2.5Y2/4)微砂
20．浅黄色(2.5Y2/4)微砂
21．緑灰色粗砂粘土
22．暗青灰色粗砂(礫混り)
23．緑灰色(7.5GY5/1)砂
24．オリーブ灰色(10Y5/2)砂
（粗砂と粘性砂の互層、貝殻含）
25．暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)砂
26．暗緑灰色(7.5GY4/1)砂
27．暗緑灰色(7.5GY4/1)粘性砂
（貝塚＝ハイガイ、ヘナタリ等が中心）
28．灰色(N5/)砂
29．暗オリーブ灰色(5GY4/)粘性砂
（貝殻痕跡、木片・炭化材含）
30．灰黄色(2.5Y6/2)砂
31．緑灰色(5BG5/1)粘性土
32．緑灰色(10GY5/1)砂
（灰色（5Y4/1）砂混る）
33．灰色(5Y4/1)粘性砂
34．灰色(10Y4/1)粘性砂
35．明オリーブ灰色(2.5GY7/1)粘土
36．灰色(5Y4/1)粘土
37．灰色(5Y4/1)粘土
38．灰色(5Y4/1)粘土
39．灰色(2.5Y5/1)粘土
40．灰白色(2.5Y8/1)粘土
（灰色(N4/)粘土混る）
41．灰色(N4/)粘土
42．暗灰色粘(N3/)土

第130図　溝67～70 断面



第131図　溝69



第132図　溝69・70 出土遺物

303ⅡＮ・Ｏ区で検出された溝で、北西から南東に流走すると考えられる。溝の上部には溝69が重複して流走している。規模は幅15ｍ前後の大溝で、深さは調査区が狭いため、底部まで掘り下げることができなかったが、80cm以上になる。

溝の上部には貝層が幅３ｍ、厚さ約１ｍ堆積していた。貝はほとんどがハイガイで構成されていた。

また溝内には30～50cm大の石が多く認められたが、これらは投げ込まれたような状態であった。

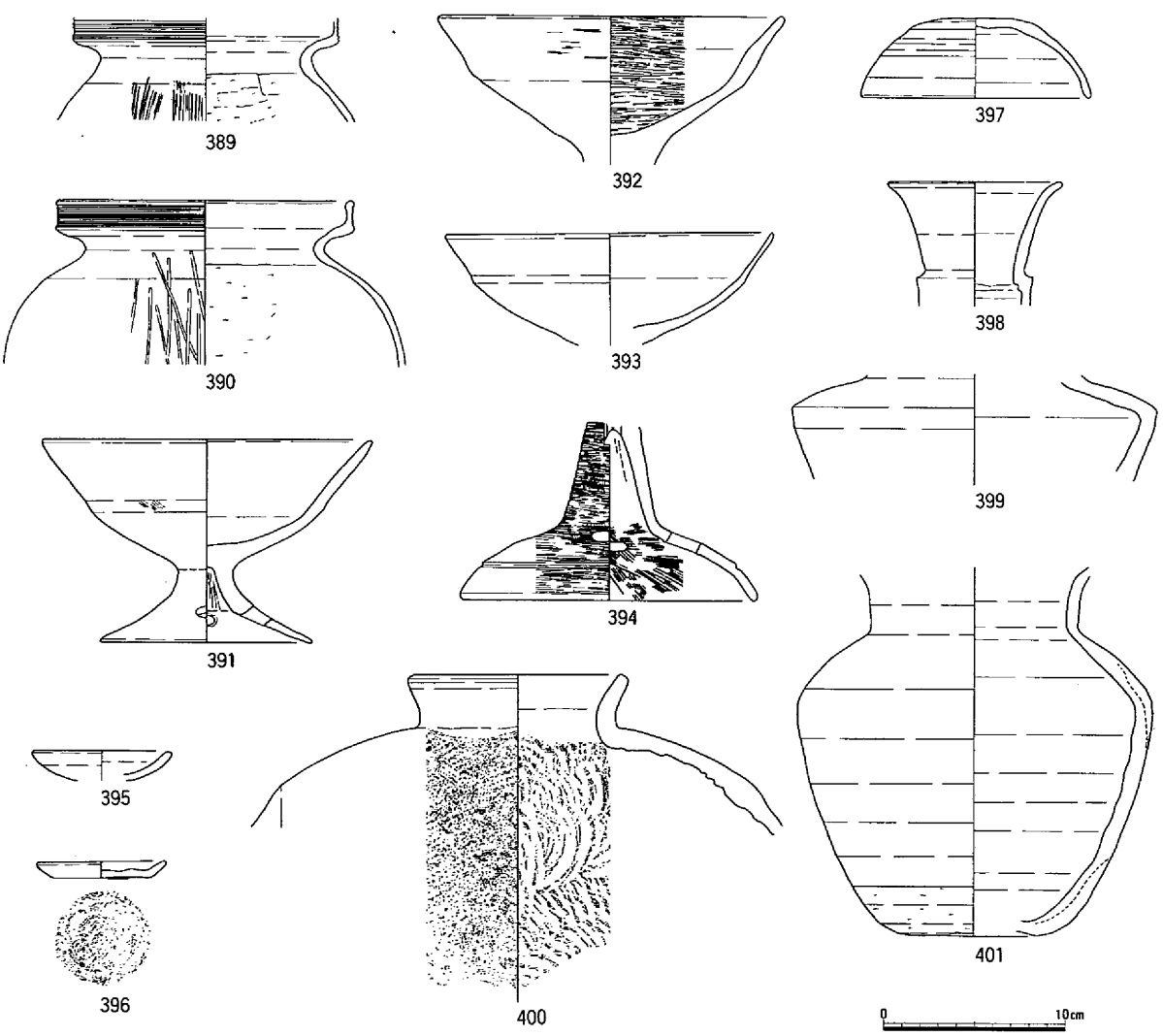
遺物は土器類を中心に、木製品、鉄製品などが出土した。W25は木製の網針と考えられる。土器類から推定される時期は13世紀以降、近世までは下らないが、かなり長期にわたって溝が使用されていたことをうかがわせる。（平井）

３．その他の遺構および包含層等の出土遺物（第133・134図、図版15）

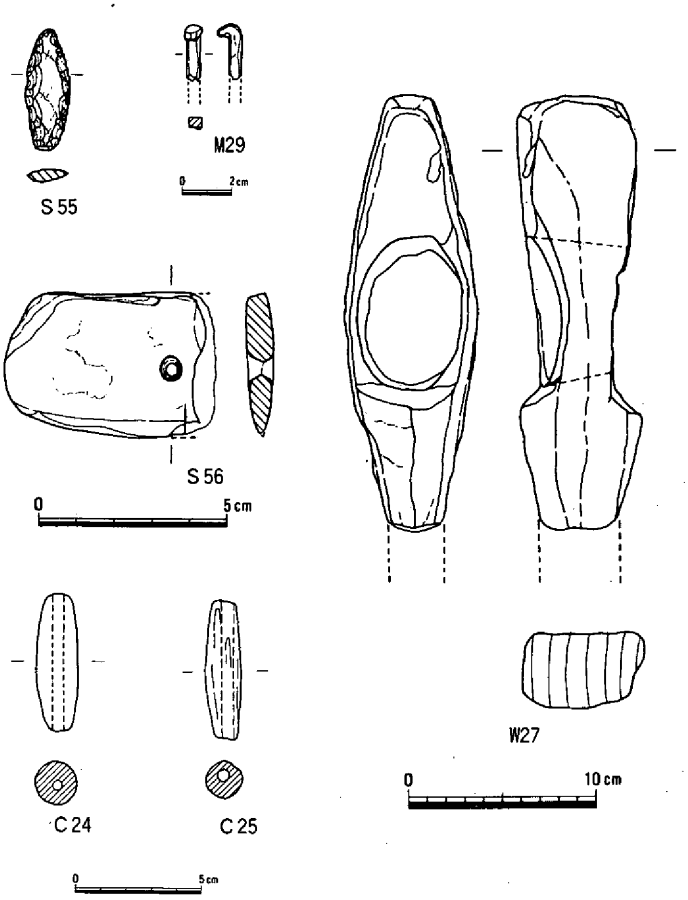
包含層等から出土した遺物には、土器を主体に石器、木器、鉄器などがある。389～394は古墳時代前半期の土師器である。389と390は口縁端部を上方へ立ち上がらせ、その外面に条線がめぐる。胴部外面には粗いヘラミガキがみられ、内面はヘラ削りで仕上げられる。391から393の高杯は、いずれも杯底部から口縁部への立ち上がりの境にわずかに段をもつ。394は杯の脚端近くに一条の沈線をめぐらす。杯部と脚部の接合は杯部に脚部を差し込む方法をとっている。

397は古墳時代後期の須恵器杯蓋である。口径は小さくなり、天井部と体部および口縁部との境界は不明瞭になり全体的に丸みを有する。

398から401は古代の須恵器である。399は長頸壺の胴部である。400は横瓶で、胴部内面は青海波タ



第133図　包含層等 出土遺物(1)



第134図　包含層等 出土遺物(2)

タキで仕上げられる。401は口縁部を欠くが、頸部から胴部は全体的にヨコナデによる丁寧な仕上げである。底部はやや上げ底になると思われる。

395と396は中世の土師器小皿である。395は口縁部と底部の境が明瞭でないが、396は明瞭な底部が形成され、糸切り痕跡がみられる。

石器には石鏃（S55）と磨製石包丁（S56）がある。S56は半分が欠損しているが、長方形を呈するものと考えられ、円孔が１穴残存している。M29は鉄釘である。W27は石斧の柄と思われるが、石斧装着部分以外は欠いている。身を装着する穴は、一方が狭くなっている。弥生時代のものと推定される。

C24・25は土錘である。　（平井）

第３節　ま と め

今谷護岸調査区は右岸側堤防の下端にそって東西約340ｍもの長大な調査区であるが、遺構検出面の幅は３ｍあまりであり、遺構の全体像は明確でない。加えて北側の低水路部分もほとんど調査がなされていないことから、ますます遺跡の全体像は捉えにくい状況である。

本調査区における弥生時代の遺構として最も明確なのは水田である。調査区の西端で一部微高地が確認され、その東側約100ｍあまりに水田が広がる。『百間川兼基遺跡２・百間川今谷遺跡２』（以下兼基・今谷２と略す）大地調査区（註１）がちょうどこの水田部分の北側にあたり、そこでも水田が検出されている。『兼基・今谷２』ではⅡＨラインまで水田が広がっており、今回の成果とも合わせて考えれば、ほぼⅡＨライン付近が水田域の東限になるものと思われる。この東側はさらに水田と同じ土層の広がりが認められるが、畦畔はなく、層の上面に凹凸が著しいことから水田と考えるにはやや問題がある。水田として整備される途中であるのか、水田として利用していたのを途中で放棄したものかは明らかにし得なかったが、今後こうした水田の周辺については意識的に追求していく必要があろう。

古墳時代の遺構も少なく、そのほとんどは溝である。集落の中心は弥生時代と同じくＦからＴライン付近であり、今回報告した調査区はその東側縁辺部にあたる。

古代の遺構としては溝が一条認められる。『兼基・今谷2』の溝70の続きと考えられる。

中世の遺構も多くが溝である。調査範囲が狭いため明確でないが、大溝の一部と推定される遺構がある。これは『兼基・今谷2』の五の坪調査区で検出された大溝の一部と考えられ、そうであれば大溝は若干蛇行しながらほぼ東西に流走していることになる。このような運河状の大溝は米田遺跡でも検出されており、さらに西側にあたる兼基遺跡、あるいは沢田遺跡でも認められる。これらが連続しているものかどうかは不明であるが、時期や規模については類似している。おそらく操山の北側を、河口にあたる米田から遡上する運河が掘削されていたのではないだろうか。　(平井)

註

註1　平井　勝他「百間川兼基遺跡2・百間川今谷遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』114　建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会　1996年

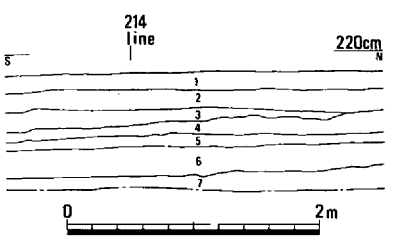
第５章　百間川沢田遺跡

第１節　遺跡の概要と調査区

百間川沢田遺跡は、岡山市沢田の百間川河川敷に拡がる遺跡部分をさす。遺跡の範囲は、調査当初百間川に架かる国道２号線原尾島橋の下流約60ｍ付近から、さらに下流に向かって約200ｍ間に拡がる微高地部分を想定していた。しかし、調査の過程で上流の百間川原尾島遺跡の微高地との間の低位部、および下流の百間川兼基遺跡の微高地との間の低位部が弥生時代後期水田でつながり、遺跡が連続することが判明したため、河川敷内の隣接する字境までが遺跡の範囲となっている。

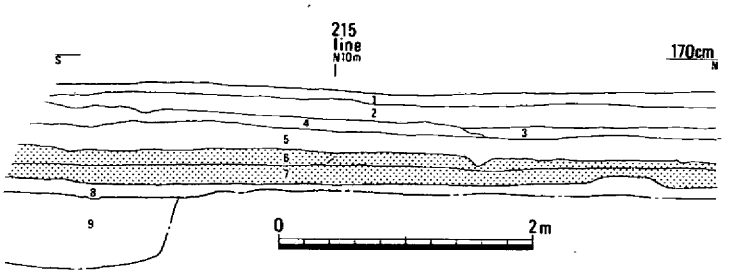
遺跡は大きく３つの微高地とその周辺の低位部とで構成され、微高地上はおもに縄文時代後期から中世までの遺構が検出されている。また、微高地縁辺とそれに続く低位部には弥生時代前期から中期水田も確認され、それらの上部や旧河道を含む広い範囲に後期水田が拡がっている。

本報告書掲載の調査区は、おもに百間川沢田遺跡の南東隅にあたる低水路右岸法線沿いの幅17ｍ前後、長さ約280ｍの範囲が対象である。この調査区の北側は当初遺跡範囲外とされた地点であり、そのためすでに一部低水路の工事掘削が及んでいる。調査区の約半分は微高地で、あとの部分は旧河道および低位部で形成されており、とくに微高地から旧河道にかかる213・214ⅢＢ・Ｃ区では縄文時代晩期から弥生時代中期中葉までの間に河道がほぼ埋まり、河道の上部を含む微高地縁辺に弥生時代後期後半になって広く水田が展開し、後期末の洪水砂で埋没後古墳時代の柵列等、さらに土砂の堆積ののち中世の大溝等が占地するなど、各時代・時期ごとの地形の変化と土地利用の変遷が良好に捉えられている。また、微高地の弥生時代前期の基盤層の下部については、百間川原尾島遺跡の一部および百間川沢田遺跡の一部で縄文時代晩期突帯文土器の散布、その下部で縄文後期土器の散布と焼土の存在なども知られつつある。当調査区においてもこれらの時期の３ヵ所の生活痕跡が確認されたことにより、沖積平野への縄文人の進出がより普遍的であったことがうかがわれる。　（柳瀬）



1．マンガン粒
2．灰黄色(2.5Y7/2)弱粘質微砂土
3．にぶい黄褐色(10YR5/4)微砂粘質土
4．褐灰色(10YR6/1)・黄褐色(10YR5/6)の混じる微砂粘質土
5．にぶい黄褐色(10YR5/4)に明黄褐色が入る微砂粘質土
6．オリーブ灰色(10Y4/2)微砂粘質土
7．灰オリーブ色(5Y4/2)砂質土

第135図　213・４ⅡＹ区 断面



1．緑灰色(10G5/1)粘質土
2．灰色(5Y5/1)弱粘質土
3．暗紫灰色(5RP3/1)粘質土
4．紫灰色(5P5/1)粘質土
5．暗緑灰色(10G3/1)弱粘質土（水多含）
6．灰色(7.5Y5/1)砂質土（洪水砂層）
7．灰色(10Y4/1)弱粘質土（洪水砂層）
8．暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘質土
9．暗緑灰色(10G4/1)弱粘質土

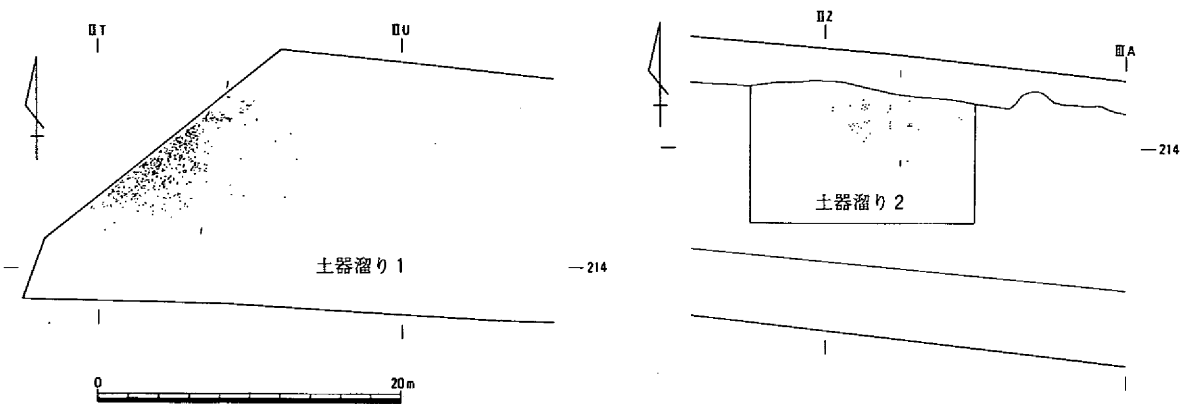
第136図　215ⅢＢ区 断面

第２節　遺構・遺物の概要

１．縄文時代後期の遺構・遺物

この時期の遺構は、調査区の西端の213ⅡＳ・Ｔ区と東へ約120ｍの213・214ⅡＺ区の２ヵ所に認められた。遺構とはいえ、前者は緩斜面の土器散布、後者は微高地形成過程での炭・灰・焼土の分布と少量の土器片の散布であり、土地への掘削（例えば貯蔵穴）あるいは人為的な生活の証拠（例えば焼土面・炉）を確実に捉え得たものではない。しかし、前者は既調査区から続く土器散布の東端を押さえることができた点、後者は後期の時点で中洲状の地点に当時の足跡が認められることが判明した点に意味をもつ。

遺物は、前者が大量の土器片と少量の石器、後者が少量の土器細片の出土をみている。　（柳瀬）

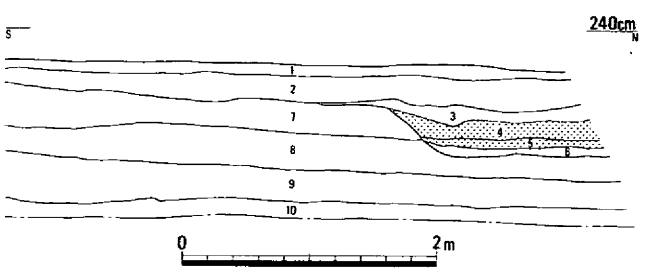


第137図　縄文時代後期 土器分布

(1) 土 器 溜 り

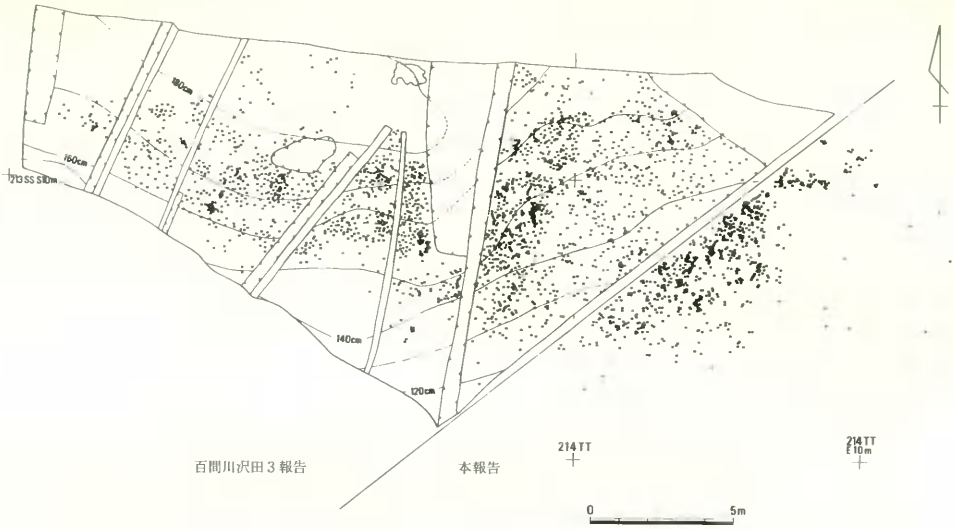
土器溜り１（第137～142図、図版６・10・14）

213ⅡＳ・Ｔ区に縄文後期土器の集中散布を認め、土器溜り１とした。上流側（西側）は「百間川沢田遺跡３」の土器溜りに続く。出土した層位は、弥生時代の基盤層であるにぶい黄色～暗灰黄色の砂質土を50cmほど除去した下層であり、第138図の第９層にあたる。この包含層は厚さ20～30cm、焼土と炭化物を含む青灰色の砂質土の同一層で、分層は明確に認められなかった。



1．灰白色(10YR7/1)砂質土
2．灰黄色(2.5Y7/2)砂質土
3．灰黄褐色(10YR6/2)砂質土
4．灰白色(5Y7/2)砂質土(弥生後期洪水砂)
5．暗オリーブ色(5Y4/3)砂質土(〃)
6．灰オリーブ色(5Y4/2)砂質土(弥生後期水田層)
7．にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土
8．暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土
9．青灰色(5BG6/1)砂質土(縄文後期包含層)
10．暗緑色(10G4/1)弱粘質土

第138図　214ⅡＴ区 断面



第139図　土器溜り１（1／200）

遺物の散布は、第139図のように、西側の既調査区との境付近の南北８ｍ、東西13m程の範囲に拡がり、点描した位置に土器片約690点と石器・石片10数点を検出することができた。特に既調査区との境付近の密度が高く、かなり重複して出土している。土器溜り全体でいえば、土器片の出土レベルは北西から南東方向に向かって徐々に下降しており、北西の最も高い位置で海抜1.5m、南東端で同1.2mを測る。上流側では遺物の散布以外に焼土面や土壙、さらに貝塚等を検出しているが、今回の調査区ではそれらは確認できなかった。出土した遺物のうち、縄文土器61点と石器10点を掲載した。

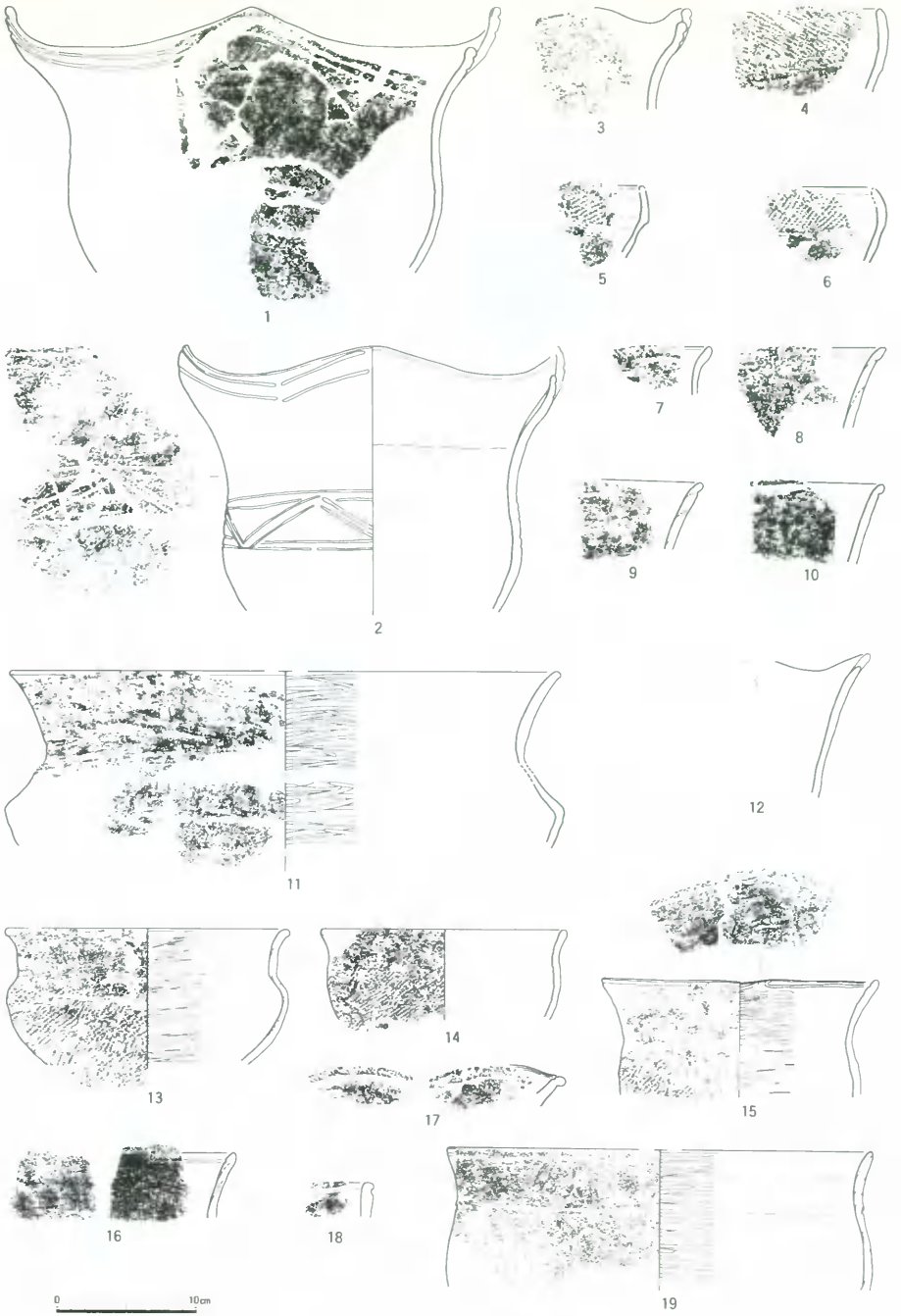
縄文土器には、深鉢形土器、浅鉢形土器、鉢形土器の各種が認められるが、全体に細片が多い。文様では、有紋と無紋の土器に大別できる。

深鉢形土器は、頸部と胴部の境がくびれて口縁部が内湾ぎみに立ち上がる器形（１～６）と胴部と頸部がくびれて、口縁部が大きく開く器形（７～12・16・18・23～30）に分類できる。前者には、口縁部に磨消縄文や縄文地に沈線を横走させているものと口縁部の全面に縄文を施すものがある。後者には、口縁端部をわずかに肥厚させたもの（９・10）や肥厚面に縄文を施すもの（７・８）、端部の内面もしくは外面に沈線を施すもの（16・18）等がある。１～３・12等は波状口縁である。

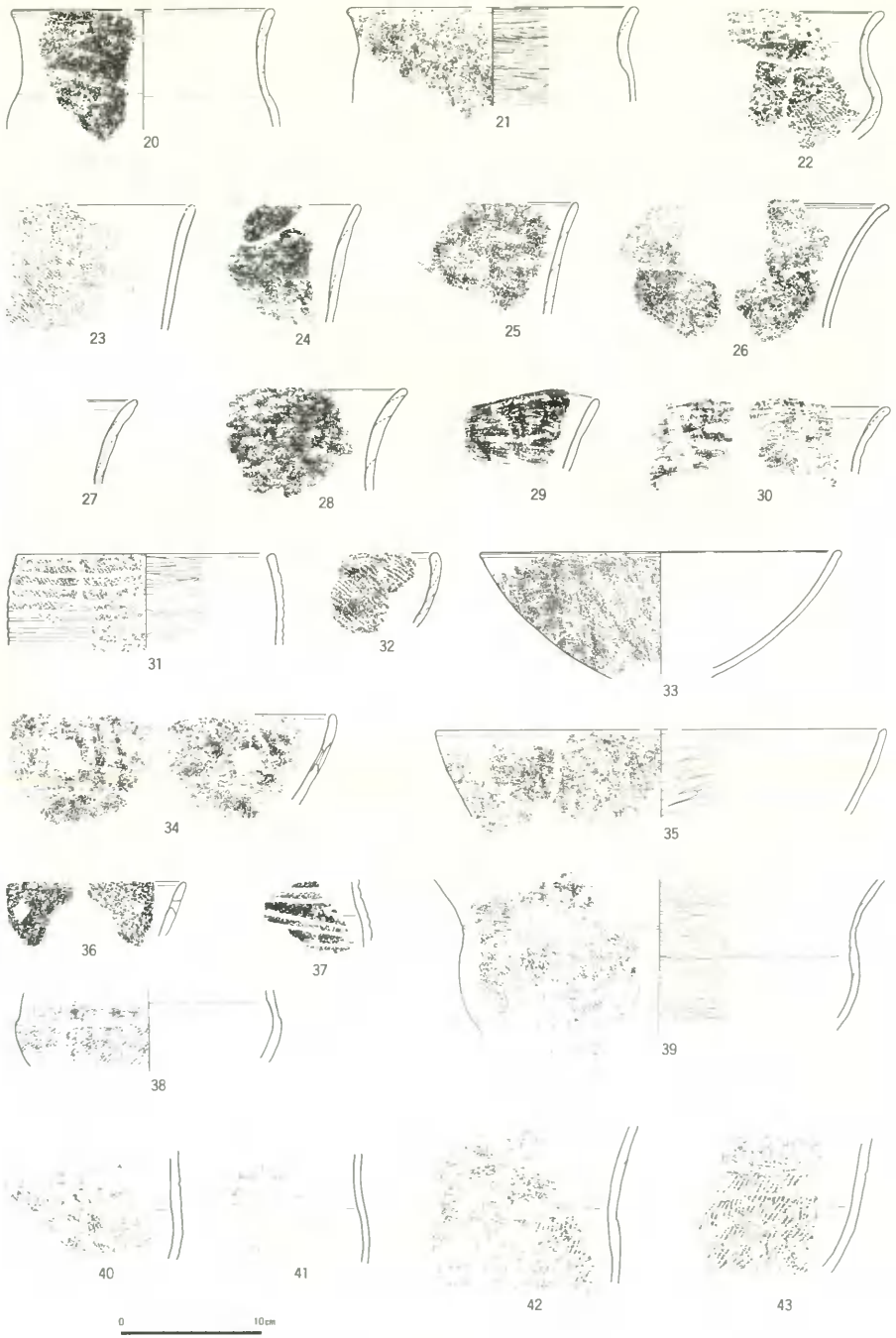
鉢形土器は、浅めの胴部に外反ぎみの口縁がつくもの（13）と短く立ち上がる頸部に外反する口縁部がつく器形（14）とがある。また有紋のものと無紋のものがあり、13・14は胴部に縄文を施し、19は頸部と胴部の境に沈線を施す。

浅鉢形土器は、口縁部が内湾しながら立ち上がるもの（31・32）と底部から緩やかに立ち上がるもの（33～35）とがある。31は外面に横位の沈線を施し、その間を縄文で充填している。32は斜縄文を幅広く施している。33は無紋の口縁部が斜め上方に立ち上がるものである。なお、34・36は口縁部近くに焼成後の補修痕がある。

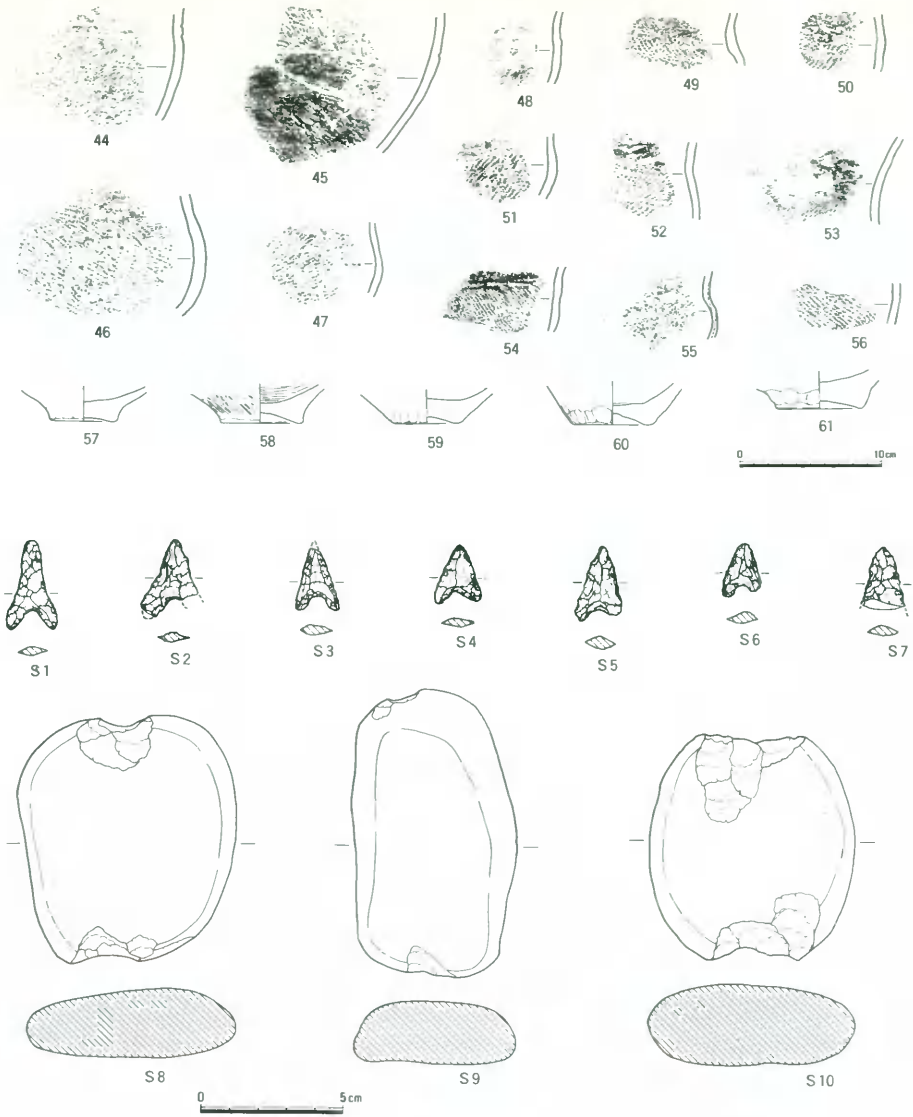
石器のうち、石鏃はすべてサヌカイト製で、多くが凹基である。石錘は、平たい円礫（順に花崗閃



第140図　土器溜り１　出土遺物(1)



第141図　土器溜り1　出土遺物(2)



第142図　土器溜り１　出土遺物(3)

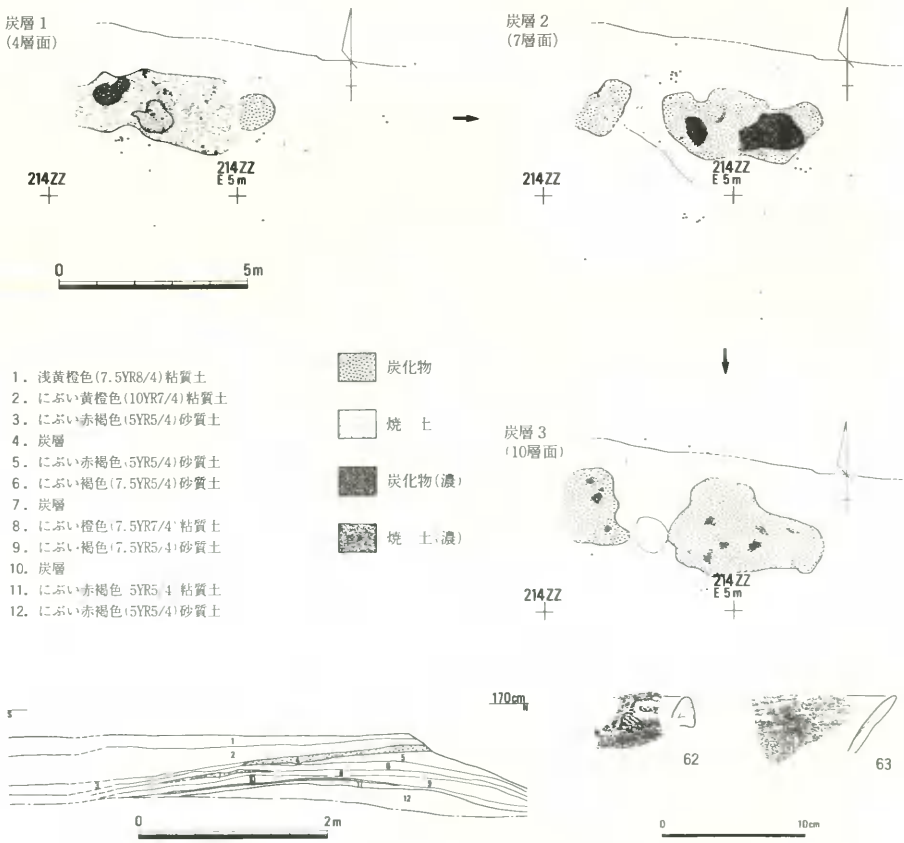
緑岩・玢岩・花崗岩）を用い、長軸の両端を打ち欠いて製作している。（山磨）

土器溜り２（第143図）

214ⅡＺ区の西端部分で弥生時代の包含層から約１ｍの間層下から検出された。全部で３層の面を検出し、それぞれの遺構面から炭と焼土面が検出された。上面から炭層１・２・３と仮称してそれぞれについて観察してみると、炭層１はにぶい赤褐色の砂質土層の上に形成されており、焼土面は西方

に集中していた。炭の堆積は広範にわたって厚く堆積している。出土遺物は認められなかった。炭層2はにぶい橙色の粘質土層上に形成され、焼土面と炭層は2ヵ所に分散していた。遺物として縄文後期の土器片が多く出土しているが、2点のみ図化した。62は鉢形土器の口縁部である。肥厚させた縁帯部の外面には太い沈線と磨消縄文が施文されている。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。63は深鉢形土器の口縁部である。端部は粘土紐を巻き上げながら外上方に緩やかに開く。外面にはわずかに条痕文が認められる。また部分的に煤の付着も認められる。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。ともに彦崎ＫⅠ式の範疇に入るであろう。炭層3は炭の散乱状況など炭層2とほぼ同じであるが、炭の集積は部分的なもので全体的には希薄である。出土遺物は認められなかった。

盛り上がった粘土層の上面に形成された3面の炭層を時代を追って見てみると、縄文時代後期に火を伴う作業面が2ヵ所つくられ（炭層3）、のちに洪水等によって埋没した。再び作業面の形成が試みられ、焼土面が2ヵ所も見られるなど最盛期を迎える（炭層2）。また埋没・再生されるが、焼土面などは縮小される（炭層1）。その後は再生されることはなく廃絶される。遺構の性格としては不明ではあるが、立地や形成過程から漁労等に伴う作業場が考えられる。（根木）

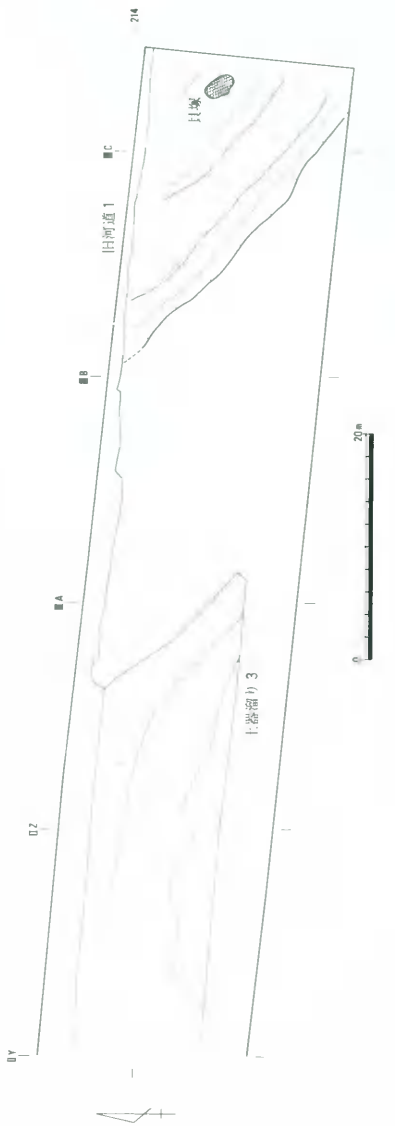


第143図　土器溜り2　炭・土器分布（1／150）、同断面（1／60）、同出土遺物

２．縄文時代晩期・弥生時代前期の遺構・遺物

この時期の遺構は、縄文時代晩期の河道の底部近くの小貝塚と、微高地上のⅡＹ～Ｚ区に拡がる幅５ｍ前後、深さ15cm位の撓み（調査時には晩期水田を想定したが、プラント・オパール分析結果では可能性が少ない）しか確認されておらず、弥生時代前期の明確な遺構も確認できていない。

遺物は、河道の埋没過程で流入した両時期の土器・石器、縄文晩期の貝塚に伴う骨角器や弥生前期の木器などと、撓みの下層に包含された晩期土器（土器溜り３）など多量に出土している。（柳瀬）



第144図　縄文時代晩期　遺構配置（1／500）

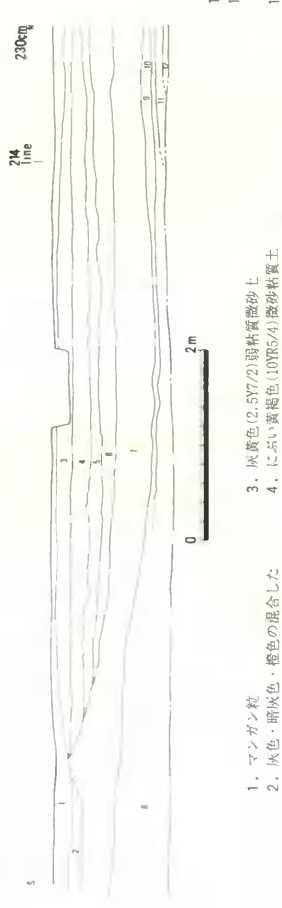
(1)　土　器　溜　り

土器溜り３（第144～147図、図版10・16）

214ⅡＹ・ⅢＡ区から多くの縄文時代晩期の土器片が出土した。遺物を包含する層は、弥生時代の基盤となるにぶい黄褐色微砂粘質土（第４層）の下の第５層で、南から北へ下がる地形に厚さ約10～20cmほど堆積している。遺物は東のたわみ部分が最も多く、西になるほど少なくなってゆく。第５層はレベル差で全部で３層に分けられ、その中でも中層から大半が出土した。

出土遺物を各層ごとに見てみると、上層からは少量の土器片が出土している。64～67は深鉢形土器の口縁部である。すべて口縁端部と外面突帯部分にキザミ目が施されている。褐色や灰白色の色調を呈す。68は深鉢形土器の底部である。外面にはヘラ削りが施されている。中層からは多様な器種の土器と石器が１点出土している。69～85は深鉢形土器の口縁部である。調整は上層のものとほぼ同じで、頸部以下には貝殻による条痕文が施されている。中には波状口縁を持つ85もみられる。86～90は浅鉢形土器の口縁部である。91・92は浅鉢形土器の底部である。いずれも凹み底で、一旦垂直もしくは外反ぎみに開いて底にいたるものである。93は鉢形土器の底部である。調整その他は器表面が著しく摩滅しているので不明である。石器はサヌカイト製の石包丁状石器（S11）が出土している。最大長88mm、最大幅45mm、最大厚11.5mmを測る。下層からは少量の土器片と石器・土製品各１点出土している。94～97は深鉢形土器

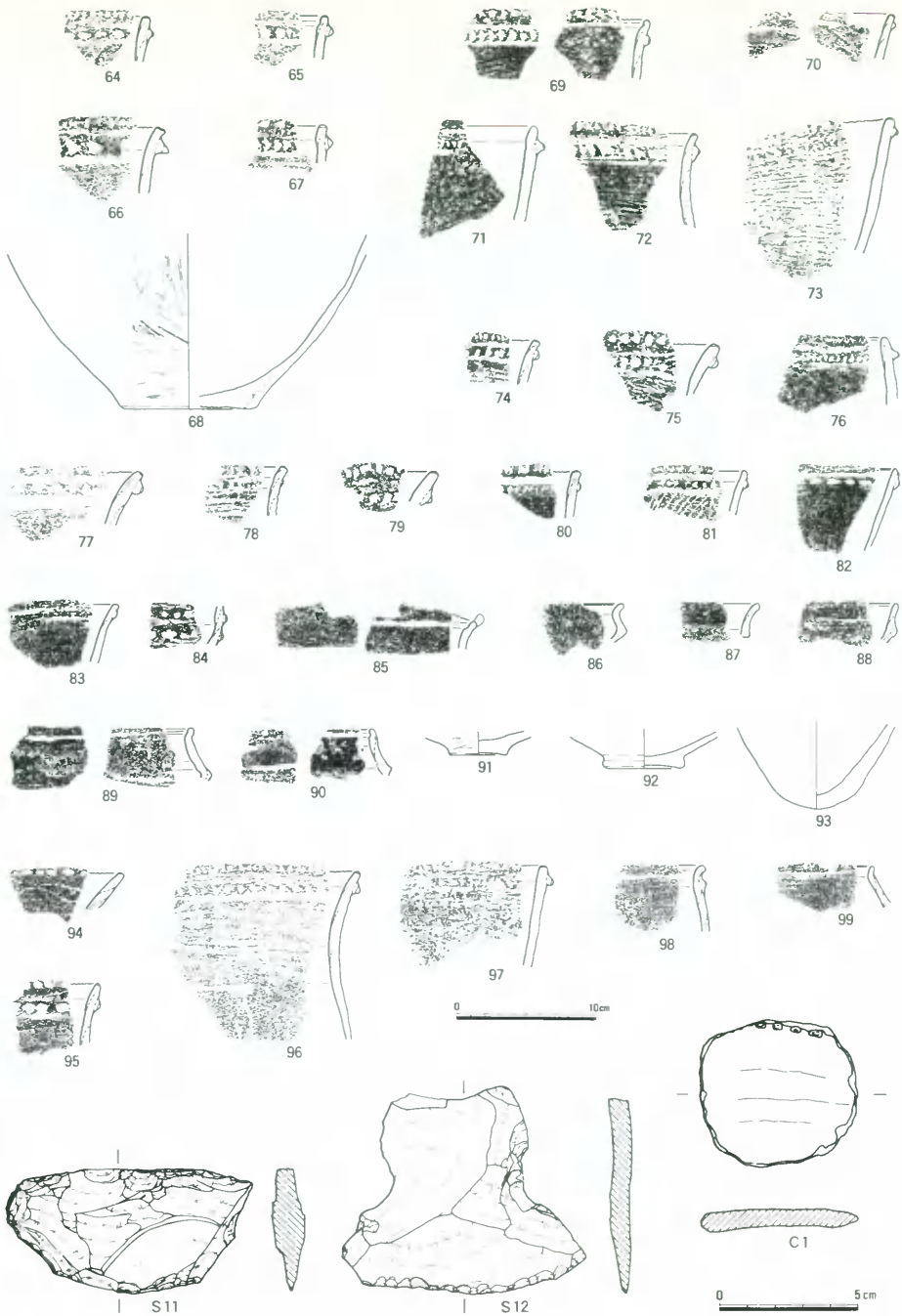
第145図　土器溜り3



第146図　ⅡZライン　断面

の口縁部である。端部に肥厚帯をつくり、上面にキザミ目が施されている。38は浅鉢形土器に口縁部である。39は深鉢形土器の底部である。石器は石匙（S12）、土製品は土製円板（C1）が出土している。

土器を形式的にみれば、原下層式から黒土ＢⅡ式の中に納まるものと考えられる。　（根木）



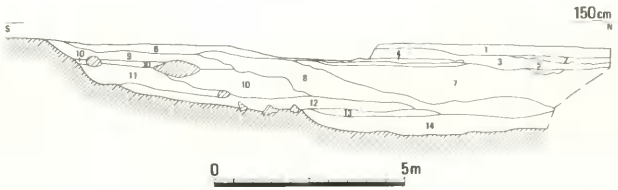
第147図　土器溜り３　出土遺物

(2) 旧 河 道

旧河道１（第144・148～161図、巻頭図版２、図版６・10・14～16）

214ⅢＢ区からⅢＣ区にかけて弥生時代後期水田面の直下から検出された。これは北西から南西方向に流走して、調査区外にのびるものである。河道の規模は幅が17m以上、深さが検出面から最も深いところで1.6mを測る。底面は２段になっており、最も深くなっている海抜－1.5mの地点にはハイガイを中心とした貝塚が形成されていた。壁面は検出した地点の中間部分で一度緩やかに立ち上がり、海抜0.8m付近から急斜となって再び立ち上がり、南側の微高地へとつながっている。

埋土は14層で、上層（１～７層）、中層（８～13層）、下層（14層）に大別できる。まず上層は３層を除き、比較的かたい粘土層の安定した堆積が認められる。遺物の出土は全体から見ると少ないが、

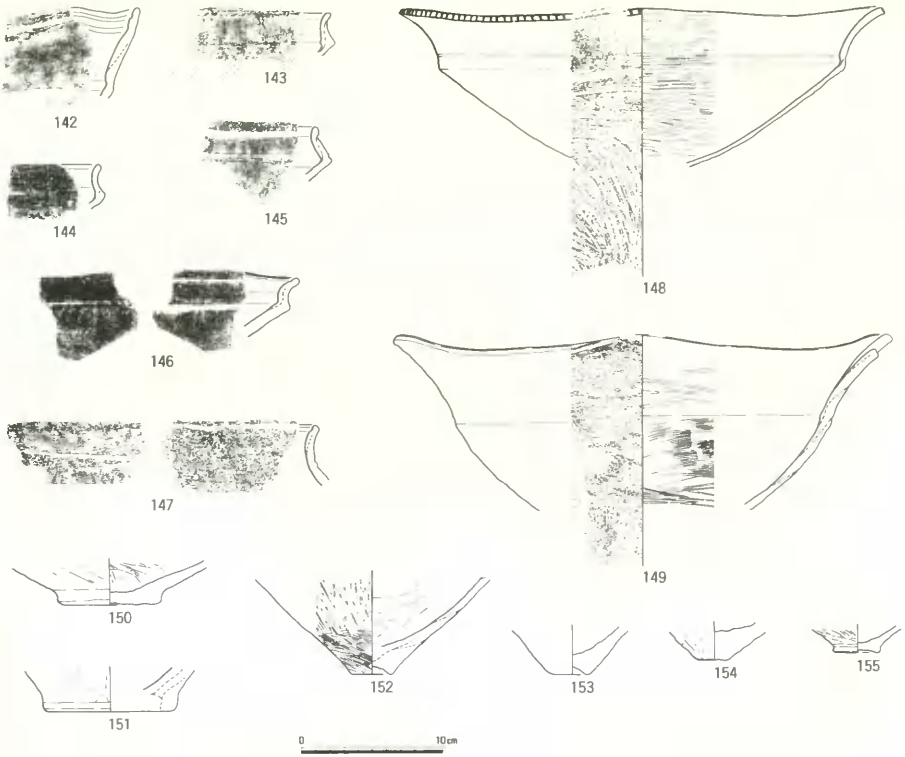


1．紫灰色(5P5/1)粘質土
2．緑灰色(7.5GY5/1)粘質土
3．明緑灰色(10GY7/1)砂質土
4．暗紫灰色(5RP4/1)弱粘質土
5．明緑灰色(10GY8/1)粘質土
6．明赤灰色(10BG7/1)粘質土
7．オリーブ灰色(5GY6/1)砂質土
8．オリーブ灰色(2.5GY5/1)粘質土
9．暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘質土
10．暗緑灰色(2.5GY4/1)弱粘質土
11．暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘質土
12．暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)弱粘質土
13．暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘質土
14．オリーブ灰色(5GY6/1)粘質土
（粗砂・小木片多数含）

第148図　旧河道１　断面（1／150）

第149図　旧河道１　出土遺物(1)〈貝塚〉

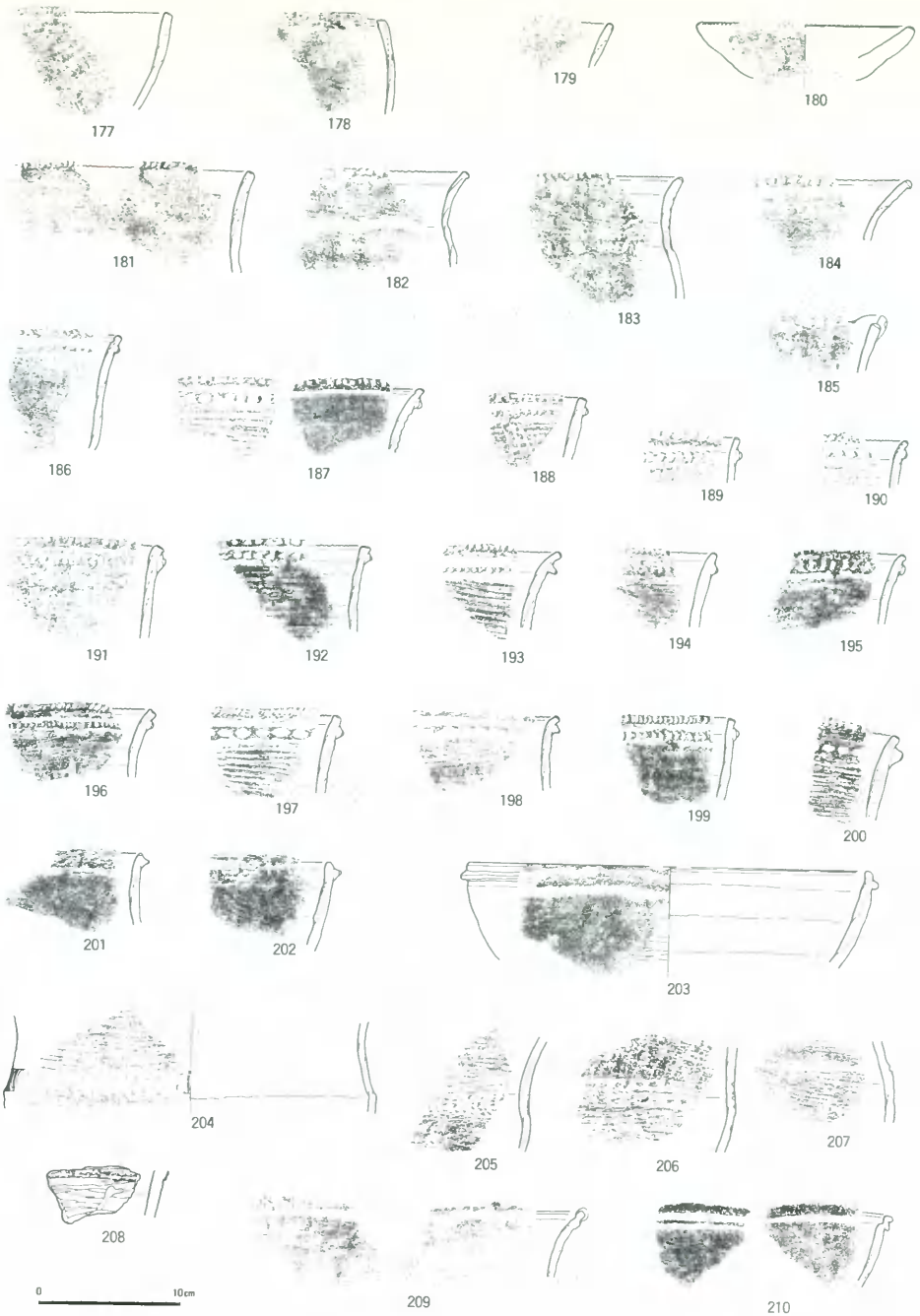
第150図　旧河道１　出土遺物(2)〈14層〉



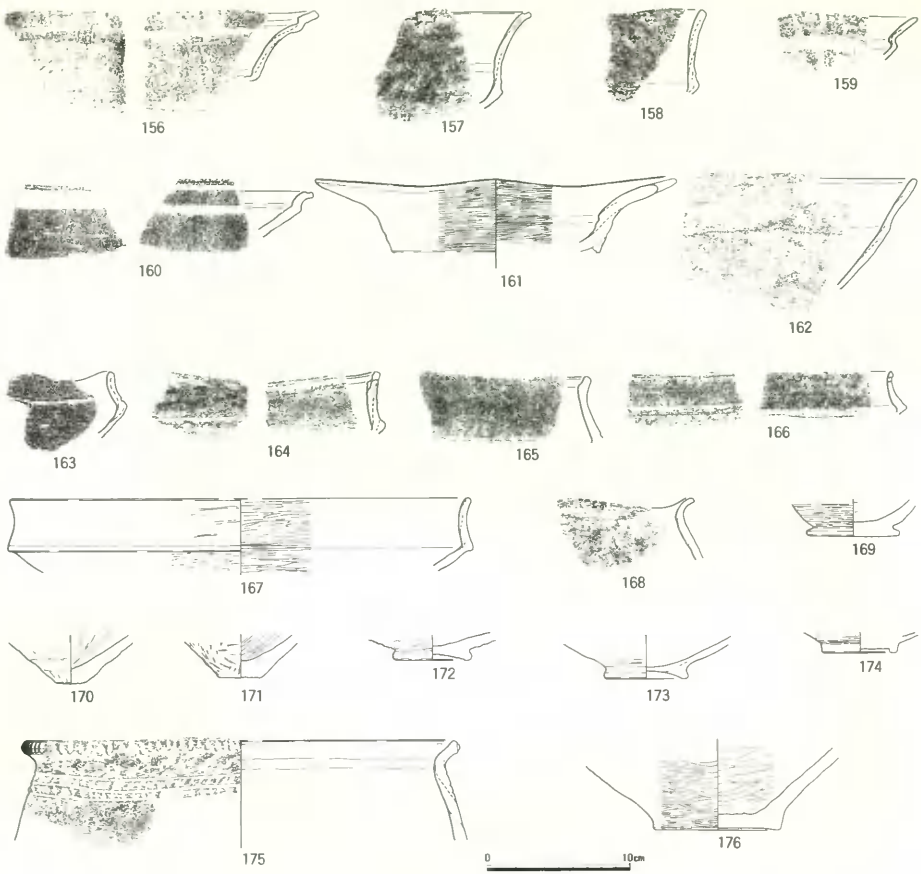
第151図　旧河道１　出土遺物(3)〈14層〉

弥生時代中期の土器片が混じる。またこの上面からは中世の溝33が掘り込まれている。中層は上層に比べ堆積層の粘質性に欠けるが、遺物は11･12層を中心に縄文時代晩期と弥生時代前期の土器片が混在して出土している。下層は植物遺体と粗砂が混在し、堆積土は若干砂質土的になってくる。出土遺物も多く、貝塚内を含め純粋に縄文時代晩期の土器片が採取された。

出土した遺物について見てみると、14層から検出された貝塚内からは縄文時代晩期の土器片と骨角製品が出土している。100～110は深鉢形土器の口縁部である。外面にはキザミ目突帯を貼りつけている。また肥厚させた端部平坦面にはキザミ目を施している。111～114は浅鉢形土器のII縁部である。口縁部には丹念にナデが施されており、112・113は波状口縁の形態を呈する。さらに114には朱が塗布されていた。115は深鉢形土器の底部である。形態は凹み底でユビオサエによって底部を形成し、内面にヘラミガキ、外面にヘラケズリが施されている。またこれらの縄文時代晩期の土器片とともに骨角器が５点出土している。B１は、鹿角製品である。鹿角の角幹と又状に分岐する枝を削り出しによって精巧に作られている。細部の細工を見てみると、角の根元部分である体部を台形状に残しながら面取りや縦方向の貫通孔を施し、中心部分は半円孔が穿たれている。また半円孔の外側３方向にキザミ目を入れ、内側の厚みを薄くすることによって頭部と身部の区分を明瞭に行なっている。さらに鉤状に広がる部分は、一方が楕円形状頭部で切り離されたのちに、十文形のキザミ目が施されている



第152図　旧河道１　出土遺物(4)〈12層〉



第153図　旧河道１　出土遺物(5)〈12層〉

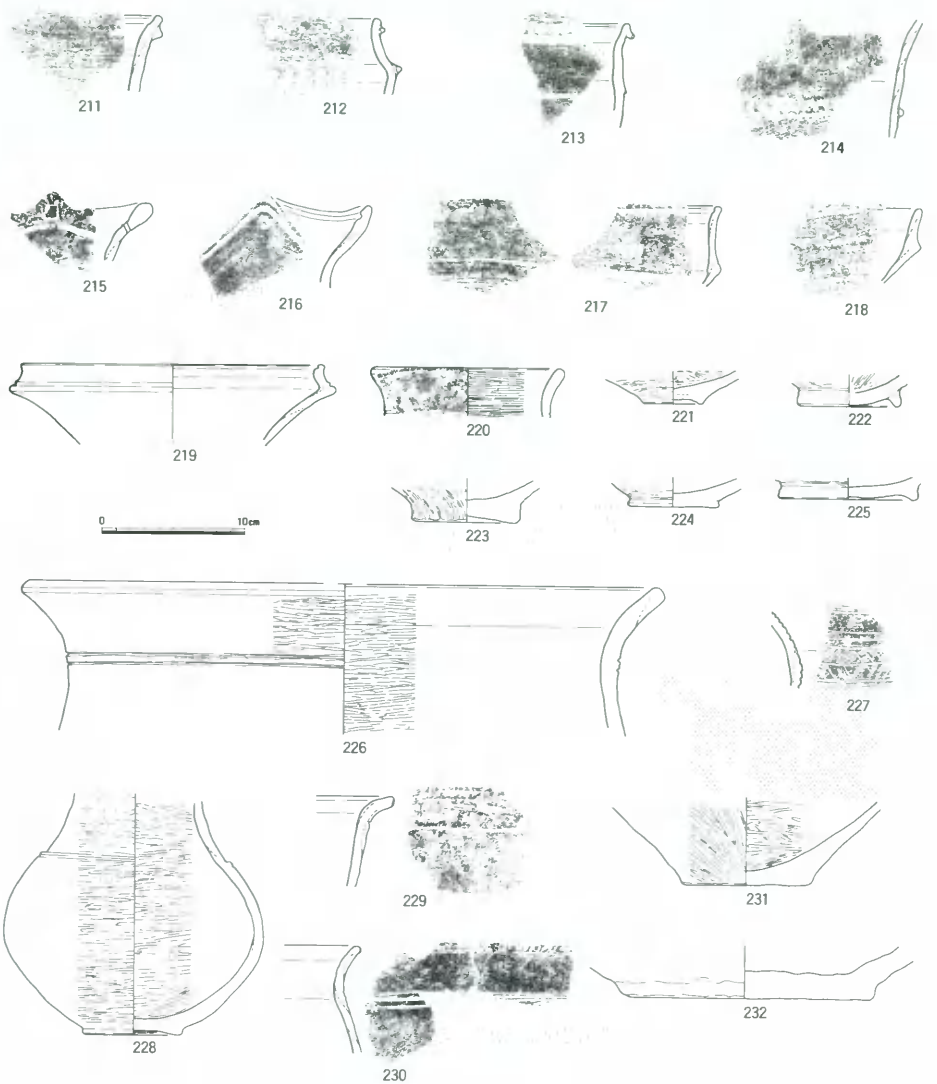
他方は体部上に頭部が形成され、先端部分にいたる約13cmの間は外方をさらに薄く断面楕円形に削って尖鋭さを出している。用途は不明であるが、春成秀爾氏によれば、角製鳥形短剣に分類されるものである。B２は鹿角製の管玉である。最大厚8.5㎜、最大幅12.3㎜、重さ0.92ｇを測る。B３は鹿角製の指輪形模造品である。ほぼ完形で出土している。中央部分には円孔を穿って断面楕円形の環状部分を形成し、台座部分は楕円形状で内側は内方に向かってくぼみが掘られていた。長さ30㎜、最大幅22.5㎜、最大厚8.5㎜、重さ2.64ｇを測る。B４・５は用途不明の鹿角製の剥片である。

最下層に位置する貝塚を覆っていた14層からは多数の縄文時代晩期土器片に加えて石器が２点出土している。116～141は深鉢形土器の口縁部と胴部である。貝塚から出土しているものとほぼ同じものである。142～149は浅鉢形土器の口縁部である。口縁内側に沈線が巡るもの（142・146）と口縁外側に沈線が巡るもの（147）が存在する。148・149は波状口縁を有する浅鉢形土器である。148は端部を肥厚させてキザミ目が施されている。胴部は二枚貝による条痕文が認められる。150・151は浅鉢形土器の底部である。152～155は深鉢形土器の底部である。凹み底で、縦方向のケズリが施されている。

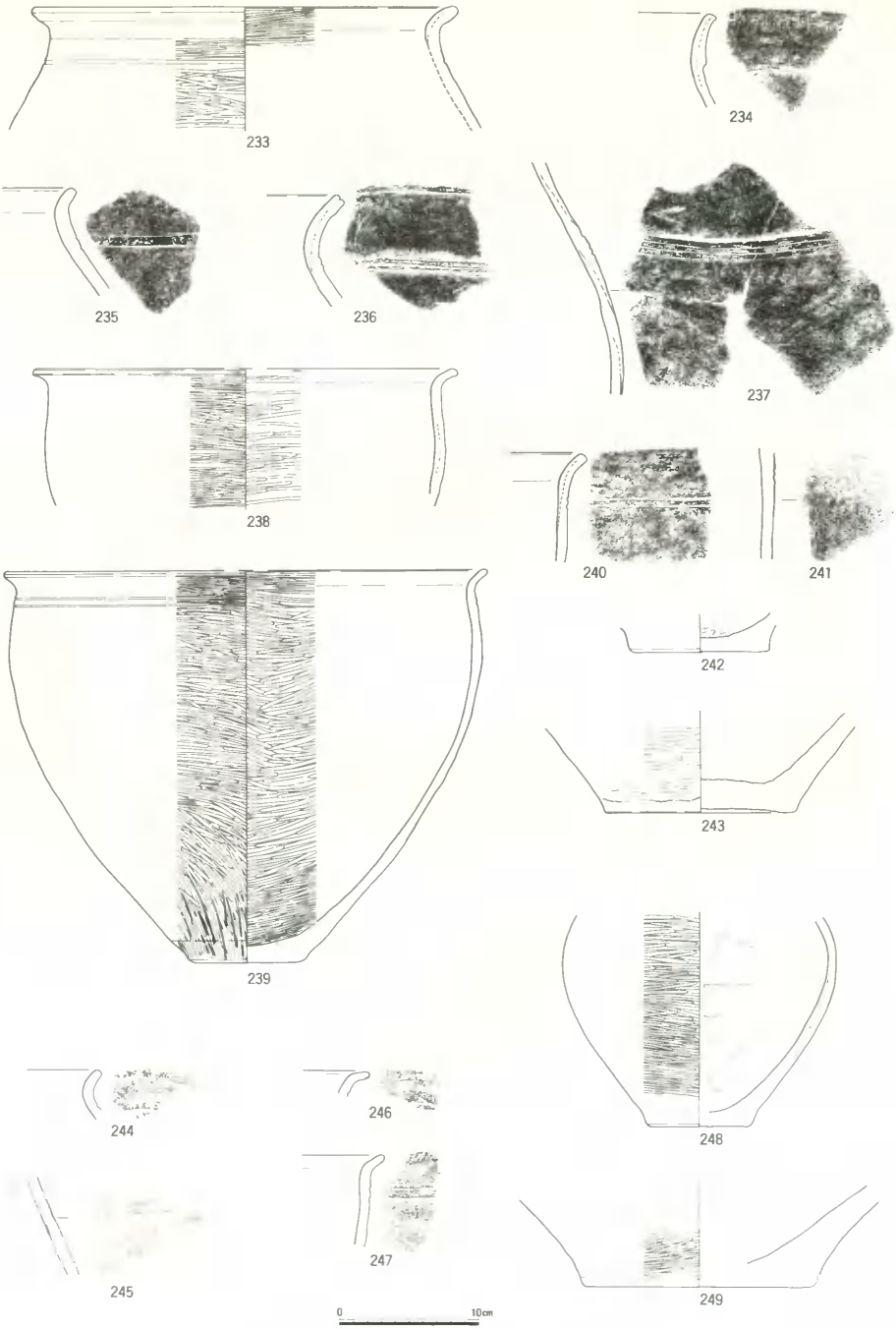
石器は石錐（S15）、石匙とおもわれるもの（S16）が出土している。

中層については縄文時代晩期後半から弥生時代前期という時代の変換点となりうる時期の土器片が多く出土している。しかし流路内で土層断面図に図示したような明確な土層区分で遺物の出土地点を押さえることは困難であったので、詳細な土器区分はできなかった。また下層の土器に比べて器表面の摩滅は少ないようである。またこの層からは直斧柄（W１）や鍬先（W３）、未完成品の鋤（W４）など多くの農耕用木製品が出土している。

上層は、土器から見てみると７層が百・中・Ⅰ中相から新相にかけて、６層が百・中・Ⅱ新相、３

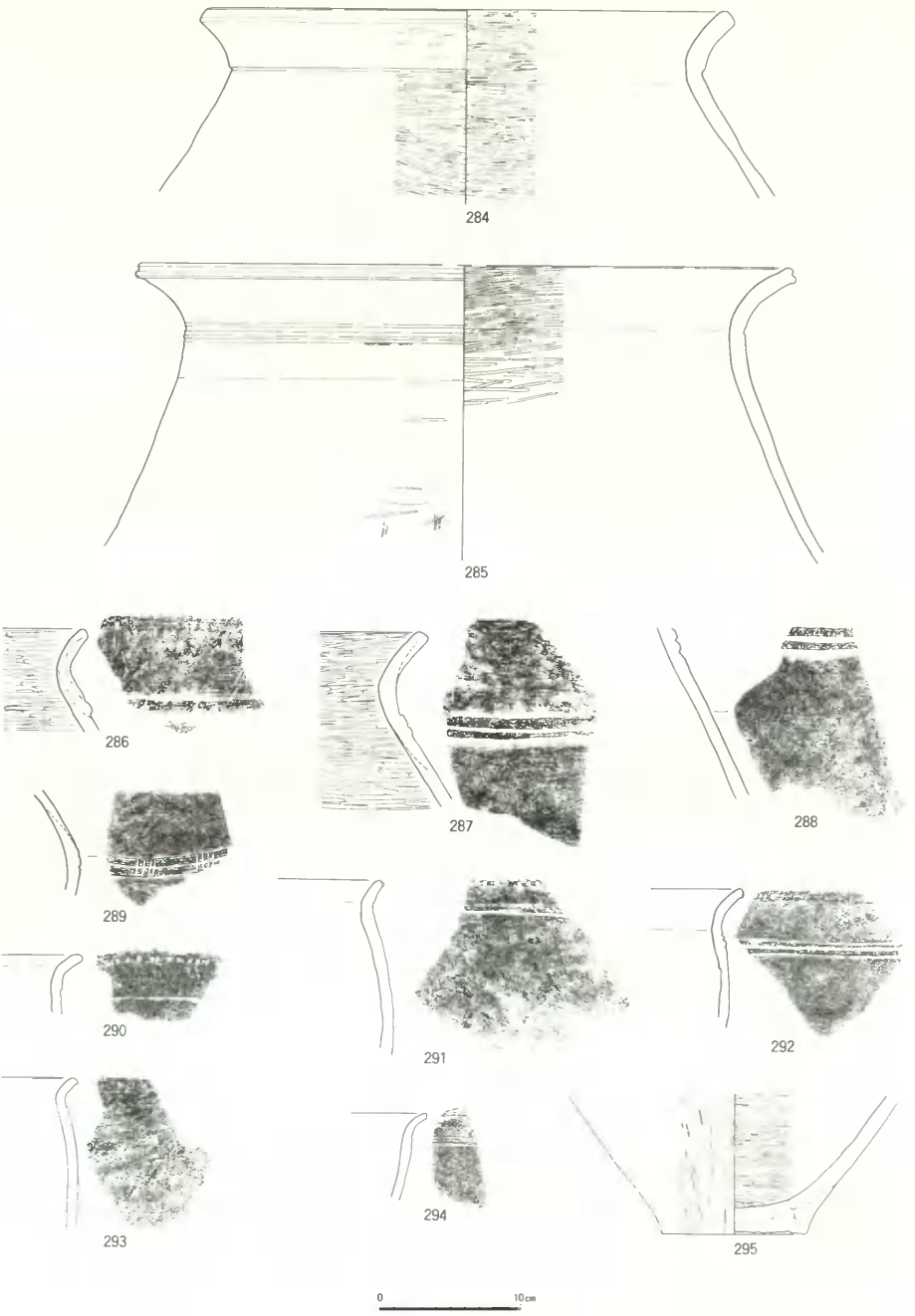


第154図　旧河道１　出土遺物(6)〈11層〉

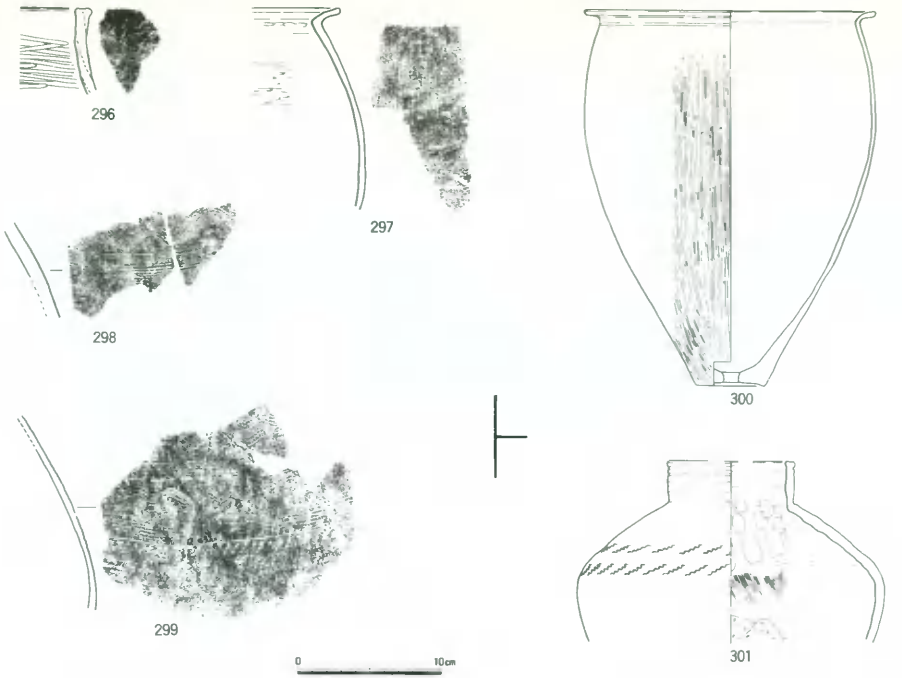


第155図　旧河道１　出土遺物(7)〈10・９層〉

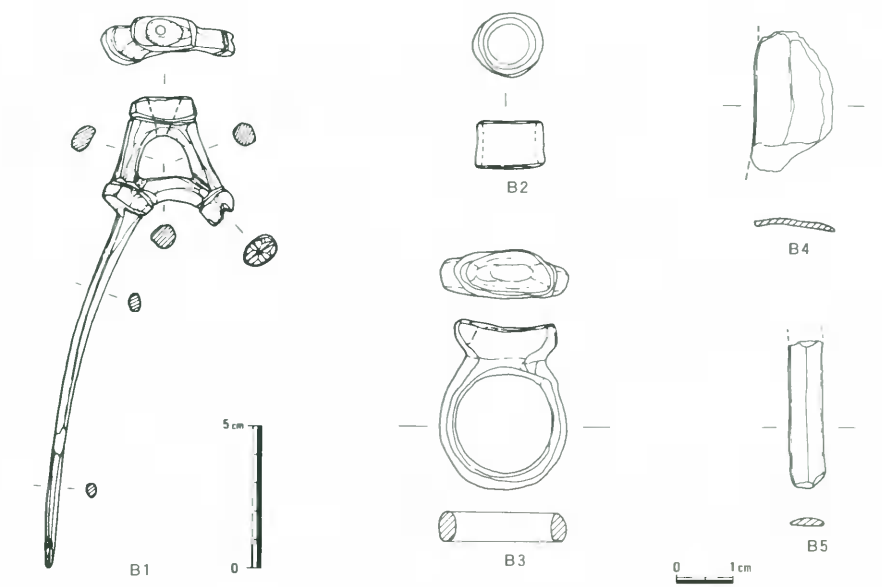
第156図　旧河道１　出土遺物(8)〈８層〉



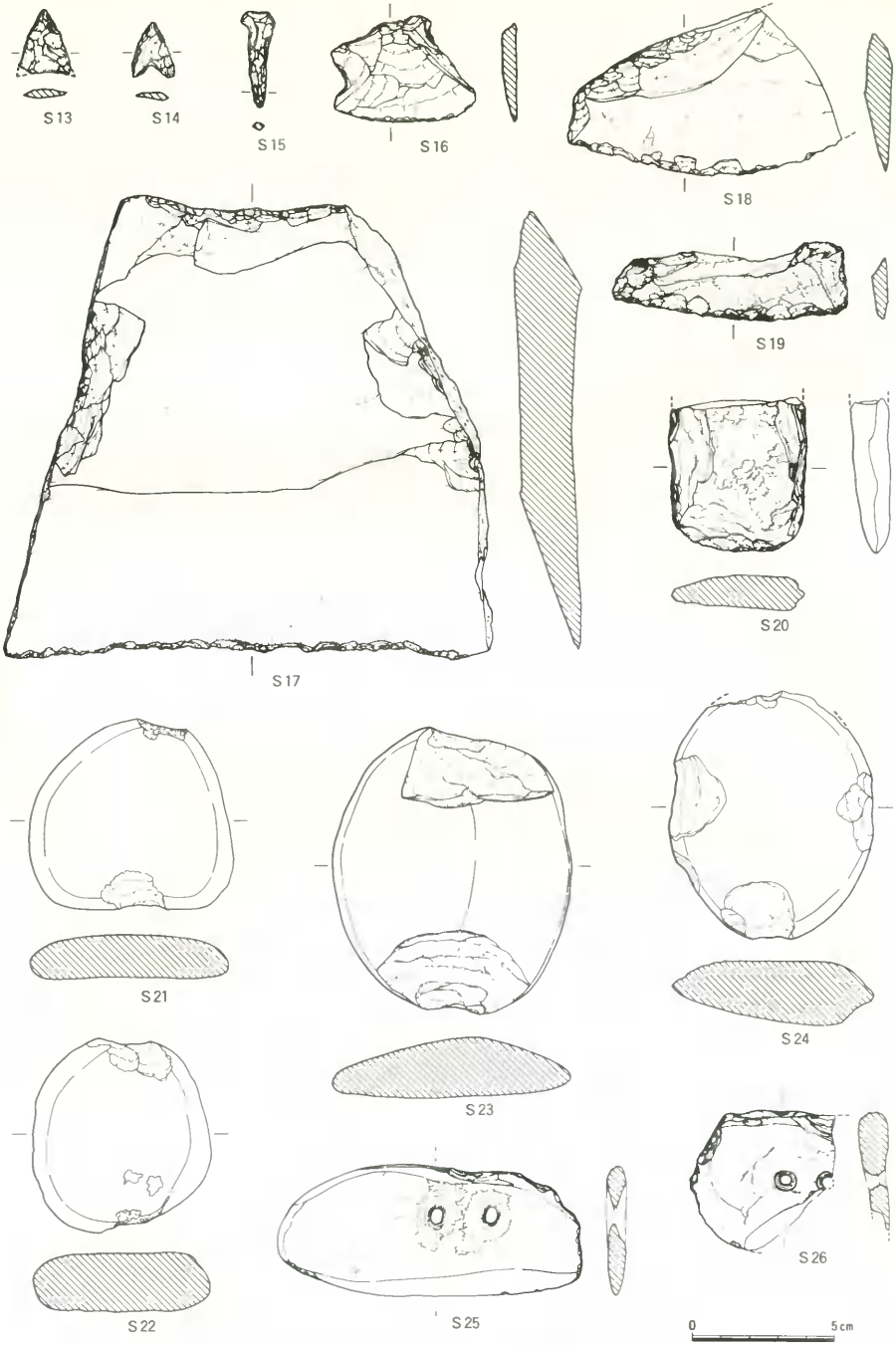
第157図　旧河道１　出土遺物(9)〈８層〉



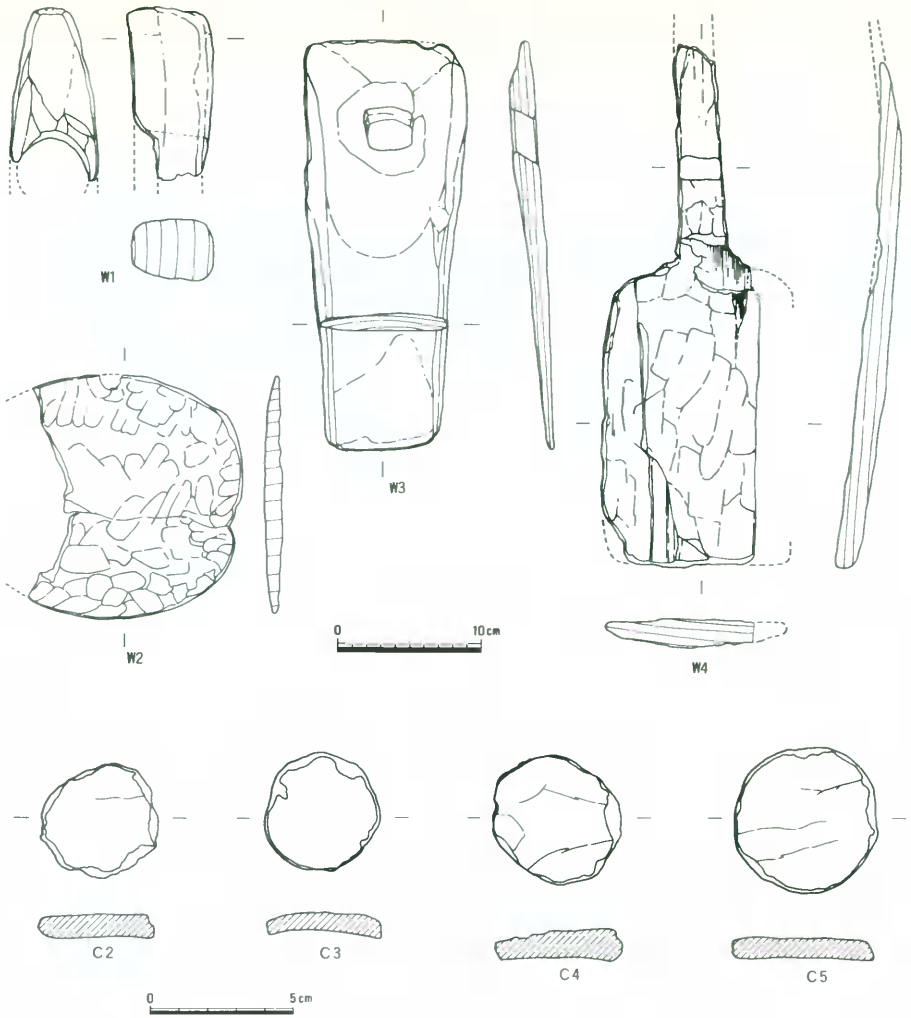
第158図　旧河道１　出土遺物(10)〈７・６・３層〉



第159図　旧河道１　出土遺物(11)〈貝塚〉



第160図　旧河道１　出土遺物(12)



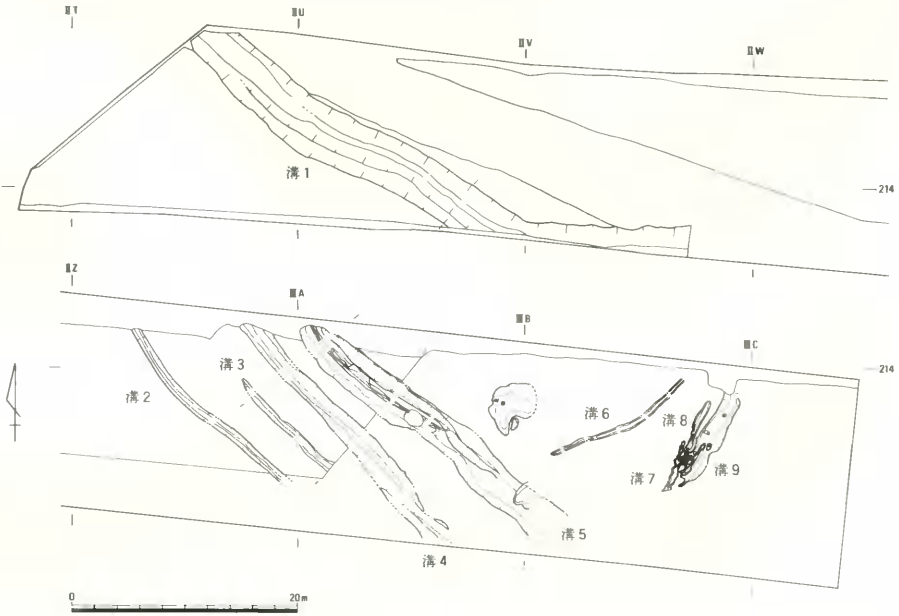
第161図　旧河道１　出土遺物(13)

層が百・中・Ⅲと考えてよいであろう。

さらに以上のことから旧河道の形成・埋没過程を大まかに復元してみたい。まず微高地北側の低地にその縁辺を巡る小さな自然流路が存在していた。豊富に採取できたハイガイの貝殻を捨てた結果、当時滞水していた自然流路の底部に貝塚が形成され、鹿角製品など多くの遺物が包含された。その後、流水・滞水を繰り返しながら下層が堆積し、増水などに伴って微高地付近まで水位は上昇し、やや長い滞水で中層が形成された。上層は弥生時代前期から中期の堆積で、旧河道の肩部が低湿地化したことで、開墾を行なうために足を踏み入れた形跡が認められる。旧河道がほぼ埋没したことによって広範囲な低湿地が形成され、弥生時代後期には水田が拓かれるのである。　（根木）

3．弥生時代中期の遺構・遺物

調査区の中では、213ⅡＴ～Ｕ区の溝１を除いて、おもに213・214ⅡＺ～ⅢＢ区に遺構が集中している。遺構のほとんどは溝で、それらの多くは微高地の肩部に沿って掘削されている。とくに溝４はほぼ同一の位置で、弥生時代後期を通じて踏襲されている。また、遺物は他時期に比べて少なく、図示しているもの以外はほとんどない。これらのことから、溝はおもに灌漑用水路であり、この調査区は、当時の住居区とは少し離れた地点に当たると思われる。（柳瀬）

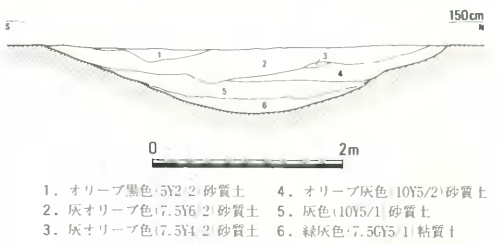


第162図　弥生時代中期 遺構配置（1／500）

(1)　溝

溝１（第162・163図、図版７・14）

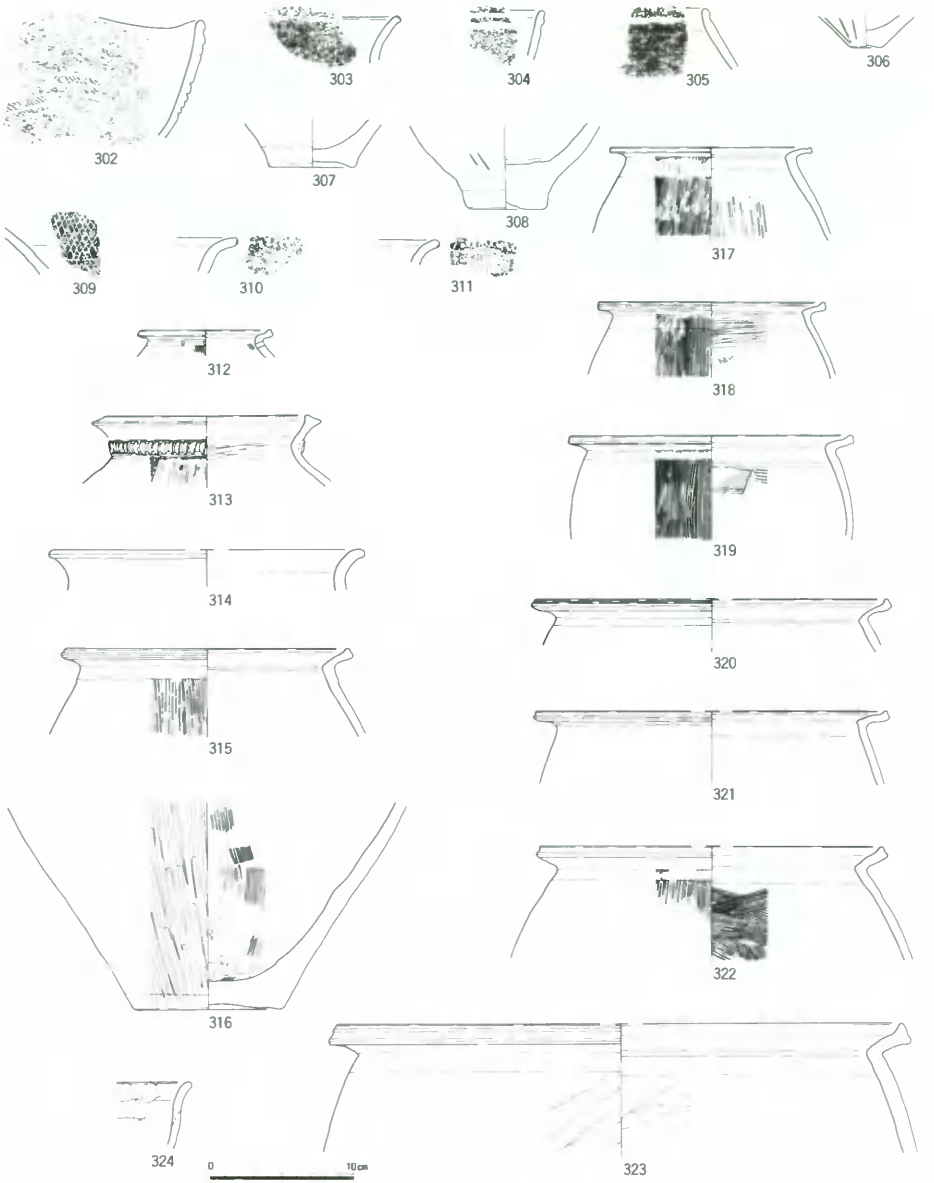
213・214ⅡＴ・ⅡＵ区で、水田１の下層に検出された。北西から南東方向に緩やかに蛇行し、東端でやや東西方向を向く比較的大形の溝である。北西端は未検出で、南側は調査区外に延びている。後述する溝12が南側の肩部に並走する。規模は、検出長約50m、幅４～4.6m、深さ70～80cmを測る。溝底面の海抜高は50cm



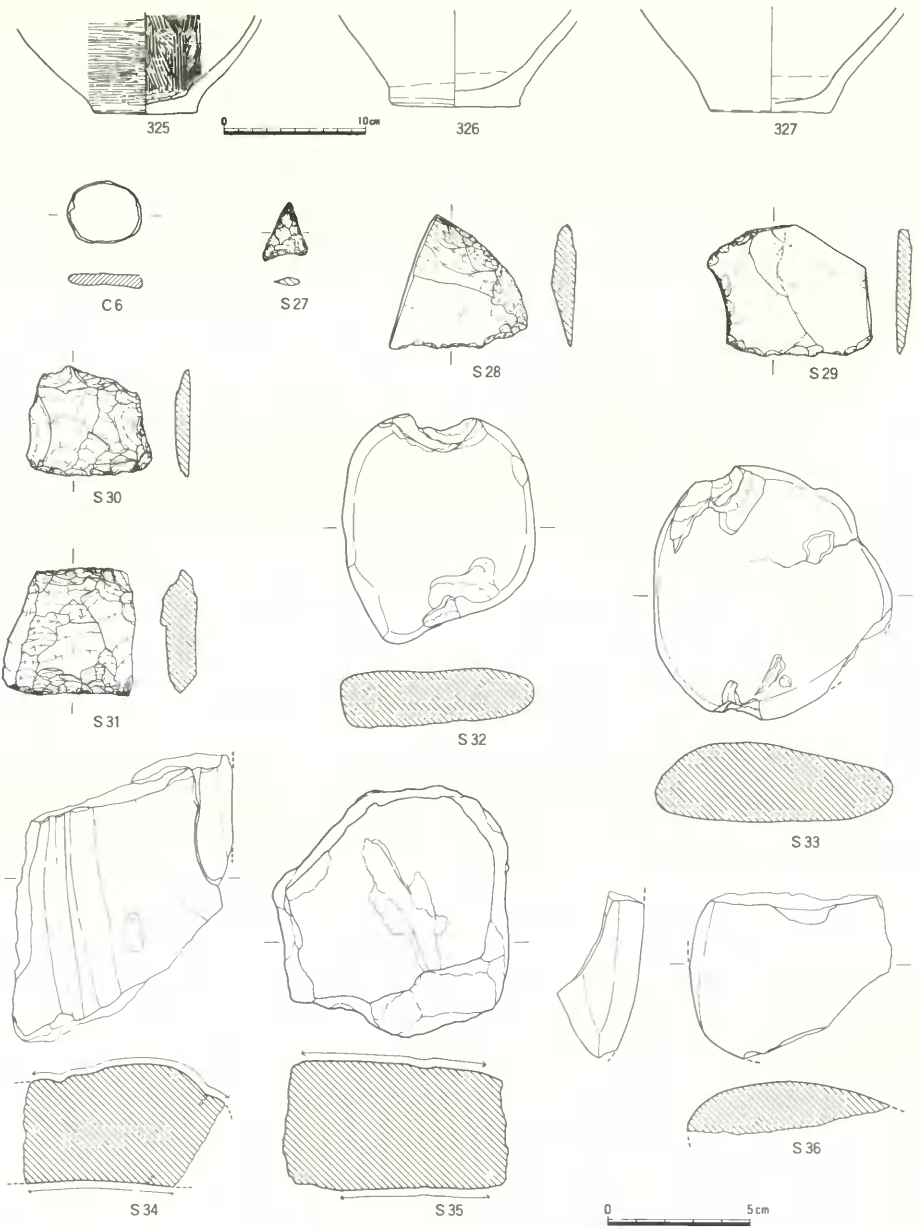
第163図　溝１ 断面

強で検出部の両端でほとんど差がないが、北西から南東に流れたものと考えられる。溝断面は、南側の掘り方の途中に若干の段をなすが、やや厚めのレンズ状を呈し緩やかに立ち上がる。埋土は６層に分層可能で、このうち第１～５層は砂質土が、第６層には緑灰色の粘質土が堆積していた。

出土遺物は、調査区北西端の縄文後期の土器溜り１の包含層を切って存在するために、縄文土器片



第164図　溝１　出土遺物(1)

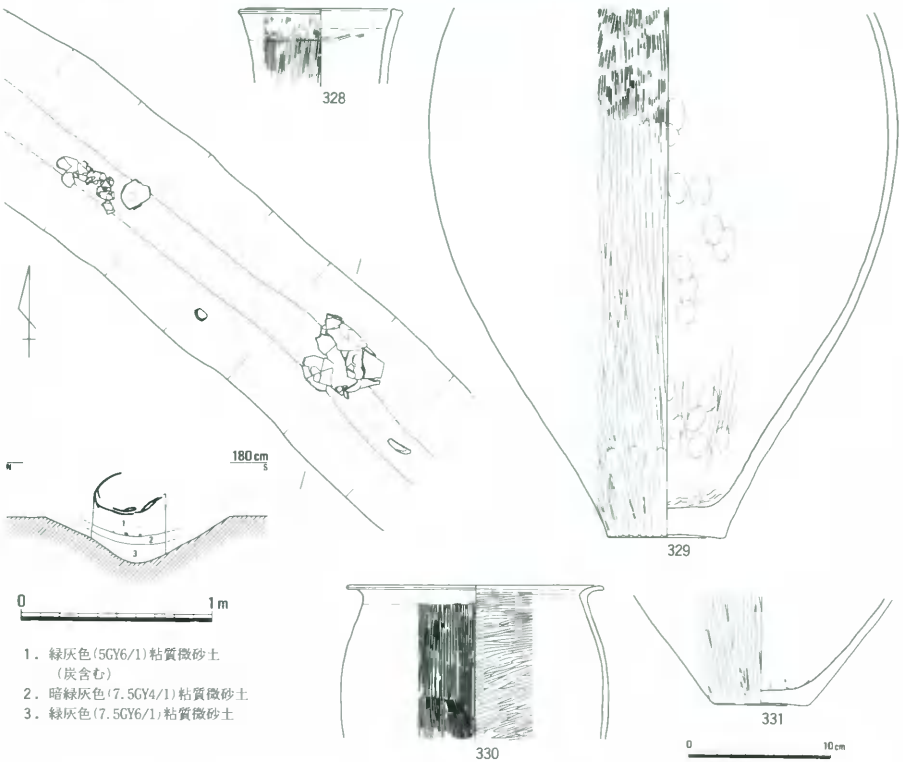


第165図　溝1　出土遺物(2)

や同時代石器と弥生土器や同時代石器が混在している。時期は、遺構の検出状況と弥生土器の口縁部に凹線文を施さない器形や内面調整の諸特徴から、百・中・Ⅱと考えられる。（山磨）

溝２（第162・166図）

213・214ⅡＺ区に検出された、北西－南東方向の溝である。溝の両端部を低水路などで削平され、長さ約11m間のみ検出し得た。微高地の端部に沿う部分に占地し、後述する溝３～５とほぼ並走している。検出時の規模は幅約１m、深さ約25cmを測るが、土器の検出レベルからすれば幅約1.4m、深さ約50cm位はあった可能性が強い。この溝は晩期の包含層を穿って存在するため、埋土に突帯文土器片を少量含むが、溝上部に出土した弥生土器から百・中・Ⅱの時期に埋没したとみてよい。（柳瀬）



第166図　溝２、同出土遺物

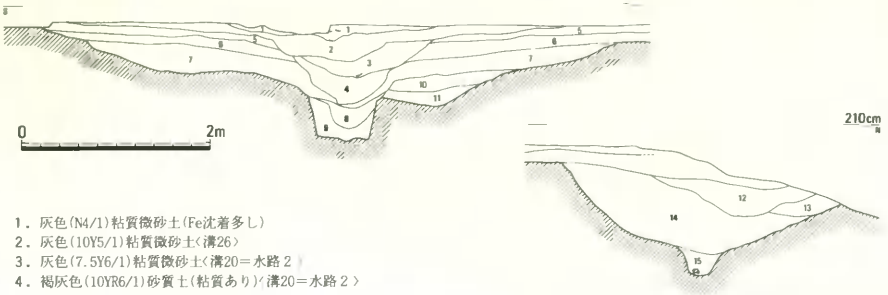
溝３（第162・167・175図）

214ⅡＺ～ⅢＡ区に検出された、溝２・４・５と並走する溝である。上部を後期の溝14によって大きく削平されているため、正確な規模はわからないが、現存幅約80cm、深さ約20cmを測る。

土器は出土していないが、土層関係から弥生時代中期の溝２と大差ない時期と思われる。（柳瀬）

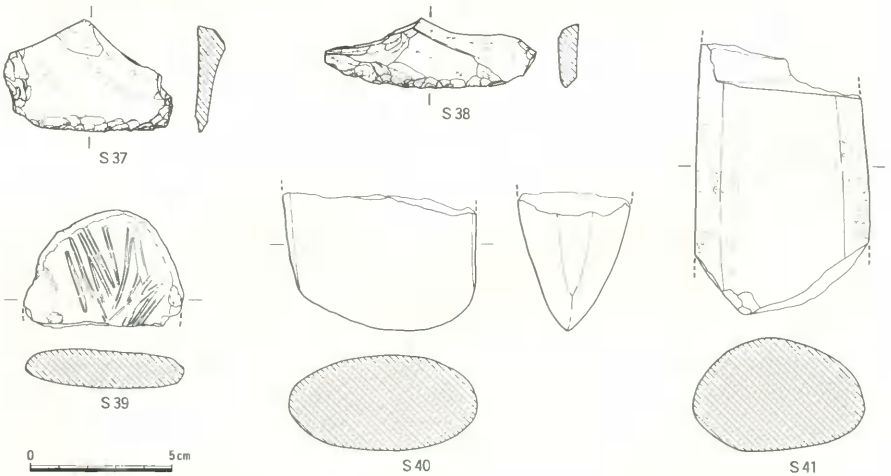
溝４（第162・167・168・175図、巻頭図版１、図版14）

213・214ⅡＺ～ⅢＡ区に検出されたが、上部のとくに南西肩部を溝14に削平され、さらにⅢＡ区では現代用水により部分的に底近くまで削平を受けている。現存幅２m前後、深さ40cm前後を測る。また、底部の標高は北西端で105cm、中央で100cm、南東端で95cm前後を測り、南東側に流下する。埋土



1．灰色(N4/1)粘質微砂土(Fe沈着多し)
2．灰色(10Y5/1)粘質微砂土〈溝26〉
3．灰色(7.5Y6/1)粘質微砂土〈溝20＝水路２〉
4．褐灰色(10YR6/1)砂質土(粘質あり)〈溝20＝水路２〉
5．黄灰色(2.5Y6/1)砂質土(Fe沈着あり)
6．褐灰色(10YR5/1)粘質微砂土
7．褐灰色(10YR4/1)粘質微砂土(黄灰色砂含)〈溝14〉
8．褐灰色(7.5YR4/1)粘質土〈溝14〉
9．褐灰色(10YR4/1)粘質土(黄灰色砂含)〈溝14〉
10．灰黄色(2.5Y6/2)粘質土〈溝４〉
11．黄灰色(2.5Y6/1)粘質土(砂多含)〈溝４〉
12．黄灰色(2.5Y5/1)粘質微砂土〈溝16〉
13．黄灰色(2.5Y6/1)砂質土〈溝15〉
14．灰オリーブ色(5Y6/2)粘質微砂土〈溝５〉
15．砂（灰色、黄色、青灰色混合砂)〈溝５〉

第167図　溝３～５　断面



第168図　溝４　出土遺物

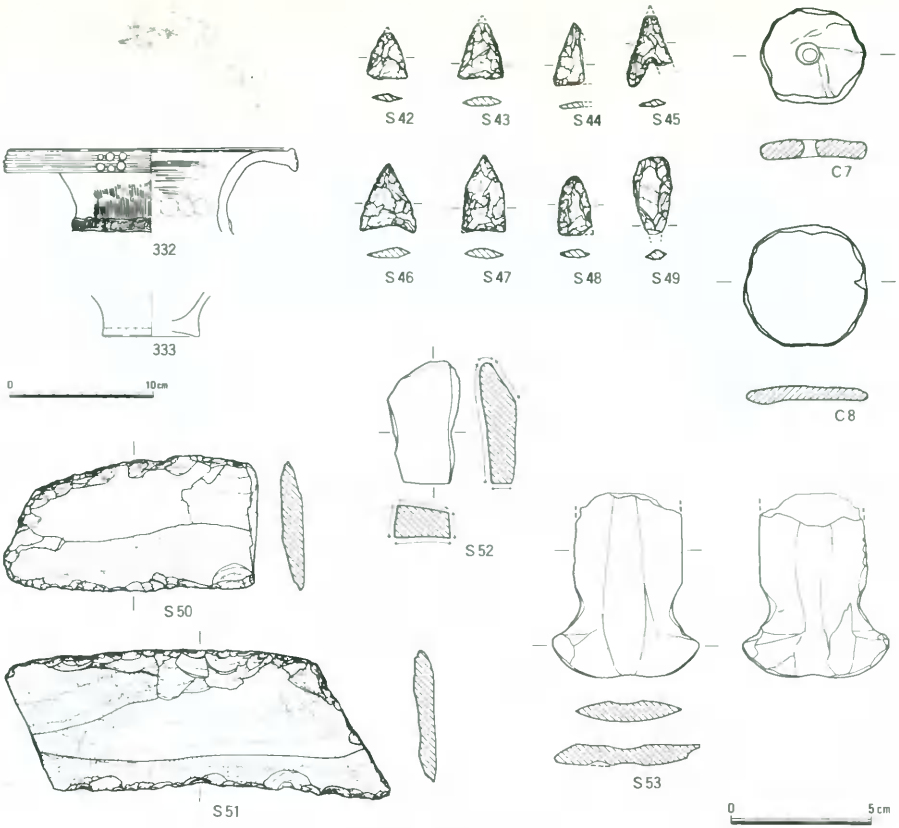
は、灰黄色または黄灰色の粘質土を呈し基盤層によく似る。

出土遺物に突帯文土器片が比較的多く、弥生土器片は少ない。石器は図示した削器や蛤刃石斧が出土している。角閃玢岩製のS39は、片面に幅約1.5～２㎜の線刻が12～13条観察される。

土器片が小さく、時期の確定は困難ながら溝２・５とほぼ同時期と思われる。（柳瀬）

溝５（第162・167・169・175図、巻頭図版１、図版７・14）

213・214ⅢＡ・Ｂ区で検出されている。ⅢＡ区の東半は、現代用水および弥生後期水田によって溝上部を削平されており、微高地末端部に沿うこの溝が廃絶し、弥生時代後期前半の後述する溝15・16が踏襲して存在したのち、少なくとも弥生時代後期後半の水田拡張に伴って上部が消滅したことを示



第169図　溝５　出土遺物

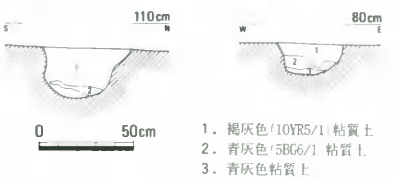
す。現存幅約３ｍ、深さ約１ｍのＵ字溝であり、底部の標高は北西端で約60㎝、南東端で約50㎝を測り、規模からすれば幹線水路の可能性が高い。出土遺物は、溝４と同様に突帯文土器片が多く出土していて、弥生土器は図示した332・333位であった。石器は石鏃・石錐・石包丁・砥石・磨製石剣などが出土しているが、石鏃S45は形態から縄文晩期に属し、磨製石剣S53（頁岩）は形態的に類例が少なく、他の出土遺物からすれば縄文晩期から弥生中期中葉の時期幅でしか捉えられない。

溝の時期は、底出土の壺332から百・中・Ⅱの時期に機能していたと思われる。（柳瀬）

溝６（第162・170図）

214ⅢＢ区の弥生後期水田層の下部で検出された、南西－北東方向の溝である。幅35～45cm、深さ15～25cmを測る。地形的には、微高地縁辺から低位部に向かってわずかに下がる部分に位置するため、両端での底部の比高差は30cmにもおよぶ。

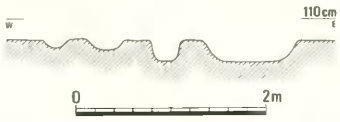
出土土器小片からは中期と考えられる。（柳瀬）



第170図　溝６　断面

溝7・8・9（第162・171図）

溝6の東側で検出され、それぞれに溝番号を付したが、溝9が枝分かれした形の溝群である。溝9は幅1m前後、深さ約25cmを測るが、他は小規模で歪である。溝6と同様の地形に占地し、旧河道1の上部でそれと直交して存在するため、自然流路であった可能性が高い。



第171図　溝7～9 断面

遺物は突帯文土器片、弥生土器片のいずれも摩滅の激しい小片が少量出土しているが、旧河道がほぼ埋まった弥生中期前半の時期であろう。（柳瀬）

4．弥生時代後期の遺構・遺物

この時期の遺構は、微高地上の中期の溝を踏襲した溝、そして微高地間あるいは低位部に拡がる水田、および水田層下の溝等が確認されている。この時期も竪穴住居や井戸、土壙などの居住域としての遺構はなく、この調査区は、中期と同様住居区からは少し離れた地点に当たると思われる。

遺物は全体に少なく、溝14に比較的まとまって土器が出土しているに過ぎない。また、それらの土器はおもに後期前半の時期を示し、後半の時期のものは皆無といってよい。（柳瀬）

(1)　溝

溝10・11（第172・173図）

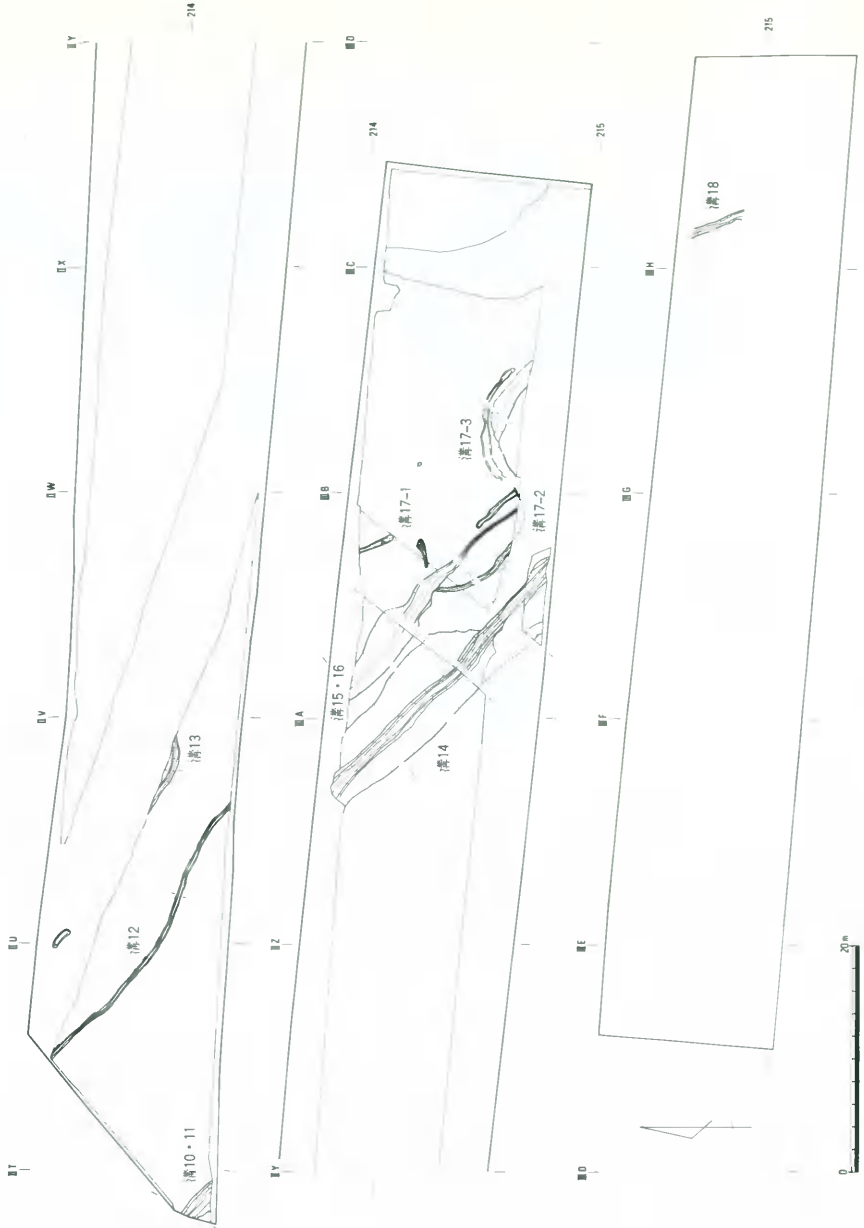
両溝は、214ⅡS区の南東隅に検出した溝群のうち最下層に位置し、ほぼ並走する。北側の溝10は、検出長5.5m、幅3.5m、深さ80cmを測る。掘り方の北側が2段に掘削されていることから、2本の溝の重複の可能性がある。南側の溝11は、検出長2.2m、幅50cm、深さ10cm程である。底面のレベルは溝10が海抜1.1m、溝11が若干浅く1.0mである。溝の新旧の切り合いは、土層からは判断できなかった。時期は、出土遺物や検出状況から弥生時代後期と考えられる。（山磨）

1．灰色（5Y5/1）砂質土（溝22＝水路1）
2．オリーブ黄色（5Y6/3）砂質土
3．浅黄色（2.5Y7/3）砂質土
4．にぶい黄色（2.5Y6/3）砂質土
5．暗灰黄色（2.5Y4/2）砂質土（溝10）
6．黄灰色（2.5Y4/1）弱粘質土（溝11）
7．オリーブ黄色（5Y6/3）砂質土
8．灰オリーブ色（5Y5/2）砂質土
9．灰オリーブ色（7.5Y5/3）砂質土
10．緑灰色（10GY6/1）弱粘質土

第172図　溝10・11 断面

溝12（第173・174図、図版7）

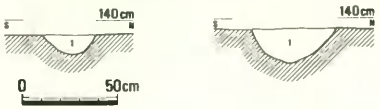
213・214ⅡT・ⅡU区で、水田層除去後に溝1の南側に接して検出した。検出長28m、幅30～45cm、深さ10cm前後で、U字形の断面を呈す。溝底面のレベルは、北西端から南東端まで約10cm低下している。時期は、検出面や埋土等から弥生時代後期と考えられる。（山磨）



第173図　弥生時代後期 遺構配置（1／500）

溝13（第173・174図）

溝12と同様に水田層除去後に検出した。幅50～60cm、深さ10～20cmで、U字形の断面を呈すが大半が削平されている。時期は、検出状況から弥生時代後期と見られる。（山磨）



第174図　溝12・13 断面

溝14（第167・173・175・176・181図、図版７）

213・214ⅡＺ・ⅢＡ区で検出された、北西－南東方向の溝である。南東部の約半分は、現代用水等により溝上部を削平されている。この溝は、溝３・４の上部を広く削平して両者のほぼ中間に位置し、後述の水路２（溝20）の直下に重複して存在する。上端幅5.7～6.4m、中端幅1.1m前後、下端幅約55cm、上端からの深さ約１m、中端からの深さ55～70cmを測る。溝底の標高は、北西端で約70cm、南東端で約60cmを測り、南東方向に流下する。中端から下端にかけての断面形は逆台形を呈す。埋土は褐灰色系の粘質土で、167・181図の地点では改修の形跡も看取され、水路であった蓋然性が高い。

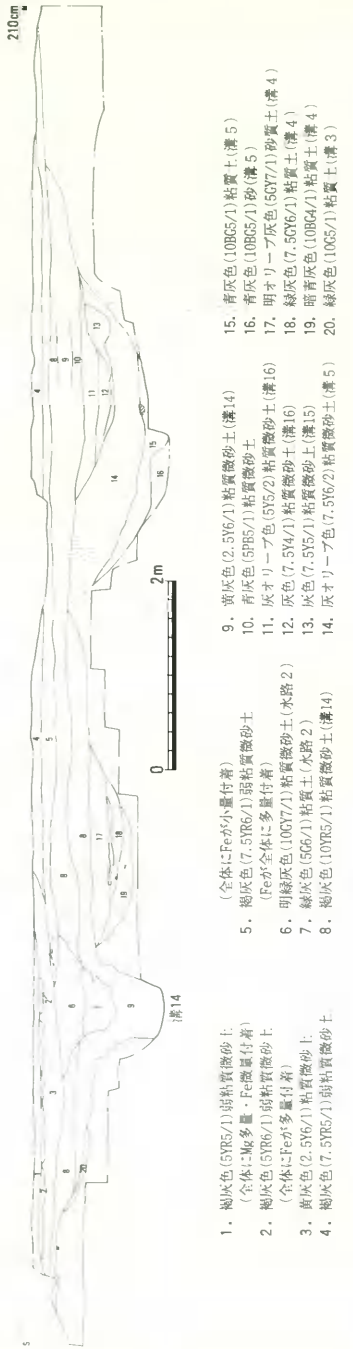
遺物はおもに北東側の棚部にまとまって出土しており、百・後・Ⅰの新相からⅡの古相の時期に機能していたとみられる。（柳瀬）

溝15・16（第167・173・175・176図）

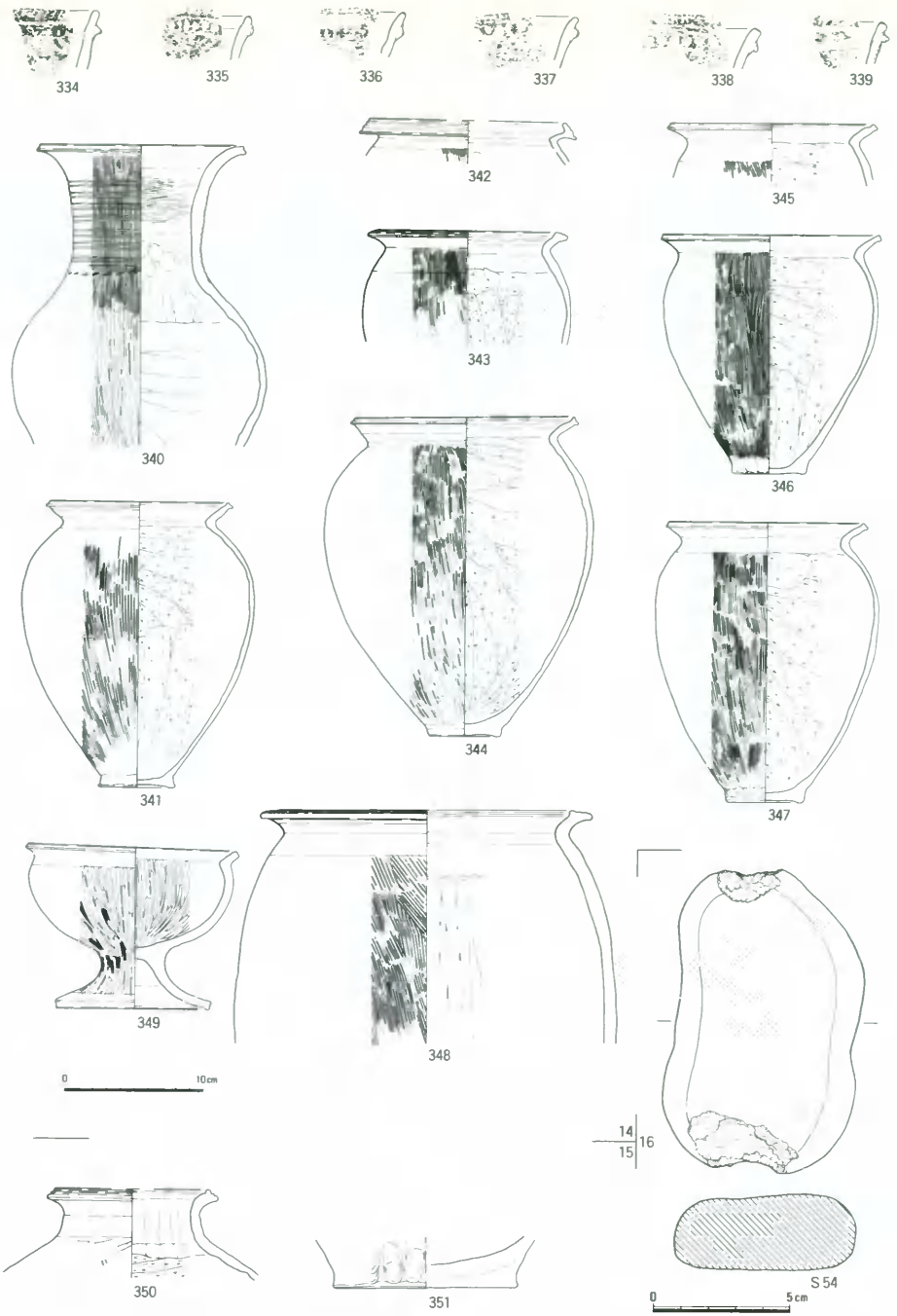
いずれも溝５の上部の北東寄りに重複して検出された溝である。南東側の半分以上を現代用水および弥生後期末水田によって削平され、さらに溝15の大半は溝16によって切断されているため、とくに溝15はわずかにその形跡を残すに過ぎない。溝15は現存幅0.8～1.5m、同約30cm、溝16は幅1.8～2.4m、深さ30～40cmを測る。ともに溝底のレベルに差はなく、標高約110cmを測る。断面の状況からすれば、溝16は溝15の改修溝で時期差もほとんどないと思われる。

遺物は溝15から突帯文土器片や中期壺小片、石錘等少量出土しているに過ぎない。溝16は突帯文土器片と弥生前期から後期前葉の土器片が比較的多く出土しているが、図示できる土器はほとんどない。

壺350から百･後･Ⅰの時期の溝とみてよい。（柳瀬）



第175図　213・４ⅢＡ区 断面（1／60）



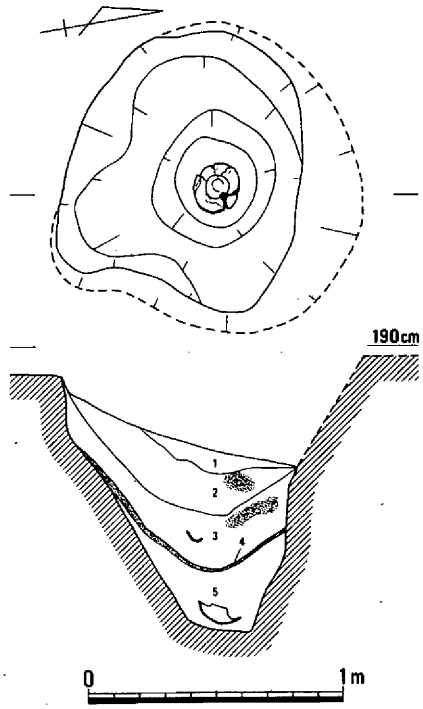
第176図　溝14～16 出土遺物

るものも少ない。甕は二重口縁でほぼ垂直に立ち上がる口縁端面にクシガキ沈線を施すタイプと、くの字口縁の二者がある。いずれも小振の甕で、口縁部の立ち上がりと開きの少ない坩とともに百・古・Ⅱの特徴を示す。　（柳瀬）

井戸３（第182・188図、図版８）

214ⅡＺ～ⅢＡ区に検出された不整円形の井戸である。弥生時代後期の溝14の掘り下げ中に、北側の肩部を大きく削平した段階で確認されている。径推定110～120cm、深さ１ｍ強を測る。堆積土層は４層に大別されるが、第３層と第５層の間には１～２cmの厚さの炭層が認められる。炭は第２・３層中にも部分的に含まれ、土層はいずれも中央に低く、凹レンズ状に堆積している。

遺物は、底部近くから比較的大きい甕の破片などが見つかっているが、胴部のみであるので図示していない。時期は、井戸２と大差はないと思われる。　（柳瀬）

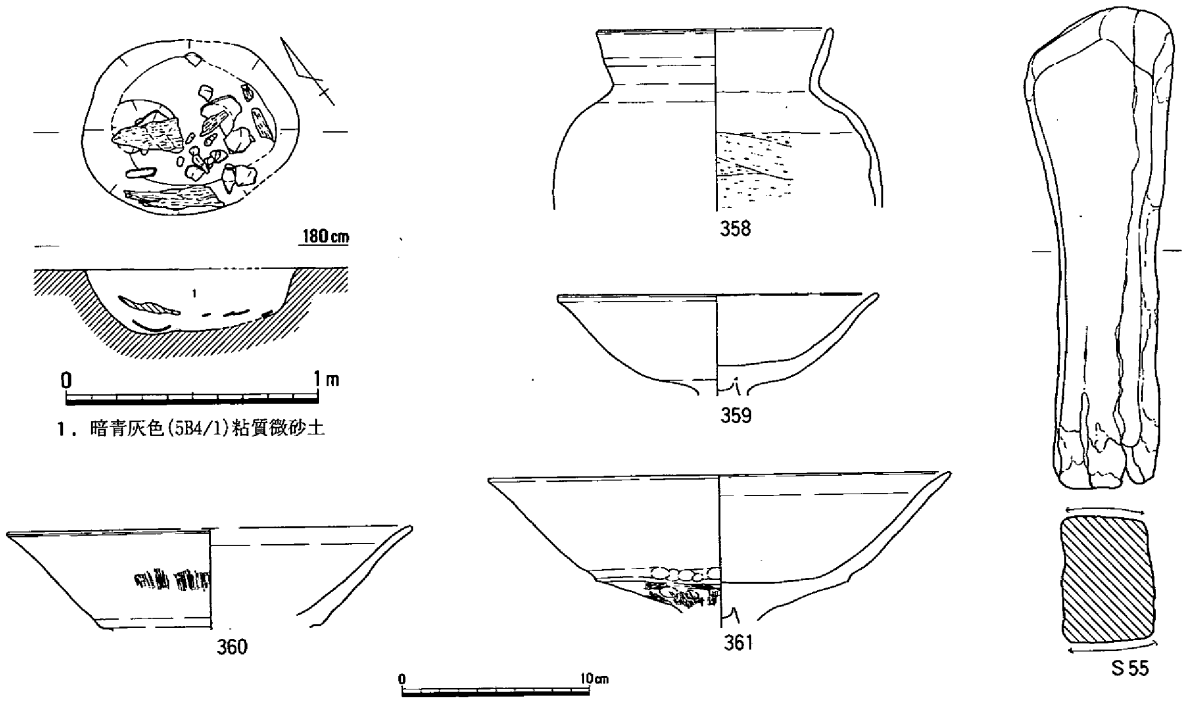


第188図　井戸３

(5)　土　　壙

土壙１（第182・189図）

214ⅡＷ区に位置する小土壙である。長軸86cm、短軸68cmの楕円形プランをもち、深さ約15cmを測る。水田１の肩部と水田層の一部を切って存在し、底部は水田層下部とほぼ等しい。埋土は単一で、底近くには土器や石器とともに、保存の良くない板状の木質が３～４片認められている。周辺には溝２本が検出され



第189図　土壙１、同出土遺物

小穴列である。南から北へわずかに下る緩斜面（６ｍで約30cm下る）にあり、２個１対の小穴が16ヵ所に認められている。小穴は、径10～20cm前後の円または楕円形を呈し、２個の間隔は接するか10cm前後離れるものが多い。小穴の深さは深いものでも10cm程度で、北に行くほど浅くなる。

遺構の形態から柵列と思われ、時期は土層関係からは古墳時代の前半と思われる。　（柳瀬）

(4) 井　戸

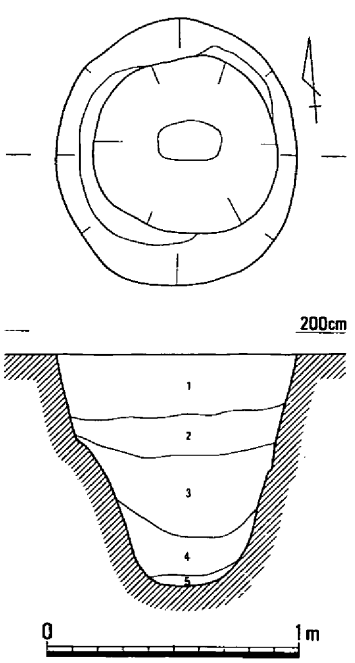
井戸１（第182・186図）

213ⅡＸ区の南端に位置する。径１ｍ前後のほぼ円形プランをもつ素掘りの井戸である。掘り方は比較的急傾斜で底部に至り、深さは90cm強を測る。埋土は５層に分別される。上部の第１・２層は黄灰色の粘土塊を多く含み、ほぼ水平堆積を示すため、人為的に埋められた可能性が強い。最下層の第５層は灰を多く含んでおり、隣接する井戸２の第４層に炭と灰が多いことと関連するかも知れない。遺物は土師器の細片が数点しか出土していないが、井戸２と同じ時期であろう。　（柳瀬）

井戸２（第182・187図）

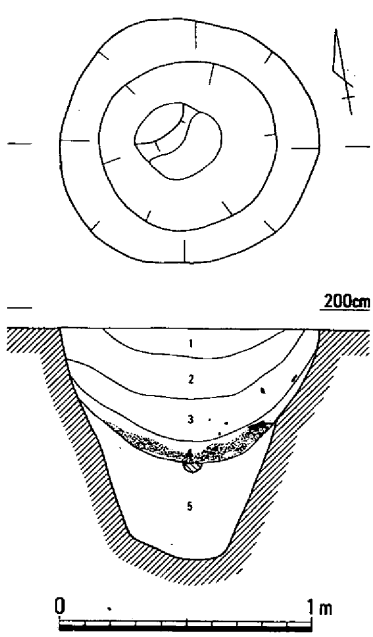
井戸１の北北東側に約２ｍ離れた位置に検出された、円形の素掘りの井戸である。径約１ｍ、深さ90cm強で、規模は井戸１とほとんど変わらない。埋土は５層に分かれ、中央に低い自然堆積が看取される。上部の第１～３層には井戸１と同様の粘土塊を含む。中位の第４層には上部に灰、下部に炭が多くみられ、この井戸が廃棄されたのち、あまり時が経過しない時期に井戸の周辺で火を使う何らかの行為があったことを想起させる。

遺物は、おもに第４層から上位に少量出土しているに過ぎない。土器はいずれも小片で、図示でき

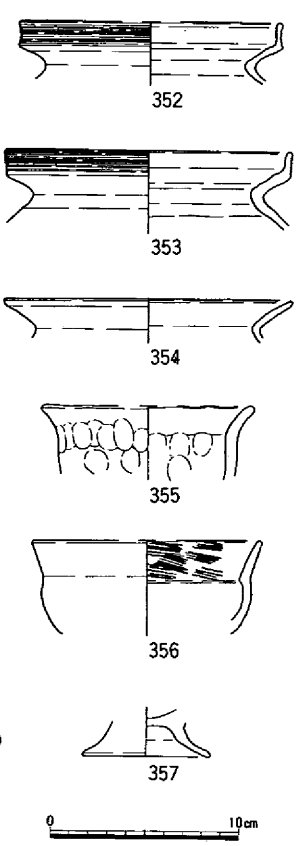


1．にぶい黄褐色弱粘質微砂土
2．にぶい黄色弱粘質微砂土
（黄灰色土ブロック含）
3．黄灰色粘質微砂土
4．黄灰色粘質土
5．灰色粘質土(灰を多く含む)

第186図　井戸１



1．黄灰色粘質微砂土(黄色ブロック含)
2．暗灰黄色粘質微砂土(黄色ブロック含)
3．灰黄褐色粘質微砂土(黄色ブロック含・炭粒含)
4．灰
5．オリーブ灰色砂質土

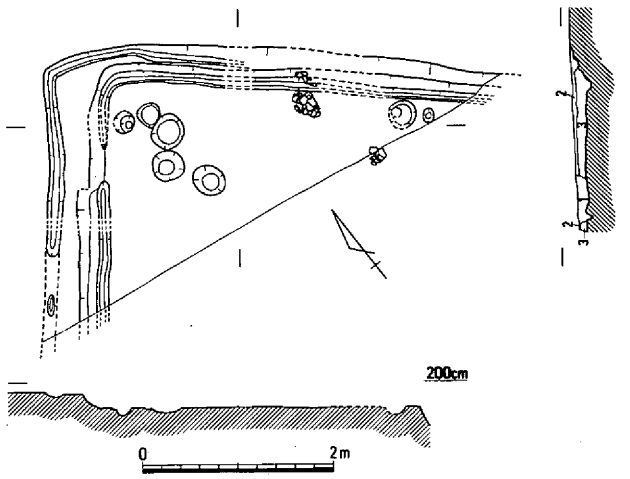


第187図　井戸２、同出土遺物

この住居は、214ⅡＹ～Ｚ区にまたがった位置に検出されたが、南側の約2/3以上を現代水路によって削平され、北側のコーナー部分しか残存していない。形態は方形であるが平面規模は不明である。

壁帯溝が二重に検出され、床面も２面確認されたことから、拡張住居であることは間違いない。床面に６～７個の柱穴状の落ち込みが認められたが、いずれも浅くまた位置関係からも該当する柱穴がない。

遺物は下部の床面近くから数片の土器片が出土しているが、百・古・Ⅱの時期位としか判定できない。　（柳瀬）



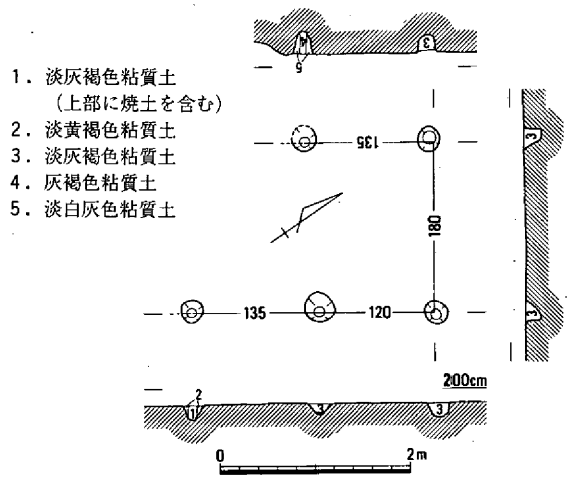
1．灰褐色(7.5YR4/2)、明褐色(7.5YR5/6)砂質土　2．灰褐色(7.5YR4/3)微砂質土　3．明褐色(7.5YR5/6)微砂質土

第183図　竪穴住居１

(2) 建　　物

建物１（第182・184図、図版８）

213ⅡＹ区の南西隅に検出された、２×１間の建物である。西隅の柱穴を現代溝によって失っているが、桁行255cm、梁間180cmの規模である。柱穴の径は柱穴４が約30cmのほかはいずれも25cm前後で、深さは約13～25cmを測る。周囲には10個程度の同規模の柱穴が散在するが、この建物以外にまとまるものはない。柱穴内の３片の土師器片から、竪穴住居１と同じ位の時期と思われる。　（柳瀬）

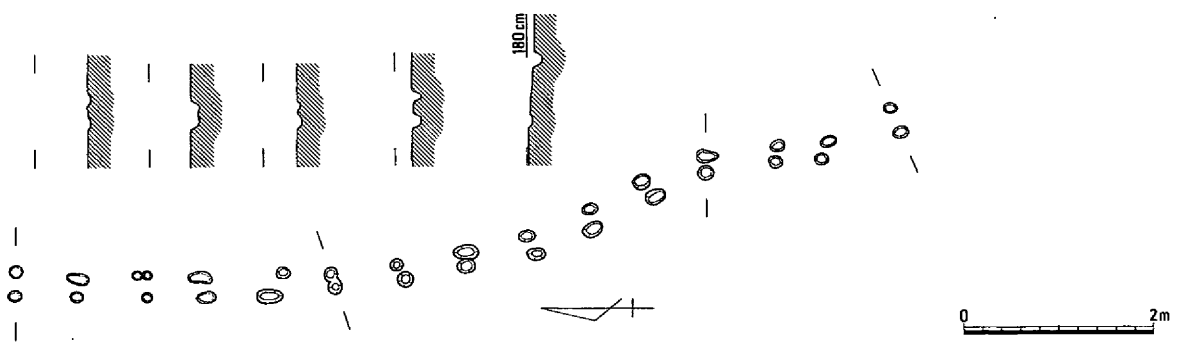


第184図　建物１

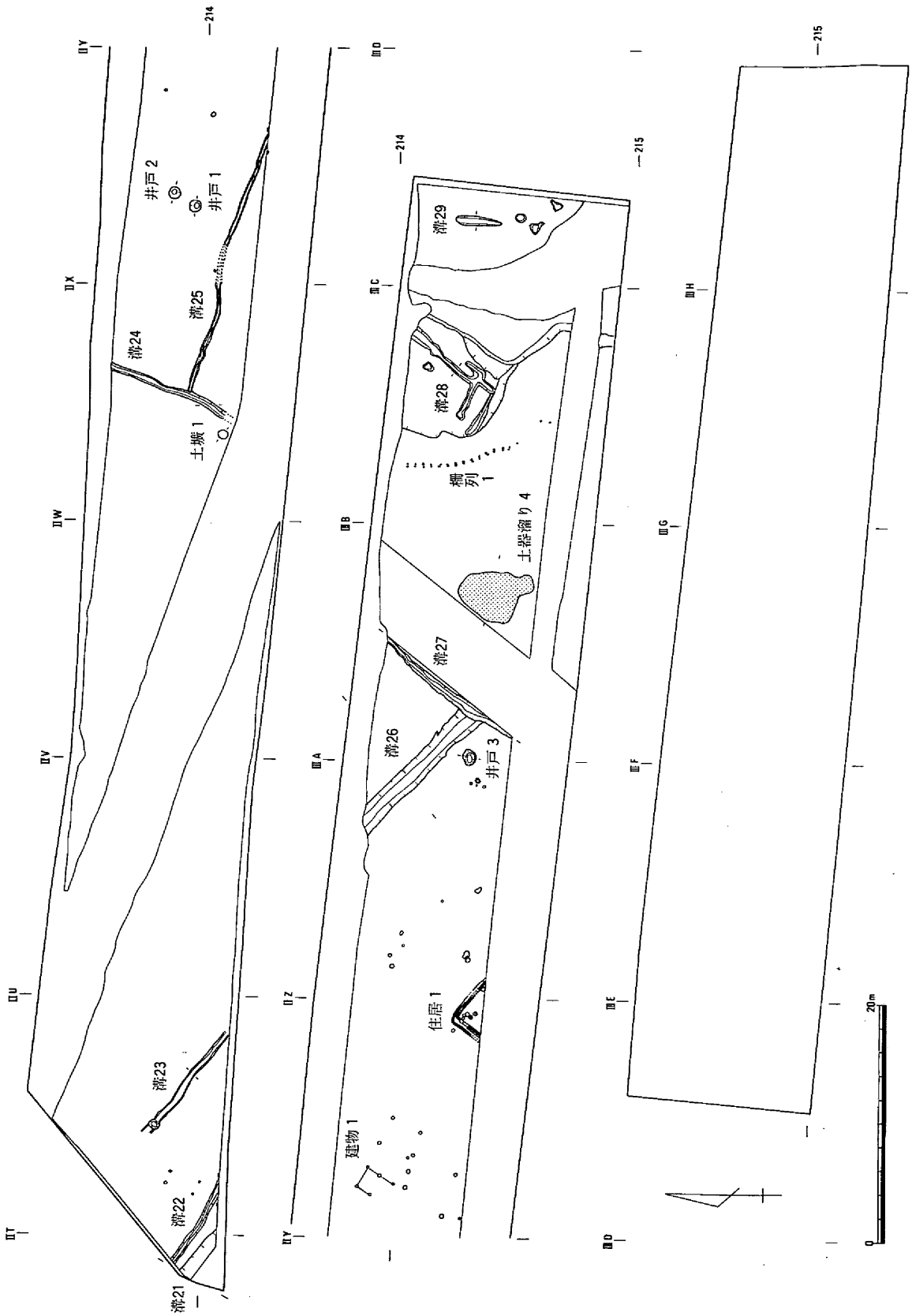
(3) 柵　　列

柵列１（第182・185図）

214ⅢＢ区で検出された、ほぼ南北方向の



第185図　柵列１



第182図　古墳時代 遺構配置（1／500）

(1) 竪穴住居

竪穴住居1（第182・183図）

小振（径３～６cm、深さ１～1.5cm）であることと、その配列にとくに規則性が見いだせない点に違いがある。また、アメーバー状の足跡らしき痕跡も認められるが、今一つ明確でない。　（柳瀬）

水路１＜溝19＞（第172・179図）

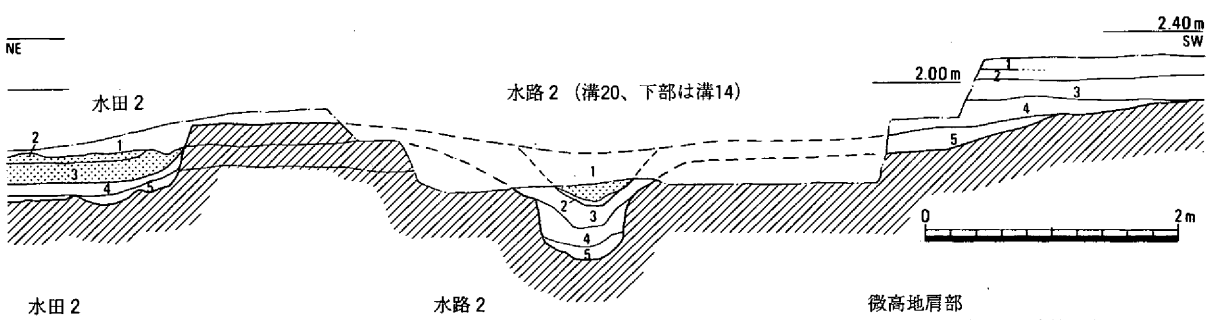
214ⅡＳ区の南東隅の溝群のうち、溝10・11の上層で溝24の下層に検出した。溝の上面は現代溝によりかなり削平されていた。検出規模は、全長４m、幅1.4～１.9m、深さ40～50cmで若干南に向かってカーブしている。断面はU字形を呈し、明るい褐灰色の砂質土の堆積である。水路の底面は検出部分では標高1.3m程で、高低差は認められなかった。この溝は、弥生後期末の洪水砂により埋没した水田１・２などと同様の砂質土が堆積していることから、水田と同時存在した用排水路と考えてよい。溝の南側は調査区外に延びるが、北西側は「百間川沢田遺跡３」の溝183に接続する。　（山磨）

水路２＜溝20＞（第167・175・179・181図）

214ⅡＺ～ⅢＡ区の溝14の上部に重複し、洪水砂が埋没した状態で検出されている。中央から南東側の多くを現代水路等で削平され、その部分では底部近くが辛うじて残存していた。幅1.5m、深さ50～60cmを測り、溝底の標高は全体に110cm前後で大差はない。

この溝は、水田面を広く覆った洪水砂と同じ砂で埋没しているところから、同時に廃絶、つまりは同時に存在していたことになる。位置関係からいえば、水田区画１への分水が認められないため、下流の南東から東部分に拡がる水田に配水する幹線水路の一つとみられる。なお、第181図断面位置での区画１の水田面は標高約120cm、水路２の底面は同約105cmを測り、15cm後者が低い。

溝に埋積した洪水砂中には突帯文土器片や弥生後期土器片が少量含まれるが、溝が機能していた時期は、同じ状況下にある水田と同時期の百・後・Ⅳ期とみて間違いない。　（柳瀬）



水田２
1．褐灰色粘質土
2．淡黄灰色弱粘質砂(洪水砂)
3．灰色砂(洪水砂)
4．暗灰色粘質土(水田層)
5．灰色＋青灰色粘質土(溝17-2)

水路２
1．暗緑灰色(7.5GY4/1)砂質土
2．暗緑灰色(10GY4/1)粘質土(炭多)
3．暗緑灰色(10GY3/1)粘質土
4．暗緑灰色(10GY3/1)粘質土
5．暗緑灰色(10GY4/1)粘質土

微高地肩部
1．灰白色(2.5Y7/1)粘質微砂
2．灰黄色(2.5Y7/2)粘質微砂
3．灰褐色(7.5YR5/2)粘質微砂
4．暗青灰色(5BG4/1)粘質微砂
5．暗青灰色(5BG4/1)粘質土

第181図　水田２・水路２　相関断面

５．古墳時代の遺構・遺物

この時期の遺構は、竪穴住居・井戸・土壙・溝・土器溜りなどが少数検出されている。いずれも古墳時代前期の遺構と思われ、おもに微高地上に散在している。調査区のうちⅢＤから東については、地形的に低位部に当たり、さらに後世の古代～中世の比較的大きな溝が調査区の多くを占め、それらに削平されているためか、遺構は見つかっていない。

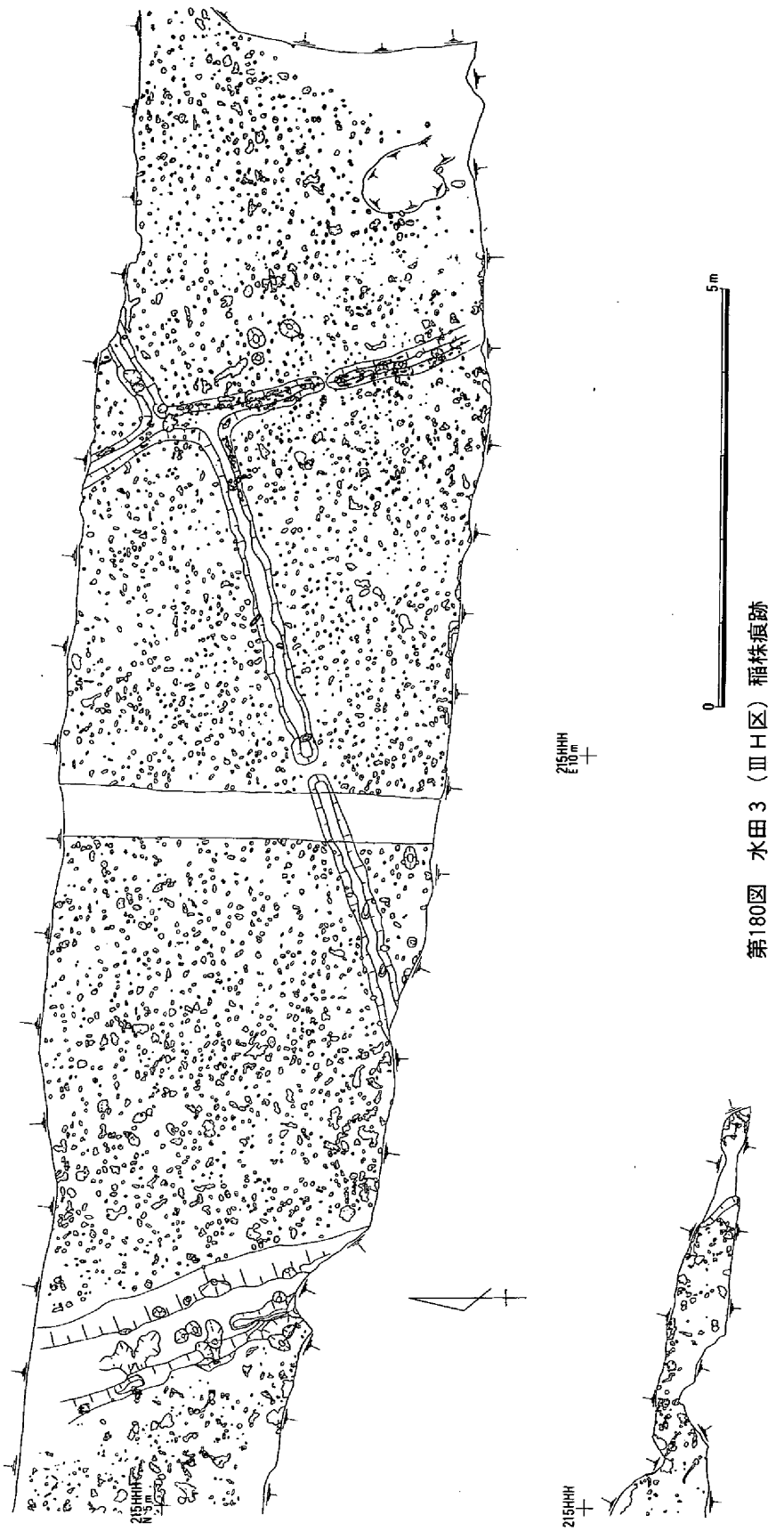
遺物は、土器そのものも溝26および土器溜り４以外は極めて少ない。注目される遺物として、加工された石杵が包含層から出土している。遺構と同様、後期の遺物もほとんど見られない。　（柳瀬）

水田３（第179・180図、図版８）

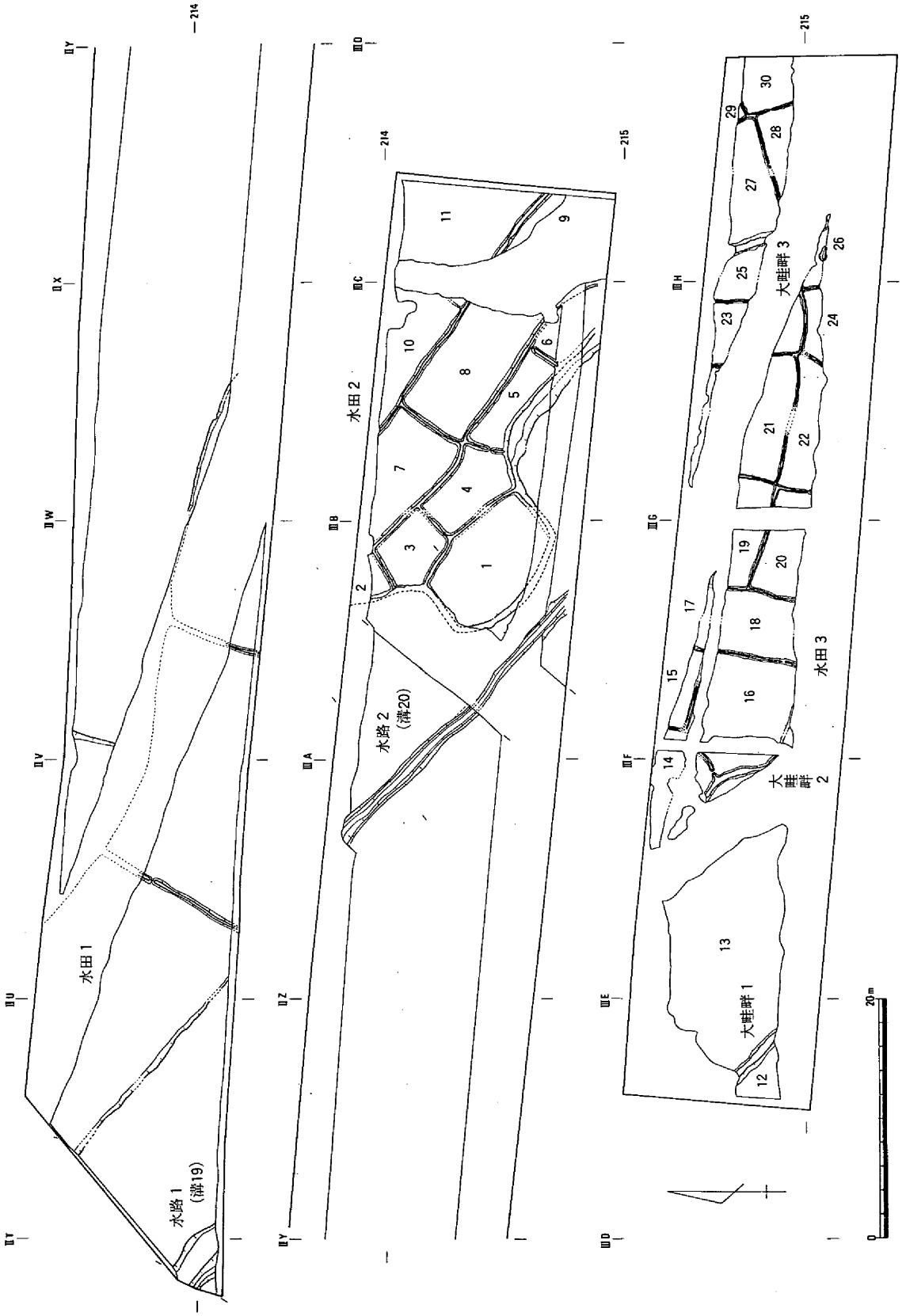
この水田域は、水田２の東側の214ⅢＤ～Ｈ区に拡がりをもち、水田２と同一の拡がりの中で捉えられるが、ⅢＣ～Ｄ区の一部に未調査区があるため水田３とした。

水田面の約半分の面積は、おもに古代から中世の溝31～33によって掘削を受けている。水田は幅約１ｍ、高さ15～20cmの３本の大畦畔と幅35cm前後、高さ約５cmの小畦畔とで区画されている。水田区画は18区画までは確認できるが、区画面積はかろうじて区画16の約66㎡が推定されるに過ぎない。水田面の標高は、区画12が約108cm、同13が約122cm、同21が127cm、同22が約122cm、同26が約112cm、同27が約110cmを測り、大畦畔２から西については南西に下る地形に、東については北ないし北東に下る地形にそれぞれ占地していることがわかる。

田面にはおもにⅢＦ区から東で、稲株痕跡などが無数に検出されている。痕跡のとくに顕著なⅢＨ区について第180図に示したが、百間川原尾島遺跡例や同今谷遺跡例よりやや

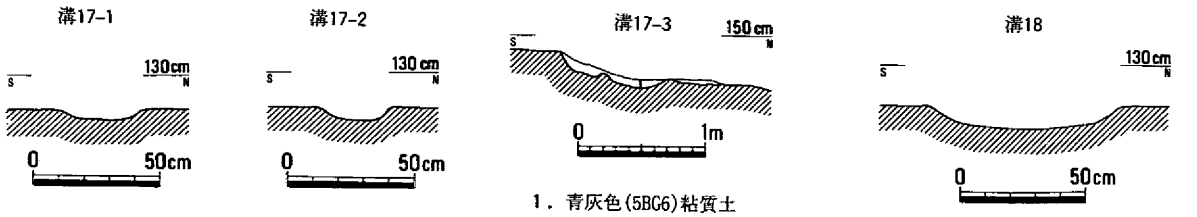


第180図　水田３（ⅢＨ区）稲株痕跡



第179図　弥生時代後期末 水田・水路

水田面は約25cmの洪水砂に覆われ、これが百間川遺跡群を広く覆う洪水砂と同じであることから、水田の廃絶の時期は百・後・Ⅳ期とみて間違いない。ただ、開田の時期については、区画１が溝15・16を切って存在することからすれば、後期前半以降としかいえない。　（柳瀬）



第177図　溝17～18 断面

溝17（第173・177図）

214ⅢA・B区の、微高地と後期末水田との境の水田層下部で検出されている。幅約30～40cm、深さ約５～６cmを測る。溝は途切れる部分もあるが、微高地裾部の水田開墾時の痕跡とみられる。

遺物は突帯文土器片が数片出土しているのみであるが、百・後・Ⅲ期頃と考えてよい。　（柳瀬）

溝18（第173・177図）

214ⅢH区西寄りのほぼ南北方向の溝である。水田３の大畦畔３の西側に接して、水田層下で見つかった。北端を低水路、南端を溝32等で切られている。幅約80cm、深さ約10cmを測る。

遺物は出土していないが、後期末水田に遡る時期の用水路の可能性が強い。　（柳瀬）

(2) 水田・水路

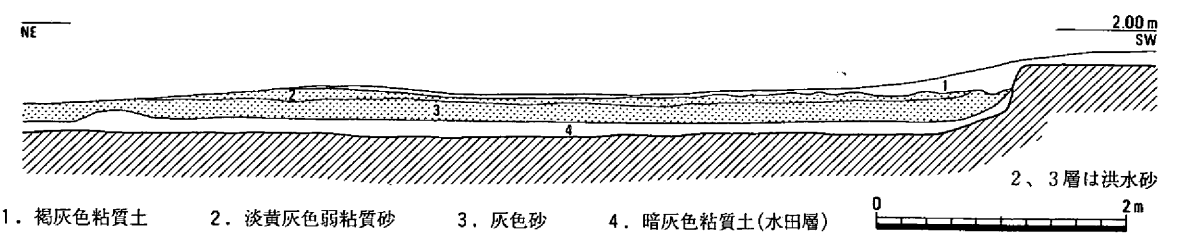
水田１（第178・179図、図版７）

213・214ⅡT～ⅡW区に検出した洪水砂埋没の水田である。地形的には、北西から南東方向に検出した弥生中期の溝１の上部に位置する。水田跡は、既に低水路や現代用水路により大きく削平されている。水田面の２ヵ所に幅50cm、高さ５～10cmの小畦畔が検出され、水田区画は３区画認められた。田面は下部の溝１の中央方向に向かって若干沈み込んでいるが、いずれも標高1.3～1.5m程で明瞭には差が認められない。微高地と田面の比高差は約30cm、水田層の厚さは15cm前後を測る。　（山磨）

水田２（第178・179図、図版７）

214ⅢA～ⅢC区に拡がりをもち、地形的には微高地裾部から低位部（旧河道１の上部）にかけて立地する。北側を低水路に削平され、調査区内においても微高地側の水田肩部の大部分は現代水路等で、またⅢCライン付近では水田面の一部が中世の溝33でそれぞれ掘削を受けている。

調査区内では10～11の水田区画が認められ、いずれも幅50cm弱、高さ５～８cmの小畦畔で区画されている。区画は微高地に沿って細長い形態が看取され、区画１を除き微高地に近いほど幅が狭い。これは、微高地の裾部が河道上部より傾斜が急であることを示す。水田面の比高でいえば、区画５と区画８（中央で標高約100cm）で約20cm、区画８と区画10で約10cmの差がある。また水田一区画の最小は区画５で、約23m²を測る。水田層の厚さは８～10cm、弥生後期の土器片が少量出土している。



第178図　水田２ 断面

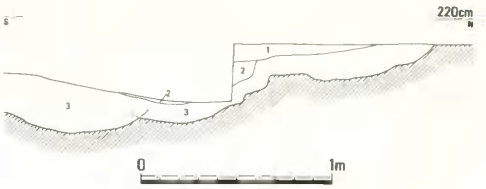
ているのみで、土壙・柱穴類は皆無である。

遺物は壺（甕）・高杯・砥石が出土しており、土器の特徴は百・古・Ⅲの時期を示す。　（柳瀬）

(6)　溝

溝21（第182・190図）

214ⅡS区の南東隅に検出した重複する溝群の1本で、南側の掘り方を現代溝により削平されているため幅は不明瞭である。検出長4.6m、最大深さ20cm程である。断面は浅い皿状を呈し、にぶい黄褐色の砂質土が堆積している。溝の流走方向は明瞭でない。



1．にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土(溝21)
2．明褐灰色(7.5YR7/2)砂質土　　3．灰黄褐色(10YR4/2)砂質土

第190図　溝21 断面

時期は、検出状況や埋土等から古墳時代前半であろう。　（山磨）

溝22（第182・191図）

213・214ⅡS・ⅡT区に検出された溝で、北西から南東方向に走る。下層には溝10の掘り方の一部が来る。規模は検出長8m、幅50cm、深さ6～11cmである。断面は浅い皿状を呈し、暗灰黄色の砂質土が堆積している。溝底面の高低差はほとんどない。時期は、検出状況等から古墳時代の前半と考えられる。　（山磨）

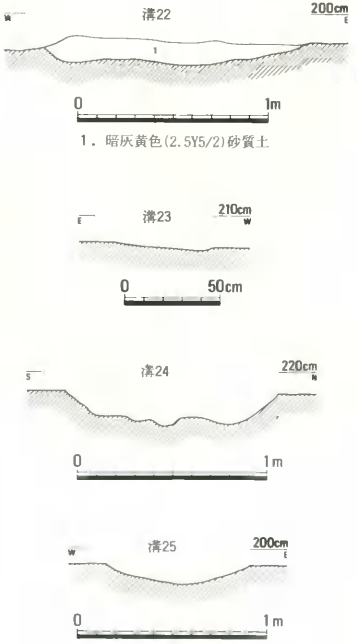
溝23（第182・191図）

213・214ⅡT区に検出した北西から南東方向の溝である。検出長11.4m、幅50～60cm、深さ平均8cm程の浅い溝である。断面は浅い皿状を呈し、緑灰色の弱粘質土が堆積している。溝底面の高低差はほとんどなく、流走方向は不明である。

時期は、溝24・25と大差はないと思われる。（山磨）

溝24（第182・191図）

213・214ⅡW区に検出された、ほぼ南北方向の溝である。北側を低水路、南側を現代水路で削平されている。幅約110cm、深さ約20cmを測り、底部はいくらか凹凸が見られる。溝底のレベルは南端で標高188cm、北端で同181cmを測り、北に下る。埋土は黄褐色の粘質土で、遺物はないが、土層関係から百・古・Ⅲくらいか。(柳瀬)



第191図　溝22～25 断面

溝25（第182・191図）

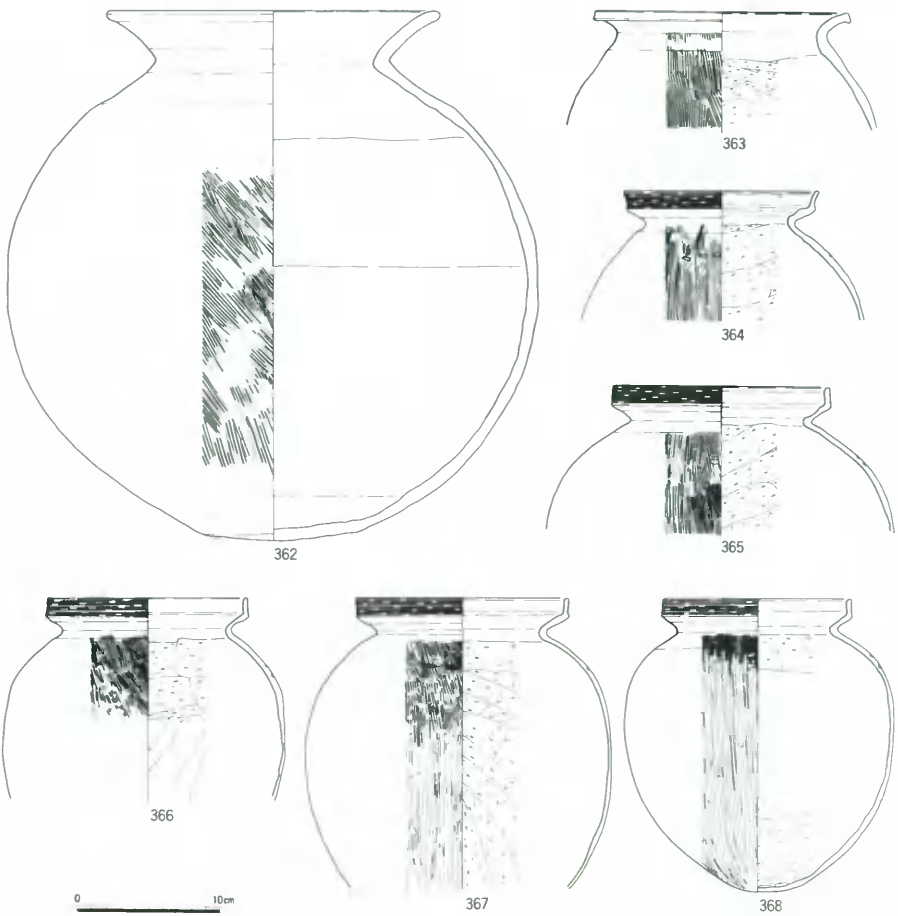
213・214ⅡW・ⅡX区に長さ約22mに渡って検出された。ほぼ東西方向の溝で、東端は現代溝で切断されているが、西端は溝27に繋がっている。幅約80cm、深さ約10cmを測り、溝底のレベルは全体に

標高182cm前後で、わずかに西に下る。埋土・遺物の状況も溝24と差がなく、同時期と思われる。

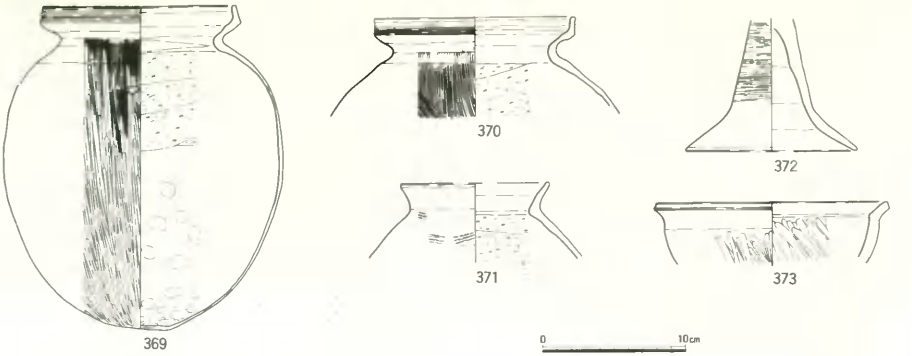
（柳瀬）

溝26（第167・182・192・193図、図版11）

213・214ⅡＺ・ⅢＡ区の溝20の上部にほぼ重複して検出されている。幅180cm前後、深さ約30cmを測る。溝底の標高は約135cmを測る。埋土の灰色微砂質土中にはとくにⅡＺ区において、完形に近い壺・甕が潰れて、底から20cm以上浮いた状態で出土している。これは土層関係お



第192図　溝26、同出土遺物(1)



第193図　溝26 出土遺物(2)

よび当時の地形でいえば、用水路として機能していた溝20が、百・後・Ⅳ末に洪水砂によって埋没して廃絶したのち、その上部が埋まりきらず溝状に窪んだ部分に遺物が落ち込んだ状況を示している。

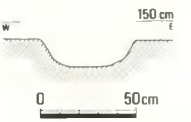
出土遺物は、壺・甕のほか高杯・小鉢片が認められたが、個体数は甕、それも二重口縁をもち拡張部外面にクシガキ沈線を施し、ほとんど丸底化した甕が圧倒的に多い。それらの特徴から、百・古・Ⅱの時期に溝（窪み）が埋まったものと思われる。（柳瀬）

溝27（第175・182図）

213・214ⅢA区の北東－南西方向の溝である。部分的に現代水路に削平されているが、溝26とほぼ直交し、同溝を切断して存在する。幅30cmから広い部分で約１m、深さ10cm前後を測る。遺物は土師器甕片が比較的多く出土しているが、図示できるものはない。時期は百・古・Ⅱ～Ⅲ位か。（柳瀬）

溝28（第182・194図）

214ⅢB区で検出された複数の溝の集合である。幅30cm～１m、深さ約15cmを測る。周辺は旧河道上の弥生後期水田のさらに上部にあたり、地形的には南西から北東に向かって標高を減じる。溝は同方向に流下し北東端は低水路によって切断されている。遺物は突帯文の細片しか出土していないが､検出レベル等から古墳時代前葉と思われる。（柳瀬）



第194図　溝28 断面

溝29（第182・195図）

214ⅢC区で検出された南北方向の溝である。長さ約４m、幅20～80cm、深さ約10cmを測る。埋土中に多数の木片や田下駄らしき板片が混入していたが、土器は出土していない。溝31とほぼ同様の地形上に占地していることと検出レベル等から、古墳時代の溝と考えられる。（柳瀬）

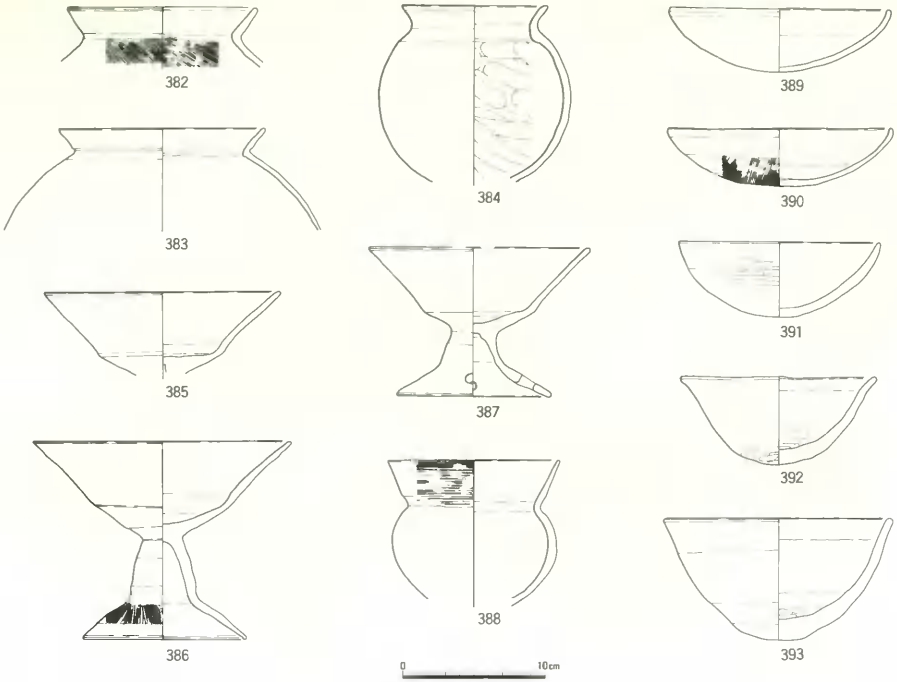
第195図　溝29、杭列１

(7) 土 器 溜 り

土器溜り４（第182・196・197図、図版11）

214ⅢＡ区の微高地端部に検出され、土層的には水田２を覆った洪水砂の上部層に包含されている

第196図　土器溜り４　同出土遺物(1)



第197図　土器溜り４　出土遺物(2)

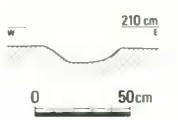
土器溜りである。土器は約５×6.5mの不整円形の範囲に認められ、地形的には微高地端部から低位部にかかる北にわずかに下る緩斜面に位置する。細かくは、東西方向では中央に向かってわずかに窪んだ地形に、土器片が溜まった状態であることも看取される。土器の散布は比較的粗であるが、完形に近い土器、あるいは大振の土器片が潰れて散在した状態を示す。

土器は、壺・甕・高杯・鉢・坩などの器種を満たし、甕の中でも二重口縁で外面にクシガキ沈線を施す甕が多い。壺は二重口縁の374と逆ハの字状に長く立ち上がる口縁の375などがあり、完形近くに復元された甕377の底部が完全に丸底化しているなど、百・古・Ⅱの特徴といえよう。　（柳瀬）

６．古代・中世の遺構・遺物

この時期の遺構はおもに溝で、ⅢＢ～Ｈ区に検出されている。とくに溝の３本は調査区の長辺にほぼ沿って東方向に流走し、ⅢＨ区以東の百間川兼基遺跡に繋がる比較的大形の溝である。

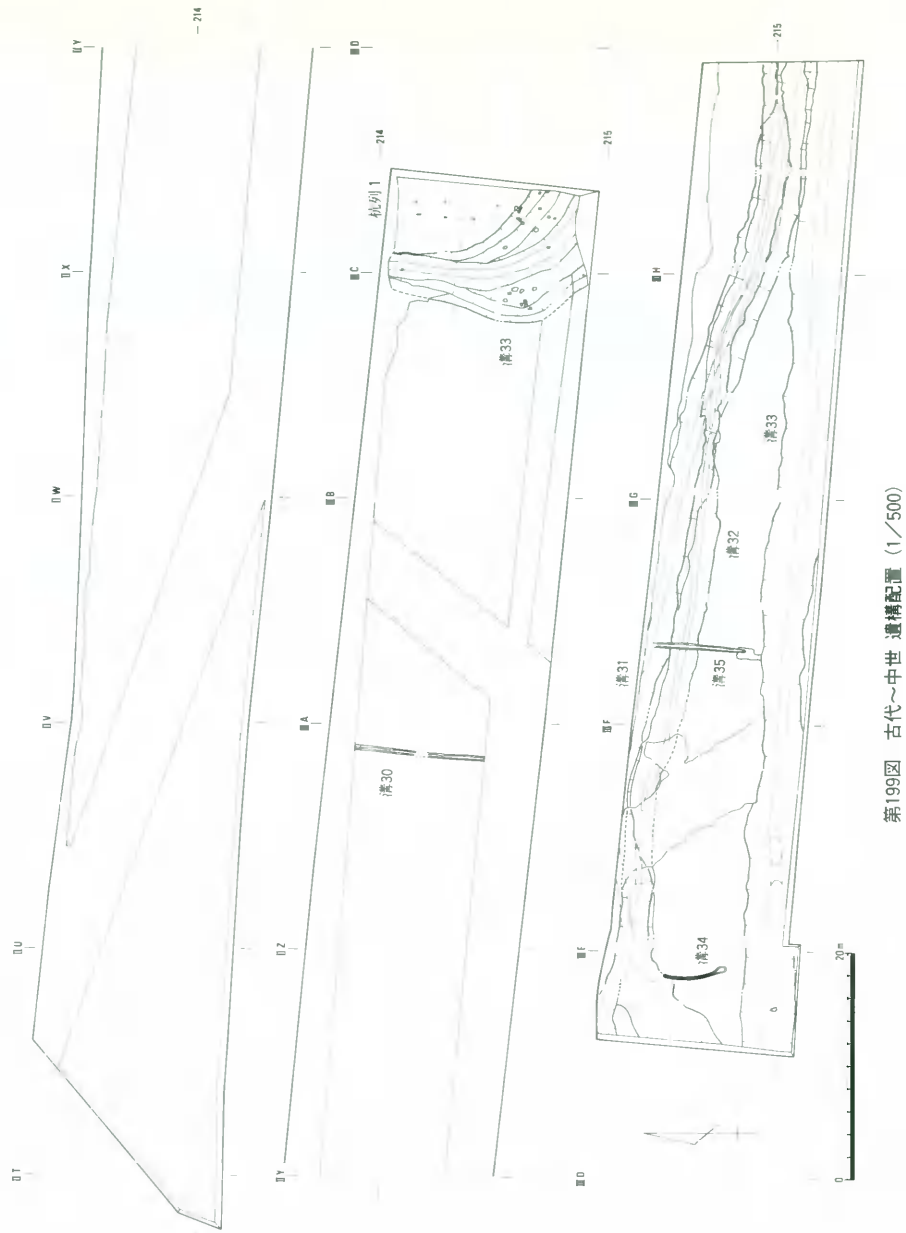
遺物も大形の溝に多い。とくに、平安時代後半の溝31には土器類とともに獣骨（ウマ）がまとまって出土し、注目される。量的には鎌倉時代前半の溝33に土師質の椀・皿、瓦器椀・皿などが多く出土している。　（柳瀬）



第198図　溝30 断面

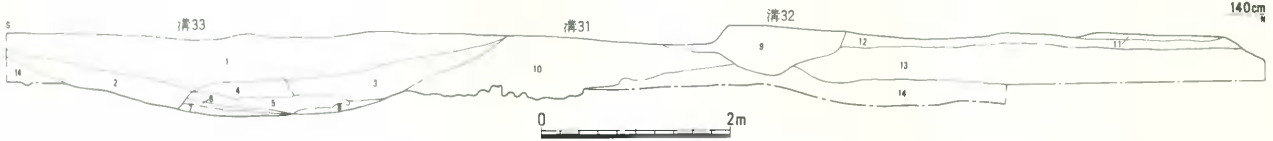
1　溝

溝30（第198・199図）



第199図　古代～中世 遺構配置（1／500）

214ⅡＺ区で検出された、ほぼ南北方向に延びる溝である。検出面での全長は約11.5m、幅40cm、深さ10cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。遺構の両端は現代の溝によって削平され、検出できなかった。遺物を伴わないので時期を決することはできないが、検出面から中世と考えられる。（根木）

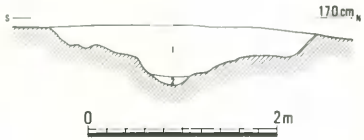


1．暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘質土
2．暗オリーブ灰色(10GY5/1)粘質土
3．暗オリーブ灰色(10GY5/1)粘質土
4．緑灰色(10GY5/1)砂質土
5．暗緑灰色(10GY4/1)砂質土
6．緑灰色(10GY5/1)弱粘質土
7．緑灰色(10GY5/1)砂質土
8．暗緑灰色(10G4/1)粘質土
9．灰色(10Y5/1)粘質土
10．オリーブ黒色(10Y3/2)粘質土
11．灰オリーブ色(5Y5/2)砂質土〈弥生後期末洪水砂〉
12．暗青灰色(5BG4/1)粘質土〈弥生後期水田層〉
13．青灰色(5BG5/1)粘質土
14．暗緑灰色(10GY4/1)粘質土

第200図　溝31～33 断面（ⅢH区東端）

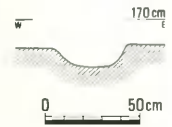
1．灰白色(5Y8/2)砂質土
2．オリーブ灰色(5GY6/1)弱粘質土
3．オリーブ灰色(2.5GY6/1)粘質土
（鉄分・マンガン多含）
4．灰色(7.5Y6/1)粘質土
5．灰白色(N7/1)砂質土
（洪水砂層）
6．緑灰色(10G6/1)砂質土
（洪水砂層）
7．緑灰色(5G5/1)強粘質土

第201図　溝31・32 断面

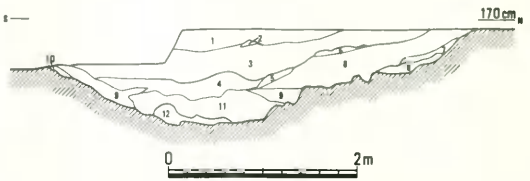


1．黄灰色(2.5Y5/1)微砂質土
2．黄灰色(2.5Y5/1)微砂質土(粗砂多量)

第202図　溝32 断面



第204図　溝35 断面



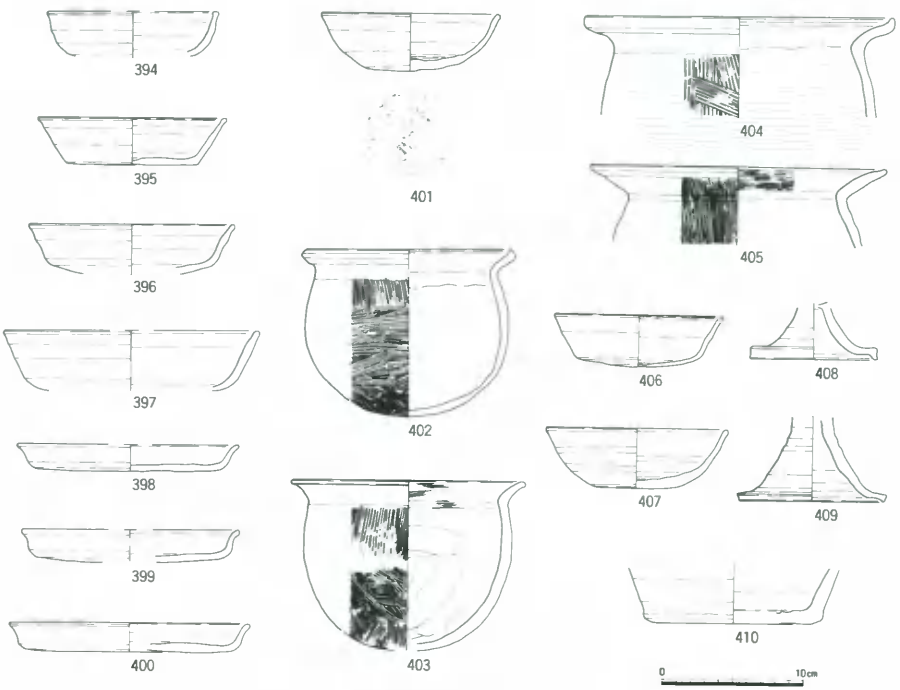
1．灰色(7.5Y7/1)粘質微砂
2．灰色(N5/0)粘質土
3．褐灰色(10YR6/1)粘質土
4．灰色(N5/0)粘質土
5．青灰色(5B5/1)粘質土
6．褐灰色(10YR6/1)粘質土
7．灰色(N5/0)粘質土
8．緑灰色(5G5/0)砂質土
9．青灰色(10BG6/1)粘質土
10．褐灰色砂質土(粘土混じり)
11．青灰色(10BG5/1)砂質土
12．粗砂

第203図　溝33 断面（ⅢF区中央）

溝31（第199～201、205・206図、図版９・12）

214ⅢＤ区から214ⅢＨ区で検出された、東側の兼基遺跡から続く東西方向に流走する溝である。溝の東端は溝33と重なるように流走している。西端は広いたわみ状に広がり、溝の始点を思わせる。検出面での幅は４～５ｍ、深さは70㎝を測り、その壁は緩やかに立ち上がる。埋土はオリーブ黒色の粘質土である。また214ⅢＤ・Ｅ区の底面から馬の頭骨と大腿骨が出土しており、水辺における祭祀の跡と考えられる。

第205図　溝31（ⅢＤ・Ｅ区）遺物出土状態

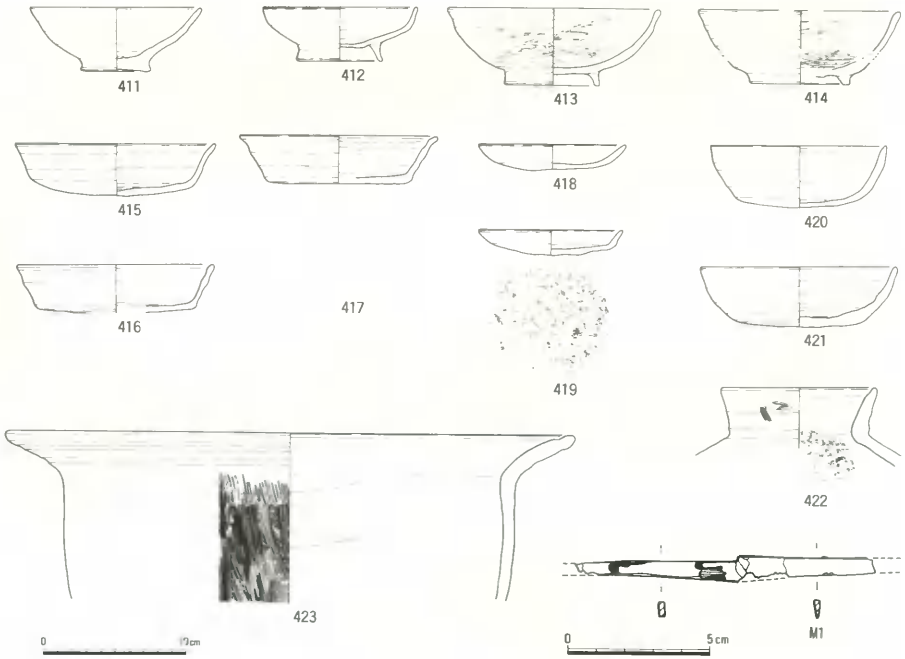


第206図　溝31 出土遺物

遺物は、土師器杯（394～397）・皿（398～400）・甕（402～404）、須恵器杯（401・406・407）・高杯脚部（408・409）・壺底部（410）など多岐にわたり、時期的には古代末の様相を呈しているが、溝32・33などに切られていることから、最終的に埋没したのは12世紀代と考えられる。（根木）

溝32（第199～202、207図、図版９・12・16）

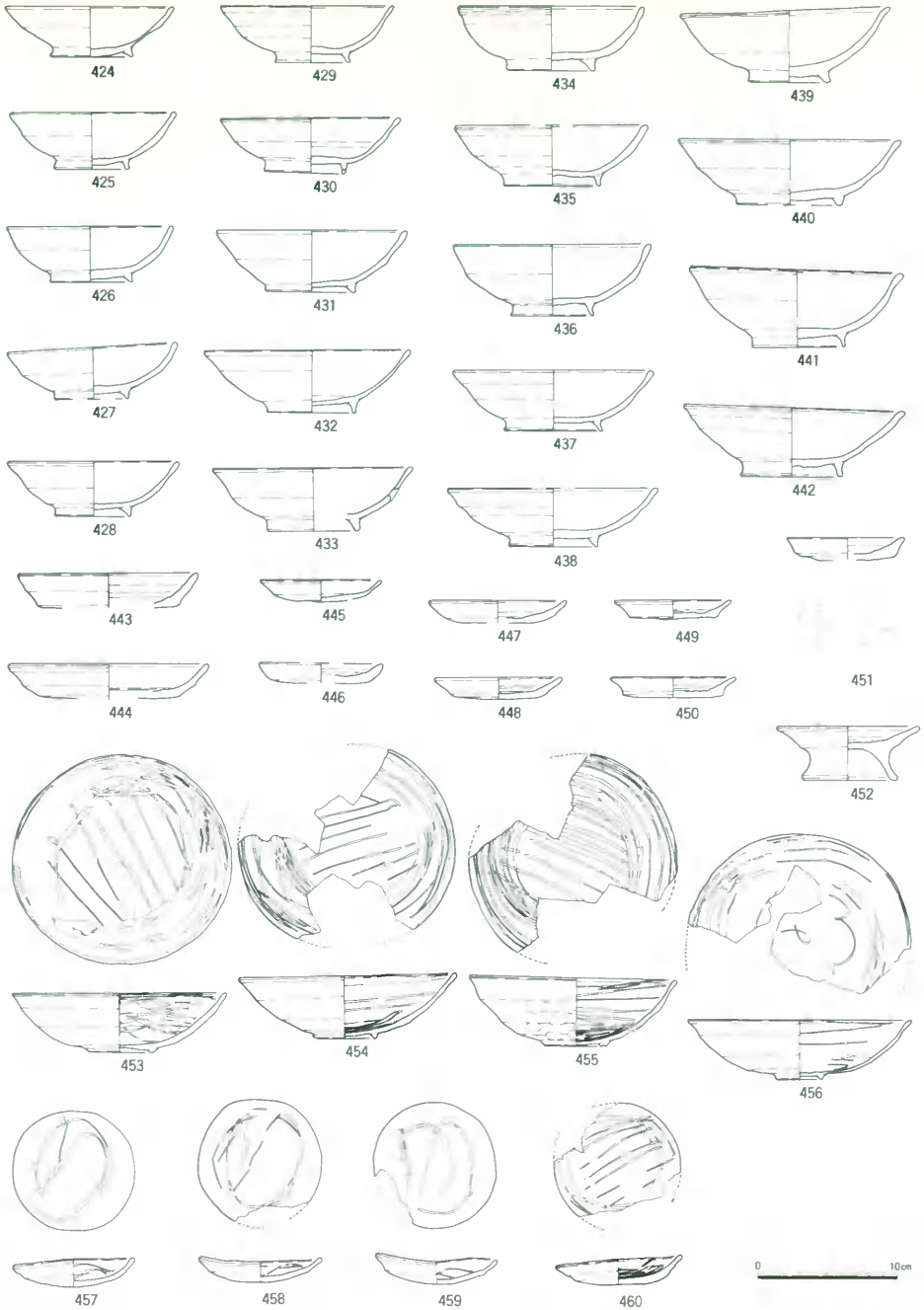
前述の溝31と重なり合うように流走する東西方向の溝である。土層断面の観察では、溝31の埋没後に溝32が再び掘られているようである。しかし溝31がたまり状になる214ⅢＥ区付近では検出できなくなってしまう。検出面での幅は２～2.8m、深さは、最も深いところで60cmを測る。壁は底面付近は比較的緩やかであるが、肩部付近では急斜をなす。埋土は黄灰色の微砂質土で、最も深いところには同色の粗砂が大量に埋没していた。出土遺物は土器が土師器椀（411～413）・杯（415～417）・皿（418～419）・鍋（423）、須恵器横瓶（422）、黒色土器椀（414）など、鉄器は刀子（M１）が１点出土している。時期は12世紀後半と考えられる。（根木）



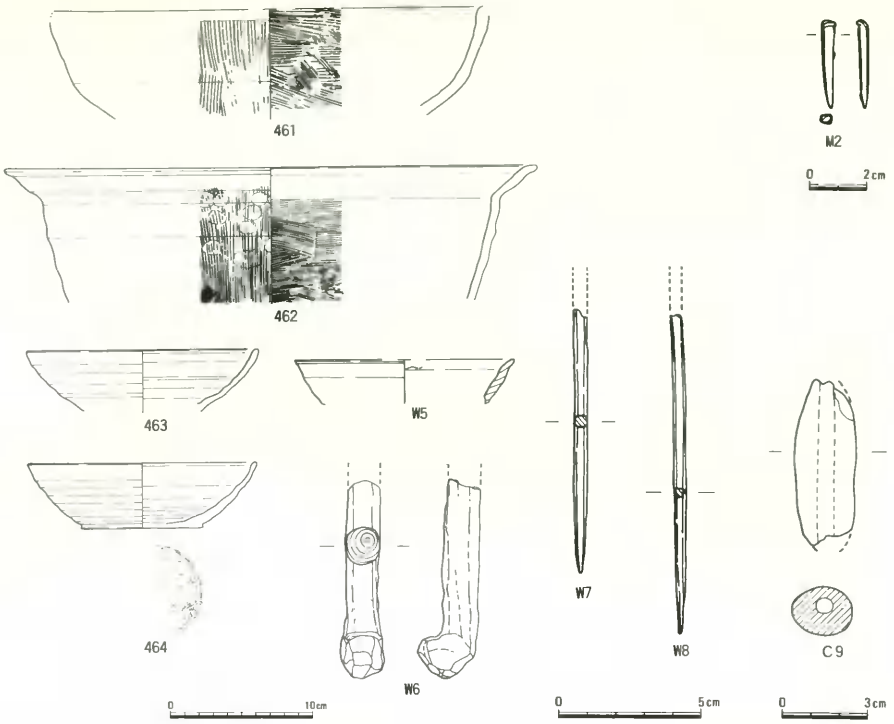
第207図　溝32 出土遺物

溝33（第199・200・204・208・209図、図版９・12・16）

214ⅢＢ・Ｃ区の調査区境から東側の兼基遺跡に続く溝である。溝の南側の肩は調査区外に位置する。溝は全調査区内で東西方向に流走しているが、未調査区を含む214ⅢＣ区でほぼ北へ流走方向を変更している。これは操山丘陵から延びる微高地が西側に形成された自然条件によるものと考えられる。また溝の上部には近現代の用水路がほぼ踏襲するかのようにつくられており、地形的にも若干低くなっていたものと考えられる。溝の規模は場所によって違いは見られるが、ほぼ丸くなっている。



第208図　溝33 出土遺物(1)



第209図　溝33 出土遺物(2)

壁は底部から急斜で立ち上がる。

遺物は土器片と土製品、木製品、鉄器が多数出土した。土器は、土師器椀（424～442）、皿（443～451）、高台付皿（452）、鍋（461・462）、瓦器椀（453～456）、皿（457～460）、須恵器椀（463・464）などである。土製品は、土錘が１点出土している。長さ59.5㎜、最大幅21.5㎜、最大厚17㎜、重さ19.15ｇを測る。木製品は、鎌の柄部分と思われるもの（W６）と、頭部を欠損した一対をなすと思われる箸（W７・８）、椀（W５）がある。鉄器は小型の釘（M２）が出土している。

時期は、土師器・瓦器の椀の型式から12世紀後半以降と考えられる。（根木）

溝34（第199図）

214ⅢＤ区で検出された溝で、若干弧を描きながら南北方向に流走する。全長６ｍを測り、南端は平たい窪み状を呈す。削平等により上部を消失した溝の底部ではないかと考えられる。幅20cm、深さ10cmを測る。遺物は出土していないが、検出面から中世以降と考えられる。（根木）

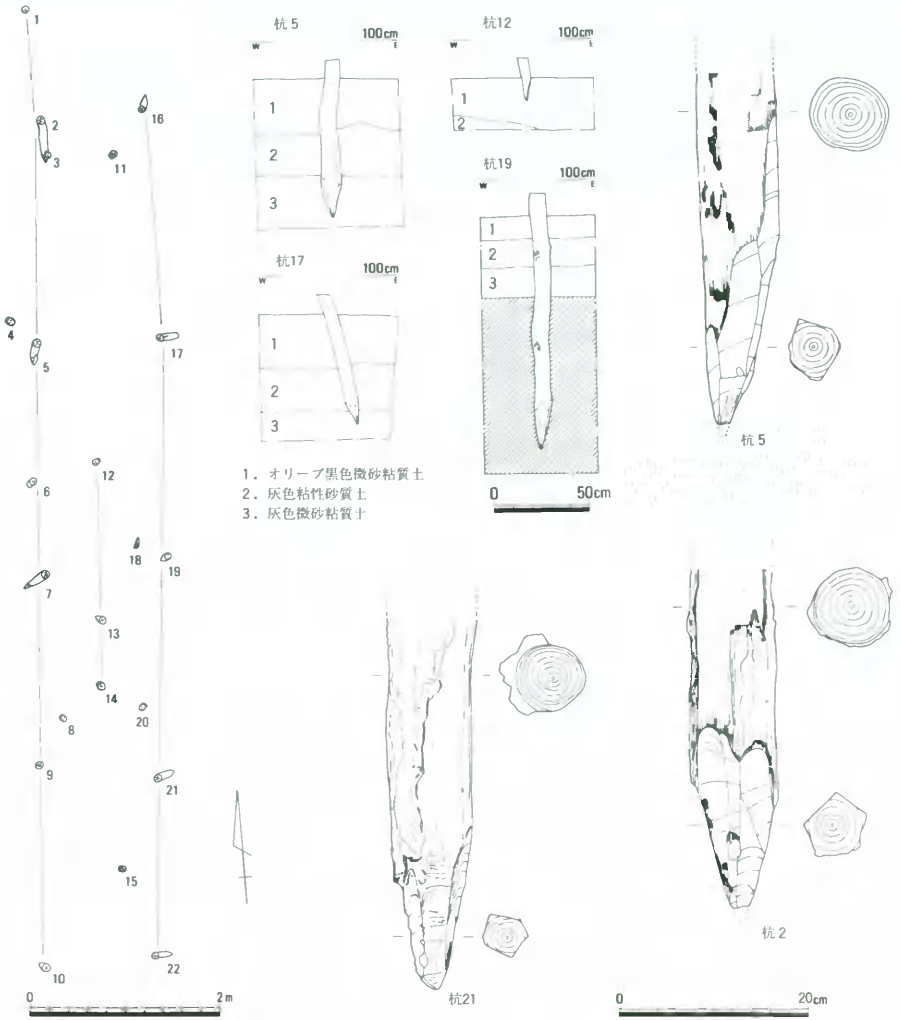
溝35（第199・203図）

214ⅢＦ区で検出された溝で、ほぼ南北方向に流走する。溝の北端は調査区外に延びるが、南端は８ｍほどで終わる。規模は幅20～30cm、深さ10cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立ち上がる。溝34同様、削平等により上部を消失した溝の底部ではないかと考えられる。遺物は出土しなかったが、検出面から中世以降と考えられる。（根木）

(2) 杭　　列

杭列１（第199・210図）

214ⅢＣ区の調査区東端近くで、ほぼ南北方向に検出されている。位置的には旧河道上部にあたり、杭列の南側は中世の溝33に切られている可能性が高い。杭は約1.5×10mの範囲に22本が存在し、整然とはしていないが、直線に近い形で西から10本、５本、７本の杭で構成される３列が認められる。杭の上端は、いずれも弥生時代後期の水田面検出時に確認された。杭は表皮がついたままの丸木（径６～９cm）の先端だけを鋭利に尖らせ、浅いもので約20cm、深いもので約135cm打ち込まれていた。



第210図　杭列１

杭のうち杭２・５・７・17など、６～７本は斜め方向であることが看取される。

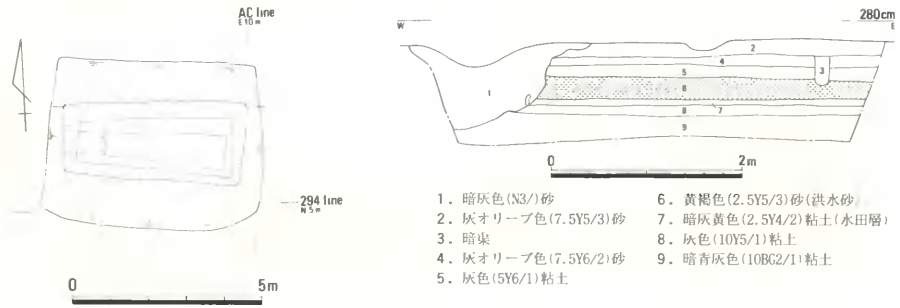
杭の配列からは何らかの構築物の基礎とも考えられるが、木の橋だとすれば杭の太さなどから小規模なものであったであろう。時期は遺構の性格から捉えにくいものの、杭列の南側が溝33に切られていることから13世紀後半以前、また杭が弥生後期末水田層を貫いていることから古墳時代前期以降であることは間違いない。（柳瀬）

8．その他の遺構および包含層等の遺物

(1) 左岸調査区の水田遺構（第211図）

調査地点は205ⅡＰ区の左岸堤防の内側裾部にあたり、調査範囲は階段の基礎部分の約５×３ｍである。西端の一部に現代の撹乱壙が存在し、この調査区での唯一の遺構である弥生時代後期末の洪水砂に覆われた水田面が一部削平を受けている。土層的には第２層が近現代水田、第４層が近世、第５層が中世、第６層が弥生時代後期末、第７層が同後期後半の水田層に比定される。調査区が狭いためか、水田面には畦畔等は確認されていない。

低水路等の他地点の調査では、微高地上あるいは微高地に近い部分には第５・６層間に１～２層の古墳時代包含層が認められるところから、この地点は低位部であった可能性が高い。（平井）

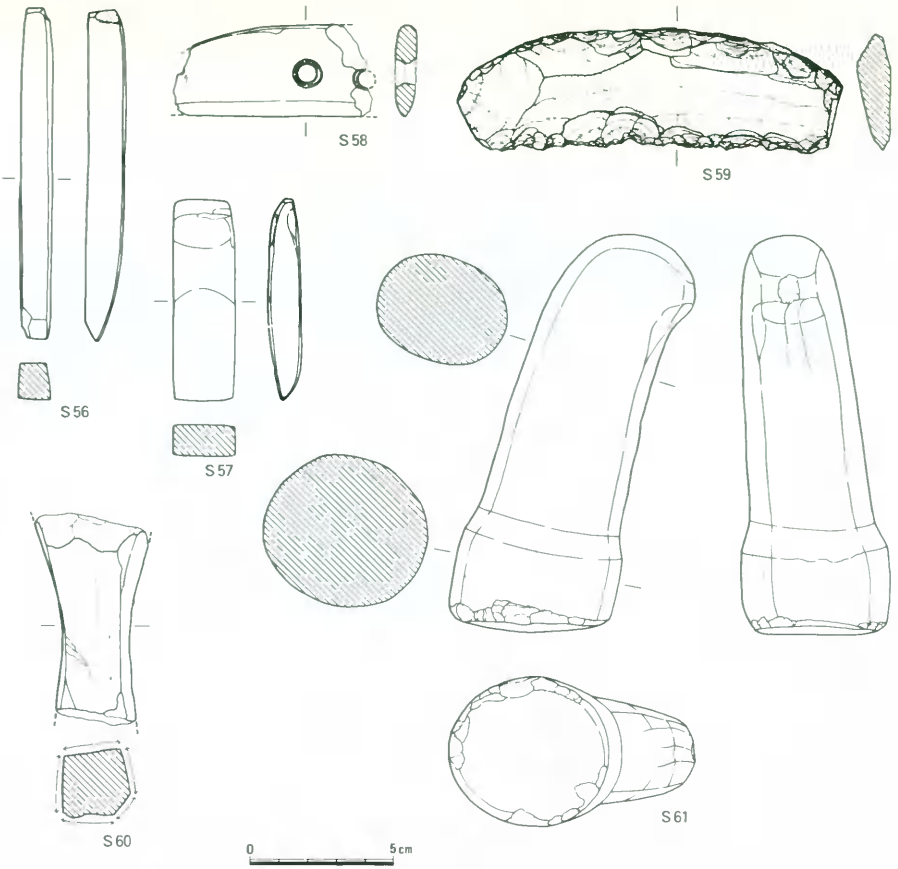


第211図　左岸階段調査区の水田遺構

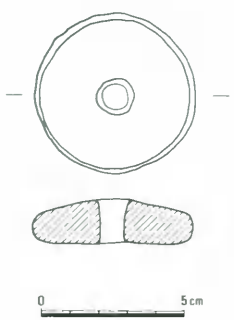
(2) 包含層等の遺物（第212・213図、巻頭図版１、図版14・16）

包含層の遺物は縄文時代後期から中世の土器を中心にして、比較的多く出土している。縄文土器・石器については、緩斜面あるいは窪みや旧河道堆積層中の、いわゆる遺物包含層中の散布ながら、土器溜りあるいは旧河道遺構の項で扱った。土器の量からいえば、古墳時代後期～奈良時代がほとんど欠落している。この項では紙面の制約もあり、なかでも注目される石器等一部の提示にとどめる。

S56・S57は、それぞれ方柱状、扁平の片刃石斧である。S56の刃部はわずかに背面からの磨きも観察される。緑色片岩製である。S57は刃部の稜線も顕著で、小振ながら典型的な扁平片刃である。流紋岩質凝灰岩である。いずれも214ⅡＴ区から出土している。S58は粘板岩製の磨製、S59はサヌカイト製の打製石包丁である。S58は出土地点からすれば溝１に伴う可能性がある。S59は刃部調整部ともに珪酸による磨耗痕跡を留める。S60は泥質砂岩製の砥石で、両端を欠損している。214ⅡＺ区の百・



第212図　包含層等 出土遺物(1)



第213図　包含層等
出土遺物(2)

古・Ⅱ期の包含層に伴う。S61は角閃玢岩製の石杵である。円柱状の体部の大半を握り易いように加工し、端部を磨面として使用している。磨面は前後方向では中央がわずかに高く、左右方向ではほぼ水平を呈す。磨面には部分的に水銀朱の付着が看取され、朱の精製過程での磨り具（杵）として機能したことは間違いない。また、磨面と握り部の中心とは、前後方向で手前に約14°、左右方向で左に約6°の角度で傾きをもつ。これらのことから、臼面での杵の動きが前後にのみわずかに振れていたことがわかり、さらに右利きの人が使用した蓋然性が強い。この石杵は自然石利用以外では、県下初現であろう。

出土層位からは、百・古・Ⅱの時期をあてることができる。

C10は214ⅡＹ区の第４層上面（古・Ⅱ～Ⅲ）からの出土で、土器片の転用ではない土製紡錘車である。（柳瀬）

第３節　ま　と　め

今回報告にかかる百間川沢田遺跡は、遺跡の範囲からいえば南東端部にあたり、遺跡を構成する３～４の微高地のうちのひとつである操山丘陵の裾部に近い微高地上と、その周辺に拡がる弥生水田などの一部である。時期的には縄文時代後期から晩期、弥生時代は前期から後期を通じて、また古墳時代は前半期、奈良時代を除き古代から中世の遺物が比較的まとまって出土している。しかし、調査地点的には集落のはずれ、つまり微高地の肩部から低位部にかけての部分にあたるためか、遺構は溝状遺構が大半を占める。

縄文時代後期は、弥生時代以降の集落の拠点となる微高地の形成過程での核になる小微高地上に、条痕文・磨消縄文を主体とする縄文土器片の散布とともに、炭・灰・焼土などの火を使用した生活痕跡も認められている。本報告にかかる地区では、それらの散布が２ヵ所（土器溜り１・２）に確認されている。土器溜り１の中心は、調査区の西側にあたる「百間川沢田遺跡３」報告の213ⅡＳ区にあり、核となる推定20×40ｍくらいの楕円形とみられる小微高地（頂部海抜180cm強）の南から南東にかけての緩斜面に土器片の分布や火どころなどの存在が報告されている（註１）。本調査区側はその小微高地の東裾部（海抜130cm前後）にあたる。いっぽう、土器溜り２は土器溜り１より約80ｍ東の地点で確認されており、核となる小微高地は推定６×10ｍくらいのほぼ東西に長い楕円形と思われ、頂部で海抜約130cm、裾部で約60cmを測り、第143図断面のように小微高地の核そのものが少しずつ拡大する過程の約40cm間に、３面の炭あるいは焼土散布面の存在が看取できる。縄文時代後期のこの二者が、同じ集団の生活痕跡であるかどうかの確証はないが、少なくともほぼ同時期の沖積化の過程で出現した小微高地上に、前者は比較的長期間あるいは後者は短期間に何度か滞在したことは確かである。とくに後者は、炭や焼土の量からして単に通常の飲食のためだけの煮炊きの痕跡とは思えない。漁撈に伴う何らかの作業、例えば魚の燻製などが考えられる。

縄文時代晩期は、後期と比べて基盤面が50cm前後も高く、後期の小微高地がつながるように沖積化が急速に進んだことがわかる。それとともに主河道と微高地との関係も明確になり、旧河道１の堆積にみられるように、次の段階ではこの時期から弥生時代前期にかけて主河道そのものの堆積化がやはり急速に進んでいく様子が捉えられる。旧河道１には底近くに小規模ながら貝塚（約３×2.5ｍ、厚さ約20cm）があり、堆積の過程で比較的多くの晩期土器や石器が包含されており、さらに隣接する微高地上の撓みにも晩期土器の散布が認められているが、貝塚以外の遺構は検出されていない。

出土遺物では、ヤマトシジミを主体とする縄文晩期貝塚とその中に含まれる動物遺存体（付載２の表１）や骨角器（B2～5）、およびその周辺出土の骨角器（B1）が特筆される。貝塚内の獣骨・魚骨が多種類に上るだけでなく、シカあるいはイノシシの中足骨の一つに犬の噛痕が認められるなど注目される結果を得ている。B1の鹿角製の鳥形短剣（註２）は、剣にあたる部分が細身であり全体に華奢な点を除けば形態的には東京都千鳥久保の鳥形短剣に類似する。この形態の製品は、管見の限りでは西日本に出土例はない。また、千鳥久保例が縄文時代中期に属すのに対し、B1は出土状況から晩期としか考えられず、その時期差を考えるとき、護身的な装身具から単なる装身具への変遷のなかで型式差の系譜がたどれるのかどうか、多少の疑問は残る。本製品は実用的には剣としての機能はなく、簪の可能性が強い。また、B3の指輪形角製品は、類似を含めて出土例をほとんど知らない。B3は輪と一体

化させて台座が削り出され、台座の中央の約７×15㎜の楕円形の範囲が窪ませてある。その窪みに宝石を貼りつけたことは疑いなく、指輪そのものと考えてよい。ちなみに輪のサイズは内径165～167㎜（円周長5.2㎝前後）で、現在の指輪の11号（女性用）に当たる。

弥生時代前期は、旧河道１の堆積の過程の包含層中から土器が散見されているものの、晩期同様微高地上には遺構は確認されていない。**中期中葉**以降、弥生時代全般を通じて微高地上には溝以外の遺構はなく、後期末にかけて微高地の縁辺部に沿って数条の溝が並走または重複、あるいは踏襲して存在する。そして後期末の溝（溝19・20）は、微高地端部から低位部にかけて広く展開する同時期の水田を覆った洪水砂と同じ砂によって埋没している。この状況は、百間川米田遺跡を除く百間川遺跡群の他の微高地と共通し、溝が灌漑水路の機能をもっていたことは間違いない。とすれば、それ以前に存在するほぼ同規模の溝も灌漑水路の蓋然性が高く、さらにいえば中期中葉の水田が周辺では検出されていないものの、その時期の水田も存在していた可能性を示唆するものである。

弥生時代後期水田の立地・展開については本文に詳しく、他遺跡のあり方と大差がないのでここでは割愛するが、水田３のⅢＨ区付近の田面に顕著に残存する稲株痕跡について、今少しふれておく。稲株の分布は、１㎡当たり70～80株（一坪換算で約250株）を数える。これは百間川原尾島遺跡例（註３）が一坪当たり約400株、百間川今谷遺跡例（註４）が同約200株であるのに比べ、より後者に近い株数を得ている。それぞれの地点は約１㎞前後ずつ離れているものの、同時に存在していたことは同じ洪水砂で覆われていることから間違いなく、株数の違いが経営集団の違いを示すのか、それとも他の要因によるものなのか興味深いが、今のところ類例の増加を待つしかない。

古墳時代の遺構は、竪穴住居と掘立柱建物各１軒、井戸３基、土壙１基、その他の溝等を入れても数遺構しか確認されていない。時期的にも百・古・Ⅱ～Ⅲの須恵器が伴う以前に限定される。また、この時期以降、**奈良時代**にかけての遺構・遺物は皆無といってよい。

平安時代から**鎌倉時代**初期は、溝のみが数条存在する。そのうち低位部のⅢＣ区～ⅢＨ区に検出された比較的大形の溝31～33は、蛇行あるいはほぼ直線的に重複しながらさらに隣接する百間川兼基遺跡に続く（兼基ではそれぞれ溝30～32に対応）。これらの溝は、切り合い関係から溝31→溝32→溝33の順に時代が新しくなり、百間川兼基遺跡と同様、前二者には須恵器・丹塗り土師器・黒色土器を含み平安時代全般の土器が伴い、後者にはおもに瓦器椀・Ⅲ、土師器椀・Ⅲなど12世紀後半から13世紀にかけての土器が伴っている。とくに後者の溝は、削平頻度を勘案すれば幅７ｍ以上、深さも１ｍ以上あったと推測され、幹線水路であったと同時に運河の機能も有していた可能性が強い。　（柳瀬）

註

註１　平井　勝他「百間川沢田遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84　建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会　1993年

註２　春成秀爾氏の分類による。春成秀爾「鉤と霊」『国立歴史民俗博物館研究報告』第７集・本篇　国立歴史民俗博物館　1985年

註３　高畑知功「百間川原尾島遺跡２―田植えと収穫量―」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56　建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会　1984年

註４　柳瀬昭彦「百間川今谷遺跡２―水田―」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』114　建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会　1996年

第6章　おわりに

百間川兼基遺跡・同今谷遺跡は、昨年度までに「百間川兼基遺跡1・同今谷遺跡1」～「同2」、百間川沢田遺跡は「百間川沢田遺跡1」～「同3」の各発掘調査報告書を刊行し、それぞれの遺跡ごとに小字名で調査区を分け、基本的には遺跡を章、調査区を節立てとし、調査区ごとに時代の古い順に遺構および出土遺物を取り上げ、その成果をまとめてきたところである。本報告書は第1章第1節でもふれたように、掲載対象の調査区が幅15～20m、長さ約850m（沢田～兼基）と幅8m、長さ340（今谷）の範囲である（第3図参照）。本報告書では、どちらも比較的狭くてほぼ東西方向に長大であり、小字名で調査区を割ると西から沢田四元・兼基大永・兼基大上田・兼基東苗代・今谷大地・今谷五ノ坪の計6調査区に分かれ、さらにとくに溝状の遺構が小字をまたがって繋がることなどから、重複を避ける意味もあって、小字での節立ては行っていない。

また、本報告掲載にかかる百間川兼基遺跡の西側約半分、および百間川沢田遺跡の全体は、それぞれの調査区の北側の低水路部分にすでに工事掘削が及んでいるため、南北方向の遺跡の拡がりや遺構遺構の繋がりを解明するうえで、困難をきたしている。そして、高水敷護岸調査地区の百間川今谷遺跡は、遺構検出面では幅2.5mほどしかなく、遺構的にはその概要しか捉えきれていない。

各遺跡のまとめは、以上の状況から個々の遺跡ごとに行い、既調査区と隣接する百間川兼基遺跡のの東半分は、関連遺構についていくらか検討を加えることができた。ただし、各遺跡あるいは微高地ごとに時代・時期ごとの集落構成の分析をするまでには至らず、今後低水路左岸肩部の10～15m前後の調査結果を加えたうえで検討する必要があり、大きな課題を残した。

いっぽう、遺物については百間川兼基遺跡と百間川沢田遺跡に注目される遺物が比較的多く出土している。それらのうちおもなものは巻頭カラー図版でも紹介しているが、なかでも木製短甲の札（兼基）・磨製石剣・石杵・鹿角製装身具（以上沢田）などが初見であり好資料といえよう。他にも木器や鉄器にも、保存状態を含めて良好な遺物も多いが、紙面の都合等もありほとんど事実関係の記述にとどまっている。時期の認定や出土例を含め、今後とも再検討が必要であろう。　（柳瀬）

新旧遺構名称対照表

百間川兼基遺跡

報告書遺構名	調査時年度・地区・遺構名
旧河道1	92・93・兼・旧河道
竪穴住居1	91・兼GL・住2
竪穴住居2	91・兼GL・住3
土壙1	92・兼・土壙8
土壙2	92・兼・土壙9
土壙3	92・兼・土壙10
土壙4	92・兼・土壙2
土壙5	92・兼・土壙3
土壙6	91・兼GL・土壙4
土壙7	91・兼GL・土壙11
土壙8	91・兼GL・土壙6
土壙9	91・兼LO・土壙3
土壙10	90・兼・土壙3
溝1	92・93・兼・溝38
溝2	92・兼・溝30
溝3	92・兼・溝40
溝4	92・兼・溝27
溝5	92・兼・溝28
溝6	92・兼・溝33
溝7	92・兼・溝26
溝8	92・兼・溝23
溝9	92・兼・溝24
溝10	92・兼・溝22
溝11	92・兼・溝16
溝12	92・兼・溝17
溝13	92・兼・溝21
溝14	92・兼・溝15
溝15	91・兼AF・溝6
溝16	91・兼AF・溝7
溝17	91・兼AF・溝2
溝18	91・兼AF・溝3
溝19	91・兼AF・溝4 91・兼GL・溝25
溝20	91・兼AF・溝5
溝21	91・兼GL・溝12
溝22	91・兼LO・溝4 90・兼・溝3
溝23	91・兼LO・溝3
溝24	91・兼LO・溝8
水田1	92・93・兼ot・弥生水田
水田2	91・92・兼yH・弥生水田
土器溜り1	91・兼GL・弥生後期 たわみ+同土器溜り
竪穴住居3	91・兼GL・住5
竪穴住居4	91・兼GL・住1
竪穴住居5	91・兼GL・住4
竪穴住居6	91・兼LO・住1
建物1	91・兼AF・建1
建物2	91・兼GL・建1
建物3	91・兼GL・建2
建物4	91・兼LO・建2
建物5	91・兼LO・建1
建物6	91・兼LO・建3
柱穴列1	91・兼LO・柱穴列1
井戸1	91・兼GL・井戸2
井戸2	91・兼GL・井戸1
井戸3	90・兼・井戸1
井戸4	91・兼LO・井戸1
井戸5	90・兼・井戸2
土壙11	91・兼AF・土壙7
土壙12	91・兼AF・土壙2
土壙13	91・兼AF・土壙3
土壙14	91・兼GL・土壙3
土壙15	91・兼GL・土壙8
土壙16	91・兼GL・土壙9
土壙17	91・兼GL・土壙10
土壙18	91・兼GL・土壙5
土壙19	91・兼LO・土壙2
土壙20	90・兼・土壙2

報告書遺構名	調査時年度・地区・遺構名
溝25	91・兼GL・溝21 91・兼AF・溝1
溝26	91・兼GL・溝22
溝27	91・兼LO・溝10
溝28	91・兼LO・溝9
溝29	91・兼LO・溝2
建物7	91・兼GL・建3
土壙21	92・兼・土壙4
土壙22	92・兼・土壙1
土壙23	91・兼GL・土壙7
土壙24	91・兼GL・土壙1
土壙25	91・兼LO・土壙4
土壙26	91・兼LO・土壙5
土壙27	91・兼LO・P−277
土壙28	91・兼LO・土壙7
土壙29	91・兼LO・土壙1
溝30	92・兼・溝37 93・兼・溝37
溝31	91・兼AF・溝9 93・兼・溝2・43
溝32	92・兼・溝1 93・兼・溝1
溝33	92・兼・溝6
溝34	92・兼・溝20
溝35	92・兼・溝13
溝36	91・兼GL・溝14
溝37	91・兼GL・溝18
溝38	91・兼GL・溝19
溝39	91・兼GL・溝15

百間川今谷遺跡

報告書遺構名	調査時年度・地区・遺構名
土壙30	90・今・土壙3
土壙31	90・今・土壙1
土壙32	90・今・土壙2
溝40	90・今・溝31
溝41	90・今・溝32
溝42	90・今・溝30
溝43	90・今・溝27
溝44	90・今・溝25
溝45	90・今・溝26
溝46	90・今・溝24
溝47	90・今・溝21
溝48	90・今・溝22
溝49	90・今・溝23
溝50	90・今・溝9
溝51	90・今・溝10
溝52	90・今・溝8
溝53	90・今・溝5
溝54	90・今・溝4
溝55	90・今・溝3
土壙33	90・今・土壙4
土壙34	90・今・土壙5
溝56	90・今・溝29
溝57	90・今・溝19
溝58	90・今・溝17
溝59	90・今・溝20
溝60	90・今・溝15
溝61	90・今・溝14
溝62	90・今・溝16
溝63	90・今・溝13
溝64	90・今・溝18
溝65	90・今・溝11
溝66	90・今・溝12
溝67	90・今・溝7
溝68	90・今・溝6
溝69	90・今・溝1
溝70	90・今・溝2

百間川沢田遺跡

報告書遺構名	調査時年度・地区・遺構名
土器溜り1	94・沢ⅡST・土器群
土器溜り2	93・沢ⅡZ・土器群
土器溜り3	93・沢ⅡYZ・土器群
旧河道1	93・沢ⅢBC・旧河道
溝1	94・沢ⅡTU・溝5
溝2	93・沢ⅡZ・溝30
溝3	93・沢ⅡZⅢA・溝31
溝4	93・沢ⅡZⅢA・溝28
溝5	93・沢ⅢAB・溝22
溝6	93・沢ⅢB・溝27
溝7	93・沢ⅢB・溝17
溝8	93・沢ⅢB・溝16
溝9	93・沢ⅢB・溝15
溝10	94・沢ⅡS・溝9
溝11	94・沢ⅡS・溝10
溝12	94・沢ⅡTU・溝4
溝13	94・沢ⅡU・溝3
溝14	93・沢ⅡZⅢA・溝19
溝15	93・沢ⅢA・溝26
溝16	93・沢ⅢA・溝18
溝17-1	93・沢ⅢA・溝25
溝17-2	93・沢ⅢA・溝24-20
溝17-3	93・沢ⅢB・溝21
溝18	93・沢ⅢH・溝7
水田1	93・沢ⅡW 94・沢ⅡTV・水田
水田2	93・沢ⅢAC・水田
水田3	93・沢ⅢDH・水田
水路1(溝19)	94・沢ⅡST・溝8
水路2(溝20)	93・沢ⅡZⅢA・溝14
竪穴住居1	93・沢ⅡYZ・住1
建物1	93・沢ⅡY・建物1
柵列1	93・沢ⅢB・木柵
井戸1	93・沢ⅡX・井戸3
井戸2	93・沢ⅡX・井戸2
井戸3	93・沢ⅡZⅢA・井戸1
土壙1	93・沢ⅡW・土壙1
溝21	94・沢ⅡS・溝7
溝22	94・沢ⅡST・溝6
溝23	94・沢ⅡT・溝2
溝24	93・沢ⅡW・溝32
溝25	93・沢ⅡWX・溝33
溝26	93・沢ⅡZⅢA・溝14上
溝27	93・沢ⅢA・溝13
溝28	93・沢ⅢB・溝9-a・b
溝29	93・沢ⅢC・溝10
土器溜り4	93・沢ⅢA・土器溜り
溝30	93・沢ⅡZ・溝12
溝31	93・沢ⅢDH・溝37
溝32	93・沢ⅢEH・溝2
溝33	93・沢ⅢDH・溝1
杭列1	93・沢ⅢC・杭列

付載１　百間川沢田遺跡におけるプラント・オパール分析結果について

宮崎大学
藤原宏志

百間川沢田遺跡で採取された土壌試料（６試料）に関するプラント・オパール分析結果がでましたので下記のとおり報告致します。

分析結果に関するコメント

１．プラント・オパール定量分析の結果、イネが検出されたのは２層のみであり、４層の２試料からはいずれも検出されなかった。したがって、４層で稲作が行われた可能性は少ないと判断される。

２．イネ以外のイネ科植物としてキビ族植物のプラント・オパール検出された。キビ族植物には、アワ、ヒエ、キビなど主要な雑穀類が含まれており、これらの作物がイネとともに輪作されていた可能性が考えられる。

また、ウシクサ族（ススキ・チガヤなど)、タケ亜科植物のプラント・オパールが検出され、これらの植物が野草、雑草として存在したことを示している。

３．下層ではヨシが少量検出された。下層土の堆積環境が若干湿潤であったことを示すものであろう。

百間川沢田遺跡におけるプラント・オパール定量分析結果

宮崎大学農学部　地域農学講座

発掘区：214－ⅡY

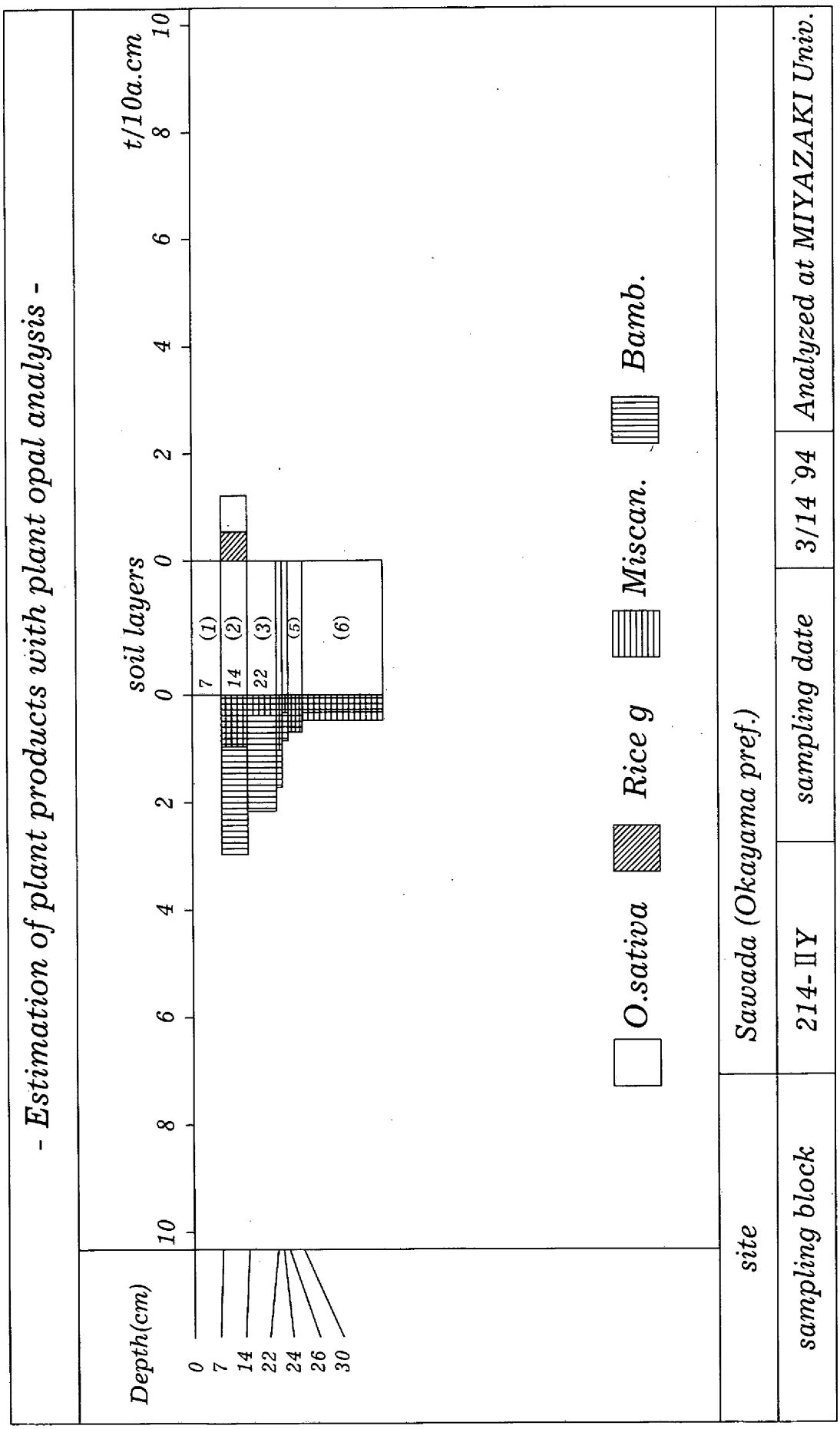
サンプリング日付：1994.3.14

層名	植物体乾物重（t/10a.cm）						
	イネ	イネ籾	キビ族	キビ族種実	ヨシ	タケ亜科	ウシクサ族
2	1.466	0.514	3.043	1.382	0.000	2.873	0.928
3	0.000	0.000	7.038	3.196	0.000	2.146	0.358
4-1	0.000	0.000	8.022	3.643	0.000	1.815	1.019
4-2	0.000	0.000	3.144	1.428	0.893	0.866	0.320
5	0.000	0.000	0.000	0.000	1.253	0.695	0.673
6	0.000	0.000	3.230	1.467	0.917	0.318	0.492

注：4-1は214-ⅡYと214-ⅡZの間の土手であり、4-2は214-ⅡYの土手である。
また、２～５の５試料は、本書第146図断面では第３～６層に対応する。なお、4-1、4-2は縄文晩期の突帯文土器を包含する土層内サンプルである。

ープラント・オパール分析による生産量推定結果ー　　百間川沢田　[214-ⅡY]（3／14'94　sampling）

層名	深さ (cm)	層厚 (cm)	GB数／g	植物名	PO／GB	PO数／g	仮比重	PO数／cc	地上部乾重 (t/10a.cm)	種実重 (t/10a.cm)	種実生産総量 (t/10a)
[1]											
	0	7	300000	イネ	0／100	0	1.000	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	0	0		0	0.000	0.000	0.000
				ヨシ	0	0		0	0.000		
				タケ	0	0		0	0.000		
				ススキ	0	0		0	0.000		
[2]											
	7	7	306749	イネ	2／123	4988	1.000	4988	1.466	0.514	3.596
				キビ族	1	2494		2494	1.000	1.382	9.671
				ヨシ	0	0		0	0.000		
				タケ	24	59854		59854	2.873		
				ススキ	3	7482		7482	0.928		
[3]											
	14	8	304317	イネ	0／211	0	1.000	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	4	5769		5769	4.000	3.196	25.568
				ヨシ	0	0		0	0.000		
				タケ	31	44710		44710	2.146		
				ススキ	2	2885		2885	0.358		
[4－1]											
	22	2	297519	イネ	0／181	0	1.000	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	4	6575		6575	4.000	3.643	7.285
				ヨシ	0	0		0	0.000		
				タケ	23	37806		37806	1.815		
				ススキ	5	8219		8219	1.019		
[4－2]											
	24	2	319534	イネ	0／248	0	1.000	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	2	2577		2577	2.000	1.428	2.855
				ヨシ	1	1288		1288	0.893		
				タケ	14	18038		18038	0.866		
				ススキ	2	2577		2577	0.320		
[5]											
	26	4	309294	イネ	0／171	0	1.000	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	0	0		0	0.000	0.000	0.000
				ヨシ	1	1809		1809	1.253		
				タケ	8	14470		14470	0.695		
				ススキ	3	5426		5426	0.673		
[6]											
	30	----	316377	イネ	0／239	0	1.000	0	0.000	0.000	----------
				キビ族	2	2648		2648	2.000	1.467	----------
				ヨシ	1	1324		1324	0.917		
				タケ	5	6619		6619	0.318		
				ススキ	3	3971		3971	0.492		


- Estimation of plant products with plant opal analysis -
Depth(cm)
0
7
14
22
24
26
30
soil layers
t/10a.cm
10 8 6 4 2 0 0 2 4 6 8 10
7 (1)
14 (2)
22 (3)
(5)
(6)
O.sativa
Rice g
Miscan.
Bamb.
site
Sawada (Okayama pref.)
sampling block
214-ⅡY
sampling date
3/14 `94
Analyzed at MIYAZAKI Univ.

付載2　百間川兼基・今谷・沢田遺跡から出土した動物遺存体（予報）

奈良国立文化財研究所
松井　章

百間川兼基遺跡

ウシ、ウマ、タヌキ、ヒト、スッポンが出土している。時代は中世が主体である。中世の溝からウシ、ウマに混じって人骨が出土することは稀ではない。

百間川沢田遺跡

縄文時代晩期の層、および貝塚から、多量の魚骨、獣骨が出土している。魚類は、軟骨魚ではトビウオ属の歯板が、硬骨魚ではクロダイの各部位、スズキ、ナマズ、ボラなどが出土している。これらは、ナマズを除くと内湾でも淡水の流れ込む河口部に入り込む魚種で、この地に移住した縄文人の漁撈活動はさほど広くなかったと考えられる。貝種も汽水域に生息するヤマトシジミが多いことも、採貝活動と漁撈型で、汽水域によく入ってくる大きさである。ボラは体長40cm以上の成魚であっても河口域に群れを成して入ってくることが多い。

中世の溝からウシ、ウマが出土している。百間川兼基・今谷遺跡で見たのと共通した出土状態である。

今後、出土した動物の種類別、部位別、さらに計測値を他の遺跡出土のものと比較することによって、本遺跡から出土した動物遺存体の特徴をより明らかにすることが出来よう。

なお、現段階では資料分析中であり、紙面の都合もあって下表のみ報告する。

表1　百間川沢田遺跡貝塚出土動物遺存体

番号	遺構名	大分類	小分類	部位（左右）数量
1	旧河道内貝塚	哺乳類	ニホンジカ	上腕骨(R)1、下顎骨(L)1、脛骨(L)1、寛骨(L)1、中手／中足骨1、手骨1、中手骨(L)1、鹿角1
2	旧河道内貝塚	哺乳類	ニホンジカ/イノシシ	肋骨1
3	旧河道内貝塚	哺乳類	イノシシ	前臼骨1、主上顎骨1、犬歯歯根部1、頭蓋骨1
4	旧河道内貝塚	哺乳類	シカ/イノシシ	四肢骨7、大腿骨2、中手／中足骨2(うち一つに犬の歯痕)、椎骨2、踵骨2、肋骨1、破片1
5	旧河道内貝塚	哺乳類	シカ	中足骨1、脛骨(R)1
6	旧河道内貝塚	哺乳類	イヌ/シカ	前頭骨1
7	旧河道内貝塚	哺乳類	アナグマ	上腕骨1
8	旧河道内貝塚	哺乳類	ノウサギ？ムササビ	肋骨1
9	旧河道内貝塚	哺乳類	ムササビ？ノウサギ	四肢骨1
10	旧河道内貝塚	哺乳類	ノウサギ/ムササビ	寛骨1
11	旧河道内貝塚	哺乳類	ムササビ/ノウサギ	中手／中足骨1
12	旧河道内貝塚	哺乳類	ニホンザル	犬歯1
13	旧河道内貝塚	哺乳類	ニホンザル/イノシシ	臼歯1
14	旧河道内貝塚	哺乳類	不明	頭蓋骨2、前頭骨？1、椎骨1
15	旧河道内貝塚	魚類	クロダイ	主上顎骨(L)3・(R)3、前上顎骨(L)12・(R)11、歯骨(L)7・(R)9、関節骨(L)2・(R)1、方骨(L)1
16	旧河道内貝塚	魚類	クロダイ/マダイ	烏口骨1、方骨1、鰓蓋骨(R)1
17	旧河道内貝塚	魚類	タイ類	烏口骨1、椎骨3、鰓蓋骨(L)1・(R)1、背鰭棘1、遊離歯1
18	旧河道内貝塚	魚類	スズキ	前上顎骨(R)1
19	旧河道内貝塚	魚類	スズキ？	前上顎骨(L)2・(R)1
20	旧河道内貝塚	魚類	トビエイ属	歯板1
21	旧河道内貝塚	魚類	ボラ	主鰓蓋骨(R)1、鰓蓋骨(L)1
22	旧河道内貝塚	魚類	ナマズ	腱鎖骨1、胸鰭骨(L)1
23	旧河道内貝塚	魚類	不明	椎骨2、肋骨1、棘7
24	旧河道内貝塚	魚類	不明（種？）	部位？
25	旧河道内貝塚	魚類	小型カモ類	上腕骨(R)1
26	旧河道内貝塚	爬虫類	ヘビ類	椎骨2

※表は鑑定資料の一部をもとに柳瀬が作成

付載３　百間川沢田遺跡における種実同定

天理大学附属天理参考館　金　原　正　明
古環境研究所　星　野　佳　史

１．試料と方法

試料は以下に一覧する。試料は縄文時代晩期の旧河道１内貝塚から出土した種実でいずれも選別されて乾燥していた。観察は肉眼および実体顕微鏡下で行い、同定は形態的特徴ないし現生標本との対比で行った。分類群の表記は同定レベルによって種、節、属、科のレベルで行った。

表１　試料一覧

No	試　　料	
1	沢田 214-ⅢC区 旧河道内貝塚	
2	沢田 214-ⅢC区 旧河道内貝塚 K-1 上層	94,02,24
3	沢田 214-ⅢC区 旧河道内貝塚 K-1 上層 no,2	94,02,24
4	沢田 214-ⅢC区 旧河道内貝塚 K-1 下層 (3)	
5	沢田 214-ⅢC区 旧河道内貝塚 K-2 下層 (1)	94,02,24
6	沢田 214-ⅢC区 旧河道内貝塚 K-2 上層	94,02,24
7	沢田 214-ⅢC区 旧河道内貝塚 K-3 下層	94,02,24
8	沢田 214-ⅢC区 旧河道内貝塚 K-3 下層 (1)	94,02,24 (2)
9	沢田 214-ⅢC区 旧河道内貝塚 K-3 下層 (1)	94,02,24 (1)
10	沢田 214-ⅢC区 旧河道内貝塚 K-3 上層	94,02,24
11	沢田 214-ⅢC区 旧河道内貝塚 K-4 上層	
12	沢田 214-ⅢC区 旧河道内貝塚 K-4 上層 F (小)	
13	沢田 214-ⅢC区 旧河道内貝塚 K-4 上層 F (大)	

２．結　果

同定の結果、樹木21、草本14の計35の分類群が同定された。結果は表に和名、学名と数量をまとめる。以下に分類群と形態的特徴を記す。

〔樹木〕

１）マツ属複維管束亜属　*Pinus* subgen. *Diploxylon*　毬果　マツ科

黒褐色で卵形を呈す。種鱗先端の外部に露出する部分は偏平５角形であり、その中央にはヘソがある。長さ3.5～3.9㎜、幅2.0～2.2㎜。

２）ヤマモモ　*Myrica rubra* Sieb. et Zucc.　核　ヤマモモ科

茶褐色で楕円形を呈し、両端がややとがる。一端にへそがあり、表面は粗い。断面は偏平である。長さ6.3～8.5㎜、幅5.0～7.0㎜。

３）アカシデ　*Carpinus laxiflora* Blume　果実　カバノキ科

黒褐色で卵形を呈し、先端がややとがる。表面には縦に８本程度の筋が走る。断面は両凸レンズ形である。長さ3.1～3.9㎜、幅2.8～3.0㎜。

4）コナラ属コナラ亜属　*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*　幼果・殻斗　ブナ科

幼果は黒褐色で鱗片に覆われた殻斗に包まれている。

殻斗は黒褐色で椀状を呈し、鱗片が覆瓦状に並ぶ。殻斗壁が上端ほど薄くなり、先端がやや内側に向く。

5）イチイガシ　*Quercus gilva* Blume　堅果・種子（子葉）　ブナ科

堅果は黒褐色で楕円形を呈し、先端に明瞭な花柱を持つ。

種子（子葉）は黒褐色で楕円形を呈す。表面はやや平滑で、縦方向に1本の溝がある。

6）コナラ属　*Quercus*　堅果・種子（子葉）　ブナ科

堅果は黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。殻斗が欠落しているため、属レベルの同定にとどまる。

種子（子葉）は黒褐色で楕円形を呈す。表面はやや粗い。

7）ムクノキ　*Aphananthe aspera* Planch.　核　ニレ科

淡褐色で広卵形を呈し、一端に白色の突起がある。表面には微細な網目模様がある。断面は偏平～楕円形である。長さ4.5㎜、幅3.6㎜。

8）カジノキ　*Broussonetia papyrifera* Vent.　種子　クワ科

黄褐色で広倒卵形を呈し、基部に突起がある。表面にはいぼ状の隆起がある。長さ2.0～2.5㎜、幅1.8～2.0㎜。

9）ヤマグワ　*Morus bombysis* Koidz.　種子　クワ科

茶褐色で広倒卵形を呈し、基部に突起がある。表面は粗い。長さ1.9～2.0㎜、幅1.2～1.3㎜。

10）サクラ属サクラ節　*Prunus* sect. Pseudocerasus　核　バラ科

黄褐色で楕円形を呈し、下端が大きくくぼむ。側面に縫合線が走る。表面はやや粗い。長さ5.8㎜、幅4.0㎜。

11）キイチゴ属（フユイチゴ？）　*Rubus*（*buergeri* Miquel?）　核　バラ科

黄褐色でいびつな半円形を呈す。表面に網目模様がある。長さ2.5㎜、幅1.9㎜。

12）キイチゴ属　*Rubus*　核　バラ科

淡褐色でいびつな半円形を呈す。表面には大きな網目模様がある。長さ1.9㎜、幅1.2㎜。

13）サンショウ　Zanthoxylum piperitum DC.　種子　ミカン科

黒色で楕円形を呈し、側面に短いヘソがある。表面には網目模様がある。長さ4.0～4.4㎜、幅2.8～3.0㎜。

14）カラスザンショウ　*Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc.　種子　ミカン科

黒色で楕円形を呈し、側面に長く深いヘソがある。表面には大きい網目模様がある。長さ3.0～3.3㎜、幅2.5～3.0㎜。

15）アカメガシワ　*Mallotus japonicus Muell.* et Arg.　種子　トウダイグサ科

黒色で球形を呈し、「Y」字状のヘソがある。表面にはいぼ状の突起が密に分布する。長さ3.4～3.5㎜、幅3.3～3.4㎜。

16）トチノキ　*Aesculus turbinata* Blume　種子・幼果　トチノキ科

破片であり、黒色ないし茶褐色を呈し、黒色の部分には光沢がある。

17）ムクロジ　*Sapindus mukurossi* Gaertn.　果実　ムクロジ科

黒色で球形を呈し、基部に発達しない心皮がつく。心皮の表面には一本の筋が走る。長さ8.2㎜、幅7.7㎜。

18) ブドウ属　*Vitis*　種子　ブドウ科

茶褐色で卵形を呈し、先端がとがる。腹面には二つの孔があり、背面には先端が楕円形のヘソがある。長さ3.0～3.2㎜、幅2.8～2.9㎜。

19) クマノミズキ　*Cornus brachypoda* C. A. Mey.　核　ミズキ科

淡褐色で球形を呈す。表面に一本の広い溝がめぐり、数本の細い縦筋が走る。径3.2～3.5㎜。

20) エゴノキ　*Styrax japonica* Sieb. et Zucc.　核　エゴノキ科

黒褐色で楕円形を呈し、下端にヘソがある。表面に3本の溝が走る。長さ10.2～11.3㎜、幅6.0～6.5㎜。

21) ニワトコ　*Sambucus sieboldiana* Blume ex graedn　種子　スイカズラ科

黄褐色～茶褐色で楕円形を呈す。一端にへそがある。表面には横方向の隆起がある。長さ2.4～2.6㎜、幅1.5～1.7㎜。

〔草本〕

22) ミクリ属　*Spaganium*　果実　ミクリ科

淡褐色で倒卵形、断面は円形である。表面には縦方向に5本程度の筋が走る。長さ2.1～4.0㎜、幅1.2～1.8㎜。

23) ヒルムシロ属　*Potamogeton*　果実　ヒルムシロ科

茶褐色で楕円形を呈し、先端に花柱が宿存する。背面に稜がある。長さ1.8～2.2㎜、幅1.3～1.8㎜。

24) ウキヤガラ　*Scirpus fluviatilis* A. Gray　果実　カヤツリグサ科

黒灰色で倒卵形を呈す。表面は粗く、断面は三角形である。長さ2.2～2.5㎜、幅1.4～1.7㎜。

25) ホタルイ属　*Scirpus*　果実　カヤツリグサ科

黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、基部に針状の付属物がある。断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起がある。長さ1.9～2.1㎜、幅1.5～1.6㎜。

26) カヤツリグサ属　*Cyperus*　果実　カヤツリグサ科

黒褐色で倒卵形を呈す。断面は三角形である。長さ1.0～1.2㎜、幅0.7㎜。

27) カヤツリグサ科　*Cyperaceae*　果実

黒褐色で倒卵形を呈す。断面形は片凸レンズ状または三角形のものがあるが、統一してカヤツリグサ科とした。長さ2.2～2.5㎜、幅1.4～1.5㎜。

28) アサ　*Cannabis sativa* L.　種子　クワ科

茶褐色で広卵形を呈す。一端には円形のヘソ部がある。長さ2.9㎜、幅2.1㎜。

アサは南アジアや中央アジア原産とされる1年草の畑作物である。茎皮の繊維は麻糸になり、種子は油を採ったり食用になる。

29) カナムグラ　*Humulus scandens* Merrill　種子　クワ科

黒色で円形を呈し、断面形は両凸レンズ状である。側面には心形を呈するヘソがある。長さ3.5㎜、幅3.2㎜。

30) タデ属　*Polygonum*　果実　タデ科

黒色で卵形を呈し、基部に突起を持つ。表面には網目模様があり、断面は両凸レンズ形である。

長さ2.0～2.2㎜、幅1.3～1.6㎜。

31) ササゲ属　*Vigna*　種子（炭化）　マメ科

黒色で楕円形を呈す。ヘソは縦に細長い。長さ5.2～7.7㎜、幅3.1～5.2㎜。

ササゲ属にはリョクトウ、アズキ、ササゲなどの栽培植物が含まれるが、現状では識別が困難。

32) ブドウ　*Ampelopsis brevipedunculata* Trautv.　種子　ブドウ科

茶褐色で広卵形を呈す。腹面に「ハ」字状の孔が２つあり、背面のカラザは長く伸びる。長さ3.7～4.5㎜、幅3.2～3.9㎜。

33) シソ属　*Perilla*　果実　シソ科

茶褐色で球形を呈し、下端にヘソがある。表面には大きい網目模様がある。径1.5～1.8㎜。

34) イヌコウジュ属　*Mosla*　果実　シソ科

茶褐色で球形を呈し、下端にヘソがある。表面には網目模様がある。径1.0～1.1㎜。

35) キク科　Compositae　果実　キク科

茶褐色で楕円形を呈し、両端は切形となる。表面には縦方向に８本程度の筋が走る。長さ5.0㎜、幅1.7㎜。

３．考　察

旧河道１内貝塚出土の種実は多い種類から、イチイガシとコナラ亜属を含むコナラ属、トチノキ、アカシデ、ヤマモモ、ヤマグワ、ササゲ属、ムクロジと続く。種実遺体群の特徴としては、樹木の種実が多いことと、食用となる種実が多いことが上げられる。

樹木が多いことからみて、周囲に森林がかなり優勢に分布していたことが推定される。アカシデ、カジノキ、ヤマグワ、ニワトコの樹木やカナムグラ、ノブドウ、シソ属、イヌコウジュ属の草本などは人為改変を受けたところを好む傾向があり、貝塚周辺の環境を反映していると考えられる。ムクロジやエゴノキは河川沿いなどの湿潤地に生育し、ミクリ属、ヒルムシロ属、ホタルイ属、カヤツリグサ属ないしカヤツリグサ科は水湿地植物であり、河道の植生を反映している。

食用となるものは、ヤマモモ、イチイガシとコナラ亜属を含むコナラ属、ムクノキ、ヤマグワ、サクラ属サクラ節、キイチゴ属、サンショウ、シチノキ、トチノキ、ブドウ属の樹木種実、アサ、ササゲ属の草本種実がある。イチイガシとコナラ亜属を含むコナラ属とトチノキはかなり多く、トチノキ種子は破片であり明らかに人為的に利用されたとみなされ、これらが主要な食物であったと考えられる。アサとササゲ属は外来の栽培植物ないし栽培植物を含むため、何らかの栽培が行われていたことが考えられる。

以上、ここでは百間川遺跡縄文時代晩期旧河道１内貝塚から出土した種実の同定を行い、基礎的データの提示を行った。

参考文献

松本　豪（1979）緑豆．鳥浜貝塚、福井県教育委員会、p.162-163.

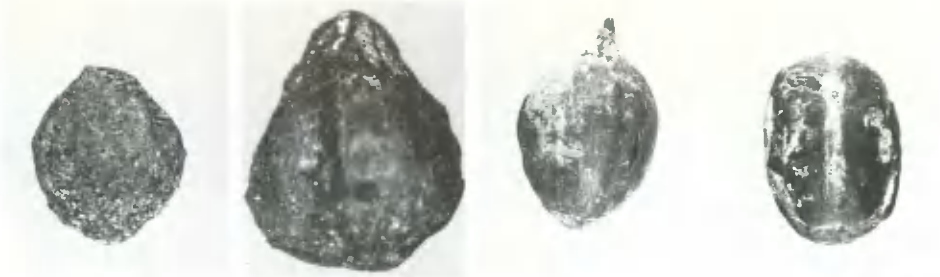
笠原安夫（1982）菜畑縄文晩期（山ノ寺）層から出土の炭化ゴボウ、アズキ、エゴノキと未炭化メロン種子の同定．唐津市文化財調査報告第５集　菜畑遺跡、　唐津市教育委員会、ｐ.447-451.

吉崎昌一（1992）古代雑穀の検出．月刊考古学ジャーナルNo355、ニューサイエンス社、p.2-14.

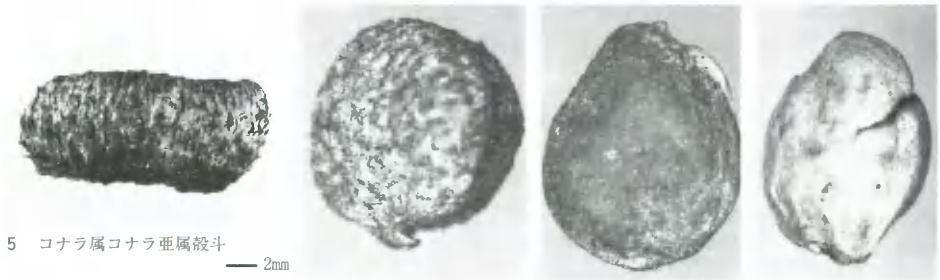
表2　百間川沢田遺跡における種実同定結果

分類群			旧河道内貝塚												
学名	和名	部位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
arbor	樹木														
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	毬果													2
Myrica rubar sieb. et Zucc.	ヤマモモ	核	1		1	1	6	1	3	5	6		1		3
		破片			1		2		3	2	3				
Carpinus laxiflora Blume	アカシデ	果実		3	6	9	13	6	7	8	12	2		9	57
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	幼果			1	4	2			3		1			1
		殻斗				4	9		5	6	10				
Quercus gilva Blume	イチイガシ	堅果						1							
		種子					1								
Quercus	コナラ属	堅果			2		3	2		1	2				2
		破片	21	15	57	68	122	21	242	100	75	38	10		39
		種子				1						1			
Aphananthe aspera Planch.	ムクノキ	核													1
Broussonetia papyrifera Vent.	カジノキ	種子			1										3
		破片													1
Morus bombysis Koidz.	ヤマグワ	種子												16	8
Prunus sect. Pseudocerasus	サクラ属サクラ節	核					1								
Rubus (buergeri Miquel?)	キイチゴ属（フユイチゴ？）	核													1
Rubus	キイチゴ属	核													2
Rosaseae	バラ科	刺			3	5	4	1		1			2	2	4
Zanthoxylum piperitum DC.	サンショウ	種子									2		1		1
		破片						2							
Zanthoxylum ailanthoides Sieb. et Zucc.	カラスザンショウ	種子						1	2	1					1
Mallotus japonicus Muell. et Arg.	アカメガシワ	種子					1		1						
		破片			2										
Ilex rotunda Thunb.	クロガネモチ	種子												1	
Aesculus turbinata Blume	トチノキ	種子(破片)	27		82	18	50	50	9	34	46	5			
Sapindus mukurossi Gaertn.	ムクロジ	種子		3		2	2	2		4	1	2			
		破片			4		2			5					2
Vitis	ブドウ属	種子			1	1				2	1				1
		破片										2			
Cornus brachypoda C.A. Mey.	クマノミズキ	核					2			1					
Styrax japonica Sieb. et Zucc.	エゴノキ	核	1									1			
		破片										1			
Sambucus sieboldiana Blume ex Graebn.	ニワトコ	種子													2
heab	草本														
Sparganium	ミクリ属	果実												1	3
Potamogeton	ヒルムシロ属	果実												4	2
Scirpus fluviatilis A. Gray	ウキヤガラ	果実												2	2
Scirpus	ホタルイ属	果実												4	
Cyperus	カヤツリグサ属	果実												1	
CyperaceaeA	カヤツリグサ科	果実												1	2
Cannabis sativa L.	アサ	種子			1										
Humulus scandens Merr.	カナムグラ	種子		1											
Polygonum A	タデ属	果実												1	10
Vigna	ササゲ属	種子					4	1		8	3	1			5
Ampelopsis brevipedunculata Trautv.	ノブドウ	種子		1			1	2		2					
Perilla	シソ属	果実												6	1
Mosla	イヌコウジュ属	果実												3	4
Compositae	キク科	果実													1
Total	合計		23	50	162	113	225	90	272	183	161	54	14	51	161
Unknown	不明			2				1	2	1	5				

百間川沢田遺跡出土種実 I

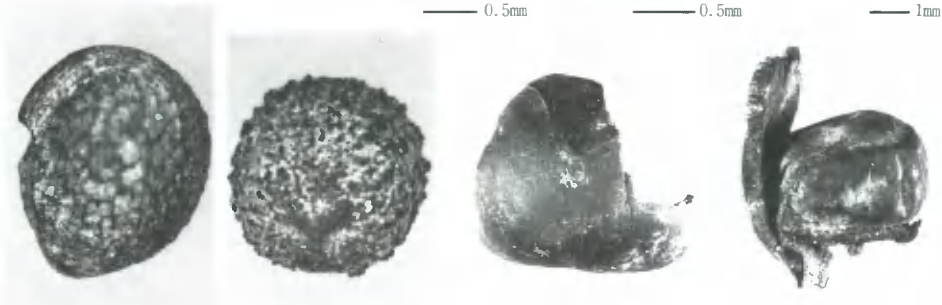


1 ヤマモモ核 —— 2mm 2 アカシデ果実 —— 0.5mm 3 コナラ属堅果 —— 2mm 4 イチイガシ種子(子葉) —— 2mm



5 コナラ属コナラ亜属殻斗 —— 2mm

6 カジノキ種子 —— 0.5mm 7 ヤマグワ種子 —— 0.5mm 8 サクラ属サクラ節核 —— 1mm

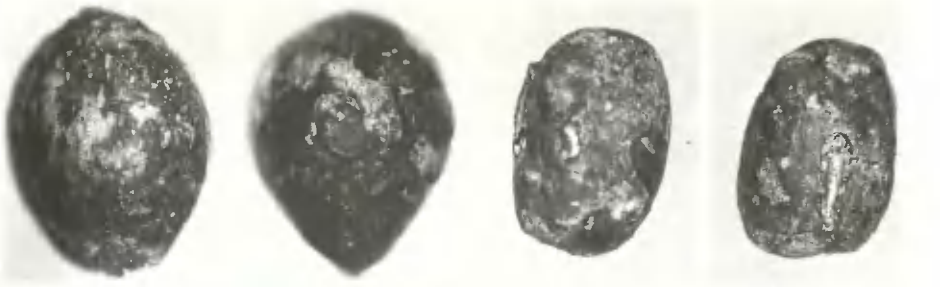


9 サンショウ種子 —— 0.5mm 10 アカメガシワ種子 —— 1mm 11 トチノキ種子(破片) —— 2mm 12 ムクロジ果実 —— 2mm

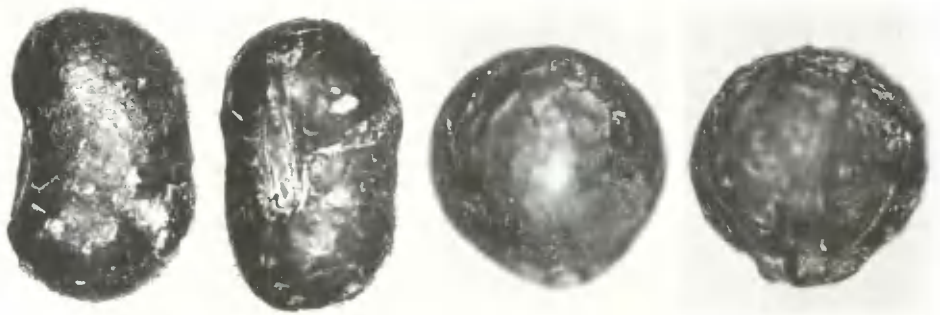
13a ブドウ属 13b 同左 —— 0.5mm 14a クマノミズキ核 14b 同左 —— 0.5mm

百間川沢田遺跡出土種実 II

15　ミクリ属果実 —— 0.4mm　16　ヒルムシロ属果実 —— 0.4mm　17　ウキヤガラ果実 —— 0.4mm　18　ホタルイ属果実 —— 0.4mm



19a　アサ種子　19b　同左 —— 0.3mm　20a　ササゲ属種子　20b　同左 —— 1mm



21a　ササゲ属種子　21b　同左 —— 0.5mm　22　シソ属果実 —— 0.3mm　23　イヌコウジュ属果実 —— 0.2mm

付載4　百間川兼基遺跡出土ガラス小玉

株式会社ニコン・相模原本部
苅　谷　道　郎

1．試料および実体顕微鏡観察結果

試料の一覧を表1に示す。試料のガラス小玉は岡山県百間川兼基遺跡の住居床面、溝あるいは住居埋土中から検出され、共伴した遺物から弥生時代後期前半および古墳時代（包含層の時期と一致しない可能性がある）と推定されている。試料1は青緑色ガラス小玉であり、孔の軸方向に平行な泡の配列とやけの筋（埋蔵時の水分による侵食痕）が観察される。また表面・孔内部に平滑な仕上げ加工の痕跡がある。試料2は紺色ガラス小玉であり、試料1と同様な泡の配列と加工痕が観察されるが、外形は歪んで小平面がある。試料3は空色ガラス小玉であり、内部に存在する多数の小泡に方向性が認められず、孔内壁の一部に筋が認められる。試料4は空色ガラス小玉であり、試料1と同様な泡の配列、筋と加工痕が認められる。

2．見掛け比重の測定、表面分析結果と組成の推定

試料の見掛け比重を純水を用いたアルキメデス法で測定した。結果を表2～5に示す。通常では考えにくい低比重を示したが、これは内部の泡が多いためと考えられる。

試料をエネルギー分散型X線分析装置（フィリップスDX4i）で分析した。分析は安立伸夫氏（株式会社ニコン・相模原技術開発部）に依頼した。分析結果を表2～5に示す。

本分析法では表面の微小部分の深さ約1μmまでの組成を半定量している。表2～5の分析では試料1～4のガラス小玉の、埋蔵時の水分の影響を受けにくいと考えられる泡孔の内壁あるいは割れ面を分析した。いずれの分析も組成分析値はNa以上の重元素の酸化物について合計100％になるよう計算した半定量値である。

いずれの分析値も表面の組成分析値であり、ガラスが埋蔵中に水に接触し表面の可溶部分が溶出し、表面組成は内部組成と異なっていることが予想される。内部組成は表面組成に較べNa_2O、K_2Oが多く、SiO_2、Al_2O_3は少ない。

試料1～4のガラス小玉の組成は表面の侵食による変化と本来もつ内部組成のばらつきを考慮するとほぼ同一組成系と考えられるが、着色元素が異なっていると推定される。また試料4にTiO_2が検出されていないが、他の組成から本分析法の検出感度以下で含有されていると推定される。

見掛け比重が低く、主として含有される泡によって低比重を示すが、百間川原尾島遺跡から出土し分析調査されたガラス小玉[1)2)]の類似組成系ガラスと比較してもSiO_2が多く、低比重を示す傾向にある。しかし分析された表面組成では溶融温度は高すぎ、古代のガラスでは存在し得ず、試料を破壊し内部組成を分析しなければ内部組成は推定しがたい。また百間川原尾島遺跡から出土し分析調査されたガラス小玉に比較し、埋蔵時の土壌の化学的条件によりガラス表面の侵食状況が異なり、表面に残留するSiO_2が多い可能性がある。

３．着色原因の推定

表２～４に示す分析結果から着色原因は次のように推定される。

試料１の青緑色は主としてＦｅＯとＣｕＯの共存による着色であり、試料２の紺色は強酸化条件下で溶融されたFe_2O_3とＭｎＯによる発色である。試料３および試料４の空色はＦｅＯが主因になっている可能性が高い。酸化条件で溶融されるとＦｅはFe_2O_3となり、本含有量では暗緑色となる。試料３および４は還元条件下で溶融され主としてＦｅＯによる発色であり、試料３のＣｕは発色に寄与していない可能性がある。

４．製造方法の推定

試料１、２および４のガラス小玉は実体顕微鏡によって観察される泡の配列と加工痕から、ガラスを加熱し引き伸ばし丸棒とし、冷却後切断し、中心に穿孔し、外形を荒摺り研磨し、玉としたと推定される。試料３のガラス小玉は泡に方向性がなく、外形に研削痕が認められないことから、離型材を塗った金属棒を芯にし、加熱し引き伸ばした細いガラスを巻き付け成形し、冷却後芯を抜き、研磨し、玉としたと推定される。

表１　百間川兼基遺跡出土ガラス小玉の試料一覧

試料	図番号	実測番号	出土遺構・層位	時　代・時　期
1	J9	3	306-J：古墳時代包含層	古墳時代？（包含層の時期と一致しない？）
2	J4	4	305・306-G：溝25	古代以降？（遺構時期と一致しない？）
3	J1	5	306-I：竪穴住居１床面	弥生時代後期前半（百・後・Ⅱ）
4	J2	12	306-I：竪穴住居２埋土中	弥生時代後期後半（百・後・Ⅲ）

表２　百間川兼基遺跡出土ガラス小玉（資料１）の表面の組成分析結果

試料１　青緑色ガラス小玉　見掛け比重　１．８　重量　０．３０３ｇ				
分析部位	表面１	表面２	泡孔１	泡孔２
組成　wt％				
SiO_2	84.9	82.2	77.0	86.4
Na_2O	1.7	2.9	1.8	2.5
K_2O	3.0	1.7	3.0	2.0
MgO	0.7	0.9	1.6	0.4
Al_2O_3	8.7	10.1	15.1	8.0
TiO_2	－	1.0	－	0.1
Fe_2O_3	0.6	0.9	1.3	0.4
CuO	0.5	0.3	0.2	0.2
MnO	－	－	－	－

注）FeおよびCuの化学状態はそれぞれFe_2O_3およびCuOとして計算した。

表3　百間川兼基遺跡出土ガラス小玉（資料2）の表面の組成分析結果

	試料2　紺色ガラス小玉 見掛け比重　1.8　重量　0.139g				
分析部位	表面1	表面2	割れ目1	割れ目2	泡孔
組成　wt%					
SiO_2	85.3	85.6	87.7	85.2	85.2
Na_2O	0.4	0.2	1.5	1.6	1.6
K_2O	5.7	5.5	4.0	1.6	1.6
MgO	0.7	0.7	0.6	1.0	1.0
Al_2O_3	6.2	6.5	5.3	9.6	9.6
TiO_2	0.1	0.2	0.1	−	−
Fe_2O_3	0.8	0.7	0.5	0.5	0.5
CuO	−	−	−	−	−
MnO	0.8	0.7	0.2	0.3	0.3

注）FeおよびCuの化学状態はそれぞれFe_2O_3およびCuOとして計算した。

表4　百間川兼基遺跡出土ガラス小玉（資料3）の表面の組成分析結果

	試料3　空色ガラス小玉 見掛け比重　1.7　重量　0.052g			
分析部位	表面1	表面2	泡孔1	泡孔2
組成　wt%				
SiO_2	83.5	83.6	84.2	85.7
Na_2O	0.6	0.6	2.3	1.1
K_2O	9.9	8.6	1.8	3.7
MgO	−	−	0.4	−
Al_2O_3	4.5	5.3	9.3	7.6
TiO_2	0.2	0.3	0.2	0.2
Fe_2O_3	0.2	0.7	0.8	0.7
CuO	0.7	1.0	0.9	0.7

注）FeおよびCuの化学状態はそれぞれFe_2O_3およびCuOとし計算した。

表5　百間川兼基遺跡出土ガラス小玉（試料4）の表面の組成分析結果

試料4　空色ガラス小玉 見掛け比重　1.8　重量　0.053g			
分析部位	表面1	割れ目2	割れ目1
組成　wt%			
SiO_2	88.1	85.2	87.3
Na_2O	1.4	2.5	1.5
K_2O	1.0	0.7	0.3
MgO	0.6	1.4	0.2
Al_2O_3	8.3	9.9	10.0
TiO_2	—	—	—
Fe_2O_3	0.5	0.4	0.7
CuO	—	—	—

注）FeおよびCuの化学状態はそれぞれFe_2O_3およびCuOとして計算した。

参　考

1）苅谷道郎「百間川原尾島遺跡出土ガラス玉およびガラス滓」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』97 p238、1995

2）苅谷道郎「百間川原尾島遺跡出土ガラス玉およびガラス滓」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』106 p240、1996

付載5　百間川兼基遺跡出土の玉類の産地分析

京都大学原子炉実験所
藁　科　哲　男

今回分析を行った玉類は、岡山市に位置する百間川兼基遺跡の弥生時代から古墳時代にかけての玉類8個で、出土地区、遺構・層位、時代などを表1に示す。これら8個の玉類の産地分析結果が得られたので報告する。

表1　百間川兼基遺跡出土玉類の資料一覧

資料番号	掲載番号	出土地区	出土遺構	時代・時期	備考
勾玉－1	J12	305・6G	包含層	―	
管玉－2	J6	305・6E	〃	―	
臼玉－6	J3	305F	水田層	百・後・Ⅳ	
臼玉－7	J7	305・6F	包含層	―	
臼玉－8	J10	305・6G	〃	―	
臼玉－9	J5	306G	溝　26	百・後・Ⅲ	
臼玉－10	J11	306H	包含層	―	
臼玉－11	J8	306N	〃	―	

非破壊での産地分析の方法と手段

遺跡から出土した勾玉、管玉、臼玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をとり、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。碧玉製玉類はESR法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。なお、本報告ではページの都合上、詳細な産地分析法と手段は割愛するため、詳細は『百間川原尾島遺跡5』の報告書を参照することができる。

結果と考察

これらの遺物の蛍光X線分析の結果、（図1～8）および比重（表2）からと原材料の岩石の特徴から、今回分析した玉類は調査した原産地の碧玉原石の基準から大きくはずれている（表3）。勾玉-1はMg、Si、Feなどの元素の含有量が相対的に大きく、石質は粗く吸水性を示す石材である。管玉-2は蛍光X線分析でRb、Sr、Y、Zrの各元素が容易に観測でき、比重が2.4程度であることからグリーンタフ系の石材ではないかと推測した。臼玉は肉眼観察で結晶が一定の方向に平行に配列しているようで、鉱物線構造を示す結晶片岩、Mg元素が比較的大きく観測されていることから、カンラン岩系の変成岩の可能性が推測される。これら臼玉は蛍光X線分析結果とESR信号で分類すると、Cr元素のピークが大きく、図9のESR信号が相互に似た臼玉-9、-10は同じ石材から作られた可能性が

推測された。また、臼玉-８を除く他の臼玉は定性的に相互に似ている。臼玉-８は蛍光Ｘ線分析でＹ元素が多く含有され、ＥＳＲ信号も他の臼玉と異なる結果を得た。これら臼玉の一部と同じ石材と推測される玉類が兵庫県和田山町の向山古墳、鳥取県米子市の尾高19号古墳、岡山県川上村の下郷原和田遺跡などで観測されている。本遺跡の玉材と同じ産地の原石が使用され、また時代が一致する遺跡との関係を石材を通じて明らかにする資料を与えることができると推測される。現在これら玉材の原石産地は不明であるが、原石産地は玉作り遺跡から遠くない地点に発見される可能性が推測されるために、原産地発見には発掘関係者の協力が不可欠である。

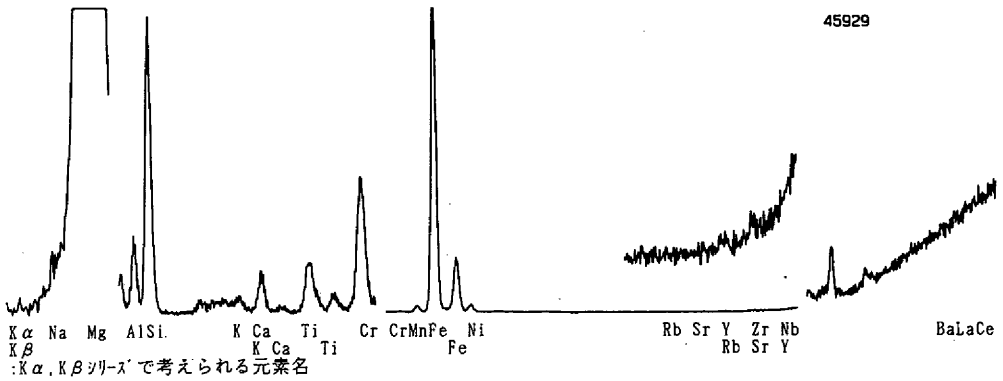


図１　百間川兼基遺跡出土、勾玉-１（45929）の蛍光Ｘ線スペクトル

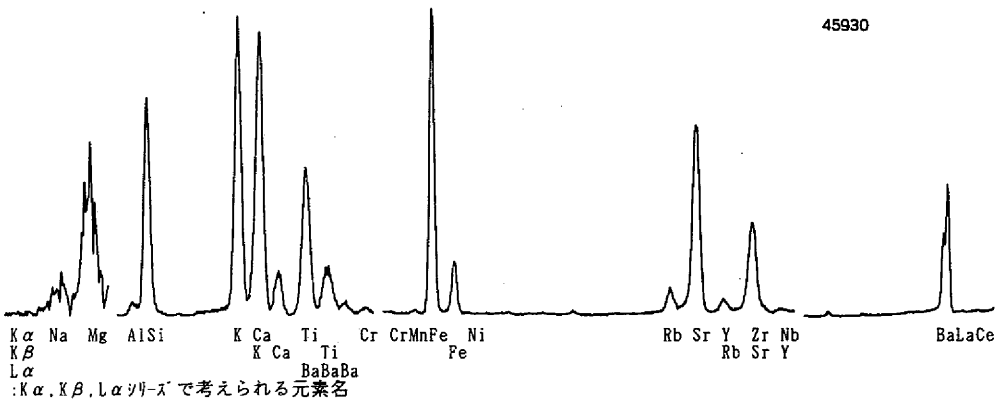


図２　百間川兼基遺跡出土、管玉-２（45930）の蛍光Ｘ線スペクトル

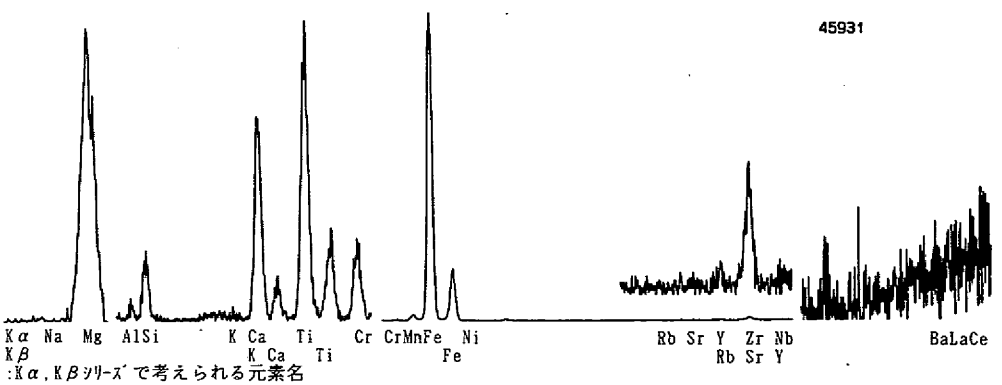


図３　百間川兼基遺跡出土、臼玉-６（45931）の蛍光Ｘ線スペクトル

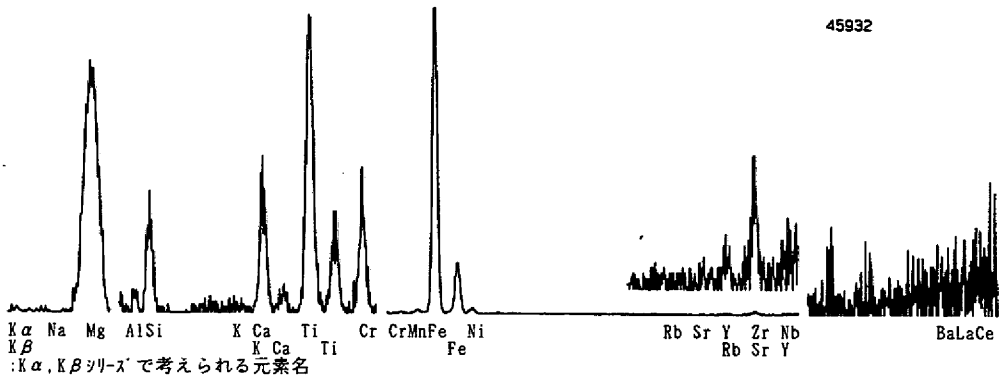


図４　百間川兼基遺跡出土、臼玉－７（45932）の蛍光Ｘ線スペクトル

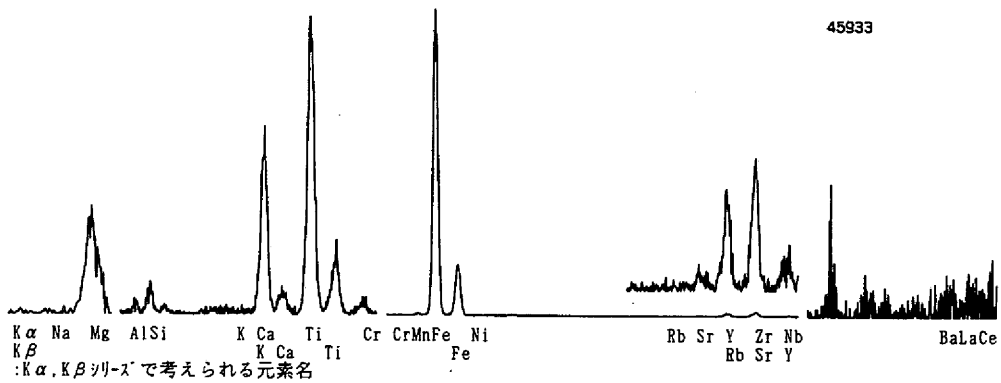


図５　百間川兼基遺跡出土、臼玉－８（45933）の蛍光Ｘ線スペクトル

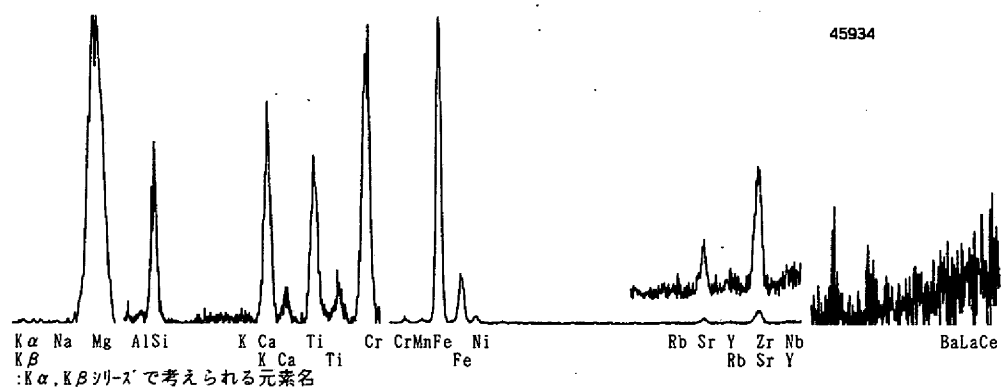


図６　百間川兼基遺跡出土、臼玉－９（45934）の蛍光Ｘ線スペクトル

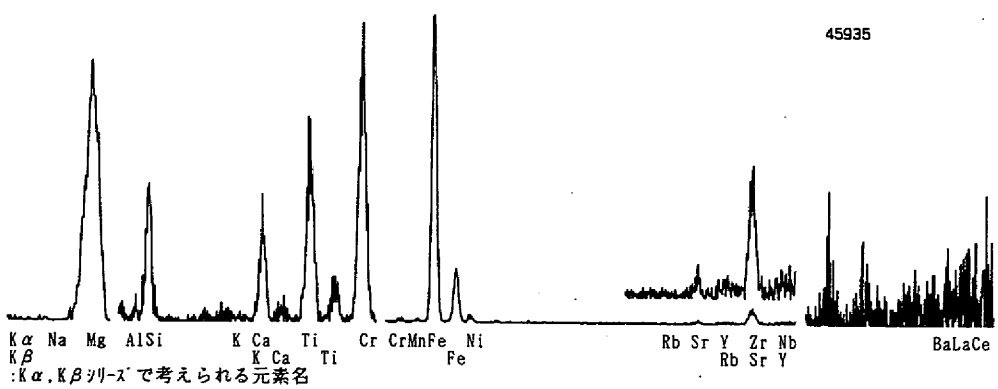


図７　百間川兼基遺跡出土、臼玉－10（45935）の蛍光Ｘ線スペクトル

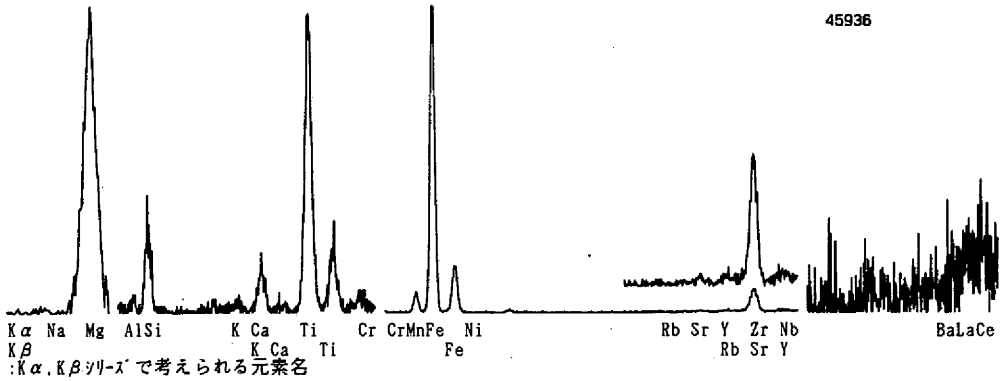


図8　百間川兼基遺跡出土、臼玉-11（45936）の蛍光X線スペクトル

表2　兼基遺跡出土玉類の分析結果

試料番号	分析番号	元素比 AI/Si	K/Si	Ca/K	Ti/K	K/Fe	Rb/Fe	Fe/Zr	Rb/Zr
勾玉-1	45929	0.156	0.066	3.050	5.053	0.004	0.000	624.360	0.253
管玉-2	45930	0.044	2.232	1.008	0.602	0.052	0.080	3.257	0.260
臼玉-6	45931	0.143	0.073	83.215	123.785	0.001	0.000	74.244	0.012
〃 -7	45932	0.084	0.067	35.475	89.851	0.002	0.001	62.640	0.043
〃 -8	45933	0.000	0.000	999.999	999.999	0.001	0.000	52.399	0.009
〃 -9	45934	0.000	0.047	54.324	46.366	0.001	0.000	17.627	0.000
〃 -10	45935	0.006	0.014	92.049	197.111	0.001	0.001	16.122	0.010
〃 -11	45936	0.005	0.173	5.837	42.452	0.002	0.000	9.452	0.000
	JG-1[a]	0.072	4.153	0.772	0.230	0.114	0.281	3.784	1.062

試料番号	分析番号	元素比 Sr/Zr	Y/Zr	Mn/Fe	Ti/Fe	Nb/Zr	重量 gr	比重[b]
勾玉-1	45929	0.096	1.044	0.020	0.001	0.000	4.533	2.4
管玉-2	45930	2.897	0.117	0.009	0.026	0.031	0.989	2.395
臼玉-6	45931	0.046	0.086	0.018	0.007	0.000	0.063	2.950
〃 -7	45932	0.041	0.200	0.013	0.008	0.073	0.031	---
〃 -8	45933	0.096	0.694	0.005	0.009	0.159	0.017	---
〃 -9	45934	0.336	0.063	0.010	0.007	0.065	0.047	---
〃 -10	45935	0.128	0.096	0.009	0.009	0.029	0.023	---
〃 -11	45936	0.029	0.048	0.064	0.011	0.052	0.035	---
	JG-1[a]	1.393	0.258	0.022	0.023	0.074		

a):標準試料、Ando,A.,Kurasawa,H.,Ohmori,T. & Takeda,E. (1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol.8 175-192.

b):重量が0.1gr以下の遺物の比重の測定誤差は+0.1～+0.2程度を含む。

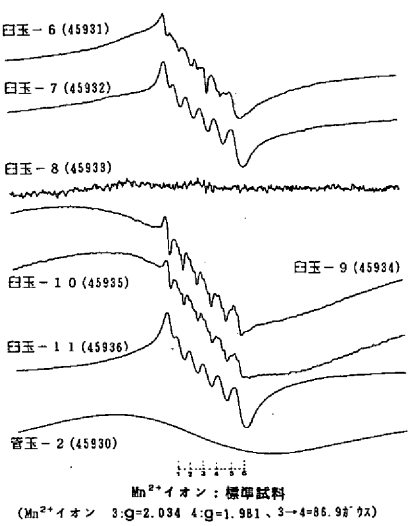


図9　百間川兼基遺跡出土玉類の信号ⅢのESRスペクトル

表3　百間川兼基遺跡出土玉類の原石産地分析結果

遺物番号	分析番号	碧玉製玉類蛍光X線分析法による帰属確率 興部群	玉谷群	花仙山群	猿八群	女代(B)群	ESR信号形	総合判定原石産地
勾玉-1	45929	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	不明	不明
管玉-2	45930	1×10^{-9}%	1×10^{-15}%	1×10^{-24}%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	〃	〃
臼玉-6	45931	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	〃	〃
〃 -7	45932	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	〃	〃
〃 -8	45933	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	〃	〃
〃 -9	45934	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	〃	〃
〃 -10	45935	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	〃	〃
〃 -11	45936	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	〃	〃

付載６　百間川遺跡群出土木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

百間川遺跡群では、これまでにも出土した木製品の樹種同定が行われ（例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社、1995など）弥生時代前期・古墳時代・平安時代前期・室町時代の遺構から出土した木製品にマツ属などの針葉樹やコナラ属などの広葉樹が確認されている。得られた結果は近畿地方や九州地方で認められている傾向とも調和的であり、岡山県内でも同様の用材選択が行われていたと推定される。しかし、時代ごとの用材選択の変化や同時代における用材選択の地域的な差等の詳細を明らかにするには至っていない。

本報告では、百間川遺跡群沢田遺跡・兼基・今谷遺跡から出土した木製品の樹種を明らかにし、用材選択に関する資料を得る。

試料：試料は、百間川遺跡群沢田遺跡・兼基・今谷遺跡から出土した木製品25点（試料番号１～25）である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表１に記した。

結果：樹種同定結果を表１に示す。試料番号５、７、19は小片あるいは保存状態が悪いため、充分な組織の観察が行えなかった。これらの試料については、観察できた範囲での結果を記載した。その他の試料は、針葉樹４種類（マツ属複維管束亜属・モミ属・ヒノキ属・カヤ）、広葉樹８種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・クリ・シイノキ属・ケヤキ・ヤマグワ・クスノキ）に同定された。（表１）

表１　樹種同定結果

番　号	実測番号	図番号	遺跡・調査区	出土地点・遺構・層位	時期	用　途	樹　　種
1	今-1	今-W27	今谷遺跡 304･5-ⅡH	包含層	弥生	斧	コナラ属アカガシ亜属
2	兼-1		兼基遺跡 階段調査区	中世層	中世	下駄	ヒノキ属
3	兼-2	兼-W14	兼基遺跡 306-P	井戸-3	古墳	盆	コナラ属アカガシ亜属
4	兼-5	兼-W21	兼基遺跡			容器	ケヤキ
5	兼-8	兼-W18	兼基遺跡 305-A	溝31	古代	卒塔婆	針葉樹
6	兼-16		兼基遺跡 305-z	弥生中期落ち	弥生	鋤	クスノキ
7	兼-17		兼基遺跡 305-z	弥生中期落ち	弥生	建築材？	針葉樹
8	兼-18	兼-W20	兼基遺跡 305-z	溝-32	中世	独楽	モミ属
9	兼-19		兼基遺跡 305-r～t	溝-32	中世	杭？	マツ属複維管束亜属
10	兼-25		兼基遺跡 305-z	弥生中期落ち	弥生	鋤	クスノキ
11	兼-28	兼-W12	兼基遺跡 304-r	トレンチ（弥・中・旧河道内）	弥生	短甲	ヤマグワ
12	兼-32		兼基遺跡 304-s	トレンチ（弥・中・旧河道内）	弥生	浮子？	カヤ
13	兼-34	兼-W7	兼基遺跡 303･4-q	旧河道掘下中（海抜0m付近）	弥生	弓	シイノキ属
14	兼-36	兼-W11	兼基遺跡 303･4-q	旧河道掘下中（海抜0m付近）	弥生	衣笠？	カヤ
15	兼-37		兼基遺跡 304-p	弥生水田層下の地層掘下	弥生	鍬	コナラ属アカガシ亜属
16	兼-41	兼-W1	兼基遺跡 304-q	旧河道掘下中（海抜0m付近）	弥生	泥除け	コナラ属アカガシ亜属
17	兼-43	兼-W4	兼基遺跡 303･4-q	旧河道掘下中（海抜0m付近）	弥生	鍬	コナラ属アカガシ亜属
18	兼-45	兼-W2	兼基遺跡 303･4-q	旧河道トレンチ（海抜0m付近）	弥生	鍬	コナラ属アカガシ亜属
19	兼-53	兼-W9	兼基遺跡 304-p	旧河道掘下中（東南の角近く）	弥生	椀	広葉樹（散孔材）
20	兼-54	兼-W19	兼基遺跡 303･4-p	溝-32下層	中世	漆椀	ケヤキ
21	沢-4	沢-W2	沢田遺跡 214･5-ⅢC	旧河道第6層	弥生	鍬・泥除？	クスノキ
22	沢-5	沢-W3	沢田遺跡 214-ⅢC	旧河道7層と8層の境	弥生	鍬	コナラ属アカガシ亜属
23	----		兼基遺跡 306-M	建物-2　P-8	古墳	柱材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
24	----		兼基遺跡 305･6-H	竪穴住居-4　柱穴	古墳	柱材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
25	----		兼基遺跡 306･J-K	竪穴住居-5　柱穴	古墳	柱材	クリ

※紙面の都合により、方法･考察を略す。

報告書抄録

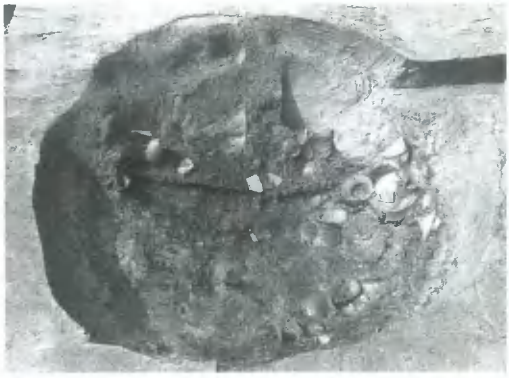
ふりがな	ひゃっけんがわかねもといせき　・ひゃっけんがわいまだにいせき　・ひゃっけんがわさわだいせき
書名	百間川兼基遺跡 3　・百間川今谷遺跡 3　・百間川沢田遺跡 4
副書名	旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査
巻次	XIII
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	119
編著者名	柳瀬昭彦・弘田和司・平井　勝・高田恭一郎・山磨康平・根木智宏・澤山孝之
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-01　岡山県岡山市西花尻1325-3　TEL 086-293-3211
発行機関	建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会
所在地	〒700　岡山県岡山市鹿田町2-4-36　TEL 086-223-5101 〒700　岡山県岡山市内山下2-4-6　TEL 086-224-2111
発行年月日	西暦　1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
百間川兼基	岡山県岡山市兼基	33201		34度40分5秒	133度58分30秒	右岸低水路 1990～1993 左岸階段 1990	8206 15	河川改修に伴う事前調査
百間川今谷	岡山県岡山市今谷	33201		34度40分5秒	133度58分35秒	右岸高水敷護岸 1990	2186	
百間川沢田	岡山県岡山市沢田	33201		34度40分5秒	133度58分25秒	左岸階段 1990 右岸低水路 1993～1994	15 4620	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
百間川兼基 今谷	集落 生産遺跡	弥生時代 中～後期	旧河道 1条 竪穴住居 2軒 土壙 10基 水田 3ヵ所 溝 24条	弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、瓦、備前焼、陶磁器　石鏃、石斧、石錘、石包丁、砥石 鏡片、銅鏃、刀子、釘 鉄鎌、タガネ、銭 広鍬、又鍬、木製短甲 木椀、独楽　土錘 獣骨　ガラス小玉	・全国的にも希有な木製短甲の札出土 ・稲株痕跡検出 ・土師質椀に「西」？の字の墨書
		古墳時代以降	竪穴住居 4軒 建物 6棟 井戸・土壙 16基 溝 31条		
百間川沢田	集落 生産遺跡	縄文時代 後・晩期	土器溜り 3ヵ所 旧河道貝塚 1基	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器 土師質土器、瓦 石鏃、石斧、石錘、石錐、磨製石剣、石包丁 砥石、石杵 刀子、釘 鍬先、鋤、斧柄、箸 紡錘車、土錘 骨角製品、動物遺体	・縄文時代晩期の旧河道内貝塚から多くの動物遺体とともに骨角製品出土 ・稲株痕跡検出 ・水銀朱精製専用の石杵が完形で出土
		弥生時代	水田 3ヵ所 溝 19条		
		古墳時代	竪穴住居 1軒 建物 1棟 柵列 1基 土壙・井戸 4基 溝 9条 土器溜り 1ヵ所		
		古代・中世	溝 6条 杭列 1基		

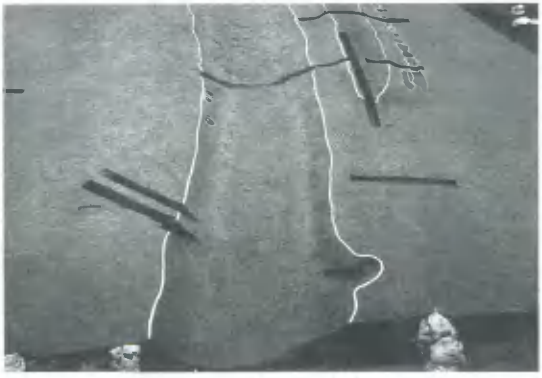
旧河道（南西から）

竪穴住居１・２、溝21、土器溜り１（南西から）



土壙８　上層（東から）

土壙８　下層（南から）



溝22、土手状遺構（東から）

溝21（北西から）

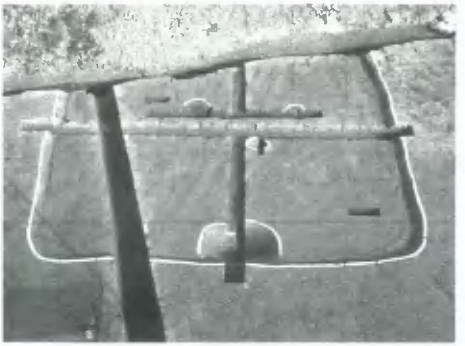
図版2

305・6ー E ・ F区
溝15～20
〔西から〕

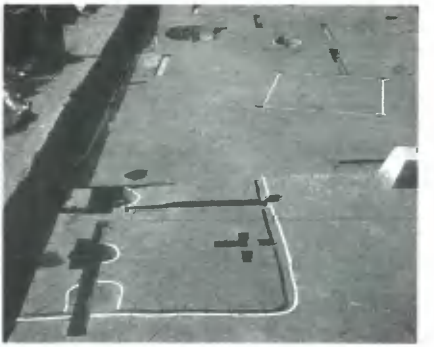
305・6ー E ・ F区
水田２〔大畦畔、小畦畔〕
〔西から〕

305G区
水田２〔微高地縁辺〕
〔東から〕

百間川兼基遺跡　弥生時代遺構(2)

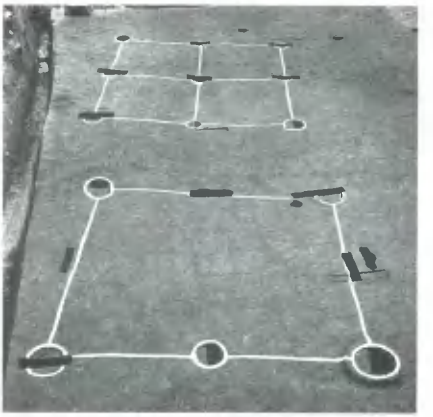


竪穴住居３（南から）



竪穴住居５・建物３（東から）

竪穴住居６（南から）



建物４・５（西から）

井戸２（南から）

土壙20（北から）

百間川兼基遺跡　古墳時代遺構１

図版4

竪穴住居３、土壙15、溝25（南西から）

溝27・28（南東から）

1　百間川兼基遺跡 古墳時代遺構(2)

303・6q～x区 溝30・32（西から）

305・6w～y区 溝30・35・32（西から）

305A区 溝31（南東から）

306L区 溝37～39（北から）

2　百間川兼基遺跡 古代～中世溝

溝44（北東から）

溝51（東から）

水田（東から）

水田 小畦畔（南から）

溝59（西から）

溝61（北から）

溝69（北東から）

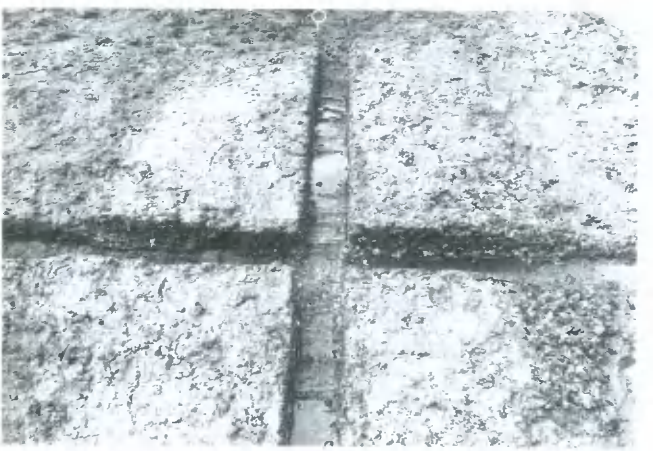
百間川今谷遺跡 弥生時代～中世遺構

図版6

土器溜り1（縄文後期）
（東から）

旧河道1（南東から）

旧河道1（白線が貝塚範囲）
（南から）



旧河道1貝塚（縄文晩期）
（東から）

百間川沢田遺跡 縄文時代遺構

溝5・14
（南東から）

溝1・12（南東から）

水田1（南東から）

水田2
（東から）

百間川沢田遺跡 弥生時代溝・水田

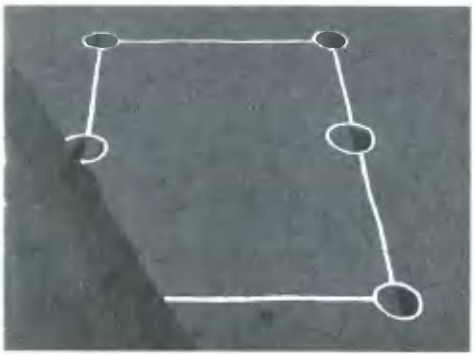
図版8

214・215Ⅲ F～H区
水田３・（溝31～33）
（西から）

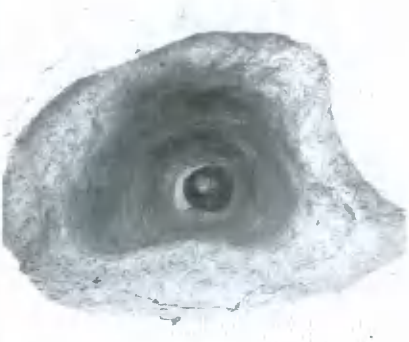
214Ⅲ G区水田３（西から）

214Ⅲ H区水田３（西から）

1　百間川沢田遺跡 弥生時代水田



建物１（南から）



井戸３（東から）

2　百間川沢田遺跡 古墳時代遺構

214・215Ⅲ E～H区
溝31～33
（西から）

214・215Ⅲ G区
溝31・33
（西から）

214・215Ⅲ G区
溝32・33
（西から）

214Ⅲ E区溝31 獣骨出土状態（西から）

杭列1（南から）

図版10

百間川沢田遺跡出土 縄文土器

2

7

15

56

52

123

132

1　百間川兼基遺跡出土 弥生土器

沢368

沢369

沢377

兼159

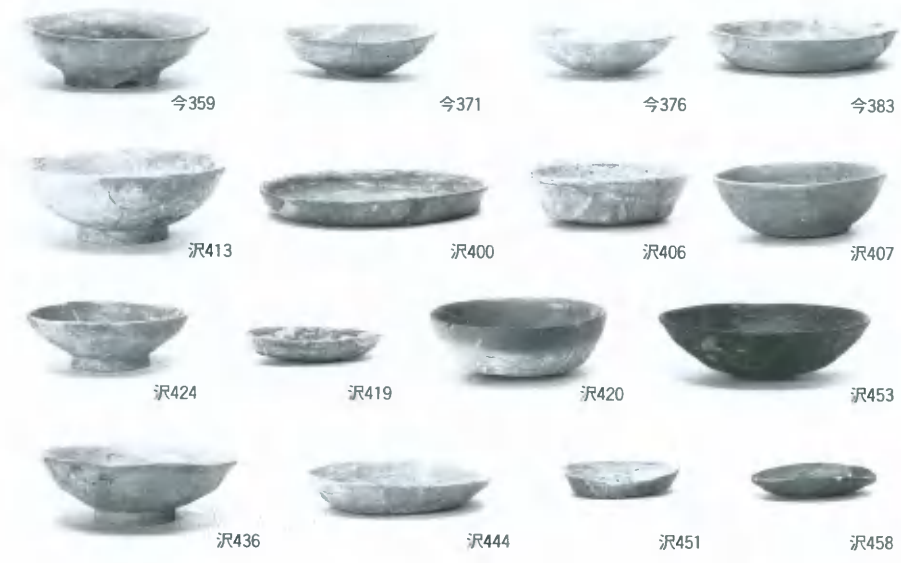
兼161

兼162

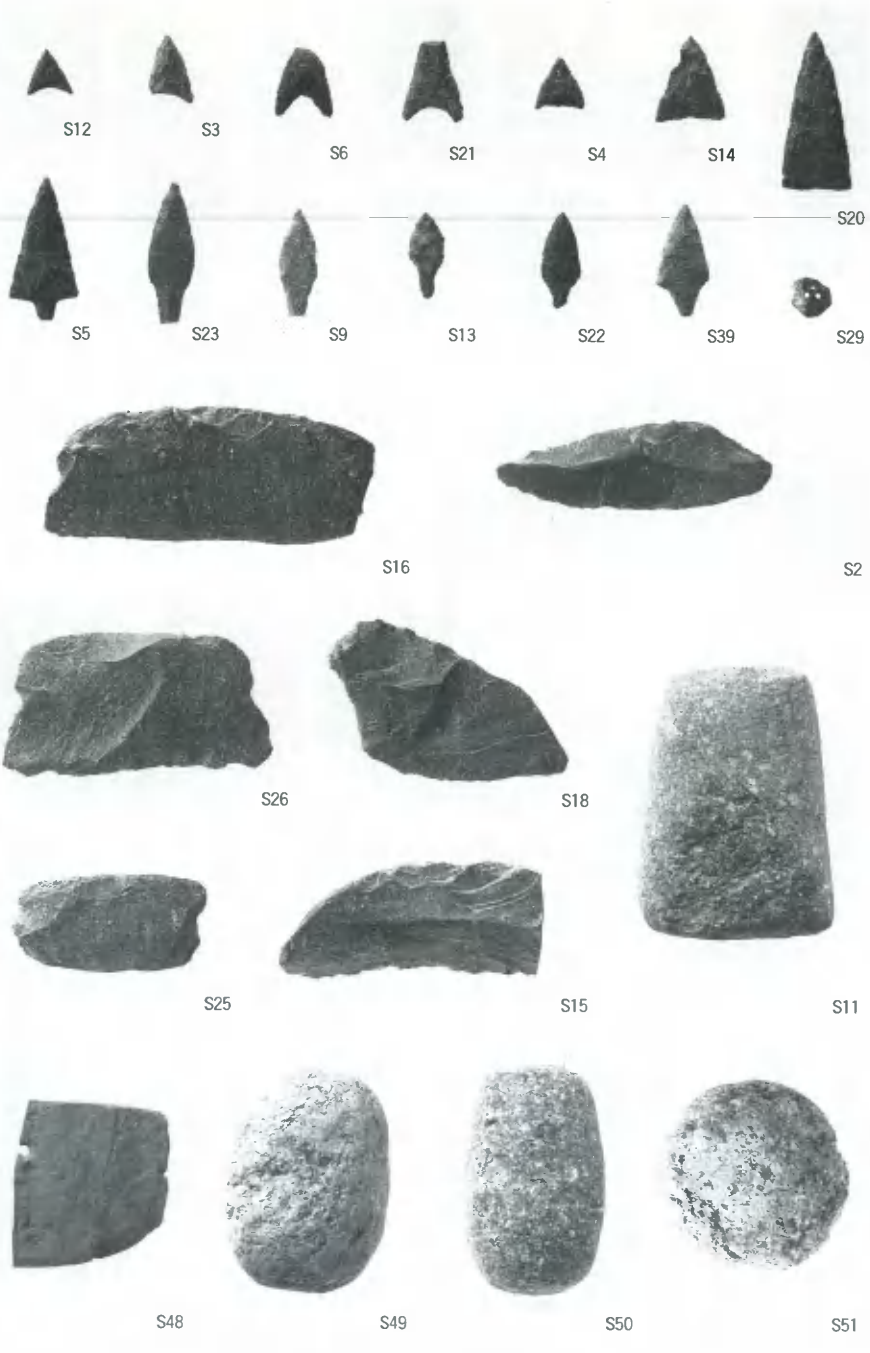
2　百間川兼基遺跡、同沢田遺跡出土 土師器

図版12

1　百間川兼基遺跡遺跡出土 土師器

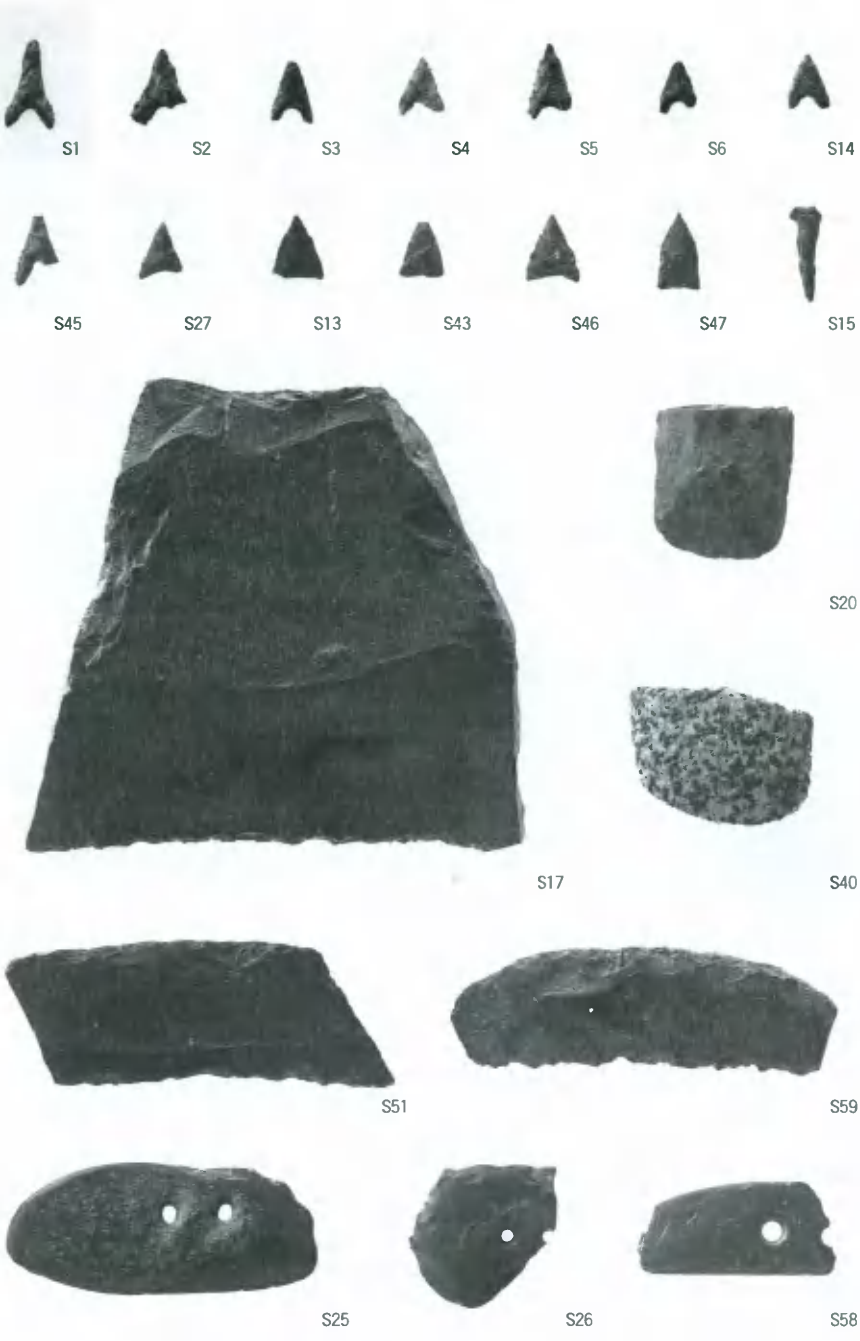


2　各遺跡出土 古代～中世土器



百間川兼基遺跡出土 石製品 (1/2)

図版14



百間川沢田遺跡出土 石製品 (1/2)

兼W1

1/2

兼W2

兼W11

兼W9

兼W18

外

内

1/2

兼W19

1/2

今W25

今W27

沢W3

沢W2

外

内

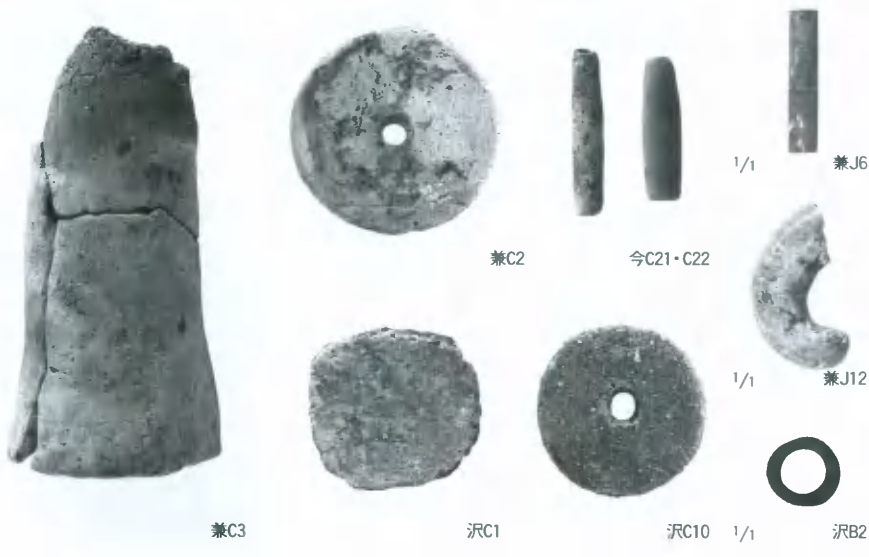
1/2

沢W5

各遺跡出土 木製品（1/2、1/4）

図版16

百間川兼基、同沢田遺跡出土 鉄製品（1/2）



各遺跡出土 土製品・玉等（1/2、1/1）

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書119

百間川兼基遺跡３
百間川今谷遺跡３
百間川沢田遺跡４

旭川放水路（百間川）改修
工事に伴う発掘調査　XIII

1997年３月20日　印刷
1997年３月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325－3

発　行　建設省岡山河川工事事務所
岡山市鹿田町2－4－36
岡山県教育委員会
岡山市内山下2－4－6

印　刷　旭総合印刷株式会社
岡山市内山下2－10－3